

—文化財で綴る—

佃島物語

増山武男



—文化財で綴る—

『佃島物語』

増山武男

緒言

文化の急速な進展は、過去を置き去り、苛酷にも無に帰する場合も起り得る。

此処東京の一極集中化と、それに伴う経済発展の甘言は、都心を変貌し、人口を離散させ、回復に人々は躊躇している。

かかる折巷間「佃島物語」の名の下、消えかかる佃の文化を誌に止めんと、立上がった群があった。しかし、殆んどが外観者による思いを集結させての忠告である。

誘われる儘、小生も参加し、義憤遣る瀬なき思いにかられ、二十年前調査の経験を基に、佃島を文化財で綴り、一編にまとめ、世に呈した次第である。

願わくば、後世の方々の「語り草」に供すれば幸甚である。

なお、後述「佃つれづれ」を友読賜り、一層ご造詣下されば、我意得たりと、この上なき喜びでもある。

平成十八年丙戌皐月

著者

目次

緒言	三
一、序章	五
二、心の故郷——住吉神社——	七
三、佃島今昔	三六
四、佃島の街中——祭りと盆——	五一
五、佃界限——石川島人足寄場と灯台・佃島砲台跡——	七六
六、大正ロマンの先駆け 佃三丁目	九一
七、昭和の夢の懸橋 “相生橋”	一〇九
八、造船昭和の街 佃二丁目	一一五
九、二十一世紀へと佃島	一四〇
佃島の文化財一覽	一四二
あとがき	一四四

一、序 章

春は 堤の 花霞み

人波 行きかう 桜橋

昔懐かし 観音と

縁し 取り持つ 言問の

隅田の流れ 情深かし

夏は 乱れて 蒼高く

江戸を伝える 咲く火花

混み合う 人の 息むれて

大川端を 廻り行く

川面ゆれて 情残す

秋は 鷗が 飛び交えて

櫓太鼓に 四股を踏む

江戸の姿を 今 此処に

両国橋に 返り咲く

隅田の流れ 情残す

冬は 佃に 雪踊る

雛子の 音色 住吉と

チャイムの響き 夕陽さす

粹の魚河岸 勝鬨の

川面映えて 情舞う

川は流れて、河口に洲をつくる。昔ここに、森島があった。またの名を、鎧島とも云う。

古へに「八幡太郎義家朝臣、鎧を収めて神体となし、八幡宮を勧請したことにより、その名が付された」と云う。

また近くには「猷廟の御時、異国より鎧一嶺を奉りけるに、重くしてこれを持つ者なかりしたため、石川氏の祖大力なりければ、これを片手に持ち大樹の御前へ披露なし奉まつる。故にこ感賞のあまり、此処を宅地に給わり、鎧を携へし賞として給う所の地なればとて、鎧島とつけられける」と。

寛永三年丙寅 船手頭石川政次八左衛門、隅田河口の洲島を拝領、人呼んで「石川島」という。新編江戸志によれば、「石川島は離れ島なり、石川氏代々の宅地」とある。諸家統胤には、「石川重次の子政次、慶長五年御使番となり同十九年御目付となる。その子重信等代々この地に住わる由」と記している。俗に「八左衛門殿島」とも云っていたが、寛政四年石川氏は、永田町へ屋敷替えとなった。爾来石川島の名は、明治まで残ったのである。

此の石川島南側鍵の手に入堀を経て、昔攝津の国西成郡佃村漁夫達が開拓移住せしために、佃島の称を付した築島がある。江戸名所図会に「佃島、鉄砲洲に傍たる孤島をいう」とあり、文亀年間の江戸旧図には「向島」とも記されている。

詳しくは、天正年間東照大神宮遠州浜松の御城に在りし時、皇都へ上り給う頃、攝津の国多田の御廟及び住吉大神へ参詣を思い立ち、本多忠勝、酒井忠次、小笠原長忠、鳥居元忠、大久保忠世（彦左衛門）等を引具し西上し神崎川畔に至る。御船見当らず一行十数名当惑している折、川口に網を卸していた佃村漁民、漁を途中で止め、一行を獵船に乗せ向こう岸へ漕ぎ出し渡し奉る。神君甚く感激し辞退する漁民等へ多分の鳥目を与え、

大久保忠世に命じて住居・名前を書き留めさせた。攝津の国西成郡佃村漁民彦作の名が、筆頭に書き記されている。

その後伏見御城にまします時、神崎川船頭の親切を思い出し、早速佃村へ連絡、名主森孫右衛門同道彦作を呼び寄せ、当時の礼を述べ今後伏見に在る時は、鮮魚供進の御用の台命仰せ付けられ、彦作帰村し村民に伝え、翌日から生魚納めることとなり、村民生活の安定の一助となった。

然るに天正十八年七月十四日付辞令を以って家康突然東国江戸に移封、旧領地は悉く豊臣家臣に分与、伏見に居た家康はそのまま諸將と共に東海道を下り、居城駿府にも立寄らず八月一日江戸へ到着、これを聞きし旧封内の民は落胆し、就中佃村漁民達も彦作を代表として、船手方石川又四郎を経て江戸随従を出願、庄屋森孫右衛門、弟九左衛門忠兵衛をはじめ一族七人、佃村、大和田村漁師合せて三十四名が、故郷の仕事を捨て随従する旨を聞いた家康は喜んでそれを許した。

慶長四年正月十二日秀吉薨じて秀頼六才の折、五大老の一人として伏見城にて政務を執りし時も、二十余年前の労を思い名主同道再び彦作を呼び、老躯でありながら白髪とは云え、腰も曲らず丈夫な姿を見て喜び合ったとのこと、以来西国へ御使いある時は、必ず漁船を以て仕へる可き旨命があり、従って大阪兩度の御陣にも、軍事の密使或は御膳の魚獵等の事日々怠なく仕へたのであった。

江戸へ降りし三十四名には、安藤・石川両候の藩邸がある網干坂・小網町・難波町等に旅宿し、江戸城外濠銭瓶橋（現日本銀行付近）で橋番の片手間に網漁を業とさせた。又その折白魚の子を移植して、浅草川の裾に放養を始める。

家康は、行政事務多忙に拘らず入城して十日目、日本全国漁業権を保証する墨付を佃漁民に与えたことは、余程随従に感謝

していたのであろう。寛永年間、銭瓶橋の換地として鉄砲洲東千潟に百間四方の地を賜り、正保元年二月漁家を建並べて、本國佃村の名を採りて即ち「佃島」と号けたのが始まりである。漁民達は、以上の特権に対して別に義務を負う必要も無かったが、唯毎年十一月から翌年三月まで白魚献上を務めとし、従って当初は夜中十余隻の船を出し、四ツ手網を用いておしゃらこ沙魚と言う小魚を捕り、市中に鬻いで生業としていたのであった。

蟬の声が重い。それほどの騒音なのに、静寂さを一層深める。酷暑の木陰には、それが似合っていた。夏休みは、「神社の杜」が故郷を忍ばせる。隅田川の川辺で、荘厳さと静寂さを求めるならば、「佃の神社」を代表とする。社の姿と神庭の木々が、江戸を醸し出しているからである。私の子供時代は、朝といい、昼といい、夜といい、終日その刻々に似合っていたのが此の神社であった。

江戸前の海上に浮出た「鎧の形に似た森島」の隣、佃島「住吉神社」が創建された因縁は、やはり鎮守の杜に応わしい地なのである。三十余名の漁夫達は、此処に「神」を祀り氏子となつたのが、佃島である。

佃島物語は、住吉神社から始まる。

江戸前の 森島影に 流れ星

宵の明星 住吉の宮

二、心の故郷

——住吉神社——

「流れよ 流れよ 隅田川の水よ、……旅にある日、ソーン、ギエンヌ、ガロンヌなどの河畔に立って私が思い出すのは、何時でもお前のことだった。」

大正初め佃三丁目「海水館」で「春」を書き上げた島崎藤村は、外遊を三回しているが、親しみをこめて書いた「隅田川」に表現されているように、彼にとって日本のふるさとであり、それは佃での生活でもあった。

金色の擬宝珠に朱色欄干の佃小橋を渡ると、右手にモダンな三角屋根の小・中学校と背後に聳え建つ超マンション群を見て、佃一丁目に目を転ずると、なんと萎びた街並である。百間四方の島が一層小さく、何かアンバランスで奇異な感じを与える。江戸時代から続く佃島と信じて訪ねるが、江戸を残すものは何処にも見当らない。私は何処へ行っても、その土地のふるさとは「鎮守様」と思っているから、古きを尋ねる場合必ず「土地の産土神様」を参詣する。私のふるさとは「佃島住吉神社」であるから、この古き神社へ詣れば、何か古い姿がとどまっているかと思う。

住吉神社正面は、隅田川に面して銅板卷神明大鳥居を東へ真直ぐ進むのである。門を入り一見すると、真先に新しき本殿・神楽殿が目に入る。「なる程」超近代的マンション群を背景に一番似合っているではないか。時代に即応して新改築された古き神社が、むしろ若々しく感じた。

昭和五十八年改築前の荘厳な姿の良かった懐かしきふるさと

「住吉神社」は、二十一世紀に向けて脱皮していたのである。

正面を入ると真新しいみかげ石明神鳥居が、参詣者を迎える。本殿改築後、平成元年一月十五日、住吉講により、この鳥居も建替えられ、掲げられている陶製扁額だけが飛び抜けて目につく。新しい鳥居の大きさは以前と同様であるが、古い鳥居はまだ破損もしていなかった様であるのに、歴史の事実が一つ消されたのは残念である。前の鳥居はこれより瀟洒で、扁額とは対をなし品位を高めていた。前の鳥居石柱（高さ四五四・五糧、径三六・六糧、周囲一一五糧）の左柱裏に「明治二十七年八月吉日」同右柱裏には「陶器仲間」と刻名があった。

（工芸品）陶製扁額・額文「住吉神社」

一面

額縁巾約一四糧の呉須地白雲文様に、額面縦八一糧、横四六糧、白地に呉須のコバルト色で「明治十五午歳六月三十日・住吉神社・一品熾仁親王」と鮮やかに焼付けられ、金網に包まれた東京では珍しい陶製扁額である。陶器仲間であれば、陶製扁額奉納は当然であろう。明治十五年六月に強風のため、石造り二ノ鳥居が倒壊した。そのため当社に屢々参詣されていた親王が、明治十四年二月神道教導職総裁にもなっていた関係上、明治十五年七月四日神主平岡好国は、親王の御染筆拜領に参殿、この折陶器問屋島田宗兵衛にも染筆を下付されたので、この扁額の文字は、それに基づいているものと思われる。当時親王七十一才の時であらせられた。

有栖川宮熾仁親王（文化九—明治十九年）は、有栖川宮家第八代当主にして、幕末期より皇族中の最長老であり、皇室の信任厚く、その上国典に通じ、書道・和歌にも御造詣が深かった。

御存知「幕末の悲恋物語」時の帝王孝明天皇の妹、皇女和宮

(弘化三—明治十年)が文久元年公武合体のため、十四代將軍家茂(弘化三—慶応二年)夫人(当時十六才)となり、有栖川宮との婚約を破棄して、泣く泣く関東へ下向をした話は有名である。慶応二年家茂長州征伐のため大阪在陣中に死亡、夫人(当時二十三才)は髪をおろし静寛院宮となり、翌々年江戸開城に際しては、慶喜(天保八—大正二年)の恭順をとりなし徳川家を守られた。倒幕のため東征大総督として、曾ての婚約者有栖川宮が下向されたのも皮肉である。慶応三年王政復古なるや親王は神祇事務総督の重職を拝任し、祭政一致の実現に尽力され、神道を国家の基本と考え、明治十四年天皇にその考えを上奏、翌十五年天皇の勸慮により皇典講究所(現國學院大学)初代総裁に就任され、以後その発展に努力された。鳥居を潜り、幕末への感慨にしばし慕る。

(工芸品) 水盤石

一基

鳥居右手に、これも亦こじんまりした水盤舎が建っている。参拝に先立ち口を漱ぎ手を洗いフト伊豆石の水盤を見ると、大きさは高さ六〇糎、上端の巾一一糎、奥行五九糎、下方は少し窄み、表面には篆書で「奉献」と横書に彫り、裏面は楷書で「天保十二年・丑正月・白子組献納」と三行に刻名されている。あった! 江戸の物を見つけたのである。

白子組とは、「白子組木綿問屋仲間」と云い、「大伝馬町木綿問屋仲間」に対立して起った木綿問屋仲間である。江戸大伝馬町に伊勢商人が軒を連ね定着始めたのは、正保から延宝にかけて盛んで、松阪の長谷川・小津・中川・小野田、射和の家城・竹川、円生の長井等が木綿問屋として営業をした。その取扱いが、松阪木綿・神戸地方の伊勢木綿・伊勢湾利用の尾州木綿・

三河木綿等より購買して、江戸で販売するのである。しかし時代が経るにつれ産地で買次問屋が起り、大伝馬町以外での木綿問屋とも取引を持つ様になった。何れにしろ伊勢界隈の木綿の出荷が、白子港を中心としていたので、大伝馬町以外で宮木綿問屋が集まり、中には小売呉服店である越後屋・白木屋・大丸まで所属して、主に勢州白子の積問屋の廻船を利用するため「白子木綿問屋」と呼称したのである。

私の店は深川永代橋佐賀町で明治二十年頃から呉服商を営み、木綿仕入は「大伝馬町木綿問屋」の長谷川や特に小津店とは取引が長く、有名な国学者本居宣長が三代目当主であった木綿店で終戦まで続いていたが、紙業に転業してしまった。

「白子組」は、当初から中小木綿問屋の集まりであるから、勢州からの廻船が無事江戸到着を願い、海上航海安全上「住吉神社」を崇敬し奉納されたものである。幕末後御維新の変革は、民衆の生活も安定せず明治十年頃まで売上が低迷し、すべての商人は困難を極めていた。白子組も明治十三年一月二十四日「木綿呉服問屋組合」を新たに設立し、白木屋十代彦太郎大村和吉郎が総代に就任以後、昭和十五年統制経済が始まると組合も名目だけとなり戦禍と共に消滅するのである。

この「白子組献納」水盤石を大事に労わる様に覆い包み建つ水盤舎は、かなり古く見える。

(彫刻) 水盤舎

一棟

大きさは、桁行・梁間共に一間、一重の切妻造り瓦葺、総檜造りである。柱の上部は、台輪と頭貫を架け四面の虹梁と更に上の丸桁の四面妻虹梁とは、唐草模様を四隅に彫り、柱に接する下端には波と魚の彫刻と、外側桁行方向に勢いよく疾走す

る様の獅子を彫刻してある。特に妻虹梁と台輪の中備の四面には、佃島漁師の生活が正面渡船の図で手漕ぎ舟に乗客四人。左側面は二艘の大帆船・満帆で荒波に向い右に枝ぶりの良い松が見える。右側面は海上生活の図で、波立つ海に艫を漕ぎ網を打つ二人の漁師を乗せた小舟二隻。背面は、潮干狩の図で表裏に彫られている。又側面上部の虹梁上に、大瓶束と笈形を立て、懸魚の位置に波と鳥の彫刻もあり、天井は鏡天井である。四本の柱の下を見ると、方柱は几帳面取で、石の礎盤の上に立ち、転がある。

慶応二年十一月神田から出火延焼が佃島にも及び、住吉神社も焼失した。その折水盤舎も類焼、明治二年四月に再建、その後明治四十四年に改築され、昭和八十年屋根の葺き替えが行われた。今日に至っている。昭和五十年に私が中央区内建築物調査を行った際、木造建築物の中では最も古く完全に保存されており、その上漁夫海上生活の資料を表現した彫刻も付され、文化財上価値のある建造物で、現在神社内では一番大切に保存しなくてはならない。

水盤舎の右奥、石垣に沿って大きな自然石が目につく。本殿参拝前に、失礼して覗いてみる。

(記念碑) 鯉 塚

大きさは、高さ二四〇糎、巾一三〇糎、正面に「鯉塚」と刻名がある。裏面の上段銅板(縦三六糎、横六七糎)に、故池田弥三郎撰「鯉塚縁起」が刻まれ、下段銅板(縦三七糎、横七八糎)に「発起人一〇一名」が刻名され石に嵌められ、左側縦に「昭和二十八年歳在癸巳五月建・節堂山崎中書・十二世石工

桜井七右衛門刻」と石に刻まれている。

この記念碑は、東京鯉節類卸商業協同組合並びに株式会社東京鯉節取引所が建立したものである。東京鯉節問屋組合編「かつぶし」によれば「天保十四年癸卯四月に、鯉節問屋小船町組では、住吉神社を正式の守護神として、その月の中旬鯉節大漁の祈願を行い、神社に「鯉釣の神楽」を奉納した」と記録があるので、江戸時代から住吉神社の崇敬深い組合であることが解る。従って塚の建立の趣旨によれば、「昔から住吉大神の神徳をたたえ、特に海上安全の守護神として海に富を得、幸いを求める人々は篤い崇敬を捧げていた。東京鯉節問屋組合では、江戸の始めから住吉大神を守護神と崇敬敬い奉仕の誠心としてきた。

今日私共の生業が斯くも繁栄しているのは、この大神の神使眷属として、世の人の食膳に海の幸として喜ばれている鯉魚の霊に対しても感謝の心でいっぱいである。この度組合員の総意で住吉神社の境内に鯉塚として建立した次第である」とある。また、宣なるかなである。

なにごとの 在(ま)しますかは 知らねども
かたじけなさに 涙こぼるる

伊勢神宮の森厳なたたずまいに仏僧の身でありながら、神威を感じ歌った西行と同様に、私は子供の頃から住吉神社に参ると、何か荘厳さとその上心休まる思であった。本殿の周囲は木々が聳え、境内を静寂さに導き、自然に頭が下がったのである。吉川英治も晩年伊勢詣の折、

ここは心の ふるさとか

そぞろ参れば 旅ごころ
うたた童にかへるかな

と歌ったように、私にとって住吉神社は心のふるさとなのである。昔から江戸の神社と云えば、山王の日枝神社、神田の明神社、深川の八幡社で代表されるが、何れもケバケバと派手な本殿で、ふるさとどころか、ウキウキ踊り出したくなる神域を醸し出し、庶民が大勢集まって騒ぐ社と近年益々感じて居る。それに引替え佃の住吉様は、生活に密着し、氏子の生活の中に生きづき、苦しい時も楽しい時も常に共存している神なのである。従って社殿も一般民家に相応しい構えで、むしろ「侘び・寂び」を感じていた程であった。

元来「鎮守様」と云えば、森がつきものである。それは森と社が密接に関係あるからで、原初的姿として考えられるものに、神籬とか磐境と云う言葉がある。ヒモロギのヒは霊を指し神聖を意味とし、ヒモロギとは神を宿し留める樹のことで、樹木そのもの、又は真垣(籬)のように並立した樹の内に神を請じ祭ることを云うのである。従って常緑樹がそれに当たっていたが、その一種によく神木として神をあげるが、神の鎮まる地の境界を示す樹で境木と云い、神の木と記し聖なる木とされるようになった。

日本書紀神代卷、天孫降臨の段に、「高皇産靈尊、因りて勅して曰く、吾は則ち天津神籬及天津磐境を起樹てて、当に吾孫の爲に齋ひ奉らむ。汝天兒屋根命・太玉命、宜しく天津神籬を持ちて、葦原中国に降りて、亦吾孫の爲に齋ひ奉れ」と記されているが、天兒屋根命は中臣氏、太玉命は忌部氏の祖先で、神命によって神籬・磐境を作り祭祀を行ったのである。

従って初めは、神祭りは社殿形式の建物を持たず、一定の聖

地(清浄な地)に樹木を建て祀ったのであったが、時代が下つて、あの仏教を奨励された推古天皇や聖徳太子でさえも、伝統的の日本の神に対する祭祀は忘れていなかった。

推古十五年の詔に、「朕聞く、曩に我が皇祖の天皇たちの世を宰むるや、天に踞り地に踏して敦く神祇を礼い、周く山川を祀って幽かに乾坤に通わす。是を以て陰陽開け和み、造化共に調う。今当に朕が世に当りて、神祇を祭祀すること豈怠り有らんや、故れ群臣爲に心を竭して宜しく神祇を拝まいまつるべし。」と。神社に社殿が造営され依代を御神体として礼拝するようになったのは、自然の勢いだったのかも知れない。

スペインの歴史家ディエス・デル・コラールは「アジアの旅―風景と文化―」の中で、「第一に日本の森は、とりわけ神社や寺と常にとともにある杉の森は、地中海や大西洋の樹木からなる吾々ヨーロッパの森に見出しうるものとは格段と優れて、自然の息吹きを呈している。第二に、日本の社殿自体が木で出来ているのであって、それは常にその傍に構えて庇護と防衛にあたっている森の直接の延長に他ならない。あたかも日本の「神」が全自然を満たしている聖なる流れの凝結した一滴にほかならぬように、日本の神社は森という神聖にして広大なる住居の最も密に圧縮された建築的表示ともいべきものである」と述べている。

たしかに、森と神社はつきものである。昔を偲びながら本殿へ歩を進めたが、何か私には不調和感を持った。それは周囲にあったあの小高い木々は消え、青天の下、太陽にさらけ出された本殿、昭和五十八年改築されたからである。

(建造物) 住吉神社本殿

拝殿から空を仰ぐと干木や勝男木が申訳なさそうに配され、重みがなく何となく華奢に見える。以前とは同じなのであろうが、荘厳さが乏しい。

元来干木とは、古事記・大國主神出雲大社創建の条に「底津石根に宮柱太知り、高天原に氷木高知りて」とあり、又別記に「底津石根に宮柱太知り、高天原に氷椽高知りて」とか、日本書紀・神武天皇橿原奠都の段に「底磐の根に宮柱太しく立て、高天原に榑風峻峙りて」とある。

何れも氷木・氷椽・榑風は、ヒギと訓み、後の干木を指し、延喜式の祝詞にも「下岩根に宮柱太知り立て、高天原に干木高知りて」と、この頃つまり平安中期にチギと読まれるようになったのであるが、榑・椽共に垂木を意味し、日本の原始的住居の天地根元造で云う、二本の垂木を交差して組み両端に置いて、この交差したところに棟木を渡し、そのため垂木の棟木に接した部分から上が、屋根より高く聳え、突き出た部分を干木と呼ぶのである。つまり干木は、垂木の延長でなければならぬ。ところが、棟木の上に載せて裝飾化しているのを置干木と云い、現代神社建築では、この方が多い。

この干木を初め氷木・氷椽と書かれていたのは、防火の意味があったらしいが、よくみるといくつかの風穴があいており、榑風とも書かれたところから風除けの意味があり、強風を避けるためらしい。願わくば高く聳えて欲しいのであるが、屋根の勾配に比例してか低くみえ、先端切り口が外削ぎで垂直のため、辛うじて高く見せている。

干木が垂木の押さえであるのに対し、堅魚木（勝男木）は棟木或は萱葺の押さえとして起った。堅魚木は、鯉木とも書き、乾かして固めた魚・堅い魚、カツ節に似た形の木を指し、棟の上に直角の方向に並べ、両端を金銅金具で飾ってある。最も古

い記録には、古事記雄略の段に「堅魚を上げて舎屋を作る家有り」とあるのが初見である。

この細身の洒落た干木や堅魚木が、参拝者に覆い被さるような勾配で迫る平面的な銅板屋根と、神社背景の屋根型高層ビルとの対比からくる、新しき物同志が不思議と似合っているのは、錯覚なのかも知れない。

拝殿に進む。昔は前庇の下、賽銭箱の真上、向拝に大きな鈴が懸けられ、鈴に添えて長い布を垂らし、神社によっては布を綱のように編んだり、最近では綱糸で麻苧や紅白或は五色の布を中に入れ編み綱に包み垂れているのを見受けるが、昭和三十四—五年までは、願掛けで成就すると御礼奉納として、私の店へ「綿」一反とか縁起を担ぎ紅白綿七尺五寸三分の長さ何本とよく注文があったものだ。この綱を曳いて鈴を鳴らすのである。

鈴を鳴らすことは、神慮を慰めたり、涼音のところから祓い清める意味があると云う。いずれにしても振ったときのすがすがしい音色は、参拝者の気を一層高めるのである。

しかしあの尊い音色は、今は聞けない。

拝殿に額突き 二拝二拍手

「日頃の守護と本日参拝の機会に感謝する」

二拝二拍手一拝、頭を上げると、昭和五十八年改築以前の社を思い出した。

木々も高く囲まれて苔むした社の屋根、神前に立つと「よく来たなあ」と神の言葉が呼霊した様に思えて自然に頭が下がった。まるで、母親の懐に包まれた安堵感を与えるのが鎮守様である。それが、私のふるさとでもあった。

そうだが、今この東京で「江戸から昭和へ」を知らせることのできる事実には「任吉神社」しかないと思った。昭和四十九年の文化財調査で私の見る限り、中央区内木造建築物では一級品

であったからである。

住吉神社が創始正保三年六月二十九日社殿造営遷座されて以来、佃島が江戸時代約十二回もの延焼に遇い、最も被害甚大であったのは次の火災であった。

・元禄十五年三月二日 南八丁堀から出火、佃島に延焼、災後奉行所へ願ひ佃島へ五百両貸付をうける。

・安永七年二月十二日 石町から出火、延焼佃島におよび、島中五軒を残し全島焼失、幕府に願ひ金子五百両拝借許される。

・天保五年二月七日 北風烈し、昼八つ時神田佐久間町から出火、築地門跡から海手まで延焼、佃島全焼、災後官に願ひ金子四百両拝借をうく。翌六年五月住吉神社再建のための募金行う(佃島住吉御礼再建仕法書)。

・天保九年十一月九日 朝六つ時八丁堀水谷町辺から出火佃島へ飛火、全島残らず類焼。

・安政五年二月十日 この日烈しい北風が吹き戌刻安針町・長浜町境から出火、延焼して東湊町におよび、佃島に飛火住吉神社焼亡。

・慶応二年十一月 神田から出火延焼佃島におよぶ。等、その都度神社再建が行われたのである。慶応二年の延焼は、天保十二年六月建造の内陣土蔵(奥行二間、間口二間半、五坪)を残し全焼、明治三年六月に再建された。

本殿は、内陣に加えて献饌所(奥行一間半、間口二間半、約四坪)土の間(奥行一間半、間口二間半、約四坪)等で、土蔵造本瓦葺である。

幣殿(奥行二間、間口二間半、五坪)は、ま下造銅板葺、拝殿(奥行三間、間口四間、十二坪)が屋根切妻造銅板葺に、御供所(奥行一間、間口二間、二坪)と、詰所(奥行一間、間口

二間、二坪)で、本殿と幣殿を接続して複合社殿とされていた。その後明治四十三年に大修理が行われ、続いて昭和八年拝殿と幣殿の屋根を銅板葺に葺替えたものであった。

この様に江戸から明治へ、更に大正の関東大震災や昭和の第二次世界大戦にも、大東京が壊滅したにも拘らず生き残った社を、文化財として誇りを持って子孫に伝えるべきだと思っていた。

ところが昭和五十七年私のボイスカウトの教え子の父、矢崎建設の針山氏設計による神楽殿が改築され、氏が富山県出身で茶室ちやむろに関する造詣も深い故か、侘・寂が滲みでて、古い神社と杜かに良く似合っていたが、翌五十八年現在の社殿に大改築したのである。

本殿(土蔵造、桁行六間、梁行四間、切妻造、本瓦葺)
幣殿(両下り造、桁行五間、梁行一間、切妻造、銅板葺)

拝殿(神明造、桁行三間、梁行三間、切妻造、銅板葺)等、建築様式と形は前社殿同様、三殿を一体化して縦に並べる権現造形式だが、拝殿・本殿は権現造の変形とみられる。施工は、私の姉女学校同級生の父経営、明楽工務店である。

改築後の神社は、リバーシティの高層建築群とはマッチするものの、神域の古い末社や鳥居、灯籠その他建造物とは違和感を持ち、古いそれ等の物がそれぞれ何かもの云いたげに私へ問いかけてくる。古いものと新しいものが、まだ溶け合っていないのである。やっぱり、それなりの時間が必要なのであろう。従って二十一世紀に向けて、「佃島住吉神社」の課題が与えられたのである。

しばし、住吉神社の心に触れよう。明治三十九年五月 宮司平岡好文「神社略縁起」を草した。

西の海 櫛の原の潮路より

顯はれ出でし 住の江の神

(卜部兼直)

この歌の如く住吉大神は遠津神代の昔、筑紫の日向の橋の小門の櫛原に於て、顯はれ出で給ひし大神にぞ座ましける。即ち伊邪那岐大神の御子にて、底筒之男命・中筒之男命・上筒之男命の三柱にして、恐くも天照皇大神の御兄神に当らせ給へり。

と、御祭神を明らかにしている。古事記上卷伊邪那岐命の禊祓の条に、禍を直さむとして「水底に滌ぎ給ふ時に成りませる神の名は、底津綿津見命次に底筒之男命。中に滌ぎ給ふ時に成りませる神の名は、中津綿津見命次に中筒之男命。

水の上に滌ぎ給ふ時に成りませる神の名は、上津綿津見命次に上筒之男命。此の三種の綿津見神は、阿曇連等が祖神と以ち伊都久神なり。故阿曇連等は、この綿津見神の子、宇都志日金拆命の子孫なり。その底筒之男命・中筒之男命・上筒之男命三柱の神は、墨江の三前の大神なり」と、系統が記されている。「倒叙日本史」によれば、筒とは「ゆふづつ」金星即ち宵の明星の星の義で、星よって航海の針路を定めた関係から、この三神を海路の神とされた由来が示されている。「阿曇」は氏の名で、アマツミ、アマは海人、ツミは綿津見と同じで、航海や漁業に従事した海人の部族を率いていた豪族である。「連」とは、姓を指し、格を定めるために、朝廷から賜る爵の如き性質のもので、臣・連・君・別・直・造・首・懸主・稲置・村主等がそれである。宇津志日金折命は、姓氏録によると「安曇連于都斯奈賀命之後也」とある。又「墨江」とは、住吉

であり、住吉の神は航海漁業の守護神として各地の港津に祀つてある。有名なものは、大坂市外住吉村、長門国豊浦郡勝山村、筑前国筑紫郡住吉町、壹岐国那賀村等の住吉神社である。

さて此の三神がどうして祀られるようになったかについて縁起は、

神功皇后の三韓を征討あらせ給う時。皇后躬から御親祭ありて、皇船の洪海を渡りまししに、大神海上を守護なし給ひ、和魂は皇后の玉體を守り、荒魂は先陣に進み給ひて、遂に三韓の王等を降伏せしめ、皇国の外蕃と成したり、而て荒魂を彼の地に鎮め祭りて、彼国の守護神と齊ひ奉りき。かくて皇船還御の途次、攝津国西成郡田蓑島に御假泊の砌り、戦捷の報賽をなさんと、三神をこの島根に於て遙拝あらせ給ひぬ、これ田蓑島の住吉大神の社祠の起源なりけり。

と述べている。更に、

皇船武庫の海を過ぎ給う時、兎原の住吉郷の御社創建し、其後仁徳天皇の御代に、住吉郡住吉の津の御社の創建あり、此の御時より神功皇后の御霊をも合せ祀りて、後世に至るまで住吉四座の大神と称へ奉れるなり。(この住吉の郡住吉の津の社が、大坂住吉神社である。)而てこの外諸国に、此の大神の御社ありて、歴朝御崇敬ありし事蹟は、国史に顯然たる所なり。

とある。

大坂市住吉区の住吉神社は、攝津一の宮と呼ばれ、仁徳天皇

が難波の地に都を移し、難波高津宮を造宮周辺部の開発に力を盡くし、墨江の津（万葉集に「住吉之三津」と歌う後の住吉津である。）を開いた。古事記下巻仁徳天皇御名代の設定の条に「秦人を役てて、茨田堤茨田三宅を作り給い、又丸邇池・依網池を作り給い、又難波之堀江を掘りて海に通し、又小椅江を掘り、又墨江之津を定め給いき。」と記されているが、これは応神天皇の御代に帰化した弓月君が率いて来た秦人達を活用して、難波津が諸水の落ち合う所で、小椅江（大坂市外鶴橋村小橋）も河内から来る諸流が、ここで相会し江湾となり、沼沢が多く、良田乏しく、しかも毎年河水が氾濫するので、帰化人の工案により疏水工事を起し、従来の外交要津であった武庫津を廃し都に近い墨江之津今の住吉津を開いたから、外国文物の輸入の門戸となり、後仏教の渡来や遣唐使の往来等、すべてこの港で行われたのである。

仁徳天皇は、住吉の神を崇拜していたので、攝津菟原（兵庫県神戸市）の地から住吉明神を移したのが、今の住吉大社である。

以来、国家鎮護の神・海上守護の神、或いは和歌や武勇の神、農業・水利の神として、大いに崇敬された。神域も広く、社領も広大で、財力も豊富であった。大坂湾の海上権を一手に握り、大海をすべて社領としていたため社運は隆盛をたどり、四天王寺と並び平安貴族の参詣者も多かった。そのため住吉神社の強勢は、権威をかさにきた神人らの横暴が多くなった。十世紀末から十一世紀初め、一条天皇の頃、住吉の神人五十余名が、攝津国司藤原説孝が神人を殴ったことから強訴、朝廷に対し神威をかざして訴えを主張する集団行動をするなど、「保元の乱」

（一一五〇）の折、住吉神社等十ヶ寺二十一社に対し、所領とその用途を報告せよの官宣旨が出されたのも、神威を後盾の住

吉神人の横暴が目にあまるものがあつたからである。後に、遠里小野（大坂市住吉区）の油商人が、住吉神社御油神人と称し、油木（搾油器）を立てて油を絞り、荏胡麻油を製造販売をしたため、大山崎（京都離宮八幡宮）油座の神人と、攝津や和泉で度々権利争をした。それは、大山崎油座の全国独占権を打ちやぶろうと住吉神社の権威を借りて行ったのである。当時は権威ある寺社を本所と仰ぎ、商人等が権利争をするようになった。中世の市場で、攝津では三条西家を本所とする青学座（天王寺）があつたが、莊園領主没落と共に解体していった。

「定頼卿集」（権中納言藤原定頼歌集）に、「さか井と云所に、しほゆあみにおはしけるに」とか、「さか井といふ所に、しほゆあみにおはしたりしに」等、海水を暖めて温浴する塩風呂で塩湯浴の名所として、平安貴族に知られ、平安末期より流行した熊野参詣の通路として賑わいをみせ始めた堺の地は、住吉大社の神領であつたが、瀬戸海上が盛になると奈良杜寺の進出が目立ち、中でも春日社は、供養神人の身分を、堺の漁夫に与え、魚の奉納・販売に従事させた。

降って南北朝時代、この漁夫達が南朝スパイの疑いあるとして、和泉守護細川氏より、魚介売買を禁止、そのため春日社の神子の魚が手に入らず、足利尊氏に訴え禁を解かれる事件もあつたが、後醍醐天皇吉野行宮に移るや、延元元年（一三三六）四月天皇は住吉神社神主に論旨を下した。これは攝津国堺荘の知行の承認を、住吉社家に与えたことは、後醍醐天皇が最も崇敬した神社であつたからである。なおこの時代に、後村上天皇が神主津守家の邸を正平十五年十月行在所とし、ここで崩御されている。

延慶元年（一三〇六）東大寺の兵庫関開設は、海上利用船から関税を徴収し始めたので、以前から住吉神社が大坂湾の海上

権を握って、和泉から播磨まで及んでいたから、その不合理を訴え、朝廷ではその主張を承認、兵庫港の商船日銭を与えた。しかし住吉神主津守氏が南朝方によっていたため、南朝と共に衰退したのである。

津守家は尾張氏の出身で、神功皇后の時に奉仕した田蓼見宿禰の子孫とされ、連綿として社務を世襲した。同族の大領（攝社大海神社社司）・板屋・大宅・神権（祿官職）・高木等と併せ住吉七家と称した。中世における莊領莊園は、近畿から西国へかけて多かったが、戦国の乱世になってすべてを失った。文禄三年（一五九四）豊臣秀吉から、神領二、七〇〇石が寄せられ、江戸幕府は改めて朱印領二、〇六〇石とした。明治四年には、官幣大社に列している。以上攝津の住吉神社の変遷と周辺地域との関係と位置を記憶に入れて、話を江戸に戻そう。縁起は更に続く、

夫より遙かの後、天正年中徳川家康公、攝津の多田の廟に参詣の時、田蓼島の漁夫等漁船を以て、神崎川の渡船を勤めたりし縁に由り、家康公この村の住吉の神社にも拝礼ありたり、尚ほ台命に依りて村名を佃島と改めぬ、漁業の傍ら田をも作れとの、公の御辞に基きしとぞ云う。天正十八年八月一日、家康公関東下降の際台命に依り、佃村の漁夫三十三人江戸へ下向の砌り、住吉明神の神職平岡大夫の弟権大夫好次。分神靈を奉載して当国に下降せり。当時安藤対馬守・石川大隅守などの諸侯の邸内に、旅館を賜はりしかば、是に於て分靈を奉祭し、寛永年間に幕府より、鉄砲洲向干潟の地を賜はり、築島工事を起し、正保二年竣成せしかば、本国の村名を取り佃島と号し、漁夫等永住するに及びたり、故に住吉明神の社地

を定め（現在地）社殿を造営し、正保三年六月二十九日住吉三柱の大神・神功皇后の御霊・徳川家康公の御霊を奉遷祭祀せし事にぞありける、是れ実に当社の創始なりけり。

此処に、江戸佃島住吉神社の創建が記され、

御祭神 三神

底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命

配 祀 二神

神功皇后、徳川家康公

等、祭祀を明かにしている。縁起は未だ続く、

爾來社前に礼拝の人絶えず、その崇敬する人の多かる中に、都下の人河上正吉氏、百方盡力粹身して、元禄七年始めて、十組の規定を立てられ、踵て十三店組成立したり。

茲に河上氏当社のため、諸問屋と議りて、講を結び金を集め、新に社殿を造営して規模を改めたり。然れば元禄十二年九月九日幕府当社を古蹟社に定めたり。是より以降四時の祭事懈怠なく、社頭の殷賑を追ひ月を重ねるに従い、益々に盛りなりけり、今日各問屋諸組の当社を崇敬あるその源の、遠く由て来たる事斯の如し。

と、江戸時代の神社繁栄を述べている。中でも航海守護を求め諸業種卸問屋仲間は当然ながら、特に本縁起文の江戸時代内容を理解する上に、当時の江戸から大阪間の廻船業の歴史を理解することが必要である。

昔は、すべて陸路にて品物を送るを主としていた。しかるに、
元和五年 泉州堺の商人が、海路で物品を送れるかを考え、先
ず紀州牟婁郡富田浦より、二百五十五石船積みの船一叟を借
り入れ、大阪へ廻し、木綿・油・綿・酒・醬油その他雜貨を
積み追風を待って帆を上げ、紀州灘・遠州灘・相模灘を無事
乗りきり、十余日を費し品川沖に着く。大阪より江戸を船で
輸送した最初の試みである。

寛永元年 大阪北浜町泉屋平右衛門が、江戸積問屋を開業し、
不定期の廻漕を考えた。

寛永四年 同じ大阪の毛馬屋・富田屋・大津屋・荒屋・塩屋等
が相次いで船問屋を開業。

正保年間になると攝津伝法村商人も駿河の廻船を雇入れ、大阪
から江戸の貨物廻船を始めていたが、

寛延五年 同じ伝法村（此花区伝法町）の船問屋が伝法船なる
ものを造り、大阪・西宮・兵庫の商人達のため、伊丹酒屋の
援助で、酒荷を主に酢・醬油・塗物・紙・木綿・金物・畳表
等を積み、船足速い二百から四百石船で江戸廻船を始めた。
これを「小早」と呼ぶ運漕船を造り、定期的航路を開いた。
ところが物貨の決算・難船の処分・船頭の不正等につき、屢々
紛争が生じ、

元禄七年 江戸商人川上正吉（大阪屋伊兵衛）は、自分も大阪
へ送る貨物が難船し損害を受けたので、本船町・室町・呉服
町・本町・大伝馬町等の大商人と図り、廻船荷積組合を糾合
すべく、荷主の攻守同盟として十組問屋を結成、積荷仲間の
結束が強化された。十組とは、塗物店屋、内店組（絹布・太
物・繰綿・小間物・雛人形）、通町組（小間物・太物・荒物・
塗物・打物）、葉種店組（葉種・砂糖）、釘店組（釘鉄・銅類）、
綿店組、表店組（畳表・青筵）、河岸組（水油）、紙店組（紙・

ローソク）、酒店組の十組問屋を指し、規定を作り、難破荷
物は、組合の行事が監査して処分し、共同海損は、荷主に配
当すること、現在の海上保険制度のようなものであるから、
初めは十三店組が**享保年間**には二十二組に増加したが、それ
でも十組と称していた。

元禄十三年 大阪にも十組問屋が生れ、廻船年寄十人を命じて、
その取締を行わせ互に連絡をとり合い、江戸が二十二組にな
る頃は、大阪も二十四組となる程であった。この江戸十組と
大阪二十四組の運漕に専用する荷船を「菱垣船」と名付け、
菱垣廻船の略で船腹に花菱の竹垣を組み立て紋様をつけ、大
阪・江戸両組合の荷と、幕府及び諸藩の荷を積む以外は、回
漕業者自身の買荷も、他の商人から頼まれたものも一切積ん
ではならないと定めた。当時の模様を菱垣廻船の繰綿業者の
例でみると、一日一刻も早く江戸へ着く競い合う番船という
ものがあって、一番船が江戸の川口へ着くと、綿俵一本を担
ぎ、仲仕数千人が各自思いの出立で、大伝馬町の町人がはや
したてて持ち歩き、その綿俵の口を切り解いて、その綿で相
場を立て、新早綿であるから、格別に景気よく、一番船一叟
分は瞬間に売り払ってしまう。二番船・三番船と値段は次
第に下がる。**享保頃**大阪の桑名屋与市という江戸積問屋の船
頭に、徳藏と云う者が航海上手のため、番船中に彼が居れば、
他の船頭は諦め、せめて二番に着こうと励んだという。一番
船の荷主は賞金を貰い、翌年番船になる時は、他船に先立っ
て荷物を積み入れる特権を与えられた。綿番船の他に酒番船
などもあり、同様江戸着を競ったのである。かの紀伊国屋文
左衛門の蜜柑船も、想像が出来るよう。しかし、

享保十五年 十組問屋の中、酒店だけは不平が起り、十組問屋
から脱退して「樽廻船」を起し、酒に限らず他の貨物をも積

み、菱垣廻船より低運賃で、その上積荷の日数が早く、競争が次第激しくなっていた。

宝暦十年十一月 幕府廻船附船出売船鑑札を交付。

安永二年 幕府は樽廻船にも積荷種類を限定し、鑑札を要することとした。更に、

安永四年 廻船附船出買札改正、このため樽廻船は衰微してゆき、菱垣廻船は栄えたものの、

天明四年 毎年幕府へ百両ずつ冥加金を上納して、加入権を今の株式売買のようにした。

文化五年 町方用達杉木茂十郎が奮起、菱垣廻船の諸規則を改正し、自ら頭取となり年一万二百両の冥加金を上納して、特権を公認させた。従って十組問屋が指定商の如き独占権を帯びた、そのため組合加入希望者が多くなり、株値も上がり、現在の六十八組、一、九九五人を限度に、人数のみの株を發行、血縁以外株譲渡を禁じた。しかし六十八組に増加しても、通常は十組仲間と呼んでいた。杉木茂十郎は一万二百両の冥加金を三年間借り下げ、利を産んで、三橋会所を起して、新大橋・大川橋・永代橋の修繕費に当てたので、幕府の受けは一段と良くなった。十組仲間は、自ら百余叟の菱垣船を所有し、大阪から江戸間に従事し、規約を定め、組合外の者が海運及び卸売の縄張りを侵すと、官に訴え、幕府は冥加金の手前、十組仲間の手先となって、自由競争を抑えたことになる。従って、十組仲間は需要に対する供給を手加減しつつ、常に市場の高値を維持することが出来た。

文化十年三月二十九日 菱垣廻船積仲間の株式が定まる。

文政六年八月十七日 大風雨で、井上十左衛門の廻船と大阪西横堀の天津屋栄三郎の廻船が佃島近くで破船したが、佃島漁師達の努力で、御用砂糖や武家の荷の大部が引揚られ、佃島

ではその報酬として歩一銀貰う。

文政六年 川船積業者、三十六人の限員を以て十組奥川積問屋の名目を立てる。

文政十二年三月二十六日 茶船持船乗業者、町奉行の認可を得て「解下積問屋の名目を立てて株式を立てる」等組合が増加している。

さて時代が進むにつれ、既に株仲間の解体や改編を求め要求が生じ始め、産地も「仲間」を通さず直接消費者に直売希望もあり、株仲間に反対する空気もあった。要するに都市の間屋仲間商人の流通機構の独占を許さないようになってきた。

天保十二年十二月 水野忠邦は無株方商人調査を実施し、株仲間解散令の前提資料を作った。

天保十三年十二月 世に云う天保の改革は、十組問屋解散の命を下し、幕府の財政は悪化するも、水野越前は、十組仲間の冥加金一万二百両今後上納するに及ばずと差し止め、株式売買と諸国物産の中継売りを禁じ、諸大名が各々国の物産を江戸へ送り、直接小売人に売渡すこととなる。従って物によっては下がり、逆に上がる物もあったので、江戸市民や小売商は、水野政策を恨むようになった。十組問屋と原産地と小売商は、二百年来の商習慣が続いて来たが、問屋と縁切りとなつた生産地と小売商は、金融に差支え、問屋に先祖代々の借金を一時に返さなければならなかった。

十組問屋解散後は、自由競争はよいが、回漕業者に対する荷主の自衛機関が薄弱となり、難船の時は泣寝入りが多く、その上運送費・倉敷料・営業費等前より不経済につき、十組問屋の手数料はなくなっても、物価はかえって上向となった。市中は、それに伴い不景気となっていたのである。

一方樽廻船は、安永二年の幕府干渉後衰微していたが、天保四年鯉節問屋と塩魚問屋と乾物問屋等は、幕府御用菓子砂糖仕入れ人の砂糖十萬斤に限り積み、この他は積むことを許さず、それを改める権利を菱垣廻船問屋に命じていたので、樽船が品川に着くと、樽船頭は一通の送り状を菱垣問屋に示し、貨物と引合せの上、抜け荷がなければ、受荷者たる樽廻船問屋へ今一通の送り状と共に渡す。このことは、菱垣廻船は保護され、樽廻船は圧迫されていたことを意味していた。

十組問屋が解散され保護者のない菱垣廻船は、二十四種を算する十組問屋時代の内、糸・油・紙・木綿・葉・砂糖・鉄・蠟・鯉節の九種の荷主だけは、特権なしの組合を結び維持していた。

天保十五年 圧迫と困難に慣れた樽船は、逆に太平洋を横行し、大阪に廻船問屋八軒、西宮六軒を置き、大阪・伊丹・池田・今津・西宮・青木・魚崎・御影・東町・新在家・大石・兵庫・十二郷の酒造家を荷主として、その他の新荷も積み、百五十・六十隻の船を、大阪から江戸間を上下させた。菱垣も樽も、大船を競い千石以上のものが少なくなかったが、官業に育てられた菱垣廻船は、樽船に及ばなかった。樽廻船は、天保改革を契機に飛躍し、灘七郷の酒の本場から江戸へ往復する荷主や大阪商人達は、港々の宿屋や色町で、武士階級以外の地歩を占め、武権も及ばぬ別天地に黄金万能王国を建設したのである。

嘉永四年 幕府は禁令を解き、再び組合制を復活させたが、文化以後に出来た組合は加盟を許さず、一万二百両冥加金は上納に及ばぬ二重特典を与えた。

十組問屋は、大阪・江戸の商権を握り、他の小組は十組問屋に併合され、九十五組にもなったが、菱垣廻船も樽廻船も

共に、明治維新政変で消滅し、古き港の紅灯情話のみが残ったのであった。

以上が各種問屋仲間の廻船を中心とした歴史である。従って、この各種問屋仲間と住吉神社への寄進関係を時代に沿って追ってみる。

(住吉神社へ各種問屋仲間寄進時代別)

宝永二年 江戸下り酒支配人仲間が、毎年正月・九月の二回、住吉大明神に庭神楽奉納の取決めをした。以後、この酒支配人仲間を住吉講という。

寛政三年三月 佃島住吉神社境内に加茂季鷹撰文の川上正吉(大阪屋伊兵衛)の頌徳碑建つ(現在存在せず)。

寛政七年四月 江戸砂糖問屋九名、江戸住吉講を結成。

寛政十年 砂糖問屋組合の住吉講中が、五十四両を以って調製した石灯籠を住吉神社に奉納(砂糖貿易同業組合沿革史)。

寛政十一年 江戸住吉講で、海上加護の御礼として住吉神社に毎年御初穂料奉納のことを議決した(砂糖貿易同業組合沿革史)。

天保七年三月一日 大阪の菱垣廻船問屋頭屋清三郎と江戸菱垣廻船問屋利倉屋金三郎が、連名で住吉神社へ一対の鑄鉄製天水桶を奉納。

天保十二年 木綿問屋組合白子組、住吉神社へ石造り手水鉢を奉納。

天保十四年四月 鯉節屋小舟町組では、住吉神社を正式の守護神として、四月中旬鯉節大漁の祈願を行い、「鯉釣の神楽」を奉納することに定めた(東京鯉節問屋組合「かつをぶし」)。

嘉永二年五月 住吉神社で江戸港に入津する諸国廻船に、海上

安全の御祈禱札を出す。

嘉永六年五月 豊表問屋住吉神社に石の玉垣奉納。

嘉永六年九月 廻船問屋附舟鑑札の改正が行われ、住吉神社もその附舟鑑札を受けた。

以上が江戸時代の諸種問屋仲間の神社奉納記録であるが、明治以後も附記しておく。

明治二十七年八月 陶器仲間住吉神社に石の鳥居奉納。

昭和二十八年五月 東京鯉節類卸商協同組合で、住吉神社境内に「鯉塚」を建立。

右各種卸問屋仲間の奉納を略記したが、これは一部であって、神社には未整理の古文書が存在されている由、それが整理されると更に詳しく江戸時代の様相が明らかにされよう。今後を楽しみにしている。

さて、縁起文は、いよいよ近代へと展開する。

古来当社は度々火災風災に遭遇せしも、各信者の盡力厚意を以て、倏忽に改修を爲しつつ近世に及びしを、慶応二年十一月神田より出火の延焼に罹り、社殿悉く烏有に帰せしも、直に建築工事を起し、明治三年に現在の社殿及び附属建物の落成を告げたり。明治五年十一月十三日に社格を村社に定められたり、同六年七月五日郷社に昇格せられたり。従来氏は佃島全部のみなりしを、明治二十六年三月月島埋立終結せしに依り、此の地の繁榮を祈らん爲めに七月九日地鎮祭を執行し、市参事府会区会等の各名譽職員参列せり、二十九年二月七日月島全部当社の氏子に編入し、二十九年九月二十九日新佃島

に於て地鎮祭を執行し、三十三年七月二十日新佃島当社の氏子に編入せり。抑も此の月島新佃の両島は、往古より佃島の漁夫の漁獵を営みたりし芦洲にして、大祭神輿海中渡御の時は、此所にて小休の神事を執行せる旧儀ありしに此の両島の地住吉神社の氏子と爲りしは、豈に遇然にあらざりして、所謂惟神の然らしむる所と信ず。元より住吉大神の神徳は、国史の上に炳然と著しるくして、今更に贅する要はなけれど、国家平穩諸人幸福を守り、殊に海上の諸般を護り給ふ明神に座しませば、環海の吾国人等が、国の富源を凶らんには、海の力を籍らずんば、いかで遍からざん、今や戦勝国たる国人は、各自に国益を計り、自己の幸福を祈らん真心あらば、荒人神と称へ奉る此の神の恩頼を、仰がざらめや、崇まざらめや。

と、結んでいる。

明治の夜明けと共に、国の将来を暗示しており、当地域の開発と大正・昭和発展の経験を通じて、住吉神社が宵の明星として針路を、平成にも示されていることが領かれる。そのことを「佃島物語」が、江戸から平成まで常に国の先端に立って進んでいることを語ろうとしているのである。

神社沿革を、記録から簡略にまとめてみる。

寛永七年 石川大隅守候の邸内に借地し、仮り小祠を建て遷し祀る。

寛永八年 石川邸住吉神社境内に家康を祠り、初は四月十七日、後に一月十七日神事を執行して恩遇を謝す。

正保二年 佃島築島後、現在地を氏神鎮座地と定める。

正保三年六月二十九日 社殿を建て遷座奉祀す（この日が例大

祭日となる。

元禄十二年九月九日 幕府より古蹟社と定められる（地子古跡寺社帳、当時江戸市中では寺社奉行直支配のため、古蹟社十四社あり、佃島明神社も寺社帳に登録し、古蹟地に編入されたと記されている）。

元文四年十月十二日 幕府の漁獵裁許状の保管を、住吉神社社司津守日向に託す。

寛政八年 攝津国佃村住吉神社社主平岡讃岐、奉行所に由緒書を提出して佃島の由緒、並びに東照宮勸請の由来、来歴などをのべる。

天保三年十一月一日 住吉神社社司平岡好貞「大江戸佃島住吉神社略縁起」を起草。

明治五年十一月十三日 住吉神社村社となる。

明治六年七月五日 住吉神社郷社に昇格。

明治三十九年五月 住吉神社社司平岡好文「住吉神社略縁起」を起草。

明治三十九年 月島通り九丁目五番地、御旅所を定める。

昭和二十一年六月 宗教法人令により、規則を定めて神社本庁所屬となる。

神社経歴を背負って、初代平岡正太夫の弟権太夫好次より子孫代々職を襲って、今日まで十二世に及んでいる。

好次―好和―好智―存信―好昌―好弘（享和三年従五位下日向守に叙す）―好祖―好貞（嘉永三年三月従五位下日向守に叙す）―好国―好文（好弘・好貞兩名叙位ありしたため、明治十七年十月士族籍に編入）―好道―好和 等長い歴史の中で、時代時代に当面する問題を、各宮司が対応し、島民の中心になって

支えた努力が、連綿として今日まで及んだ功労は、佃島が全国に知らしめた姿がその証である。

私個人も先代宮司には、昭和二十三年現在地に店舗建築のため、昭和三十七年には敷地内にボーイスカウト・ガールスカウト・子供会達の聖人児童館建設のため、又現在宮司には、昭和四十七年現在店舗改築のため、その都度地鎮祭の執行を願ったものである。

また私は、「鎮守様は、心のふるさと」である願いから、昭和二十四年から今日まで地域の子供達指導上、新年会や「新伏見新佃稲荷並びに恭助稲荷（吉田松陰御霊）」春秋祭には、日本の神特に鎮守様について子供達に語って来た。爾来毎夏行うキャンプの発発並びに帰団には、各班各組で無事の祈願と感謝を、況して海外派遣ジャンボリーや全国又は地方ジャンボリー参加スカウト達も、出発前日並びに帰国には住吉神社参拝を常とした。更にスカウトの集会日が十一月十五日「七五三」に重なった日は、該当する年少スカウトを中心に、各組で神社参拝に行くと、前宮司も現宮司も幣殿から飛び出して来て、スカウト達を並べてお祓い祈願をして下さるので、子供達は感激したものである。

私が佃島で尊敬する方が二名おられる、先代好道先生は、安田保善中学で国語の教鞭をとられたり、慶応大学英文学教授でもあられ、学校の往復に店の前を通られる姿は、白い絹のマフラーを常用しモダンで、英国紳士風の常に端整さを保っていた。もう一人の先生は、佃島の真中に住んで居られた久保田正次立教大学文学部教授で、英語辞典編纂にはなくてはならぬ方で私の恩師でもあるが、首を曲げて常に何か考えて歩いている姿は対称的であった。

古い神社であるから種々歴史的資料も保存されていることと思ふが、一般に公開される機会がない。将来公開を期待して、その面を紹介してみよう。

住吉神社 什物

(古文書) 社格通達

一通

「豊島郡佃島鎮座 住吉神社 自今郷社被定候事 明治六年七月五日 東京府」東京府より郷社昇格の通達書である。

(古文書) 神社宮司に関する書

六通

衣冠着用許可達として、京都吉田家から神主平岡好貞に対し祭礼日の衣冠着用する許可書二通

「武蔵国豊島郡佃島住吉神社神主藤原好貞、当社祭礼正月二十三日・三月二十三日・五月二十三日、

一日法令可着衣冠者、神道之状如件。天保六年正月二十八日 神祇菅領長上従二位卜部朝臣」

「武蔵国豊島郡佃島住吉神社神主 平岡日向 藤原好貞 右当社祭礼六月二十九日・九月二十三日、

一日法令衣冠着用之事、所般許如件。天保六未年正月 神祇官領長上家公文所」

濃紫奴袴着用許可状の一通

「濃紫之奴袴 神拜之領 候得共、御願被成候間、差遣候様仰候
大山將監

日向守 殿」

御火焼おひたき伝授書の一通、秋の新嘗祭にいなめは十一月に諸社で、当年の新穀を供進する神事、これを御火焼と云い夜分庭燎ひびを設けて行うのである。

「御火焼之儀 兼弓庭上敷座或家内 先一揖 次着坐一揖 次二拜 次三種 加持 次三種太祓三十八反 次以清火払清口伝

次祈念 次護身神法 次拍手三 次二拜 次坐揖 次一揖 次退下 右授与藤原好貞訖 慎而莫怠矣 天保十三年十二月二十五日 神道菅領」

京都吉田家より当社神主平岡好貞に御火焼おひたきの作法を伝授したものである。

平岡好貞叙位に関する宣旨の二通

嘉永三年 勅命により平岡好貞が従五位下に叙せられた旨、藏人頭が上郷に伝達した控え書

「上郷広橋大納言 嘉永三年三月二十日 宣旨藤原好貞 宣叙従五位下 藏人頭右中辨藤原資宗奉」

嘉永三年勅命により平岡好貞が日向守に任ぜられた旨、太政官の大外記が文書としたもの、

「従五位下藤原朝臣好貞 正二位行権大納言藤原朝臣光成 宣奉勅件人宜令任日向守者

嘉永三年三月二十二日 大外記兼掃部頭造酒正中原朝臣師身奉」

此の他吉田家作「任従五位下の勅書」写や勅許の御礼廻り箇所箇所の控などもある。

人足寄場玄米奉納通知状覚一通

寛政四年 人足寄場役所から、永代、住吉神社に、正・五・九月に米老俵宛を奉納する旨申出があった。爾来毎年奉納され、その折の覚書である。

神主居室修覆寄進帳前書並びに修覆費勸進控書

寛政十二年 神主居室修復のため、神主や世話人が氏子中へ廻した寄進帳の前書や修覆費勸進の控えて、神社に現存する古文書中古いものである。

留守中日記一冊

表紙に「嘉永三戌年二月吉日 留守中日記 平岡氏」(仕様・半紙袋綴、共紙表紙とも十二紙、紙捻綴)と記され、神主平岡好貞が叙位任官の御礼のため上京、嘉永三年二月二十八日から五月八日まで、留守家族の者の記事である。

此の他社殿造営関係記録や図面等、多数文書を所蔵しているので今後が楽しみである。

昭和五十一年度「中央区の文化財」調査は、美術工芸が主体であったため、刊行に当り住吉神社什物・絵画二点を筆頭に掲げた。

(絵画) 板絵着色「芦鷺図」

一面

画面縦八九糎、横一一六糎、全体に金箔を置き、右中央からゆるい斜面の緑青色土波を水中に描き、その土波の上に左向白鷺一羽が立ち、左に茶色雛二羽、土波手前水中に後向き成鳥一羽、画面中央左側に餌をとる成鳥一羽、その上後方から着水しようとする成鳥一羽、計六羽の白鷺の様態に土波周辺の芦穂数

本を画いた海辺が表現され、右下に横書で「是真」の朱印がある。これを巾約一〇糎蒲鋒形黒漆塗ガラス張額縁で横長の型をしている。画面の素材は、桐板五枚堅矧ぎの上に描かれている。これは、住吉神社の神使が白鷺とされているので奉納されたのである。

画家柴田是真(一八〇七—一八九一)は、江戸両国宮彫師柴田市五郎の子にして、四条派鈴木南領や京都岡本豊彦に学び、蒔絵は古満寛哉より習得、従って板絵も得意の領域であった。明治二十三年帝室技芸員に選ばれ、当社第九代宮司好国氏とは親交があり、平岡家には是真の軸物が数点保存されている。北区岸町王子稻荷神社にも茨木童子図額が奉納されており、又区内築地、法重寺にも絹本着色瀑布図の軸物がある。

(絵画) 板絵着色「蘭陵王図」

一面

画面縦八二糎、横五六糎、豎長桐板四枚矧ぎに、中央背を見せ右向に立つ舞姿「蘭陵王」の図である。蘭陵王とは、天平八年カンボジアの僧、仏哲が伝えた一人舞の舞楽の曲名であるが、陵王・竜王とも云う。王の姿は、指貫という平絹か綾織物で仕立て、裾を紐で指貫きふくらませて括って穿く袴と、五葉木瓜模様の結袖の束帯用上衣である袍の上に、糸毛緑の襦袢(うちかけ)をまとい、金色の宛帯を締め、帽をかぶり、竜を頭に冠した面をかむり、金色の桴を斜上に持ち挙げた手先に面を向け、右膝を屈して高く上げ、左足で立っている姿で、よく走物の調子を表現している。画面左下に「月耕」と墨書、落款に「月耕之印」二字二行朱印がある。

これも巾一〇糎蒲鋒形黒漆塗、透金具付額縁で囲われている。画家尾形月耕(一八五九—一九二〇)は、江戸京橋生れの日

本画家で、菊地容齋の画法に基づき独修で身を立て、新聞雑誌の挿絵や錦絵等にも新界地を与えた。

(古文書) 石擢拓本「賀茂季鷹の碑」

寛政三年 川上正吉(大阪屋伊兵衛)の頌徳碑を建立した記録があるが碑はない。しかし石擢拓本が所蔵され撰文には、十組問屋を建てた川上正吉のために記したもので、「樛木のいや継々に 語りつき いひつきゆかむ いつをしそこれ」寛政三年六月二十一日 従五位上甲斐守賀茂縣主季鷹と款がある。季鷹は、「賀茂縣主、神魂命孫武津之身命之後也」山城系の子孫にして神職である。

(工芸品) 和 琴 (銘川上)

一面

明治頃までは、神社年中行事の一つに「湯花行事」が行われた。後述するが、その折神前で和琴を調べるので奉納されたものであろう。

(工芸品) 鉄製 天 水 桶

一對

天保十年三月一日 大阪菱垣廻船問屋屋頭屋清三郎、江戸菱垣廻船問屋利倉屋金三郎連名で鑄鉄製天水桶一對奉納の記録があるが、子供の頃この天水桶一對は、拜殿正面両袖に設置され、一層社殿の古風さを守り立て神々しく感じていた。昭和五十一年調査で、本殿北側煉瓦造蔵前の木立に、芥焼却炉変りに使用され、破損した姿を見て、昔が一つ去った思いを持った。鉄製天水桶は、今はもうない。

垣間みる 神の心の 数々を

知りて育む 吾が子らのさき

昔は、楽しむことが少ない。四面水に囲まれていれば、心も鈍る。何かにつけて神社の祭事には、自然に足が向いたのである。子供の頃から社に慣れ親しんだのは、それも原因の一つかも知れない。神社の年中行事をみると、既に執行されていない神事もある。明治の頃を懐古して、行事を紐解く。

神 社 年 中 行 事

白 魚 祭

神酒流しとも云い、旧時は大寒の季節に執行したが、現在は一月十七日と定めて行う。

天正年間徳川家康公の命により攝州佃村漁夫等、白魚の種子を竹筒に入れ、関東下降(天正十八年八月)し、種子を江戸近傍の川の浮州に放ち、生殖を図り、住吉神社に祈請し、海川に神留・楨灰・白箸幣帛を流し神を祭ったことから起った。祭儀に神殿内と海上との二つあって、祭日前は「ペラ」と称し、売買にも一合二合と量ったが、祭日後は、白魚と称し、一チヨボ(二十筋)二チヨボと数えたのである。

追 儺 神 事

毎年節分夜行い、歳内の禍を払うため、「土俗鬼夜良比」と云う。祭の前日桃弓(長さ四尺弦を懸け)葦矢(十二本、閏年は十三本葦の太さを選び、長さ二尺五寸、白紙で羽を作り、黄紙を以て三五七と上中下に巻く)を作り、当日社殿軒

端その他入口・窓等に柅の葉豆柄（豆柄へ赤鯛を指す）を刺し、夜亥の刻（午後八時）より庭燎を焼き、玉鈴を鳴らし、祭文を朗読し、和歌を詠じ（当日齋主必ず和歌を詠み、神前に奉りこれを披誦する）鳴弦式を行い、矢声を発し、葦矢を射放ち、これを拾い合う群集で混乱するが、拾いし者持帰り門辺に刺し置き、悪鬼除とする。又その年、吉瑞ありと云う。鬼打豆を神殿内に擲つ、この豆拾う者で群集混乱し、豆を拾得して持ち帰り、その年疫病流行の時は、これを服せばその憂いなしと云われている。

現在は、年男が豆を播き群衆が拾う節分会である。

潔齋式

毎年三月十七日から二十三日に執行する、一に物忌の神事と云われ、嚴肅なもので、前日十六日夕齋主は塩湯に入浴し、齋室に隠もり、神勤の他外出を禁じ、常に正座し、麻を前に置き謹慎して、齋中別火を燈り、食物を煮焼する、用事ある時は筆紙を以て行い、女人は齋室へ近づけず、齋中齋主の忌みあるも慎む。諸事は一人と言語を交へず、疾病を問はず、喪を問はず、薬品を服用せず、火災その凶殃を見聞せず、詩歌を賦詠せず、管絃を作さず、俗事を思慮せず、肉類を食まず、五辛を食まず、酒茶を吞まず、食物に味噌、醤油、砂糖類を用いず」とある。又神事の都度海水浴に沐浴して、便所に入れば必ず入浴し、一切清潔を守り、神事は毎日朝昼夕の三度行うのである。

木村莊八は「如何にも『孤島』のウキヨ離れた感じがするけれども……」（東京繁昌記）と、前時代的に表現している。

鎮花祭

毎年四月六日執行され、後述するが境内社（末社）の内、疫神社の祭神事で、疫神齋と云う。祠の四方に齋竹を立て、注連縄を張り、荒薦を敷き、祭場の装飾を施し、男女老幼群衆にて参拝する。当日神符を授与し、戸毎にこれを貼り疫病退散を念じる。

竜神社祭儀

中の巳の日、その月巳の日二度ある時は、下の巳の日に行う、境内社竜神社については後述する。

初午祭

境内社（末社）入船神社祭儀を指し、一般市中で行われる稲荷祭と同じで、後述する。

大祓祭

六月三十日・十二月三十一日行う。昔から世上に著し、毎年六月二十五日、氏子信徒各自の生年月日・男女別を記し、全身を撫払い、氣息をかけた人型紙を、当日神事前まで社殿へ持ち奉り上げておく。社頭の装飾は、門前に長さ五間の齋竹を立て、之に茅輪を掛け、又本社正面大川岸に祓場を設け三間四方を開き、齋竹を立て、荒薦を敷き、中央に神籬を設け、周囲には忌串を立て、形代は葦筒に入れて楳案の上に置く、午後四時より祭儀を執行、夜葦火の庭燎を焼く、神事終れば形代を舟に積みて海中に漕ぎ出で、之を流し棄て払う。

大祭

毎年陰曆六月二十九日執行、正保三年六月二十九日創立は、神興海中へ渡行につき、朝夕時刻を量りて、今に陰曆六月二

十九日を祭日とする。氏子輩、祭日近ければ家屋修繕し、或は海水を汲みて洗い清め、畳を新たにし、祭日を待つこと一日千秋の思いにて、町角に斎竹を立て、注連縄を張り、海岸に五反幟を建て、毎戸軒端に注連縄を張り、鬘鷲と三星を画いた提灯を懸連し、又獅子頭（雌雄八対）竜虎頭等を飾る、祭儀「前日祝祭式、同日夜神輿神靈祓式、当日発輿式、神輿渡行式（海中渡行して後、氏子地渡行する、若し残りあれば翌日又渡行式を行う、近來月島氏子地に成りしより渡行は大概二日間とす）神輿婦社、神霊移式」以上は明治中頃の祭執行次第であるが、後述に詳しく文化財として述べる（現在は三年毎執行）。

鎮魂祭

十一月冬至の日に執行、現在は十二月、執行日二―三日前氏子信徒へ神符を配与し、神符に男女性別、姓名、年月日を記し、祭前日まで集め、楯案の上のせ神前に置き、冬至八刻に神事を行う、十種神宝の行事、振鈴・祭文の朗読ありて神符を又配付するのである。

湯花行事

臨時祭として大概年に七―八度あった。この日、早旦御扉を開き、饌を献じ、湯釜所より塩湯を献じ、祭文朗読、湯笹を献じ、和琴を調べ、神慮を祈請す、舞殿で神楽を奏す、湯笹を献じ和琴を調べるのは、神功皇后征韓の時、武内宿弥六張の弓を琴として、海潮を汲み住吉大神を祭った古事に倣ったものである。

本殿参拝を終え、しみじみ感じたことは、

もろもろの 祭り行年毎に

生業 弥栄 戸々に幸され

江戸より平成まで思い返す時、この長い歴史に堪えて現在此処に存在している「社」に包まれ、その歴史観に慕いながら境内を一望すると、末社が隅々に鎮座しているのに気付く。

元來神社敷地は、境内とか社地とか云うが、境内には社殿その他の建物の他、参詣者のための施設とか、神社尊嚴保持のため林や森も必要となる。従って、境内の広さは、神社の由緒・規模によって広狭様々であるが、明治初年に最低基準として大概国有地とされ、官国幣社は五千坪、府・県・護国・招魂各社は千五百坪、郷社は千坪、村社は七百坪、無格社は五百坪以上に与えられた。住吉神社は、明治六年郷社に昇格している。昭和二十二年以後は大部分の神社が、無償でその神社に払下げられた。この境内の木々を、境内樹木と云い、自然の森嚴さを保つ社が多く、住吉神社も改築以前は独特の風致をなしていたものである。その意味で本章を「心のふるさと住吉神社」としたのである。

その意味で境内地は、古来から神社固有の土地と考えられ、実際には遠い昔、ある土地をトして神社を建て、「主領き鎮ります神」つまり地主神を境内に小祠を建て祀って、境内社としていたのが例であるが、住吉神社自身が地主神でもあるので、末社には、他から移り奉祀した境内社と境外社に分かれている。末社筆頭は、本社北側に祀る「龍神社」である。

（建造物）龍神社

一棟

文政五年六月二十五日奉祀、御祭神は、關於迦美神・關美津羽神にして、世俗では、「佃弁天」と云う。創立以来信者が多く、特に芸妓達や芸人の参詣が江戸時代より続き、巳の日の祈禱日は群集市をなす程であつたと云う。私の子供頃も芸妓の方々が巳の日の午前中、店の前を多数参拝に通つていたのを覚えてゐる。願をかけ、叶つた芸妓は参拝前に店に立寄り、紅白の綿（又は新モス）を各一丈購入し、神前の振鈴紐として奉納するのである。戦後も昭和三十年頃までは続いてゐたが、それより少し前或る実業家が、会社再建に成功して、拝殿内陣幕を染めて奉納する受註があり、弁天堂内に幕の大きさを測りに行つた経験がある。今日は健康・芸事・就職・商売繁盛の願い事を持つ参拝者に変つてきた。

私事になるが、昭和五年増山家の墓と母方祖母の墓の建替を行つた折、母が或る日夢をみた。墓参に行こうとする道に白髪の老人が立塞ぎ、「通過したくば句を吟ぜよ」と云う、母は困つた揚句「吾が父の御霊祀りて嬉しさを 身にしみてこそ忘れざらまし」と、咄嗟に口ずさむと白衣を着た白髪の老人は、パット金色を身の囀に放ち空へ向つて飛び立つを見て、ハット驚いて目が醒めた。早速同業者で神導教導職である大教正古田光伯師に尋ねると「佃弁天」だと云われた。因らずも父は巳年生れであり、巳の日には必ず、「佃弁天」に参拝し続けていたが、持病の痔疾が快癒し「下の病氣も治す神様」と人々に語つてゐた。早速御札に紫の幕を奉納すべく、先代神主さんに申し出ると、「竜神様は昇格され、神紋が三爪の竜から五爪の竜の紋に染め抜いて欲しい」と語られたので、喜んで奉納させて頂いたとよく話を聞かされたものだ。父は他界する前日まで、住吉神社と弁天様へ参拝してゐたのである。同様にその頃神社南口傍に駄菓子屋があり、或る朝神社参拝のため父に手を引かれ

ながらその家の前を通ると、「川越屋さん、今朝便所に白蛇が出たのよ」と大声をあげておばさんが家から飛び出して来た。家族の人や隣近所の人々が、それを見て大騒ぎをしたそうである。又佃小橋の下の川で白蛇が泳いで神社裏に渡つて入るのを見掛ける人も多かつた。戦後もその話は、二、三聞いたことがある。それからと云うもの願掛けが叶うと参詣者は、本殿や竜神社に生卵が奉納される様になつた。

一般に「弁天様」と云えば、音楽・弁舌の女神として七福神の一神として、琵琶を弾じ、人に幸福を与え、又福徳財宝を司る女神と考えられ、巖島神社や近くは鎌倉江ノ島神社に祭る、市杵島姫命（市寸島比売命）を思い出すが、「佃弁天」は、古事記伊邪那岐命其子加具土神斬られる諸神化生す条に、「次に御刀の手上に集れる血、手俣より漏き出て成りませる神の名は關於迦美神、次に關御津羽神」とあり、「關」は谷の義で、「淤迦美」の語源は詳かでないが、万葉集卷二にある語で、雨を掌る龍神である。同神は京都府下愛宕郡鞍馬に鎮座の官幣中社「貴船神社」の祀る神にして、古来雨乞の神として名高い。

次の關御津羽神は、古事記神生の条に「次に尿に成りませる神の名は弥都波能売神」とあり、「美（御）津羽」は弥都波能売神と同義で、谷の水神の義で、「水這ふ」「水走る」「水生ふ」の義と同じで、日本書紀の「水神罔象女神」とあり、肥料の神、耕地に水を灌漑する神で、「於迦美神」同様、雨を掌る龍神である。従つて、雨祭神は、雨や水を司る神、特に祈雨・止雨ばかりでなく、耕地に水を保ち肥料の神で生産をも司ることは福徳財宝にも通ずるのである。なお父が下の病にも靈驗ありとしたのは、關美津羽神（女神）が尿に成りませる神に由来しており、芸妓の多く参詣した理由が了解出来る。殊によると、今流行の「エイズ」にも願掛けが叶うかも知れない。

社殿は共に権現造で間口二間、奥行四間、以前は拝殿が社務所と廊下で繋がれていたが、独立した建物に建替えられている。本社より数年遅れて建てられたせいか、未だ真新しく感じる。通常扉が閉ざされ、ガラス格子越しに中を覗いての参拝は、尊厳さが失われ、その場面だけでは、「社」と云うより「堂」のイメージを受ける。離れてみなければ権現造りの小さな「社」の概念が湧かないのは、それだけ民衆的なのかも知れない。昔の様に、群集市をなすほどの賑いにしたものである。

改築なった諸社殿の中で、一番初めに施工されたのが神楽殿である。竜神社から見て斜めに神楽殿が、背後の樹木の陰に溶け込んで落着いてみえる。

(建造物) 神 楽 殿

一棟

神社の中で一番親しみのあるのが、神楽殿である。祭りとなれば、終日演じる神楽見物で、常に人賑を極める場所でもある。神楽は、天岩戸の前で天宇受売命(天鈿女命)が神楽を行ったことに由来し、神前で歌舞を奏することが行われ、後殿舎が設けられ、「舞殿」と云われた。大坂住吉神社には、特殊な野外の石舞台がある。

舞殿に対して神楽を奏するようになり「神楽殿」と呼ばれるのは、近世になってからである。「神道名目類聚抄」にも、常陸鹿島神宮の神楽殿・日光東照宮の御神楽堂と云われた頃からで、伊勢や熱田の神宮は、舞殿もなかったが、明治以降一般人の希望で神楽殿が出来るのである。

本社においても宝永二年江戸下り酒支配人仲間が、毎年正月・九月の二回、庭神楽奉納とある如く、境内庭でやるのが鎮守様

であった。当社の神楽殿は大正十二年建立し、前述に寸言したが昭和五十七年施工着手、翌年四月落成、設計は矢崎建設、施工明楽建設である。銅板葺入母屋造(間口二間半、奥行三間)で、改築前の神楽殿は東京近郊の鎮守神楽殿同様、瓦葺入母屋屋造りで、里神楽の名に相応しい感を呈していたが、新殿は能舞台の雰囲気を持ち重みを増した。

神楽殿は、大祭の三日間が子供達にとって楽しみの一つである。私もその頃は食事を忘れて、終日神楽を見物し帰宅が遅れ母に叱られたものだ。「住吉様って、どんな神様なの！」よく母に質問して困らせたが、母は「何のためにお神楽を見ているの、海幸・山幸の神楽で、山幸が海辺で困っていると、翁が出て来て助けて呉れたでしょう。あのおじいさんのような海の神様が住吉様よ。」と説明され、実際には解ったような解らない様な思いがした。その頃の大祭神楽では、必ず「海幸・山幸」の神楽を、三夜通して行ったものである。

古事記の「海幸山幸物語」の条は、五段に分かれ記されている。それは、一、幸易 二、海神の宮 三、豊玉毘売命 四、塩盈珠塩乾珠 五、隼人舞の起源である。

一、幸易の段の始まりは、「故火照命は海佐知毘古と爲て、鱮の広物・鱮の狭物を取りたまひ、火遠理命は山佐知毘古と爲て、もの荒物・毛の柔物を取りたまひき」とある。佐知毘古は幸彦の意味で、幸はもと身に幸福があることを云い、転じて漁(獵)をして魚や獣を得る人の意味である。従って佐知は、幸を捕る獵具で海にては釣を山にては弓矢を指す、鱮の広物・狭物とは、大小様々の魚、又毛の荒物・柔物も大小様々の獣を指し、一説には荒物は獣を柔物は鳥とも云う。

さて弟火遠理命が兄火照命に何回も佐知を代へて獵をしないかと持ちかけられ、仕方なく獵具を替えた弟は兄の釣針を紛失

し、大切な十拳劍を溶かして五百本の針を作っても許さず、更に千本針を作っても正本の針でなければ許さないと云う。

二、海神の宮の段で「於是其の弟、海辺に泣き患ひて居ます時に、塩椎神来て問ひけらく、何にぞ虚空津日高の泣き患ひたまふ所申は」と問へば、答へたまはく、「我兄と鉤を易へて、其の鉤を失ひてき。是て其の鉤を乞ふ故に多の鉤を償ひしかども受けずて、猶其の本の鉤を得むと云ふなり。故泣き患ふ」とのりたまひき。爾に塩椎神「我汝が命の爲に善き議せむ」と云ひて、即ち無間勝間の小舟を造りて、其の船に載せまつりて、教へけらく、「我其の船を押し流さば、差暫し往てませ。味御路有らむ。乃ち其の道に乗りて往ましなば、魚鱗の如造れる宮室、綿津見神の宮なり」と、本段で塩椎神の名が出てくる、神樂での翁である。海水つ舅の神の意で、海水の神靈、従つて海路を知る神、さらに海神の發展として知恵の神又予言の神でもある。例えばギリシャ神話のネレウスやゲロウコスも海神にして、知恵の神である。日本書紀では、「塩土老翁即取囊中の玄櫛、投地に則化成五百箇竹林取其二竹作大目籠籠、内彦火火出見尊於籠中投之于海上」とある。即ち「塩土老翁」と云い、潮路を知る意で航海の神である。又伴信友（国学者）は、「塩筒」の義であるとも云っている。宮城県塩釜の塩竈神社は、本来塩土老翁神を祭り主祭神で、海岸での製塩、航海の道案内を司る神とされている。翁により「無間勝間の小船」を、日本書紀の「大目籠籠」、何れも目を細かに編んだ竹籠で、上代の船の骨組を云い、実際にはその上に獣皮を張り、水の浸入を防いだものである。例えば古代英国のブリトン人はコラクル（coracle）と云って、楊の枝で編み皮を張り卵形又は長方形の小船とした。台湾土人も竹で組んだ筏舟を用いている。

三、豊玉毘売命の段では、緑の光に満ちた神秘の海底に、魚

鱗の如く立ち並ぶ宮殿の門前で、清冷な水の涌く泉がある。泉のほとり桂の樹上、梢に若き美しい男神の姿をみた海神の侍女が玉壺を抱えたまま驚いている。恐らく世界中の神話の中で比類なき美辞で表現されている。正に想像を豊かにして麗しい神話の中の白眉である。「故教の隨に少し行てましけるに、備に其の言の如くなりしかば、即ち其の香木に登りて坐しましき。爾に海神の女豊玉毘売の従婢、玉器を持ちて水酌まむとする時に、井に光あり。仰ぎて見れば、麗しき丈夫有り。甚異奇と以爲ひき。」明治の詩人北村透谷と比較される天才洋画家、青木繁が描いた「海の幸」「わだつみのいるこの宮」は、代表的名画として有名である。「海の幸」は二十三才の作であり、「いるこの宮」は二十六才の折に描いたものである。

四、塩盈珠塩乾珠の段は、海幸山幸物語の見せ場である。火遠理の命は、海神の宮に来て早や三年経った。やっと願ひ出て、鯛の喉より兄の鉤を取り綿津見の大神誨へ申すには、「此の鉤を其の兄に給はむ時に言りたはむ状は、此の鉤は淤煩鉤・須須鉤・貧鉤・宇流鉤」と云ひて後手に賜へ。然して其の兄高田を作らば、汝が命は下田を営りたまへ。其の兄下田を作らば、汝が命は高田を営りたまへ。然爲たまはば、吾水を掌れば、三年の間必ず其の兄貧窮しくなりなむ。若し其然爲たまふ事を恨怨みて攻めぬば、塩盈珠を出して溺らし、若し其愁ひ請さば、塩乾珠を出して活し、如此して惣苦めたまへ」と。「淤煩鉤・須須鉤・貧鉤・宇流鉤」は、祝詞研究上大変重要な言葉で、これは呪詛の詞である。吉事を祈る反対に、不吉な詞唱へて不祥事を祈る時に使用するもので、言霊の信仰から起り、古代民族間に広がるのである。

五、隼人舞の起源の段は、いよいよ大詰である。兄は赦罪を

請い「僕は今より以後、汝が命の夜屋の守護人と爲りてぞ仕へ奉らむ」とまをしき。故今に至るまで、其の溺れし時の種種の態絶えず仕へ奉るなり。」守護人とは、宮門の守護の任に当る者で、日本書紀に「是以火酢芹命苗の裔、諸隼人等、至、今不離天皇の宮牆之傍、代、狗吠而奉事也」とある。大宝令の制度に、衛門府に隼人司があつて、その下に隸属する隼人が、宮廷を警護した事の起源を説明した物語である。なお同書紀には、此の下に「世人不、債、失針、此其緣也」とあるのは、諺の起源を示している。さて古事記の「溺れし時の種々の態」が隼人舞の起源とされているが、どの様な舞か記されていない。書紀には、詳しく記されている。「於是兄著憤鼻、以、緒塗、掌塗、面、告、其弟、曰、吾汚、身、如、此、永、爲、汝、俳、優、者、乃、拳、足、踏、行、学、其、溺、苦、之、状、初、潮、漬、足、時、則、爲、足、占、至、三、膝、時、則、拳、足、至、股、時、則、走、廻、至、腰、時、則、捫、腰、至、腋、則、置、手、於、胸、至、頸、時、則、拳、手、飄、掌、自、爾、及、今、曾、無、廢、絶」とある。隼人が大嘗祭の節会などに、隼人舞を奏した起源を物語っている。此の最後の段隼人舞は、兄が剣を持って立ち向かうのを、弟が塩盈珠を手に翳し、兄の溺れ苦しむ様に塩乾珠を持ち変えて苦しみを柔らげると、兄は隙を見て再び立ち向かう、何回も繰返して、最後に降参する仕草が面白い。

「佃ばやし」で後述するが金子幸吉氏は、大変上手であつた。子供ながら神楽を観て、そのストーリーが解るから不思議である。翁即住吉様に共通する海神として山幸に航海の路を教え、善神を救い導く神であることが了解されるのである。大祭最終日に「隼人舞」で終演する神楽は、子供の胸に正義感と清涼感を与え、再び次回の大祭へと思ひは飛ぶのである。

神楽に思ひを耽って歩を進めていると、銅の灯籠に突き当つ

た。

(工芸品) 銅造灯籠

一基

本殿参拝前から右手前にあつた此の灯籠を気にしていたが、傍に寄ると結構大きい。

八角型の花崗岩二段(上段高さ一九・五糎、一辺の長さ五〇糎、下段高さ三〇糎、一辺の長さ六二・五糎)の基壇上に、高さ二・三八米の姿で毅然と立っている。

灯籠最上部宝珠の下の笠は八方に開き、蔽手が付され、八角形の火袋は堅格子、表一面には円に鷲が飛揚する模様と裏面には神紋三つ星がある。中台は仰蓮形で竿の中央に節があり、背面に篆書で「奉献・神前以頌・金子政吉君之徳・大正乙卯晚秋・佃島住民」と陽鑄されている。基礎上段は逆蓮・中段四方に唐草模様を陽鑄・下段四面の四隅を次にした長方形に凹まし、獅子を陽鑄して、背面の左下に隸書で印章形四角の枠中に三行で、「大日本・東京・雪声鑄」と鑄出している。

金子政吉氏は、安政三年(一八五六)佃島に生れ、通称佃政、昭和の清水次郎長と云われ、日本最後の俠客である。一般にはやくざのように思われるが、事實はこれに反して非常な人格者であり、島民からも親のように慕われていたのである。その証拠が大正十四年二月氏の徳を称えて、氏の銅像をと島民の希望を辞退して、それならと境内に建てられたのが、この灯籠一基である。若い頃は「魚河岸の政」と呼ばれ、生粋の江戸っ子氣質の親分で、その生涯は大衆文芸さながらに、幾度か白刃の下をくぐつたという。大正十二年(一九二三)九月一日の関東大震災の折には、佃島住民を指揮して防火につとめ、島を火難から完全に救つた。勿論新佃島(佃二二三丁目)や月島全島は、

殆んど焼野原と化したのである。震災後京橋一帯の復興には、涙ぐましい大奮斗を続けた。又魚河岸の築地移転、魚河岸の内紛、大相撲の大分裂等の解決に奔走した。昭和八年夜押しかける千数百名の貧困患者の苦境を歎いて、東京市築地病院へ二〇万円の寄付を企て、後援会を組織し、自ら会長となった。昭和九年（一九三四）三月九日没、享年七十八才であった。

私が佃政の親分を見たのは、小学生の頃で佃島小学校講堂の屋上に神社小祠を建立し、天照大神並びに住吉大神分祀の祭りに、来賓として出席された姿である。地元の佃島小学校・月島第一・第二小学校並びに勝鬨保育園（日本最初の乳児施設も含み）等建設に当って、多大の寄付もされており、この事は各校長室や園長室に掲げられている記念写真中央に、必ず氏が羽織袴の姿でおられることでも察せられる。

私が区内神社・仏閣並びに橋梁調査の折、本願寺と門跡橋由来の件で、昭和六年築地と小田原町をつなぐ橋が新しく竣工して「築南橋」と命名され、開橋式の日程を耳にした政吉翁は、当時東京市長永田秀次郎に数回会談し「門跡橋」と昔の名称を残させた。私のような文化財を楽しむ者や江戸っ子には、嬉しいエピソードである。又私の友人高木菊松氏（故人）からよく聞いた話であるが、弁護士の彼の父は、佃政の弁護士親交があり、佃政の德行や美談は数知れないと云う。そのことは金子政吉氏葬儀が物語っている。

日本全国の親分衆が袂姿で新橋駅に集合、生前氏の仕事上魚河岸正面通りを築地本願寺まで「棺」の葬送行列が続き、その盛大さは今でも語り草となっている。因に明治・大正・昭和にかけて日本三大葬儀と云われたのは、日比谷公園で施行された東郷平八郎海軍元帥葬に次いで金子政吉葬と戦後同寺院で行われた島田俊雄衆議院議長葬である。島田俊雄氏は、青年の頃私

の母方祖母宅（上野池之端）で、書生をしながら東京大学を卒業した人である。

さてこの灯籠の製作者、岡崎雪声（一八五四—一九二二）は、京都伏見に生れ、明治二十三年内国勸業博覧会に出品入賞、東京美術学校教授となり、上野の西郷像や皇居前の楠公像、近くは日本橋の麒麟や獅子像も同氏の鋳造である。

銅造灯籠の傍に、「五世川柳石碑」に関して中央区教育委員会の説明板が立っている。

（旧跡）五世川柳水谷金蔵碑

一基

神楽殿左側に暗いため繹然としないが、高さ一七六糎、巾八四糎、厚さ一五糎の自然石に

「和らかで かたく持ちたし 人ごころ

五世川柳遺詠

按寿書

と刻まれている碑がある。

五世川柳の宗匠水谷緑亭は、通称金蔵功名磯太郎といい、天明七年（一七八五）の出生で南茅場町の貧しい振売をしていた父が早く亡くなったため、遠縁の佃島漁夫、水谷太平次に引取られ成長する。大変真面目で商売熱心の上家産を興し、読書を好み学に努め、文化年間初頭川柳二世柄井弥惣右衛門の門に入り、狂名佃醒齋と号し、前句附を学び、五十才にして四世川柳人見周助から点式その他流祖伝来の書籍を譲られ、天保八年五世川柳を継承して緑亭を名乗った。柳風式法及び句案十体を唱え、俳諧・歌道にも通じた、編著に「佃島住吉社奉額狂句会」（嘉永六年九月編刊）や「狂句百味筆司」「歌書小伝」等がある。佃島には素行おさまらぬ人達が多かったので、金蔵はこれを

憂い、老幼男女を自宅に集め、よく忠孝節義の談話を聞かせ、風俗矯正に努めたことや、本人自身も大変親孝行で「天保十三年三月二日佃島魚商水谷金蔵（五世川柳）奇特の行いありとして町奉行から褒賞」を以後も度々受けている。又衆望を担って永く名主も務めていたが、安政五年（一八五八）八月十六日コレラに罹り、行年七十二才で没した。

「辞世 めでられし 雅を思出に 散る柳」

墓所は、杉並築地本願寺和田堀廟所にある。

この記念碑は、魚河岸出身者八十名で創る佃組合寄合で、川柳愛好家達の発言により、昔佃出身で偉い川柳の大家が居たことがわかり、役員十三名が発起人となり、昭和四十一年十一月二十二日に建立、当日記念句会が盛大に催された。

水谷金蔵の人と成りの証拠は、中央区立京橋図書館に「仰渡されの趣」として、卷子仕立の書簡に「佃嶋勘十郎地借・金蔵」に対する町奉行所表彰文の写と、表彰された喜びを息子に伝えた金蔵の書簡、二紙共本人自筆であり、古文書として保存されている。この古文書は、宵屋が佃島で水谷氏子孫から宵を買付け仕分けして発見した書紙で、早速図書館に提出文化財的価値を認められたものである。

丁度竜神社左側横にこの碑と向いあうように、小さい黒大理石（高さ一二〇〇釐、巾八〇〇釐、土台石高さ四五釐、巾一〇〇〇釐）表面に、「明治は 遠くになつても 江戸が 残る佃の夏祭り・きんざ」の句碑がある。裏面に平成三年五月十五日佃住吉講と刻まれているが、きんざ氏は私の縁者で佃島川柳愛好家の中心人物である。

住吉の すみに 雀が 巣をくつて

すわや 雀の 巣立ち するらん

落語雑俳の一句で早口言葉の語呂遊びであるが、住吉様を敬信し、願と共にその信念を今日まで発展した信者達の姿を見る様で、正に神に導かれ巣立って今日に至っているのである。境内の文化財だけを見ても、江戸の産業と航運、漁民の生活、並びに江戸の食と文芸の一端が窺え知ることが出来るのである。江戸文化の代表俳諧の発句そのものが俳句であるなら、その平句が川柳である。それは人生全般を投影し、社会事象をも網羅した文芸でもある。「鯉塚」や「五世川柳碑」のあることは、やはり江戸の佃島ならでのことであろう。そこで「鯉」と題して一言。

延宝六年の俳諧集「江戸新道」に、山口素堂の「目には 青葉 山ほととぎす 初鯉」とあるが、その頃から江戸ッ子には、人気の初鯉である。素堂の友、松尾芭蕉も「鎌倉を 生きて出でけむ 初鯉」と揶揄している。柳多留では、

「初鯉 値を聞いて買う 物でなし」

「初鯉 そろばんのない 内で買い」

と川柳にもあるが、文化・文政頃からは、段々と廃れ「大江戸や 犬もありつく 初鯉」小林一茶が詠んでいる。

訪づれて 古さと将来の 佃島

物語り 佃 証しの 文化財

筆走り 遠く江戸へと 佃島

やれ嬉し 筆をすべらす 佃島

江戸時代有名であった「佃住吉の藤」も昨今は返り咲き、その藤棚の下で気分よく拙句に遊んでいると、ハトバスの観光客がぞろぞろ境内に見物に入ってきた。殆んど客が一直線に本

殿に進み参拝して、その場で境内を一望すると、「五世川柳説明板」前に立読みし、藤棚奥に「五反幟柱」の一部展示を一瞥すると出社して行く。誰も「水盤舎」や他の「末社」に、関心を示さない。折角「江戸」を求めて来たのに、気の毒である。それだけ、目に付く関心物が無いのである。そう思って藤棚の東端に八〇厘位の高さの石碑に、「御大礼記念植樹・大正四年十月一日」と刻まれ淋しく建っているのに気付いた。そうだ、記念植樹石碑は、もう一基残存している。

(記念碑) 植樹の石碑

一基

明治八年本居豊頼「佃島住吉社頭植樹之碑」建立。これは三条西季知が題字を書き、文を明治八年十一月中島正本が記したものである。

三条西季知伯爵(一八八九〇)は、祖が三条公民の出で幕末七卿の一人である。文久三年八月十八日午前一時、公武合体のため青蓮院宮を動かし、クーデターを計画した尊攘派公卿を一掃せんと、守護職松平容保・所司代稲葉正邦が禁裏九門に入った。午前四時一発の砲声が夜明の空に轟く中、三条等尊攘派公卿や長州藩士・親兵等約二六〇〇名、京都東郊妙法院に集結、夕刻雨の中で追討使を待って、楠木正成にならって義兵を挙げようとしたが、十九日午前三時長州藩の主張を聞き西国へ都落ちするの、世に云う七郷落ちで、蓑笠を身に泥道を遠い西へ旅立った三条実美・三条西季知・東久世通禧・壬生基修・四条隆調・錦小路頼徳・沢宣嘉の七郷である。三条西季知は、国学・歌道の達人で、当社頭記念樹碑題字を書いたことは、前述「縁起文」大坂住吉神社の項で、中世攝津にて三条西家を本所とする青芋座があったことの因縁を改めて感じるのである。

藤棚左隣に、こじんまりした末社が二社並んで建立されている。

(末社) 疫神社

瘡瘡神社(合祀)

一棟

両社は合祀され、間口一間、奥行半間、明神造り小祠で、疫神社は左側に鎮座し、御祭神は建速須佐之男命と大物主之命である。

建速須佐之男命は、古事記伊邪那岐命の禊祓の条で、「次に御鼻を洗ひたまひし時に、成りませる神の名は建速須佐之男命」と記されるのが始まりで、タケとハヤは共に神威を称えた語で、スサは「進む」「荒ぶ」等のスサで、勝ちずさんで荒々しい振舞をされた大神話に基く名である。後に荒々しい振舞を行う理由から、一般に厄除の神とされている。

大物主之命は、同記勢夜陀多良比売の条に「其容姿麗美かりければ、美和の大物主神見感でて……」と記され、大和国磯城郡三輪町鎮座の、大神神社の祭神大物主神である。日本書紀には大己貴神の亦の名を挙げているが、古事記後段にも出雲国造神賀詞に倭大物主神とか、又三輪の社に限って大物主神と云う名が出てくるので、上代の民間信仰の神なのであろう。続いて同記崇神天皇と其の御子の条に「此の天皇の御世に疫病多に起り、人民死せて盡きなむとす。爾に天皇愁歎ひたまひて、神牀に坐しませる夜、大物主大神御夢に顯れて日りたまはく、是は我が御心ぞ。故意富多泥古を以て我が御前を祭らしめたまはば、神の気起らず国安平ぎなむ」とのりたまひき。」正に疫病除の神である。

疫とは、はやり病を云い、疫病を避けるために、この厄除けの神と疫病除けの神に祈願し守護を受けるのである。

瘡瘡神社は、右側に鎮座し、御祭神は瘡瘡之神である。瘡瘡もがさとも云い、天然痘を指し、瘡は皮ふ病の総称で、できもの・かさ一名梅毒も意味している。神名が裳とあるところから、腰から下も含まれるのであろう。

両神社共嘉永三年三月祭祀し、以後毎年四月六日疫神を祭る神事を執行して、神符を授与する。この神符を戸毎に貼らせ、疫病除けとした。

疫並びに瘡瘡神社の左隣に、この末社より大きい神社が祀られている。

(末社) 船魂神社

一棟

間口一間、奥行二間の石垣内に明神造りの社である。これは石垣の奉納者名が佃漁業組合の名が多いので、佃漁夫達によって文久三年四月祭祀されたのであろう。御祭神は、大海津見神・住吉三柱神・猿田彦神である。大海津見神は古事記伊邪那美二神の神生の条に「次に海の神、名は大綿津見神を生みまし」し記され、綿は即ち海、津見は掌の意味を持つ古語である。住吉三柱神は、本社祭神底筒之男命・中筒之男命・上筒之男命三柱、猿田彦神は、同記猿田毘古神の響導の条に「僕は国、神名は猿田毘古神なり。出で居る所以は、天の神の御子天降り坐すと聞きつる故に、御前に仕へ奉らむとして、参向へ侍らふぞ」と記され、古史伝によれば大年神の子大土之御祖神の一名を佐太大神と云うから、猿田彦神は佐太大神の同神で、出雲国意宇部佐太から出た名である。現在も八束郡佐太村には、佐太神の祠佐

陀神社がある。天孫降臨の物語に出て来るが、物語は天鈿女命が猿田彦神社を送って伊勢に赴き結末となっている。

「倭姫命世記」に、猿田彦神の裔宇治土公祖大田命が倭姫命を迎えて、五十鈴川上の地を霊地として答へたと記され、又「延暦儀式帳」には佐奈県追御代宿称が倭姫命を迎えて、自国を「許母理国志多備乃国眞久佐牟気草向国」と奏してとあるのは、兎前迎來前迎の意味で、猿田彦神が国覓き給ふ皇孫の先導の任に當った理由からの名と考えられ、猿田彦神が伊勢国に深い因縁の神であり、響導の神とされていたのである。

従って岐神又は道祖神と云われ、街を守る神として祭られ、後世には祭祀の際神輿の渡御の先導をつとめる神としてよく知られている。其の面は赤く塗られ、鼻高が特長で、目が鋭く大きいので、猿田彦の名の猿から起った連想だろう。日本書紀には「其鼻長七咫、背長七尺余、且口尻明耀、眼如八咫鏡、而赫然似赤酸醬也」とあるから、昔から異様な面相をしていた神なのであろう。

さて文久三年と云えば、五年後に明治を迎える。国内騒然の内、此処佃島漁夫達にも船業上幕府からのお達しがあれば、船の安全と戦いの準備を考えると、開島以来の出来事である。船の守護には、海の神・住吉の神更に小船であればその特徴を生かして、先導し徳川様への日頃の恩義に報ゆる時が来たのである。佃島漁民の意気込みが、この船魂神社にはみられるのである。

同様に境内南出入口の東端、佃漁民による稲荷社がある。

(末社) 入船稲荷神社

一棟

文久三年四月に奉祀されたこの稲荷は、明治二年大伝馬町一丁目の太物店より移約されたもので、現在の御祭神は天照大神・須佐之男命・宇迦能魂命・屋船久々能知命・大年神等五神が合祀されている。天照大神は、古事記伊邪那岐命の禊祓の条に「於是左の御目を洗ひたまひし時に、成りませる神の名は天照大御神。」とあり、天にましまして照り輝き給ふ義の御名で、日本書紀には「大日靈貴」「天照大日靈尊」等の御名で記され、延暦の皇大神宮義式帳には、天照皇大神と称している。更に同記に「此の時伊邪那岐命大く歡喜ばして詔りたまはく、吾は生子生みて、生の終に三はしらの貴の子得たり」とのりたまひて、即ち其の御頸珠の玉の緒母由良邇取り由良迦志て、天照大御神に賜ひて詔りたまはく、汝が命は高天原を知らせ」と事依さし賜ひき。……中略……次に建速須佐之男命に詔りたまはく、汝が命は海原を知らせ」と事依さしたまひき。」要するに、天照大神が高天原を治めるのに対し、須佐之男命は海原（後に根国）を治め給うのである。次に大年神と宇迦能魂命であるが、同記須佐之男命の神裔の条に「又大山津見の神の女、名は神大市比売に娶ひて生みませる子大年神、次に宇迦之御魂神。」と記されている様に、須佐之男命の御子達なのである。「年」は祝詞に「祈年」「奥津御年」、又豊年のことを「年よし」「年栄ゆ」「年あり」と云うように穀物の意味を持ち稲を指している。即ち穀物の神である。又宇迦之御魂神は、日本書紀に「倉稲魂命」とあり、この神も穀物神で、「宇迦」は食と同じ食物の義である。倉稲魂命と云えば、一般には稲荷と解され合祀の本末社は稲荷社と呼ばれたのであろう。屋船久々能知命は、本境内に祀られる神の中で一番古い神で、伊邪那岐伊邪那美二神の国生の条で「次に木の神、名は久久能智神を生みまし」とある。「久久」とは莖で、「智」は男性に対する美称の接尾語で

あり、「屋船久々能」の名は、木船を司る神なのである。

五神の合祀されている社は、間口一間半、奥行二間明神造りで、春秋稲荷祭は佃住民が当番を定め、祭を執行し神社境内の趣を持たず庶民的である。やはり稲荷と名の付いている所以なのかも知れない。既に故人となったが、佃上町住人小泉清さんは稲荷祭の当番に当たると、店に飛んで来ては、「よう!! おじさん。稲荷なんだよ。祭をするんでえ。切れ(布地)呉れえ。」父は、「それでは奉納しましょう。」「ありがてえ、申訳ねえ。」社の前庇に吊されている鈴綱用の布である。清さんは、河岸から仕入れると自転車にリヤカーをつけ、東銀座から新富町湊町明石町と行商を一生していた人である。

この様に境内南側に鎮座する末社は、すべて佃住民の生業や生活から必要上祭られた神々である。例えば、疫や瘡瘡神社は、嘉永頃から江戸に麻疹や瘡瘡が流行し、安政に入ると同五年八月水谷金蔵がコレラで他界したように、江戸だけで死者一万二千余に及び、佃島でも五百人のコレラ死者を出した。更に幕末になるや、品川砲台の建設で獵場は荒され、軍艦操練が始まれば、獵の禁止を申渡されたり必然的に願いは神頼みとならざるを得なかった。これは境外社も同じであった。

(境外末社) 森稲荷神社

一棟

佃一―四―五に鎮座 祭神 佃島開拓の祖森孫右衛門命

(境外末社) 於咲波除神社

二棟

佃一―八に鎮座 御祭神 倉稲魂命

南出口に立って、もう一度境内を振り返ると、石の獅子一对(昭和四年八月一日御大礼奉祝記念奉獻)・石灯籠一对(同

年十月奉納東京肥料問屋組合・正面入口に高く聳えている住吉神社社名記念石碑（小笠原長生敬書、昭和十一年十二月奉獻）等昭和の什物と、新しい石灯籠や鳥居等平成の什物が、雑然と起立しているように見え落着きがない。むしろ「本社」と右隣「御輿庫」背景の高層ビルの場面だけが溶け合って、都心の神社として写っている。

神社を離れるに当り、フト思い出すことは、昭和三十八年ボーイスカウト・ガールスカウトや子供会達の集会所として、児童館を私宅裏に建築した際、佃三丁目鈴木福次郎佐官職が父とも幼友達とのことで、氏を通じて日本橋箱崎町会長宮島（明治天皇御大葬の掌典所製作に携わった技師）氏の工務店へ施工を依頼、鈴木氏が児童館の内外装の壁塗りを担当、完成後鈴木氏は住吉神社内陣土蔵壁塗り替えをされた。次に昭和四十八年現在店舗改築に矢崎建設を施工後、昭和五十八年住吉神社改築設計を同事務所が行う等、二度まで建築に関連したことは、何か因縁さを感じている。

天を指し 住吉宮の 曙は

あけぼの

千木そそり立つ 国のあとさき

三、佃島今昔

浅草の磯に小高き 待つ乳山

水脈流れ 森島に出づ

昔から待乳山と石川島には、井戸を掘ると水が湧出た。同じ水脈が、通じているからだと言ふ。隣島人工で築いた島といえ、佃島には現在でも数多く井戸が保存され使用もしている。地質学上、同層位置にあるからである。地形からみて江戸の東南特に東端部に属する佃島は、沖積低地からなり、河川が運搬した土砂の堆積と、地盤の隆起によって、標高一から五米位にあり、待乳山付近は、小高い丘が多かったが現在聖天様の高台だけとなり、その流れが下って佃島に出て来ている。関東ローム層の下にある江戸層が両地とも同じで、真土が待乳と変名されたのである。江戸の最初に出来た竜閑橋付近の「主水の井戸」は、地上より六米下に真土があった。同様に「白木屋名水」(日本橋東急百貨店現コレド日本橋)も真土より水が湧出、待乳山から佃島の線上にある。

東京の地下を百米掘り下げると、三浦層群と呼ぶ地層に当る。これは東京が海底にあった頃の古い地層で、第三紀鮮新世層と云い、この層は上から中里層・大船層と呼ばれ泥岩や砂岩の地層で、厚さ二百から三百米、更に地下四百米位は江戸層と呼ばれ厚さ約百米の砂層がある。

今日江東区地下から水溶性の天然ガスが採掘されているが、この三浦層群の上に、洪積世約一万年前より百万年前頃の地層を東京層と云い、勿論東京が海底にあった時出来た地層で、厚

さは西に薄く、東に厚い結果となり、千代田区付近で百米前後である。東京層の上半分に、かなり連続した砂礫層があり、東京礫層と地質学者は呼ぶ。この砂層を上下に区分して、上部東京層・下部東京層と云う。東京礫層を建築業者は、建造物の基礎としているので、高層建築はこの部分まで基礎を入れるのである。その後、沈降運動が続く「武蔵野湾」と云われる入海が出来、西から礫が運ばれ堆積したのが、上部東京層である。この頃は、日本とアジアが陸続きであったので、ナンマン象が往來していた。新大橋架け替えの折、中央区側砂礫の層からナンマン象の骨が出て来たので証明されている。

これは海底の東京が、海辺の東京へ生れ変わった姿を意味している。その後再び西から東へ礫層は流れ、その上古富士火山噴火の繰返しが続き、火山灰が赤褐色の赤土となり、関東ローム層を造るのである。何万年も続いて寒冷の水河期から、温暖な後氷期と洪積世から沖積世へと移って行った。すると急に低下していた海面が上昇し始め、氷河の融水により世界的現象であるが、海水は台地をきざみ谷となし、入江をつくり、やがて潟となり更に沼沢や池となったのである。河川が運搬した土砂の堆積と地盤の隆起によって、標高一から五米の沖積低地が出来、現在この低地を、吾々は「下町」と呼んでいる。

慶長十八年(一六一三)英国ジェームズ一世の書簡をたずさえ、日米通商条約のため来日したジョン・セーリスの「日本渡航記」に「この都市の主な街路を貫く一本の土手道があって、その土手道の下に川が流れている。五十歩毎に一つの井戸があって、砂石ではなはだ頑丈に組立ててあり、近所の者が水を汲むため、又火災の危険に備えるために、つるべが添えてある。この街路は、イングラントの街路に劣らず大きい。」江戸が立派な大都市になっていたことが解る。水は生活の元であれば、居

住は不可能である。況して島であれば、一層不安となる。折角築島したのに努力の甲斐がなければ……当時はずいぶん心配であつたらう。幸いに、待乳山から続く水脈の上に築島されたのであつた。

井戸は、佃二丁目でも私の子供頃は、裏道を挟んで両筋側の長屋に住む世帯が一乃至二つの井戸を使用していた。佃島の今日は全世帯水道ではあるが、現在使用している井戸には、昔ながらの井戸端会議を時折見受けることが出来る。

江戸前に 流れ星落ち 住吉の

都ささえる 佃のおこり

先に佃島の起りを「住吉神社略縁起」で触れたが、今日まで四百年続いた江戸の掘り起しのため、何人もの大学教授や研究室並びに文化財専門家達が、佃島調査を実施し発表されて来たが、自分が生れ育った佃島の経緯を通じて、過去を紐解き現代に反省し、未来の夢を試みようと思つている。その意味で先達の諸説を交えながら、「佃島の今昔」を述べてみよう。

先ず「佃島の起り」を、地元での古文書からみてみよう。

(古文書) 佃島起立之事 一綴 飯田栄太郎氏所蔵

佃島の起りについては、本綴一冊と小沢長吉氏(故人)所蔵「佃島之古事記」の二冊が挙げられるが、飯田氏所蔵の本綴は天保年間まで二百年の記録がなされている。

初めに「佃島起立之事」と題して、島の開発から文政六年(一八一三)まで、佃島関係事項を年代順に記述されたもので、縦一三・五種、横二〇種、美濃紙横半切の料紙を袋綴にした横

長帳で、本文一〇紙、藍色表紙で綴られている。本書が小形であるのは、名主か年寄が携帯用に製作し、役所の呼出し用に備えたものである。従つて名主森家代々引き継ぎ筆記してあるから、筆跡も当然異り、随所に朱筆が加えたり一応天保年間で終っているが、巻末に嘉永の追記もある。

昭和四十三年明治大学萩原竜夫教授が本書を調査し、翌年五月中央区教育委員会に報告種々文中の疑問点を挙げていたので、それに対比しながら述べてみる。

本書当初の記録は、天正年中徳川家康が浜松より攝津多田廟と住吉社参詣の折、漁船で神崎川を渡り掃路佃村の孫右衛門方に立寄り、庭の立木「松」を見て「森」の称号を賜つたと、孫右衛門の姓の起りから始まり、天正十八年家康関東打入り、漁夫が召連れられたり、慶長四年伏見での上覧などは根拠に乏しいと萩原氏は述べている。

小沢氏所蔵の「佃島之古事記」には、「天正十八年八月攝津国西成郡佃村より転住した」とあり、恐らくこれに基いて記載されたと思う日本橋魚市場沿革紀要に「天正十八年庄屋森孫右衛門弟九佐衛門忠兵衛をはじめ、一族七人、佃村・大和田村漁師合せて三十四人江戸へ下る。」とあり、現在日本橋室町側東袂の「日本橋魚市場記念碑」にも刻まれ、又深川区史に「天正の頃、攝津地方の漁師江戸へ下り、深川(元町)へ居住して漁業を営み、徳川氏開国に際し、魚貝を献上、その賞として現存する漁船一六八艘を限り、無年貢営業を免許さる。」と、更に慶長六年白魚役由緒書には「將軍上総東金鷹狩の際小網町の漁師浅草川に網を曳いて白魚を献じ以来冬春の間御小肴御用を勤める」とある。従つて氏によれば、これ等も根拠に乏しいこととなる。

即ち本綴によれば、「慶長十七年七月攝津国西成郡佃村の庄屋森孫右衛門、佃村・大和田村の漁師三十余人を引連れて江戸へ下る、佃島起立之事、台徳院殿依爲、江戸城在城、漁師関東に可趣旨上意有之佃村之漁師二十七人、同国大和田村の漁師七人、都合三十三人、慶長十七年七月二十六日攝津発足、八月七日江戸着」とある。これは佃漁夫関東に赴く命令が出され、佃村隣の大和田村漁夫共々江戸に來り、安藤対馬守及び石川又四郎（八佐衛門の間違い）等の邸に居住し、浅草川で將軍お成りの御時漁獵を上覽したとある。又御扶持方を下され、攝津へ交代に勤める。氏によれば此の条も交代勤務は考えられず、文化元年頃と合せて考察すべきだと指摘される。

翌十八年「此網引江戸近辺へ於海川あみかけ候事不可有相違候。但浅草川稲毛御法度之場にては引べからずもの也」と、江戸近辺の漁獵免許の御墨付を受けている。従って佃島漁師達は、此の御墨付を楯に今日まで漁業を引継がれて來たのである。この条の浅草川は、利根川と人間川の合流点下流を指し、稲毛河とは多摩川のことである。そのため習慣的に渡良瀬川下流の太日川を「利根川」と呼んでいたから、河口での漁場争いが今後他の漁夫達と屢々起るのである。

慶長二十年（元和元年）大阪落城時の漁船奉仕を、攝津佃村から誇を以って江戸へ伝えていゝ。

萩原氏は、攝津との交流は、文化元年からとして、この記録を疑問視されている。

寛永七年 攝津から江戸石川邸内に住吉社勸請同十五年中川と利根川間を「御菜川」と称し、年々白魚献上する。後中川川口、八郎右衛門新田（深川氏開拓地）野錢場に、三百十八間×二十間の土地を漁師居小屋として、伊奈半十郎から賜る。

寛永二十一年（正保元年）石川島傍干潟埋立竣工、南北九十

間、東西九十五間の孤島に佃島と命名居住地となる。

正保三年 石川邸より、住吉阿佃島へ移遷。

慶安二年 佃島家数八十軒、人数百六十人。

——此処までは佃島起立に関する記録であるが、慶安二年以後漁業問題として、他の漁村との獵場争論を展開し、当時の江戸前での「獵場斗い」に興味をそそる——

慶安二年 正月葛西領二之江・下今井・長島三ヶ村から、利根川（江戸川）での出訴。

宝永七年は大争論となり、葛西側にも裁許状が今も伝わっている。

享保二年五月十日、御船手奉行向井將監より、明日將軍龜戸へ鷹狩の由、引網三組、橋場横堀に待機との命令あり、（舟三人乗二艘で一組）舟六艘十八人が、十一日曉七つに出動、名主忠兵衛は麻上下着用し、別船にて横堀へ向う。

此の日は命により、小網町から出動した。当日鷹狩の後、隅田川御殿（墨田梅若塚付近）へ入御され、申刻（午後四時）佃島に網引けの命下り、横川仮御殿前にて三組が同時に網を引く。魚が獲れると、名主忠兵衛の舟に置いてある陸持三個に入れ、御小納戸頭松下専助に渡し、これを上覽、更に引けの命下り、

こうして一組が二度、従って六度の上覽があつて、舟は御前から退がった。次に唐網を打てと、小網町漁師に命ぜられ、網打を上覽されたが、魚は一匹も獲れず、控えよの御諒があつた。

申中刻に環御となり、御座船が浅草川出口まで進むと、再び網を始めよの命が下り、唐網・引網打ち混じり御座船脇にて引き合つたところ、佃島半四郎の網に鯉がかかる。將軍よりお賞めの詞かかる。將軍は兩國橋より上陸、城へ御帰還、鯉を將軍に届けるべく御小人目付に頼むが応ぜず、仕方なく佃島へ一同引取り、その晩町年寄樽屋の役所へ申出たが、今からでは町奉行

へ報告も間に合はず御台所役人へ渡せよと云われ、翌日御賄進上方へ岡持に入れ届ける。平塚友八殿が請取り、小川左右衛門殿、伊藤新兵衛殿へ報告された処、御成り時の魚ならその場で差上げる可きを延引したのは、何の理由かと問われ、事情を申上げ老中まで連絡をとり、早速鯉を引取られた。従って、三奉行にこの旨届け出た。翌日向井将監殿・伊奈半左衛門殿、更に樽屋へ罷り出て、今回の漁獵上覧の首尾無事済んだこと申上げた。以上鯉一尾を巡り將軍側近・名主・右往左往の漁民達の立場が詳しく記されており、これは新將軍紀伊家より入った吉宗の時である。

寛文四年 下総国唐代嶋村より、佃島地引網を訴えられる。

寛文七年 同国船橋浦より地引網につき訴えられ内済。

寛文九年 芝新網町の者日比網を建てた件に対し三年間停止の命出る。

宝永元年 右同日比網の件。

宝永六年 右同日比網の件。

享保二年 佃島より將軍上覧のため六人引網三組(舟六艘)を出す。

享保二年 中川にて漁獵上覧、佃より鶴繩網(口広十二尋、袋の奥行三十尋)三組、漁追縄百二十尋(鶴羽所々に付け)一組に付舟四艘等を出すこと命ぜられる。

享保五年 地引網始めて成る。

享保六年 隅田川上覧にて、地引網一組、六人引二組、あぐり網二組を出す。この時河底の古杭に網かかり大損傷する。

享保十六年 幕府より助成金十五両(大岡越前守掛り)を以て、六人引網一丈できる。

享保十七年 同六十三両(樽屋掛り)を以て、初めてあぐり網を作り、中川にて用い御用(魚献上)を勤む。

享保十八年 佃島・金杉・本芝・御林丁・羽田の五浦より、品川獵師町・浜川・大森三浦を相手取り、いか獵の「作り藻」を廃すべき訴をなし、勝訴する。

享保十八年 あぐりを海あぐりに改めた見積りを幕府より求められ、又鯉釣りに付き尋ねられる。

享保十八年 小石川の江戸川(神田川)にて鯉取揚げを幕府より命ぜられ、六人引網を以て取る。

享保十九年 御本丸奥納戸に呼ばれ、六人引二組取建の方針を聴かされ、その一組はあぐり網を直すこと。

元文四年 三田の二宮玄考という者常盤網を考案、意見求められる。

元文五年 自費を以て淵引(簀引)網を仕立てたき旨出願。

元文五年 霜月網につき差障り出訴。

寛保元年 自費にて大網(四十間、漁夫六十人)大網船二艘(巾一丈・長十尋)を完成。

寛延元年 錢瓶橋堀にて四手獵を呉服橋番所より咎められたるも、先例を申し立て許される。

宝暦四年 船堀・東宇喜田より中川にての肥あみ出入りをかけられ内済。

安永七年 猫実村の者を相手取り、海上叩立漁獵差障につき訴え内済。

以上漁関係の目ぼしき記事を連記したが、寛政後は漁関係記事が無くなり、文化文政よりは商行爲・遊覧漁等に記事が片寄っていく。末尾に、西本願寺建物配置図が記されているのである。

以上本綴の萩原氏の疑問点を再考してみると、氏は慶長十七年以後の記録は認められており、私もそれは当然であり近海及び河川の網獵の特権も与えられたのも事実である。又攝津から態々下向し、安藤並びに石川邸に旅宿を直ちに許された佃島漁

夫達は、それ以前から関係があったからこそであり、況して天正十八年四月二十七日江戸城、五月二十二日岩槻城、六月二十三日八王子城と豊臣軍関東打入で降伏させ、その上六月江戸城は徳川家康家臣、戸田忠次が受取っており、七月に家康の関東移封が決定するや、八月一日は江戸城へ入城しているのである。

直ちに食糧を考えた場合、前に控えた江戸前海から魚獵の必要性が手取り早い、小沢氏の「佃島之古事記」及び本綴の「佃島起立之事」は、攝津佃村漁夫達の出府願いがどれ程家康にとつては感謝したことか、江戸での手配振りでそれが知れよう。又萩原氏は大阪での上覧に疑問を持たれているが、大阪落城後元和元年佃村庄屋孫右衛門に、焼米一藏を拝領した。その上天正以来の忠節に対し、大阪に地面拝領の沙汰もあったがこれを固辞したのは、恐らく孫右衛門が既に江戸へ出向した漁民達と自分も江戸へ出ていた経験から、江戸の将来を知ったからであろう。更に氏は、「御扶持方を下され、攝津へ交代に勤める」のは信じがたいと云われるが、正保元年二月一日佃島の普請が完成、名主に忠兵衛がなるや、孫右衛門は郷里佃村に帰り、年々出府することは、御扶持を受けているからである。

(古文書)「往昔佃村より江戸へ下降せし漁師の名前」一綴

前綴書の関係文書として、同氏所蔵の移住漁師名簿が付された綴で、縦二三・八糎、横一六・五糎、半紙判、本文は藍色刷半面十行の罫紙四枚・無地表紙で整い、小捻綴。

(内容)

一、上条の年月等

右は確としたる証明すべきものなきも、二三記して御参考
に致し候

一、漁師各記したる書類の中に、慶長年御入国の砌御供し候一、惣漁師無運上にて海川漁被下由緒出こと秀忠公様江戸城に止遊御座候慶長年中 安藤対馬守様まで下[○]候、佃村、大和田村の漁師三十一人江戸表へ罷り下り候

一、由緒出の関原御陣の宮御利運江戸御入国の砌、佃村百姓被留[○]候ため御供仕り候

イ、佃島由緒出(これは御家にて拝借書写しもの)天長十

八年御入国の砌御当地へ御供仕り由停に付居下り候事

ロ、秀忠様江戸御城に仕り問御遊御座候に付、土井火炊頭、

安藤対馬守様、御上意の砌と仰渡、獵師共三十四人佃村

より居下こと

ハ、慶長年中に互り之の証文取領候

之、右に関する事項

由緒によれば、前後の事項はばお分かり申へく候

神主 平岡日向守

忠藏、宇右衛門、吉右衛門、平左衛門、太右衛門、善吉郎、
長兵衛、太左衛門、五兵衛、伊右衛門、半四郎、太兵衛、仁
左衛門、五左衛門、庄左衛門、五郎兵衛、太郎左衛門、忠右
衛門、久兵衛、長四郎、勘十郎、善九郎、喜兵衛、孫左衛門、
市兵衛、仁兵衛、伝兵衛、長兵衛、喜左衛門、甚左衛門、六
左衛門、情兵衛、孫兵衛

本綴は後年屢々奉行所に呼ばれ、その都度由緒について諮問
を受けるので、文書によって上申するための控書と考えられる。

さて、この「佃島起立之事」を一層鮮明にするために、当時
の江戸付近の漁業状況を知ることが必要である。

天正十八年家康が関東入りをして芝浦を通過する折、潮流の關係で船が州にかかり動きがとれず困っていると、本芝浦と金杉浦の漁師数十艘の漁船で御座船を動かして戸田まで送った。そこで礼に何を望むか家康が聞くと、御入国後も今迄通り漁をしたいので、何国何方の浦へ行っても差し支えない様願ひ出た。それに対して、水三合ある場合ならば何方で漁もして良しと黒印免許書を与えられたと云う。従つて家康入国後、本芝・芝金杉両漁民は、上品の魚が獲れると初穂として折り折りに献じたが、秀忠時代になると月に四度上納し、いつとわなしに江戸城直接でなく、関東郡代伊奈備前守の役所へ納める様になる。その中、品川浦も近いので仲間に入り、万治元年（一六五八）芝金杉の東海手が御用地になり、その六軒分の獵師は大井村の御林海岸に代地を与えられ、此処を「御林獵師町」と云い、先の三ヶ浦に組み合ひ、御菜御肴四ヶ浦で毎月上納した。その後、羽田・生麦（以下横浜）・神奈川・新宿も加わり「御菜八ヶ浦」となった。元禄九年伊奈半十郎の役所から、無年貢印として除の焼印鑑札を漁師一人一枚宛渡され、代つて御菜御用・御好御用等をつとめ、品川御殿御成りの際に、御用御肴など献上して

いた。寛政四年（一七九二）には、銭納になるが、文化八年（一八一二）に再び現物納めになり幕末まで続くのである。

芝金杉と本芝の両浦は、元浦と称して最古の浦であるが、寛文二年（一六六二）に町奉行支配になってから、漁師は家業を肴問屋か他の商人になる者が多くなつていった。

享保二年（一七一七）芝浦書上に、肴の献上日毎月六・十三・二十一・二十七日で、その役に当る漁師は前日より漁をして残らず御菜小屋へ持参し、漁師頭・町内家持・組頭・名主が立合つて吟味し、代官伊奈半左衛門方へ持参する。肴の種類や数は、漁により一定しないが、石鰯類が多かつた。海上しけの場合は、

日延べを願ひ出る。文化七年に正魚上納復活になり、月一度となり日本橋馬喰町御用屋敷内（元関東郡代役宅）の鷹野役所へ持参し、検査後城中へ献納するのである。將軍家に慶祝事あれば臨時に納めることもあつた。例えば天保八年（一八三七）四月家慶十二代將軍になられた時、金杉・本芝の魚問屋は活鯛五千枚を、江戸近海四十四ヶ浦から、規定五千枚の他、三日より十五日まで獲れた分まで、援助を受けた例もあり、勿論一定の値段は支払つたのである。

又漁法を見ると享保五年（一七二〇）書上に、芝金杉町・本芝町、品川漁師町・御林町の四ヶ町は小獵のため、鯛は海老網に少々あけることもあり、網の仕入金は問屋より借り受ける。

羽田漁師町は、地引網・鶴縄網・小あぐり網で鯛をとる。地引網一帖で、金二百兩位問屋から前借する。品川漁師町・御林町・羽田漁師町の三ヶ村は、毎日漁獲物は江戸小田原町・芝金杉町・本芝町の三ヶ所の問屋に送り、問屋から仕切をとつておき、年の暮れに前借金と差引勘定をする。五ヶ村は外売は一切せず、三ヶ所の問屋から仲買・小売を経て一般消費者に互るのである。

これが東方面の漁業は、近くは深川漁師町・蛤町・八町堀・小網町等の漁師と佃漁師の争論は多く、更に葛西領堀江村・猫実村・船堀村・東宇喜田村・桑川村・二之村・下今井村・長崎村等二十一ヶ村、別に下総国唐台島・船橋村で、東京全漁村と争を起した感がある。文化十三年（一八一六）には、武蔵・相模・上総・下総の四十四ヶ浦の者会議を開き、漁具三十八職を定め、それ以外の漁具使用の場合は、同盟の許可を必要とした。翌年代官へ提出した書類をみると、品川漁師町には、二人乗十八艘・三人乗三十五艘、計五十三艘、大井御林町は三人乗二十艘、四人乗二十五艘、計四十五艘の漁船があつた。

何れにしる佃島漁村に対する幕府の接し方と、江戸周辺の漁村に対する奉行所の扱いには格段の差があった。況して漁師同志間では、「家康の許可状」を笠に着せての振舞も窺い知れる。そこでこれ等地「元資料」の更に正確さを見るために、行政記録からの佃島今昔を列記してみる。

なお前記資料と幾分重複する面もあるが、了承願ひ度い。

(一) 佃島の記録（江戸時代）

正保元年二月一日 鉄砲洲東干潟百間四方の普請完成、佃島と命名、絵図面を地割役木原勘右衛門へ納める。

武州豊島郡所屬となる。 名主 忠兵衛

正保二年 佃島渡船はじまる。

慶安二年一月 佃島家数八十軒、人数百六十余人、初めて江戸市中の格法に従って町儀作法を定め、連印証文を作る。

慶安二年一月十五日 佃島漁師、東葛西領地元漁場に網を張りし所の者毆打し、越えて二十日大挙して毆込をかけ、アジ網十八艘分を奪い去る。これによって、東葛西三ヶ村の名主が連署して、漁場再確認の訴状を奉行所に提出。

明暦三年一月十八日 江戸大火の飛火で、佃島漁師の家十五軒焼失、災後幕府に願って銀十七貫匁の拝借を許される。

寛文二年四月四日 佃島開業森孫右衛門没（九十四才）。

寛文四年 下総国唐台島漁師が、佃島漁師引網を拒んで訴訟を起したが敗訴におわる。

延宝五年十二月 大柴六兵衛、佃村網の者御奉書頂戴の由来書を幕府に提出。

天和元年 凶荒、佃島では幕府から米十九石の下賜を受け、同年更に二十七石を拝借した。

元禄四年二月 小網町漁師と佃島漁師の間に漁場の出入あり、

小網町他十二ヶ町立会作製の川絵図面を町奉行に提出した。

元禄十三年四月 佃島漁師から、江戸湾内諸浦に於て、おぼこ（ボラの幼魚）の乱獲を禁じられたい旨願ひ出て、七月評定

所で評価が与えられた。以来毎年六月十五日初イナ上納のこ

と始まる。

元禄十五年三月二日 南八丁堀から出火、佃島に延焼して住吉神社も焼る。災後佃島では奉行所に願って五百両の貸付をう

けた。

元禄十六年十一月二十二日 房総方面に地震、そのため漆筋が移動し、佃島と葛西領三ヶ村との間に漁場紛争が起る。

宝永四年三月一日 夜毎大川筋に白魚漁船が篝火を点じて多数集まり、船行に差つかえ、火事の危険もあり、白魚漁船を減

ずるようにお触が出る。

宝永六年 葛西領三ヶ村漁師と佃島漁師間に入会漁場の紛争が起る。

宝永七年八月 円波遠江守与力磯貝藤兵衛外二人の係りで、佃島估券図を幕府に提出。

享保四年十月二十四日 深川八幡前、武家方上り屋敷八四四坪の地が佃島の助成地と成った。町家を立てて佃町と云う。この冥加として、三月から八月まで、一ヶ月魚数三百ずつ、八

ヶ月惣数二千四百を上納することになる。

享保六年二月二十四日 佃島漁民に対し、千住大橋から上豊島までの漁獵の許可が与えられる。

享保六年 佃島漁師の助成地として、深川小松町続きの茅場千三百八十坪を拝借し、家作を作る。

享保六年 下総船橋村と佃島漁師との間に紛争起る。

享保七年 佃島で助成地として深川に三百八十四坪の地拝借

(寛延二年九月に返上)。

享保十六年 佃島窮状を訴えて幕府から二百両の下賜を受ける。

享保十六年春 葛西領堀江村・猫実村漁民が、鳥賊を採るため多数の「作藻」を海中に布置し、佃島漁師から網漁の障りになると抗議をうけ、止むなくこれを撤去。

享保十六年 將軍遊猟の折使用する、大六人引網一組出来る(佃島保管)。

享保十七年六月二十日 佃島、奉行所に御用網納屋建築見積書を提出。

享保十七年八月一日 佃島で御用網修理願提出。

享保十九年 將軍遊猟の折使用する大六人引網もう一組完成(佃島保管)。

元文四年一月二十九日 烈風中佃島に出火百四十軒焼失、災後奉行所に願ひ出て五百両の貸付を受ける。

元文四年十月十二日 幕府の漁猟訴状の保管を住吉神社社司津守日向に託す。

寛保元年 隠売女を置いたことから、深川小松町佃島助成地取上げられる(当時売女を置くと罰せられた)。

延享三年 深川小松町助成地の一部佃島に戻さる、但し家作は許されなかった。

延享三年 白魚屋敷の建網と佃島四つ手網との間に争論が起る。延享三年二月二十日 南八丁堀五丁目万宝院で網建場についての和談成立。

寛延元年六月一日 町奉行市橋下総守が、銭瓶橋際の四つ手網漁の禁止を命じたのに対し、佃島由緒を上申、町奉行も止むなく従来の慣行継続を許す。

寛延三年四月一日 深川筋御成あり、助成地深川佃町の蓬菜橋改造のため、幕府から五百両拝借する。

宝暦元年二月 堀江村と佃島との間に六人引網のことで訴訟事件起る。

宝暦元年 佃島では漁猟裁許状が本国佃村に預けてあるため、裁判延期を願ひ証文を取寄せ、三月三日の裁判に証拠書類として提出、この爲事件後裁許状を江戸佃島に置くとしたため、本地佃村と不和を醸すに至る。

宝暦二年二月二十九日 西澤で、白魚屋敷建網と佃島四つ手網の者が口論、訴訟となり、六月二十三日白魚役の者十八人が、江戸払・手鎖・過料などの処罰をうけた。

宝暦二年八月 佃島名主御本丸に召出され、小鳥の餌にする川小海老、小うなぎを毎日差出すよう命ぜられる。

宝暦四年 船堀村と東宇喜田漁師が、田地の肥料にする「アミ」取りに出かけ、佃島漁師から漁場荒しとがめられ、アミ取道具取上げられたが和談を以て解決。

宝暦八年五月一日 佃島では御菜漁場で白魚が採れなくなったため、白魚御用御免を願ひ出た。

宝暦十年二月一日 本小田原町肴問屋類焼のため、佃島で網仕入金三百両の請借を幕府に願ひ出る。

明和二年八月二日 大暴風雨により佃島四方の石垣が崩壊、石垣修復のため、幕府から金子五百両を請借した。

明和三年二月一日 町奉行の諮問に答え、佃島漁師代から御網御用について答申した。

明和三年八月七日 佃島漁師惣代十兵衛ら八人が町奉行所へ呼ばれ由緒その他について諮問を受け、文書によって由緒を上申。

明和七年五月十一日 前年三月四日佃島渡船転覆し死者三十余人出す事件につき、十八ヶ町の者が召出され判決下る。

「船頭長十郎遠島、名主忠兵衛押込、月行事彦四郎、組頭太

兵衛、善四郎、仁兵衛、家主守右衛門へ拾貫文宛過料、外町はお構へ無之旨被申渡し

安永七年二月十二日 石町から出火、延焼佃島におよび島中五軒を残して全島焼ける。災後幕府に願って金子五百両拝借許さる。

天明四年 船堀村と東宇喜田村の者、田地の肥料にする「アミ」取りに出かけ、この度も佃島漁師から漁場荒しと咎められ、アミ道具取上げられたが和談により解決。

天明六年 葛西領桑川村・二之江村・下今井村・長崎村・堀江村五ヶ村の漁師達が、佃島漁師の専横を奉行所に訴え出る。

文化元年 攝津国佃村・大和田村の漁師達が、大阪の漁師達と漁場紛争を起すと聞いて、江戸佃島の島民が由緒書を奉行所に提出し、遙かに本国の救援をはかる。

文化五年 佃島東方の沼地を埋立て網干場を作る。

文化七年八月二十三日 將軍芝海手徳川式部卿屋敷へ御成、大川通りで佃島漁師の魚獵見物。

文化九年八月二十一日 將軍芝海手徳川式部卿屋敷へ御成、大川通りで佃島漁師の魚獵見物。

文化十三年八月四日 大暴風雨佃島四方の石垣崩壊、修理のため幕府から三百両拝借した。

文政七年九月六日 佃島名主清右衛門、町奉行所に錢瓶橋四つ手網の由来について答申。

文政九年八月二十一日 將軍芝海手徳川式部卿の屋敷へ御成、御台所は浜苑にお入りあり、魚獵を見物した。

文政十二年三月二十一日 巳刻（十時）神田佐久間町出火、日本橋、八丁堀、靈岸島、鉄砲洲、築地海手佃島、石川島人足

寄場悉く焼失、折りあしく小潮のため佃島に船懸りしていた大船二十八艘焼失、災後佃島では官に請うて金子四百両拝借。

天保二年七月一日 町奉行遠山左衛門尉の命で、佃島住民の盆踊をして市中徘徊することを禁止さる。

天保五年二月七日 北風烈し昼八つ時（二時）神田佐久間町から出火、築地門跡から海手まで佃島も全焼、災後官に願って金子四百両拝借。

天保十四年九月二日 勅使徳大寺前大納言実堅卿・日野前大納言資愛卿に隅田川遊覧の供応あり、乗船きりん丸の永代橋を過る頃「御船の左右に佃島漁人、小船数艘をうかべて網引、御船に添ふて川をのぼる」

弘化二年八月一日 佃島で小六人網二組修補費用として、幕府から金子四拾両拝借。

弘化三年一月三十一日 小石川片町から出火延焼佃島に及ぶ、災後佃島では幕府に請うて金子四百両貸与を受く。

安政元年八月 芝金杉松平肥前守陣屋前の海手、海岸から濡まで二十四間の杭打工事計画について町年寄を通じて支障の有無問いただしあり、佃島四つ手頭から漁獵に支障ある旨申した。

安政五年 コレラ流行佃島で死者五百人出す。品川沖砲台が出来、濡筋に変化生じ、品川沖漁場洲高となり地引網・交網等は用をなさぬ様になる。

安政五年十二月二十二日 佃島漁師惣代から大川筋上総濡筋に焼瓦土砂などを捨てぬよう、町触を出されたいと奉行所に請願書を提出す。

文久元年二月 白魚獵の捨杭などが軍艦操練のじゃまになるため、軍艦奉行から町奉行にその取締り方の懸合があり、佃島にその旨達しがある。

元治元年 佃島南方に砲台築かれる。
慶応二年 石川島人足寄場奉行清水純崎が、隅田河口品川沖航

行船舶のために、寄場油しほり益金を割いて、石川島の一角に灯台を築く。

慶応四年(明治元年)三月十六日 佃島第七番組に編入、名主森幸右衛門添年寄となる。

慶応四年七月 佃島漁師惣代から鎮将府宛由緒をのべ、旧来通り御香御用を勧めたき旨願書提出。

慶応四年九月七日 川船方から、王政御一新に付、佃島も定法通り川船年貢銀を納める旨通達あり。

慶応四年九月十七日 佃島漁師惣代から東京府裁判所宛に由緒書を述べ、旧幕時代通り御堀水御門番・近海御用・納魚代納銀納入等を勤めたき歎願書を提出。

明治元年十一月十九日 佃島漁師惣代から、東京府裁判所宛、名産白魚と小肴献上方を願ひ出る。

明治二年三月十一日 名主廃止、中年寄・添年寄を置く、府下五十組に分けられる。

明治二年十一月 東京府下を六大区に分け、大区を各十六小区に区画、佃島は近隣諸町共に第三大区五小区に属す。

明治二年 佃島人別帳成る。十一月現在の戸数二五二軒、人口一、四二二人(男八一、女六一〇)。

以上江戸時代の佃島漁民が、既存漁村民達と較べて如何に特異な位置にあつたか窺え知れる。

それは平行して魚河岸の成立を見なければ理解できないこと、後述「佃つれづれ一齣り」中で、「佃島漁民と魚河岸の成立」に期待されたい。

明治になって佃島漁民達が、新政府へ如何に対処していったか、幕府という後盾がなくなる以上、近代を如何に展開していったか見ることにする。明治二年人別帳が出来て、佃島住民の詳細が鮮明になった。従つてこの調書が基本となつて、近代曙の

日本へと前進して行くのである。幸いにも、その資料の一部が古文書として残存されている。

(古文書) 明治二年佃島戸籍下書

本文献は中央区立京橋図書館所蔵で、佃島人別帳作成の折、当時佃島町年寄の手により調べた下書である(明治二年)。

佃島人口 一、四二二名

(内訳) 男 八一一名
女 六一〇名

含 (他町からの奉公人 一六名)
(他所よりの来在者 一八名)

戸数 二五二戸

(内訳) 地主 八戸
借地借家 二〇八戸

借家 三六戸(店借に同じ)

婚姻 佃島内結婚 九八(全体の五〇%)
島外からの通婚圏、現在の中央区地内一六、神田、四谷九、本郷四、浅草三、深川、芝、足立郡等各一、葛飾郡一七

(漁業関係)、他県一七(遠方は越後)
(注) 通婚圏が想像以上広範囲である。

職業 漁師一五九(全体の六三%)

棒天振二六、小肴商一九、時の物商(季節もの売)四、鍛冶職四、炭渡世四、船乗渡世四、賃仕事三、酒渡世二、小

肴問屋二、舂米渡世三、碓鍛冶、髪結職、餅渡世、桶職、附舟渡世、野菜附舟、簀渡世、手習師匠、大工等各一

姓 名(平民が苗字公許は、明治三年九月からであるため、通称屋号で呼ぶ)

佃屋 四五戸 (全体の一六%)

国名地名を付した屋号 伊勢屋一六戸、下総屋二二戸、但馬屋一一戸、上総屋八戸、神戸屋六戸、新宮屋、津国屋、三浦屋、大島屋、大阪屋各三戸、以下二乃至一となる。

職業種目名の屋号 岩屋三戸、海苔屋、水屋、富屋等各二戸、碓屋、銅子屋、八百屋、団子屋、豆屋、釘屋、升屋、大黒屋、納屋、玉屋、竹屋、万屋、丸屋、榭屋等各一戸

苗字を屋号とした 金子屋二二戸、小沢屋一八戸、田中屋一〇戸、山田屋、高瀬屋、桜木屋等各三戸、小林屋、稲村屋、福田屋、細川屋、古島屋、高橋屋、伊藤屋、新屋等各二戸、平岡屋、岡田屋、福本屋、山崎屋、森田屋、山和屋、西村屋、飯田屋、古屋、太田屋、野田屋、川口屋、伊東屋等各一戸

(注) 国名地名中、下総屋は多いが安房はなく、伊豆、鹿島はある。業種名で水屋とあるのは、対岸から飲料水を運び各戸へ売る商売で生活に重要な職業であった。又職業欄と比較して屋号と合致しないのは、かつてその職をしていたことを物語っている。苗字名でも今日残存しているのは、金子、小沢、田中、桜木、小林、細川、高橋、平岡、伊東、飯田等が目立っている。

不動産関係

佃島居住者で土地を持つ者 宇右衛門四七十坪、善右衛門

三百六十五坪、住吉神社神主平岡百五六坪、他は百坪以下(含女性四人)

佃島外での土地持者 深川大島町地主町人 孫兵衛三百一坪余

借地人の借用面積平均 一〇・二坪

(注) 佃島で土地所有した地主町人は、寛政年代が最も古いとされている。正保二年には平岡屋が一番地、慶安二年になると一番地に小沢屋となっている。番地をどの様に付されたか解らないが、明治九年東京府朱印内全地図を見ると、一番地は渡船場の突端で最も重要な場所、その北が二番地、三番地が住吉社地となっている。寛文年代に高瀬屋が三十八番地之、合せて碓屋も同番地に記され、これも同地図によれば佃小橋を渡った向町南端傍に当る。島内に宝永年代の屋敷活券図持参する者あると云われ、照合して検討可能ならば江戸時代の一端を窺い知ることが出来る。

(二) 佃島の記録(明治時代以後)

明治三年二月九日 民部省、府内海岸測量始める。

明治三年八月 家主制度廢止、佃島渡船營業權が平岡、佃、柳三氏に移る。

明治四年四月 戸籍法公布。

明治四年 仏人ラトラレジワレーの佃島漁師由次郎砲殺事件おきる。

明治五年六月 町名改正が行われ石川島は佃島に合併。

明治七年 「東京府誌料」に、佃島戸数二四五戸、人口一、二九九人(内 男七三四人、女五六五人)。

明治八年二月 太政官第二三号布告により、海面はすべて官有となり、その借用は地方官庁へ届け出ることになる。

明治八年二月 佃島町四に、山口鉄工場創立（西洋錨製造業）。

明治八年 佃島に山田小学校（代用小学校）開校。

明治九年二月二十九日 各大区の区扱所廃止、区務所が設置される。

明治九年 佃・神戸・平岡三氏東京府知事宛、東湊町に渡船場設立願提出。

明治九年七月二十三日 佃島総代森幸右衛門東京府知事に「西本願寺再交付之地所に付答申書」提出。

明治九年八月 佃・神戸・平岡三氏、東京府へ「佃島渡船賃錢揭示札下渡願」提出、この時の渡し賃、男女一人五厘、荷物二人持壹個壹錢。

明治九年十二月二十一日 浦役所及び浦役人新設。

明治十年一月二十一日 区役所を以て浦役所に代用。

明治十年一月 太政官布告第二三号に基づき、佃島で白魚漁業中の海面拝借を出願。

明治十一年十一月二日 大区制廃止し十五区制実施、日本橋、京橋区誕生。

明治十一年十一月四日 区役所開庁初めて行政庁として発足。

明治十二年一月十七日 佃島島民府知事に実状を訴え、大川・中川・上総藩三ヶ所朱引内に限り、本年から五ヶ年、毎年二月から四月まで三ヶ月間、白魚漁場と定められたいとの請願書提出。

明治十三年 霊岸島辺の漁師、佃島白魚専用漁場廃止を請願。

明治十四年一月 佃島旧幕時代の白魚献上の慣例を復活、宮内省へ白魚献上のこと始める。

明治十四年三月 佃島警察庁巡查本部に宛、警察出張所の設置

を願ひ出る。

明治十五年三月二十日 東京府知事から警視総監宛、佃島漁民の白魚場に対する妨害行為取締り方依頼。

明治十五年六月 佃島から越中島へ渡る渡航新設の計画進められる。

明治十六年九月十四日 佃島が京橋警察署所轄から水上警察署管轄に移る。

明治十七年 佃島漁民の白魚漁場専用免許向う五ヶ年延長許可となる。

明治十七年 佃島漁戸一〇二戸、人口三五九人、漁船総数三四七隻（内網船二三三隻、釣舟一一四隻）。

明治二十年 佃島渡船について訴訟起り、十月二十日築地治安庁で、平岡平右衛門が渡船の慣行について陳述を行う。

明治二十年 東京湾浚渫作業と併行して、月島築造工事始まる。

明治二十一年四月十五日 市制及び町村制公布。

明治二十一年十月一日 佃島四十二番地、佃島小学校開校。木造平家建、尋常科四学級一六人収容。

明治二十三年 新佃島埋立工事着工。

明治二十四年 佃島漁戸一一三戸、漁船一六七艘。

明治二十五年七月 東京市会、佃島地先埋立地に月島と命名すること決議。

明治二十五年十二月 月島一号地（面積一〇九、五八三坪）の町名決まる。

明治二十六年五月 佃橋架設。

明治二十六年 佃島小学校、西仲通り一―四に移転。

明治二十六年七月九日 月島一号地埋立完成により、住吉神社で地鎮祭を執行。

明治二十七年十月十七日 月島二号地完成町名を立てる（面積

八四、一〇〇坪。

明治二十九年九月 新佃島（面積二六、三三三坪）完成町名を立てる。

明治三十三年 通一丁目から新佃島に至る小橋が架る。

明治三十六年三月 相生橋架設成る。

明治三十九年一月八日 月島通り三一九に月島小学校開校、佃島小学校一時廃校。

明治四十年 有志者の醸金で、西仲通り一丁目新佃島西町間の

新月橋架る。

明治四十一年一月二十日 月島通り四一十に築地警察署月島分署設置。

明治四十一年一月 佃島小学校旧校舎を月島尋常小学校分校場とする。

大正二年二月 月島三号地理立完成、面積四九、三三三坪。

大正三年二月二十三日 月島有志「新月橋」を東京市に献納。

大正六年 通り七一―月島消防出張所設置。

大正八年八月 相生橋の改築工事が竣工。

大正十年 月島四一十 月島警察署竣工。

大正十二年七月十四日 門前仲町から月島へ市電折返し運転開始。

大正十二年九月 一日午前十一時五十八分関東地方大地震起る。

東京市内一三四ヶ所より出火、翌日にかけて市内灰盡に帰す。

当地区佃島・石川島の一部と稲垣氏家、渡辺倉庫一部を残し全島焼失する。

大正十三年八月 相生橋の再架工事始まる。

大正十五年四月二十二日 相生橋完成、盛大な開通式を行う。

昭和二年三月三十一日 東京市、佃島渡船場の諸施設を完成、

無料の曳船渡船を開始「佃島渡船」の由来を誌した石標立つ。

昭和六年四月 月島四号地晴海地区完成、面積二三〇、〇六八坪。

昭和六年九月十八日 満州事変勃発。

昭和六年 築地本願寺の墓所杉並区和田堀に移転。

昭和七年一月二十八日 上海事件おきる。

昭和七年二月 佃島有志、本願寺和田堀廟所に「佃島祖先由来之碑」を建立。

昭和八年六月 勝鬨橋、架橋基礎工事始まる。

昭和八年 月島地区要保護世帯 二、六六二戸。

昭和八年十二月十三日 築地中央卸売市場竣工。盛大な竣工式を行う。

昭和九年二月十日 三井倉庫東京支店で、佃島五十番地に政府米収蔵の急設倉庫二棟（二、五一四）建設。

昭和十年十月一日 国勢調査実施、月島地区人口三七、〇五〇名。

昭和十年十月十一日 築地中央卸売市場操業始。

昭和十年 築地西本願寺伽藍落成。

昭和十二年 当地区機械工場は、平和産業から軍需工場に転換十五人以上工員使用工場六二工場を数える。

昭和十二年七月十五日 四号埋立地（晴海）に町名起立、六ヶ町となる。

昭和十四年九月三日 第二次世界大戦勃発。

昭和十五年四月二十日 支那事変勃発以来、月島出身者戦没する者四〇余名、帝国在郷軍人会京橋区第九分会主催、月島第一小学校で慰霊祭執行。

昭和十五年六月十五日 勝鬨橋完成盛大に渡り初式執行、月島

地区の立地条件、一躍して都心並となる。又同日、渋谷から月島系統の乗合自動車開通。

昭和十六年四月一日 鮮魚介配給統制規則公布。

昭和十七年十月 京橋消防署築地出張所内水上出張所独立、西

河岸通り十二―八水上消防署設立。

昭和十七年 月島小学校内に高射砲部隊第四防空連隊設置。

昭和十九年五月一日 都バス門前仲町―月島八丁目間開通。

昭和十九年十一月二十四日 B 29東京を初空襲。

昭和二十年一月十一日 B 29一機東京に侵入、石川島造船所目

標に油脂焼夷弾およそ七〇個投下。

昭和二十年二月九日 B 29爆撃により月島通り一丁目に焼失地

域若干生ず。

昭和二十年二月十九日 晴海町二丁目、月島第二国民学校脇そ

の他数ヶ所に焼夷弾落下、空襲この頃から激烈度加わる。

昭和二十年三月九日 米空軍東京大空襲、数万の焼夷弾を投下、

浅草、本所、深川地区を灰燼に帰し、九万名にのぼる死者を

出した。

昭和二十年八月十五日 日本無条件降伏、「終戦の詔書」発表。

終戦。

* * *

昭和二十二年十月二十四日 勝鬨橋の都電渡り初め行われる。

昭和二十四年二月 水産業協同組合法施行。

昭和二十四年 佃島漁業協同組合、佃浜漁業組合誕生。

昭和二十六年九月二十六日 新漁業法に基く各種漁業権が佃島

漁業協同組合に免許される。

昭和二十七年二月十二日 晴海埠頭建設対策特別委員会発足。

昭和二十七年二月二十一日 都の事業として晴海埠頭建設工事

はじまる。

昭和二十八年十月二日 日比谷公会堂で郷土芸能大会に佃島盆

踊出演。

昭和二十九年六月三日 日本橋魚河岸記念碑除幕式。

昭和三十年三月十七日 晴海埠頭開業式挙行。

昭和三十年十月一日 十八日まで晴海に於て中国見本市開催結

果、恒久的国際見本市施設として建設することになる。

昭和三十年十二月十日 晴海埠頭国際見本市第二会場地鎮祭執

行。

昭和三十一年十一月八日 南極観測船「宗谷」晴海埠頭出港壯

途に上る。

昭和三十三年五月五日 十九日まで第二回国際見本市第二会場

が晴海町特設会場で開催、(公開日の一日平均入場者十三万

五千人を超す、外人バイヤーより苦情続出)。

昭和三十七年 東京都三十七年度追加予算として、佃大橋の橋

梁費五億一千万円、事業費三億円を計上、都議会通過。

昭和三十七年十一月十日 石川島播磨重工業(株)佃新橋架橋工事

を受託。

昭和三十七年 月島地区防潮堤工事着工。

昭和三十七年十二月 去る三十一年「首都圏整備法」が公布さ

れ、大東京港の完成や防災施設及び高速道路の建設・設備は、

海面の埋立・浚渫の計画を促し、江戸川から羽田沖に至る海

岸線の居住する長き伝統をもつ漁民、十七漁業協同組合四千

世帯に対し、昭和三十四年「東京港拡大用地のため」漁業権

の放棄とその補償案が提示されたが、問題は補償額とその配

分問題で都と漁民の折衝は三年に渡り交渉が続き此処に妥結、

一世帯当り平均八百万円で漁業権は放棄したのである。従っ

て佃島を始め東京の海岸から漁民の姿が消えたのである。

昭和三十八年四月一日 月島十二丁目地区埋立地、豊海町と命

名される。

昭和三十九年五月三十一日 佃島と晴海の間に佃水門完成。

昭和三十九年八月二十七日 佃大橋完成、盛大な渡り初め式を行う。橋の開通と共に、佃の渡しは姿を消した。

昭和三十九年十二月一日 佃島を除く月島地区住居表示変更案議決。

昭和三十九年 大橋完成に伴う佃島漁業組合と漁業権保証問題が起る。

昭和四十九年 石川島播磨重工業(株)工場一部横浜移転。

昭和五十四年六月 同社一部事務所残り移転。

昭和五十四年十月 同社より跡地日本住宅公団取得。

昭和五十五年一月 同社より跡地三井不動産取得。

昭和六十一年四月十四日 大川端リバーシティ21起工式。

昭和六十一年 佃小・中学校建設のため替地 佃二丁目五番地に石川島播磨重工業(株)会社一号館事務所移転。

昭和六十三年六月八日 営団地下鉄有楽町線開通。

平成元年 リバーシティ21マンション完成と共に佃一丁目町会編入。

平成二年 佃小中学校新校舎開校。

平成三年一月二十五日 イタリア・ベネチアにて第二回水都国際会議開催、「水の都」ベニス賞がベニス市長より佃島に贈られる。

平成五年八月二十六日 「中央大橋」斜張橋が対岸新川と佃島が開通。

明治二年人口、一、四二一名の佃島島民が御維新後、漁業再生を如何に対処するか、幕府の庇護が解かれ独立独歩する姿が今日まで展開され、その間二回もの大災害と戦禍から逃れ、都心の袋小路の小さな町の位置にありながら、環境の激しい変化にも堪え、先ず生業なりわいの漁業が廃され周囲の近代化にもめげず、

僅かながらも江戸伝承の文化を守り続けたことは、本項記録が物語っている。

ビルの谷間で、古いまとまりを見せた町、佃島は、世界からも認められたのである。

佃島物語は「佃の文化」本心に触れるのである。

四、佃島の街中

——祭りと盆——

名月や ここ住吉の つくだじま

其角

昔から佃島は、江戸名所遊山地の一つとして江戸庶民から親しまれ、多くの文人墨客で股賑を極め、文芸や絵画のモチーフにされてきたが、それもこれも江戸の動脈隅田川、一名大川河口唯一の孤島であり、大江戸の昔より交通上や文化の発達史に大きな役割も果たしてきた。江戸中期頃からは、遊覧船が浮び、白魚旗で四つ手網の景観は、江戸前になくはならぬ風物でもあった。御維新後も、川岸は荻萩がおい茂り、朝霞や夕暮の霞は、一幅の絵画でもあった。

文明開化は、野暮なもので、明治十六年十月に東京川筋の名称を決定し、大正十年三月五日東京市内外河川航通調査では、浅草区橋場町地先今の桜橋附近から、京橋区（中央区）浜離宮地区まで、延長四、九五一間を荒川と云い、京橋区石川島地区より新佃島東町二丁目まで、延長四六三・二間今の相生橋側を荒川派流と呼ぶのである。その頃は一銭蒸気や大型汽船も通い、夏ともなれば川岸に葦簀ばりの日除けが架けられ涼をとる風物が見られたが、石川島と月島に煙突が立ち並ぶ頃から、水の流れも濁り始め、隅田川の趣も変ってきたのである。同時に佃島一孤島も界隈の開発は進み、新佃島東西町、月島・勝鬨・晴海・豊海各町と今日の発展をみた。

何か佃島だけがアッと云う間に取り残された感があった。

昭和三十年代になると戦後の落ち着きからか、文化財が世上

の話題となり、町ぐるみの保存運動が此処彼処に叫ばれ、東京では常に佃島が指摘されていた。

「佃島は古風・現東京最古風の土地であるが、単に「古風」と云い過ぎるより、何々保存にとまではいけないにしても、その現在あるうちに、心ある一殊に若い一人たちの、見ておくことを、すすめたいものである。路地・へっつい・引窓・しのび返し・水がめ・れんじ窓・明り障子・神棚・荒神様……これらが生きて使われている、現代唯一の土地」と画家木村莊八は、昭和三十三年十一月「東京繁昌記」に述べている。氏は明治末年新佃島東町「海水館」に下宿して、若い頃から佃を愛していた一人である。

昭和四十九年から始まった中央区文化財調査で、佃島を点で残すか面で残すか考えていたが、山口県萩や津和野、岡山県の倉敷、長野県木曾街道、秋田県角館等「面」即ち町としての保存は、住民にとって不便でもあり莫大な費用もかかる、せめて「点」即ち「家」ならばと考えても、見学の体験された方なら了解出来ると思うが、文化財指定された家は家庭生活の中へ、他人が踏込んで来るから迷惑である。況してその家だけが、文化的生活を暮せない恐れもある。

従って、点も面も文化財の指定は、なるべく避けるに敷くわないと考えるならば不可能となる。そうこうしている内に佃島の町中は、一軒一軒近代建築に建て替えられていったのは、時代の要求で当然と云わなければならない。従って「旧跡 佃島漁村」とでも名称を付けるにしくはない。

寛永二十一年（正保元年）二月一日、石川島南側干潟に百間四方の築島普請を完成し、佃島と命名、地割役に名主忠兵衛が申告して、正式に武州豊島郡に属したが、町としての形態は慶

安二年一月、漁民の連印証文を作製し、江戸市中の格法に基いて町儀作法を定めたのは築島五年目であった。恐らくその折島を東西に走る道筋を作り、北側を上町、南側を下町としたのである。道筋は島の中心を十文字に割り出したものの、江戸時代特有の中心部を鍵手に縄張りし、道路の直線視野を避けてあるのは防備からくる町の配置法である。然し生業上天候に備えて船の安全舫い場を考えた時、石川島と佃島の堀だけでは狭くまた危険でもある。従って向島の埋立の必要が起り、記録上寛文年間には既に高瀬家や碇屋の家屋が、佃小橋を渡り向島南端に記されてある処から、正保元年から十五年後には埋立を完了し、向島と町名を立てたと考えられる。従って幕末に石川島灯台が出来るが、隅田川より石川島と佃島間の堀、正しくは佃川支川と呼ばれ、住吉神社裏を右に流れて佃川、現在の佃大橋東詰下まで、延長二〇一・九米、川巾最広で一七・一米、最狭で四・四米、平均九米の小船の避難所が出来たのである。更に百五十年後、文化五年佃島東方沼地を埋立て網干場を作った。従って新佃島埋立工事が明治二十三年から始まったが、それ迄は、現在私が住んでいる佃三丁目四・五・十一番辺りが、旧佃島であった。それは平成二年隣家栗原ビル建設の折、地下五―六米から杉材の杭が並び、生簀と考えられる材木が採掘されたからである。此の辺は関東大震災までは平家でありその際灰盡になり、後再び平家長屋が私の家位置から石川島播磨病院前の道に添って建てられ、昭和十年後裏側に二階家長屋が建てられていたので、埋没材は江戸時代のものである。

昭和五十年一月営団地下鉄半蔵門線建設工事中、日本橋一―二今の日本橋北側東袂と真向いの駿河銀行間の道路下から、江戸時代の神田上水の木樋と埋樹が発掘された。発掘物は現在中央区築地社会教育会館資料室に保管されているが、当時発見の

知らせて現場へ急行鑑定した際、寛政二年に付設されたこの地中に埋めた埋樹(深さ約一・七米、横一・二六米、奥行一・三二米、厚さ十糎、巾三〇―三五糎、桧材)の口が二つあり、江戸橋方面口は蓋で閉ざされ、魚河岸方面口に木樋が付されていた。神田川岸の下に当る処が魚河岸の営業場であろう。生簀跡が同時発掘され、木樋が生簀に接続されていたので淡水魚の生簀と考えられる。残念乍ら発掘の際形態を既に工事人が半分以上破壊してしまっていたので、その資材保管は断念したが、隣家工事場からも同様なものが発掘されたのである。明治十九年版内務省地理局写の「明治初年の石川島と佃島」地図を見ると、その頃までの佃島の面積が了解される。

月島地区の地図をみると、碁盤の目のように縦横整然と町の区切りの道路が巾広く造られている。計画時の東京市長が大風呂敷で有名な後藤新平であったから、昭和通り同様人工島であれば、外国に匹敵する街造りを構想されたこと云う。

新佃島は、関東大震災後すぐ建てられた家々は平家で、昭和に入ってから二階家が佃大通りを占める様になった。大通りを西に行くと、右側の丸機械(現住友マンション)ビル角から戦前は、少し耳の遠くなったお婆さんが店番をしていた高瀬のタバコ屋で、先に続いて隣が豆腐屋や長唄師匠の看板がある家など五軒位の家並で、向い側は高瀬の親戚の寿し屋を角に自転車屋など四―五軒並んでいた。丁字路から西が佃島(一丁目)である。左に折れ米屋の角を右に三間巾の路を曲がると、佃小橋が見えてくる。此処からが、江戸時代から続く佃島の街中に入るのである。

佃小橋の右角一軒手前隣に、小さな蔵の暗い店で、靴の踵を直している小柄な靴屋さんがあり、この家族をモデルに徳田秋声の小説をものにしてている。左角にはピリヤードがあり、朝か

ら遊びやの若衆達が打興じ、昭和の初めはのんびりしていた。橋の右袂には今も公衆便所があるが、大世帯の家は便所が一区なので、殊に朝は近所の人達がまるで自分の家の便所であるかのように賑わっていた。

この佃小橋より東側を向町と云い、東町とも呼んでいた。

佃小橋は、二十八番地と対岸四十三番地間の佃川支川に架け替えられ、長さ七・三六米、巾三・一四米、明治十二年四月二日開通された。同橋について、木村莊八（東京繁昌記）は、「最近、昭和三十一年八月六日、佃島へ行くと……中略……木製の風情床しかった佃小橋は、あたりを都内並みに掘りくり返して、かけ替え工事のさなかだった。すでにその小橋はなかった。というのが、やがて新しくこんどかけ替わる時には、木の橋は架かるまい。今風のものに変わるだろうということである。

佃島には「繁昌記」のためにも行ったが、その前年昭和二十九年にも行った。それはブリヂストン美術館で作る鏗木清方先生の記録映画に、材料を採るため、先生は対岸の築地こそゆかりの土地であっても、すでにそこには「材料」はないので、それで文字通り川岸を代えて、この佃へと行ったものだった。その主たる目的が、佃小橋を撮影するためだった。

東京広しといえど、すでに、水流の上に橋が渡って、その木の欄干の影が水中にたゆたい映る、いわんやその橋の上を蛇の目の女姿が通る——などという「清方えがく」風景を見ることの出来るところは、偏したりといえど、佃島の佃小橋へ行って見る他には、その時もう「手」がなかった。

——ところがそれが意外にも「昭和三十一年八月まで」の風景と（その時限りこの土地に影絶えてしまった）、はっきり日附を切って、こういえるようになるうとは！

何も、橋は木を以って架けよ、と、アナクロニズムを申出る

わけではない。既に東京には、木の橋が、——そこを汐の香のする川風が渡り、橋下からはすくすくと舟棹や網の先が覗き、川岸にはぼっくいで架けた、船虫のいるさんばしが並ぶという「旧東京」の風景は、今日只今、絶滅したということを一筆はつきり書いておく、この一節のイミである。」と述懐している。

下駄の音をたてながら木の佃小橋を渡ると、左橋袂に交番がある。明治十四年三月佃島警察庁巡査本部宛に、警察出張所設置願いを申し出て付設されたもので、朝から晩まで渡船で往き交う人々を監視するのか、制服にサーベルを佩した巡査が目を光らして立っている。

三間巾の狭い佃中央通りを大川に向かって進むと、右角に「もんじゃ屋」があつて、何時も女の子の遊び場でもあった。斜向いには落語に出てきそうな髪床（理髪店）が、もの悲しそうに鈴ん棒の看板をクルクル廻し客を待つ。道の両側から軒が低く迫る家並が続き、まるで江戸時代の下町を往く思いで歩いたものだ。殆んどが築地魚河岸勤めが多く、夕刻になると盤台を洗っている行商の家もあった。

丁度町の真中に行き当った処には、立教大学の久保田正次先生宅の潜り戸があり、右側蔵の中で何時も本に埋まって執筆されている先生の姿を思い出す。正にこれが、蔵書なのであろう。

先生は少年時代「佃酒店」に奉公し、働きながら勉学に励まれる姿をみて、子供のいない主人は、築地の立教中学から大学へと教育を受けさせた。従って酒店は、後輩の大塚氏が継いで今日に至っている。昭和二十年先生宅から渡船場までの家側は、強制疎開で立ち退かされ、先生御家族も池袋・立教大学裏に移転し、運悪くその日の空襲で馬車荷車に品物を乗せたまま、家財道具も蔵書もすべて戦禍で失われ、お気の毒であった。早速食料・衣類等をお送りしお慰めしたが、戦後御存命中は屢々私

の練馬区大泉学園宅にも遊びに来られもした。後先生の御次男が「佃」姓を継がれ、立教大学総長になられたのである。

十字路を南に久保田先生宅から三軒目位に「桜井家」があり、昭和五十年調査の折も明治三年「住吉神社本殿再建」と同じく、初年建築と伝えられている。御主人は太って鬚髪を生やし、恵美須様のような方で、十一代に亙り魚問屋を営まれ町の中心的存在の人であった。従って先代御主人の建築で、佃島民家では最古の住居であるから、当時の形式を多く留めていた。

残念ながら昭和五十九年に取壊し新築されたので、調査当時の資料から当時の様相を想像されたい。

(建造物資料) 桜井家

一階は間口二軒半、奥行五間の店構えて二室に分かれ、表戸を開けると半分土間で井戸があり、そのための流しと真上の天井に釣瓶跡が付き、井戸の左側には魚問屋の時使用した「生簀」二ヶが、板で被われ板の間として利用し、別に台所用流しが左側にあり、これを「表台所」と云う。台所であるから煙抜きのため、屋根の一部に開閉式「引窓」と、そのための紐が付されていた。右側上り板の間から続く、四畳の広さの「おかって」板の間奥に、「店」と呼ぶ八畳間で二軒の戸棚の付された部屋がある。従って昔は此の間が、事務所兼土間での客との駈け引を行った店であった。桜井家は、佃島家屋中では広い建物に属し、中庭を持ち三間半の長い渡り廊下に続いて、昔「釣り床」のあった奥の間七畳半、一間戸棚付の居間がある。

店の二階は、天井が張っていない六畳一間であった。

家の外観は、二間半間口の「人見梁」という差鴨居に、一、二階共軒が出桁造りで、二階は一階より半間奥にさがり、高さ

は半二階と云うか、漁村の海辺・川辺にみられる風除けのためか低い。佃島の漁民宅は、いづれも小住宅であるから「表勝手」造りが大部分で、桜井家こそ江戸末期から明治への典型的佃島民宅代表の建物であった。

現在は見られないのが残念であるが、「桜井家」の南四軒隣には幸いにも同形式を持つ「飯田家」が現存している。

(建造物) 飯田家

一棟

本建造物は、大正九年の建築で魚問屋営業併用住宅であり、昭和になり二間増築されている。

間口三間半、奥行四間半の広さで、間取は一階表土間の隣合せに玄関を置き、玄関に続いて六畳間更に奥へ六畳間、「店」には表土間中央稍々右に現在も使用中のポンプ式井戸と流しがあり、「表台所」が現存している。現在は、台所が後部に設置してある。表「上り板の間」の板を開けると、「生簀」が下に付設されており通常は板を閉じ間として使用、そこから奥四畳半位の板の間を上り、右手に二階への階段がある。

二階表側に、床の間と筋違い棚付き八畳間の客間に、六畳の続き間座敷があり、廊下を隔てて且つて四畳半女中部屋として使用していた居間がある。上・下階共戸棚が可能な限り設置されているので、恐らく客の出入が多かったことを物語っている。

外観は佃島には珍しく、二階軒が出桁造りで、一階は庇となり、上下階を通して化粧材にて板張りされている。明治以降の特徴か、表台所と玄関を並存させたのは住居形式の変化を表わし、更に外観上の形態も「東京」と呼ばれて以来、都市住居の発展上参考とすべき建造物である。佃での町並散策の折には、是非「表台所」を持ち明治建築法を取り入れた江戸建築折衷の

「飯田家」を一見されることをお進めする。

佃島は漁村であるから、海辺特有の風除けのために軒が低い。下町には漁師宅も多かったが、昭和四十年初めまでは未だそれらしき家屋も見られたが、佃大橋や地下鉄有楽町線等交通の発達、又江戸下町見学のためかハトバスその他観光バス等の頻繁な出入等の影響で、日々人々の訪れが多い。人情経済が許せば、少しでも美観を考え改築するのは人間の常である。何時の間にやら、漁業を思わせる家々が見当らなくなった。江東区白河町の「江戸資料館」には、深川蛤町の漁民家実物大が展示されているので、参考にされると良い。

さて、道を元に戻って久保田先生宅西隣、つまり大川に向けて進む通りの先隣に、戦前は酒店があった。現在は向い側角の山本菓子店隣へ、酒店は移っている。

渡船場に近づくると左側に「佃仙・佃茂」と二軒の佃煮屋が並び、その日の最終船時間まで店を開き、客には大変便利であった。もう目の前には、「佃渡船」の碑があり、客待ちの船が波に揺られ上下しているのが見える。これが戦前「佃の渡し」に行く道であった。

昭和三十八年三月「全国社会教育大会」が北海道旭川で行われた際、東京代表で出席した私は、佃島について特に「佃の渡し」の質問を受け、真逆こんな最果てで話題になるとは思わなかった。その頃友人を渡船場まで送ると、初めての友人は必ず墓口を出して、「乗船券は、何処で買うの」と聞かれたものだ。無賃であるのが余程珍しかったのである。

(旧跡) 佃島渡船の碑

子供の頃から何時も目にしてきた「佃島渡船の碑」が、今は佃島児童遊園の片隅と、湊町佃大橋の歩道階段口に、高さ九八糎、巾七四糎、奥行五八糎の駒型柱自然石がしょんぼり立っている。

表面には「佃島渡船」と彫られ、裏面に「佃島渡船は、正保二年の頃島民交互の手漕渡船に、その端を発し幾多の変遷を経て、大正十五年三月十日東京市の経営に移し、昭和二年三月末日諸施設の完成と共に曳船渡船を開始せり・東京市」と記されている。

江戸時代を通じて江戸へ行く渡しであり、住民には欠くことの出来ない交通機関であるが、長い歴史の中でも明和六年三月四日渡船が転覆し、死者三十余人を出す事件があった。翌年五月十一日に関係者十八ヶ町の者が召出され判決が下っている。

「船頭長十郎遠島、名主忠兵衛押込、月行事彦四郎、組頭太兵衛、善四郎、仁兵衛、家主宇右衛門へ拾貫文宛過料、外町はお構へ無之旨被申渡」と。恐らく此の事件が素材となつて、落語人情話「佃まつり」が出来上がったのであろう。

明治元年十二月十一日、築地寄留地が出来たため、本湊町から佃島へ渡る渡船場と寄場渡船場は、稲荷橋(八丁堀川口)際へつけ替となった。寄場渡船場は、対岸今の湊町児童遊園で「石川島の渡し」と呼ばれ、人足寄場へ行く囚人が、此処を最後に内地と離れた場所である。後石川島造船所の工員が渡る船場となるが、関東大震災前までこの鉄砲洲川口(現在川はない)に自然石で小島が造っており、船頭達は此の岩で汐の干満を知り「はがみ様」と呼んだ。現在は地藏堂が建っていて、元海草問屋が祠を祀り、今でもその堂を「齒神様」と呼び齒痛治しの信仰が続き、祠の前に塩が偶に上っている。

明治三年八月家主制度が廃止となり、佃島渡船営業権が、平岡・佃・柳の三氏に移るが、同九年新に佃・神戸・平岡三氏連名で東京府知事宛に東湊町渡船場設立願を提出し、八月「佃島渡船賃銭揭示札下渡願」を提出した。この時の渡し賃は、男女一人五厘、荷物二人持老老銭である。

明治十五年には佃島から江東区越中島へ渡る渡航新設の計画が進められ、私の父が通った佐賀町の私立東洋小学校へ、ボーイスカウトの教え子瓜生隆夫君の祖父が父の同級となり、この渡船で毎日通学していた。

又此の界限の渡し場をみると、隣の月島一号地（二〇九、五八三坪）が明治二十四年に完成したので、二十五年月島に居住した鈴木由三郎氏が十一月より、南飯田町から月島一号地に至る渡船を開始（実際は三月から有料手漕船で始めていた）「月島の渡し」と呼ぶ。しかし同三十四年三月東京市へ移管され、無料曳船となる。当時の模様が新報によると「月島の渡船は無料なるも、毎月住民の家賃に掛り居り、船頭は月給にて雇はるる故か、婦人など早く出してお呉れと頼みても、容易に出さず、何だ無料で渡してやるのにと云はぬ許り澄まして居るとこぼし居れり」と書かれている。十二月に入り市経営となると、汽船による曳船と変わるのである。なお明治三十九年に、隅田川汽船会社の月島から吾孺橋間十一銭均一の運転許可もおりている。その後明治四十四年より徹夜渡船を開始する程、月島工業の盛況（七九%工場であった）を推察出来る。

又明治二十七年に月島二号地（八四、一〇〇坪）が完成し、同三十八年一月日露戦争勝利を記念して「かちどきのわたし」が開設され、築地波除稲荷神社横の坂下渡船場から、手漕渡船により現在勝鬃橋下手日本鑄鉄会社専用渡船場までである。京橋区祝捷会京橋区同志会により、築地側橋畔に記念石柱が建て

てあり、東郷平八郎海軍元帥筆による渡し名が刻まれている。従って明治末年の佃島界限の渡し場は、

佃の渡し（船松町―佃島）料金五厘

石川島の渡し（新船松町―石川島造船所）

月島の渡し（明石町―月島西河岸四丁目）

勝鬃の渡し（南小田原町―月島西河岸八丁目）

の四ヶ所となった。

大正に入るや三年十一月に「かちどきの渡し」が汽船曳船に改まり、十三年七月一日には住民の陳情で夜間十二時まで延長するなど、次第にこの界限の人口が増加していくことを物語っている。

序でに述べると、隅田川口から上流両国橋間を、明治末まで次の渡しが存在していた。

大川口の渡し（越前堀二丁目―相川町）私設一銭

中洲の渡し（中洲―佐賀町）

佐賀町の渡し（蛸殻町三丁目―佐賀町）

清澄の渡し（浜町三丁目―清澄町）

安宅の渡し（浜町二丁目―安宅）

千歳の渡し（矢の倉―千歳町）

右、江戸から明治の隅田川模様的一端が窺え知れよう。

佃の渡しも明治九年八月以来、「五厘の渡し」と云われ親しまれて来たが、十六年大倉組の私人経営に移り、やはり手漕の有料渡船であったものの、運営上の問題か客とのいざこざか、明治二十年佃島渡船について訴訟が起り、十月二十日築地治安

庁で、平岡平右衛門が渡船の慣行について陳述を行っている。

大正十五年三月経営を東京市に移管し、昭和二年三月から汽船曳船渡船に改め無賃となった。

渡船利用者も著しく増加し、昭和三年十二月の一日平均数をみると、往復回数一六六回、車輛（リヤカー・大八車等）数二六二台、自転車数二、一八八台、通行人員一〇、一九九人であった。

昭和十八年東京都から京橋区へ移管され、昭和三十九年まで続くのであるが、戦後戦禍の災害が少ない当地の人口は増加し、利用者は益々多く、特に三十年七月一日から運航回数一日七〇往復に増発、十月には新曳船第十有明丸が就航するほどであった。翌三十一年度の一日平均作業状況は、往復六〇回、自転車数一、六〇〇台、通行人数二六、〇〇〇人、機関船三隻、客船一隻、救命艇一隻、浮台船三隻が配置され、毎日午前六時から午後十時まで運航している。従って、詩人木下幸太郎が愛して「渡し渡れば 佃島」といったあの明治末の面影は、到底窺え知ることは出来ない。

この渡船場も江戸ッ子から東京人まで親しまれ、昔から数々の劇や物語の舞台に、また画題になったものであるが、昭和三十九年八月二十七日「佃大橋」の完成と共に昔話となったのである。

同じ児童遊園の片隅に、「佃の渡し」に關係する碑が建っている。

（記念碑）「佃の渡し」劇北条秀司の碑

平成三年八月 劇作家北条秀司の米寿を祝って建立された。

自然石に、

「雪降れば 佃は古き 江戸の島」

とあり、礎石には、「劇作家北条秀司は佃島が好きであった。新派俳優花柳章太郎も佃島が好きであった。二人はたえず連れ立って、佃島をあるき、大川の渡船をたのしんだ。その結晶として、「佃の渡し」の芝居作りを企画した。それが昭和三十二年十二月の新橋演舞場に脚光を浴び、劇団新派の財産を一つ殖やし、北条の代表作をまた一つ世に残すことになった。」と刻まれている。

北条氏が何故「佃の渡し」が好きになったのか、それは東京の次々に変わり行く変貌に対する慕情なのか、氏とそれに伴った花柳章太郎丈の「佃の渡し」に対する愛着を覗いてみよう。

『築地明石町大川端に、この所佃渡し場ありという碑が立っている。そのすぐそばに幽霊館みたいな三階建の古建物がある。いまは物置倉庫みたいになっているが、三十年前は船員相手の安ホテルだった。その最上階の和室がわたしの隠れ家だった。佃祭が近づくと大川を渡って、稽古囃子がきこえた。音から高名なお神輿の川入りもまっ正面だった。その部屋で、わたしは新派のための「佃の渡し」を書いた。窓の下が屋根つき舟着場で、小蒸気渡船が島を往復していた。明石町側の発着所から川上の永代橋や越中島がみえた。佃側からは川下の勝鬨橋やお浜離宮の森がみえた。夕焼けの雲の下をとり交う鴉をみていると、この索漠な東京にもまだこんな美しい絵が残されていたのかと、ゾクゾクした。とりわけ雪の日が好きだった。仕事に疲れても近くの銀座へは行かず、腰掛けのある船で佃島へ出かけた。テーマソングみたいな佃煮の匂いを嗅ぎ乍ら、住吉神社境内を抜け、佃小橋を渡って、ドサ芝居のかかる住吉亭の前を通り、海水館

に近い鳥辰の天ぶらで軽くビールをのみ、波除稲荷から網干場を通って発着所へ戻って来る。その好きな風色を採り入れて「佃の渡し」五場を構成した。たのしい製作だった。芝居の筋は、わりにおもしろく出来た。わたしは、佃に生れた二人の娘を描こうと思った。

漁師の家に育った姉娘は、玉の輿にのって料亭の女将になったが、妹娘はヤクザに染まって身を持ち崩し、佃煮問屋の嫁のある若旦那と邪恋に落ちて、島をとび出してしまった。そして無頼な同棲生活を楽しんだが、若旦那が罪を犯してプチ込まれることになったので、その罪をかぶって警察に自首して出た。それをシオに若旦那と切れたつもりだったが、警察を出た日、衝動的に島がみたくて、渡船にのり、人目を忍んで夜佃を徘徊している時、運命が若旦那と再会させてしまった。若旦那は、船持ちの嫁の実家から掣肘を受け乍らも、男として発憤を燃やしていたので、もう一度二人で暮らそうと、本気で云う。だがお咲は必死と心を叱ってそれを戒しめた。が、別れ際にフト耳にした、若旦那の嫁が妊娠しているという話が胸を突き刺し、せっかく抑圧した炎が又燃えさがあった。お咲はそれを消すために、島でたった一人だけのご晶屑である仙吉おじのおでん屋台に行ってみる。佃小橋の寂しい空地に車を止めている仙おじは、話をきいてお咲を褒め、新しい働き場所をたのんでやるため、船で房州まで同行してやることにする。だが仙おじが出前のおでんを届けに行った間に、運命は又若旦那の嫁の幸福な姿をお咲に見せてしまう。うれしげに腹の子の話をして行く嫁をみると、佃育ちの荒い気っ風がお咲を又才鬼にしてしまい、前後を忘れて嫁を突き殺してしまう。そして、吹雪になった大川へ身を投げてしまう。ザッとそういう筋だった。』

〔いまはなき佃の渡し〕演劇太平記北条秀司筆〕

(小唄)

雪ふれば 佃は古き 江戸の鳥
千鳥啼くよな あの笛は

今年限りの 渡し船

わしとお前は 今日限り

昭和三十九年夏「佃の渡し」消えるを惜しみ小唄「雪ふれば」を作詩され、作曲は三代目飯島ひろ子により披露された。また花柳章太郎丈は「佃の渡し」の終曲の中で、「やがて、私のために書き下されたのが「佃の渡し」三幕五場であり、北条さんの代表作であり、私は佃生れの漁師の姉妹、二役に扮して早変わりで勤めました。……(中略)……私の役のお咲が恋人の若妻を殺し泥酔して、土地の若い者と雪の渡船場で、この盆踊りをおどり乍ら大川に身を投げます。三ヶ月以上「みなと館」からその周辺の風物を見据えて、あの作と取組んだ作者の熱意はそのまま私への血となって降り、遂に、私の十種の一つに「佃の渡し」が残る訳となりました。この作品を忘れ得ず、私は小唄に作り、三舛のぶが作曲、歌舞伎座で宮城まり子が浅蜷売りに扮して小唄振りを演じたのです。

江戸の香の残る僅か佃島

渡し通いの恋の荷の

浅蜷の笊は軽けれど 春の朝しお 秋の汐

濡れいくしたる濡杭の

あと うたかたと消えてゆく

いまになくなる 佃の渡し

拙い歌詞であります、藤間勘十郎氏の振付けが物を云って相当評判になりました。

八月二十八日をもっていよいよ廃止となるこの渡しをなつかしく、日生劇場の役が済んで私は、最後に佃と、明石町の渡船場へ行き、暗い川面に、開橋を待つ佃橋の黒々と巨大な姿をうらめし気に見入ったのです。……(中略)……小唄の結びも、「いまは昔の渡し」と替えなければなりません。近く、私は「佃の渡し」の芝居をやり、せめても佃ぶことにしたいと北条さんと約束しました。河は暗く、やがて佃のほの暗い彼方からボンヤリと遅い月が浮いて来ました。』

平成四年十月演舞場夜の公演で水谷良重嬢がお咲役を上演、十二月五日文化庁から芸術祭賞を受賞、更に翌五年二月二十七日新聞に「平成四年度芸術選奨文部大臣賞・演劇部門新派」佃の渡し」他で、賞を得る」記事が報導され、佃を愛する北条秀司翁や故花柳章太郎丈は、共に喜んでおられることであろう。愛知県明治村に、「佃の渡し」が保存されているので、機会があれば一見されるのも良いと思う。

かもめ知る 人の往来渡し船

江戸の模様を 夢に止どめん

隅田川 万余の人を 渡し船

昔の姿 何処に求めん

武蔵野武人

時代は過ぎ「佃の渡し」を偲ばれる方が次第に少なくなつて

きたが、今も江戸時代をそのまま継承しているのは、佃島の年中行事である。

三年一度の「住吉神社大祭」は、佃島全体が江戸時代に戻り、島民挙げて訪れる人々を昔に誘うのである。また毎年行ふ「佃島盆踊り」もそのもの悲しい節の流れと盆唄に合せての振り付けは、遠い過去へと魂を導くのである。佃島を知るには、佃島の年中行事を紐解かなければならない。

(年中行事) 佃 祭 り

佃一丁目

お手元に江戸切絵図がありましたら、お開き下さい。

江戸前に浮かぶ石川島と佃島を扇の要として、北東から南西に江戸が展開されています。その故か大川を佃島から渡船で渡って行くことを、明治上旬に生れた老人達は、佃大橋が出来るまで江戸へ行くと云っていました。

家康入府以来各藩に課せられた築地は、またたくまに江戸城下町を形成しました。従って切絵図によれば、武家屋敷の面積に対して二割弱が町人の住居に当ります。その上家光の参勤交代制度は、嫌が上にも人口の増加を招き、元禄末にはフランス・パリー人口約六十万を超えて八十万に達していたことは、世界一の都市でありました。ところで、その人口が武士と町人がちょうど半々の構成のため、日頃から武士階級の圧迫に押さえられている町人達は、祭りによって爆発します。

江戸城を中心に、地内日枝神社(太田道灌築城の折川越日枝神社より分祀)、鬼門に当る神田明神、辰巳に位置する深川八幡を江戸の三大祭と云います。何れも京の祇園さんと同様、祭の主役は「山車」で、豪華絢爛また大きい程氏子の敬神の情がしのべれます。

祭の巡行の折には、如何に大名と雖ども祭の行列を横切ることは出来ません。従つてその時程町人達は胸を張って、ゆっくりと歩み行列が長ければ長いほど、「ザマーみろ」と溜引を下げたことでしょう。残念ながら関東大震災で殆ど「山車」が焼滅し、一部東京青梅市に東京都文化財として残存されています。灰盡に化した町中から「町御輿」が主流となつて復興しました。もう一つの原因は、電気の発達で東京の空が蜘蛛の巣のように電線を張りめぐらせられ、竹の棒で線を押し上げながらの山車巡行では、「ヤボ」に見えます。

第二次大戦の敗戦は「神も仏もあるものか」の風潮か、この神社も閑散としていました。その上占領軍司令部（GHQ）のお達しで、昭和二十年十二月十五日神道と国家の分離、同月三十一日学校での修身・地理教導の禁止、更に二十三年五月十三日人の集まりを禁止するなど、況して御輿を担ぐことは許可されませんでした。しかし新佃西町の岸床のおじさん（故岸田次男氏）は、祭り狂人ですから、子供達へ樽御輿を作つて祭気分を味合せてもらいました。これも江戸ツ子気質の、体制に対する反発の一つでしょう。従つて戦火に免かれた「町御輿」も、担ぎ手もないところから、地方に譲る町まで出ました。佃一丁目の「町御輿」も、浜町の町から贈られたものだそうです。

御輿と云えば昔は「宮御輿」が主で、氏子圈内巡行のため「神輿」の担ぎ手を、祭前日に浅草御門外に屯する「人非人」や「御薦さん」今で云う「ホームレス」の人々を集め、斎戒沐浴の上、白衣や冠帽を着用させ、静かに町の巡行に当らせました。彼等には終日馳走を振舞い、駄賃を与えるのですが、すべて神社に奉納された金子や物品で賄われました。祭は神の栄えと町人達の喜びの上にその感謝を貧しき人々にも分かち与えることなのです。

戦後深川八幡の復興の遅れか「東京三大祭」と名が代つて、浅草の三社祭、神田祭、赤坂の山王祭が盛んとなりました。平成三年深川八幡に、新聞を賑わした東京佐川宅急便寄贈による十億円総金箔造りダイヤ入りの千人神輿が、これに対抗していくことでしょう。「江戸から東京へ」祭を見ても栄枯盛衰悲喜交々を感じます。

その中であつて、江戸時代より一貫して変わらないのが「佃まつり」で、江戸を代表する庶民の祭だと信じています。今こそ「佃島の住吉神社」と云えば全国に有名となりましたが、百間四方の築島住民の寄進では、人を雇つてまでの「宮神輿」の巡行は考えられません。むしろ日常神の守護に対する感謝は、自分達の手で実行することこそ、当世風で云う民主的祭であつた訳です。（浅草の鳥越神社も昔から同様でありました。）その代り上町・下町・向町（東町）と各町に組があり、各組で造られた獅子頭が競い合う巡行は、他では見られない独特の祭です。安藤広重の絵にも、佃祭の二葉が描かれていることは御存知でしょう。

佃祭りが今日まで存続したのは、佃町民の組織が現在も一貫して維持され、その協同一致の努力が支えているのです。その様子は、祭りに関する文化財によって証明されます。

（古文書）佃島下町若衆大帳

一帖

佃一丁目在住の下町年寄鈴木勇雄翁「佃の移りゆく姿」の記で、『佃島上・下・東三町、四年毎に行われ、年番宮の御輿を一番初めにかつげるといふ順番があり、十二年に一度だけ宮前より一番初めに御輿をかつき出せる若衆には、晴れ姿を町娘にみせる最高の場面である。大祭年の六月初め、十八才になると

「若い衆」に強制的に入れられ、(若い衆・大若い衆・年寄・世話人の順に上っていく)一人酒一升、スルメ十枚持ち、居並ぶ末席より「今年から若い衆のお仲間に入れていただきます。どうぞよろしく。」の口上を述べ、入会が認められると、親の前で煙草・酒を飲むこと、すべて一人前と認められた。揃浴衣も色合いも別、大若衆・年寄共に別、また他町での御輿かつぎも出来ない。大祭一ヶ月より、囃子殿・竜虎の頭の飾り小屋・子供みこし小屋の設定、飾り付けが若い衆を先頭に年寄の指示で始まる。

幟は川より掘出し、水洗いし木部の組立と大柱を祭礼の前々日位に樹てる(のぼり各町内二ヶ所、他に小屋全部三ヶ町十五ヶ所組立てる)とある様に、祭を支えるのは何れの地域を見ても土地の若衆組織で、今では青年団がこれに当たっていますが、佃島では江戸時代よりそのまま若衆組織が現存しているのです。私は東京都教育委員会の依頼により昭和三十四年から四十三年にかけて、伊豆七島青年大会講師として毎夏招かれ、漁業・地場産業・家庭生活・文化活動等の研究を共にした経験から、昔の若衆宿が青年団と名を代え、村のすべてを青年達が支えている姿を見た時、佃島若衆組も恐らくそれと同様と思われます。ただ現在は漁業に関係ないため、祭り中心に活動していると考えられます。従って島で男子として出生した者すべて、若衆組に参加する訳です。

大帳(藤間陽一郎氏所有)は、美濃判縦帳袋綴になり、表紙に「大帳弘化四年六月」と筆太で書かれ、掟書が記載されています。

一、御公儀様御法度之儀者不及申、町法堅相守可申事

一、博奕諸勝負並喧嘩口論等一切致間敷事

一、川通船等江差構不申口論等決而致申間舗事

一、貝乗船参候節貫ニ出申間舗事

一、若者之内みたり之義無之様申合、平日共相互心懸可申候事

右之通一統相談之上此度相改候間、堅相守可申候、万一規定背候者有之候ハハ、無差構帳面相除可申事

弘化四年六月

庄 五郎

以下人名が列挙され、内半数くらいは印判を捺してあります。実は驚く勿かれこの大帳は現在も生きており、入会者の名が本祭の度に記入されるのです。この掟の条文は、現在の若衆にも尊重させる意味で、活版印刷を作り新入者に配布しているようです。これを、上町の若衆組定じやうじやうで見てください。

一、御公儀様御法度之儀申不及時々御触書等大切相守可申事

一、博奕諸勝負事きつと相慎申可事、並町内一統之規定相背申

間敷事

一、父母之教良守、不孝成儀きつと不仕、平日共万事柔和致可

事

一、諸親類勿論、隣家之者他人共何事不依争構敷儀一切相慎申

可事

一、家業向帳場先出入船等間違筋有之候共物事静相掛合不法之

儀一切致間敷候事、並家業之儀出精致相働申可候

右之通此度一統相談之上規定相決儀上何事不依相背候者有之候ハハ、右此帳面相除連外致付合等一切仕申間敷事

嘉永元申年六月吉日

上町 世話人

以上、上・下町若衆組掟を見るに当り、また今日まで若衆に尊重をさせていることは、佃島の共同意識が如何に高いものであるか窺えます。

そのためにこそ、あの五反の大幟の柱と棹組の保存が、大都會の真中でも行われ続けられてきたのです。

(民族資料) 住吉神社大祭大幟

(六組)

五月の空の下江戸城より將軍が江戸前を見渡すと、海上に浮ぶ佃島に、一列となって「住吉神社」の五反の幟が棚引きます。「おう、佃まつりか。」と、恐らく思われたことでしょう。三ヶ町の幟の位置は、その様に建てられています。

寛政十年(一七九八)六月の大祭に、幕府の許可を得て建てられたのが最初と云われています。当時將軍家所領であった千葉県鹿野山中に三本の大杉があり、周囲大の男が三人手を広げた太さのものを許しを得て切り出し、海路を経て輸送したことが、鹿野山神野寺に記載されているそうです。爾来この棹並びに支柱棹等は、隅田川辺に埋め保存し、大祭の度に掘り出し飾り立ててきました。現在は住吉神社裏側の舟入堀に保存され、岸際より約二米位離れた処に掘り、充分土を固めて埋められています。

祭日より三週間前の日曜午前七時、約一二〇名程集まり二手に分かれ掘出します。出された資材を洗い流し、各三ヶ所の場所へ配置されるまで約三時間、次の日曜日に組立てる訳です。

棹は、全高一八米(上半は円柱型・下半一一・六米は角柱型)太さ最頂部直径〇・一六米、底辺部〇・二二米、支え棹は、角材中央支柱二本(長さ四・三米、巾と厚さ〇・四六米)、左右

支柱二本(長さ四・三米、巾〇・三四米、厚さ〇・〇八米)、上下二段横材二枚(長さ五・七米、巾〇・三二米、厚さ〇・〇八米)、支え棹組は、中央支柱二本と左右支柱を中心より約二米離し、地上約二・八米高さに立て、その間を上下二段の肩平横材二枚を胴差し連結します。

縦横の角材は、先細の楔で固定し、棹は中央二本の太い角材を前後で締めつけます。棹組の構え場所は一定していて、土地を掘ると納穴のある礎石があり、そこに角材を嵌め立て、土をかけて固定します。劇作家北条秀司氏が新派「佃の渡し」創作中、仙吉役のモデル老人と親しくなり、渡し船が無くなる噂で佃島に訪れた際、仙吉役モデル老人と合い「渡しが無くなるって噂があるんだ。明石町の方からバカ大っかい橋を架けるってんで、役所の奴が下見に来やがって、幟台にハンマーで傷をつけやがったもんで、島中のかみさんが血の雨を降らそうとしかかったんだ。佃は女も気が荒えからね。」と語りますが、幟台とは、地中に埋めてある納穴付の礎石を云うのです。佃島に來られて真逆こんな川堀に、幟の棹や支柱棹資材が保存されているとは考えられません。滋賀県の坂本にも琵琶湖畔に同様な保存法が昔から守られています。大東京の下で……と誰しも感心されます。

この大切に保存している努力を、昭和五十五年の祭準備の時でした。向町で幟柱が立ち一安心している折、銭高組のトラックがぶつかり棹組資材を大破したのです。

「さあ、元のままの柱を返せ、そうでないと殺してやる。」佃島の血が騒ぎます。そうです。江戸の文化に疵がつくからです。この大騒動を、昨日の様に思い出します。

肝心なのは五反の幟布で、昭和六十二年新しい幟が創られましたが、前の幟布で最も古いものは明治二十二年のもので、そ

れ以前の織布は、獅子頭やその他祭具を包んだり、祭囃子小屋の裏幕等に利用してしまいました。織の文化的価値は、実は棹や棹組より五反の織が主役であります。武田信玄の「風林火山」も、旗の保存がされている事に文化的価値があるのです。昭和五十一年本件を文化財指定申請を東京都に提出しましたが、明治二十二年の織では未だ新しいので指定されませんでした。同時提出の北区諏訪神社の大織、勝海舟筆による布が百年経過している処から指定されてしまいました。従って棹や棹組同様織布の保存も共に考えて欲しいものです。今でも私は、残念に思っています。

いよいよ、祭りが始まります。四年毎の執行は、八月六日から八日の近い日曜を含んで三日間行われます。氏子圏は、佃島・月島・勝どき・豊海・晴海等の地域、氏子数約三千世帯です。

『大祭行事次第』

(第一日目)

午前八時—九時 大祭式
午前十時 各町内御輿勢揃出発
佃島獅子頭出発
午後九時 宮神輿神霊奉遷式

(第二日目)

午前九時 宮神輿出社水上渡御佃島巡幸
午後三時 御旅所へ渡御 勝鬨町巡幸
午後六時 御旅所にて小休祭
同所一泊

(第三日目)

午前八時 宮神輿御旅所出社
月島—新佃島巡幸
午後六時 還座祭

右の祭り次第が、町々の御神酒所に貼られます。祭り見物に、何時もお出掛け下さるか、御参考の一助になれば幸いです。

祭りの主役、宮神輿を担ぎ出しましょう。

(美術工芸)「住吉神社 宮神輿」

(八角型)

昔から宮神輿は、氏子圏内を神霊が渡御のため奉安する輿です。限られた者によって静かに練り担がれて巡幸するのです。しかし本社宮神輿は、町民によって町内から町内へ、受け継がれて巡幸するのが特色です。昭和三十九年佃大橋が架けられるまでは、水中渡御が行われ、銅板巻の神明大鳥居前の住吉上り場石段(今は防潮堤のため)から川に担ぎ込まれます。宮神輿の水中渡御模様を、詳しく述べましょう。

大祭前夜(宵宮)より酒・魚の御馳走で夜も寝れない三ヶ町囃子小屋は、祭当日陽が昇ると同時に(午前四時二十分頃)一番太鼓がなり、佃囃子が始まり、年番の若い衆は揃浴衣で、白足袋・鉢巻で時間の来るのを待っていたものだ。十二年度に一度の年番の宮出しが祭礼初日行われ、宮神輿は前夜世話人(三ヶ町)が神殿で参拝(午後十時頃)神主により神殿から御輿におたませを乗り移らせる行事が始まる。宮殿の灯が全部消され、

宮主祝詞により御輿に御神体が移される。宮神輿は、担ぎ棒に取り替えられ、宮殿の中央で一夜を明かし、大祭初日待つ、初日朝八時頃三ヶ町年寄・世話人により宮前広場に引出され、脚の上におろされる。若衆・大若衆は、町内で宮の前の世話人からの合図を待つ。

若衆・大若衆は、一ヶ町五十人位はいる。鉢巻の間に捻り紙に賽銭を入れ、合図で一斉に駆け出し宮神輿の先棒を取るのに全力疾走する。

宮神輿が担ぎ上げられ広場で三十分位揉む、観るため佃の女・子供は全部宮の近くにいる。大鳥居から隅田川に入るため、宮の前を真直ぐ時間をかけ進んで入水、約三十分以上川中で担いで揉み合っている頃、年寄がロープを横棒に縛りつける。川の中央に出ないよう、その先端を大鳥居に巻付ける。朝九時から夕方五時まで三ヶ町若い衆に宮神輿を廻し担ぐため時間的制約もあったが、三年後でなければ宮神輿は担げないから、若衆は必死になって担ぎ川の中央まで出ようとす。若い衆についている子供等が応援して、一刻でも神輿を川の中で担がせるため、年寄連中に、濡れた手拭で対抗し、年寄連中の顔や頭を叩く(子供が年寄連中を濡れ手拭で叩けるのは、この時以外ない無礼講である)その凄まじさは、大変なものである。

川の中で揉まれた宮神輿は、やがて御座船に安置され、賑やかな「佃ばやし」を奏でながら、四方水に囲まれる氏子團を一巡して帰還するのである。

神輿は天保年間の作で、神社古文書に芝大門通り万屋利兵衛製作天保九年(一八三八)納品と記され、木製黒塗り三層継壇の上に八角の屋形を据え、高御座たかみくらを模したものです。頂上には金色の鳳凰が羽根を拡げて立ち、屋根の勾配は急で、八方の降

棟・そり返った軒先や軒廻り、軸部の桁、更に要所など金・銀金具で飾り、八周幟は透彫、八隅に下がる風鐸は、いずれも手の込んだ作りです。

八角神輿が揉まれる姿は、川でよし、葦いよかの街並でもよし、江戸の情緒を醸し出しながら、その荘厳さに心打たれます。是非御拝観下さい。

昭和三年昭和天皇御大典の砌、慶祝のため宮城広場へ都内御輿の勢揃が決定されました。

佃島町民も宮神輿の出社に際し、揃伴天を誂えるのですが、各デパートや呉服大店舗は既に注文が殺到して受けて呉れませぬ。余すところ一週間に迫り、私の店に発注されました。父は急ぎ染場と掛合い、人手不足のため若衆の方々が協力下さるならば受注することに話し合いが纏まり、亀戸ヘトラックで若衆の方々を乗せ、染場で染上がり次第、若衆方二人一組となり、染め上がった伴天地を炭火で乾かす仕事に寝ずの三日間奉仕され、間に合ったエピソードがあります。それは関東大震災後深川永代より当地へ移転して、五年目の出来事でした。

佃祭りのもう一つ花を添えるのが、獅子頭巡行です。獅子頭は、三ヶ町それぞれ祀られています、特徴ある頭を紹介しましょう。

(彫刻)「竜虎の獅子頭」

佃一丁目下町若衆組

天保三年版東都歳時記に「竜虎の頭を渡す」と記されているのが、この獅子頭です。従って製作は不明なるも、天保三年以前であることは確かです。現在獅子頭は七組十四頭島内に保存され、その中の一組が「竜虎の獅子頭」で最古のものです。

昔この「竜虎の頭」の納めてある蔵が落雷で火災した折、竜頭は水を吹き、虎頭は砂を吐いて、忽ち消火したと伝えられています。

明治に入り若衆が尾張町田島質店に、世話掛・重立・年寄等組の上役達の許可なく、本獅子頭を入質したところ、質店が火災に遇い全焼しましたが、たまたま小僧の機転により狭い庭に出して避難されましたが、竜頭は水に濡れ、虎頭は砂を蒙って、自らを守っていたと云うことです。この一件により前述の「下町若衆大帳」の中に「規定追加」が挿入され諫められています。大正十年頃まで竜虎の獅子頭も渡しておりましたが、大獅子頭の新造以来ととり止めています。それに年代製作も古いため、巡行による破損が考えられるからでもあります。従って獅子頭巡行は、六組を以て行います。

獅子巡行の模様を、観ることにしましょう。

神社拝殿に勢揃いした獅子頭は、時間になると一組ずつ世話人によって昇ぎ出されますと、正面表門に待機していた若衆達が合図と共に殺到し、先を競って獅子の鼻づらにさわり、縁起をかつごと揉み合いになります。

参拝者や見物人達から、小銭を包んだお捻りが獅子頭目かけて盛んに投げ掛けるのもこの時です。もみ合いが終ると十人位の男衆が、獅子頭を奉持して、長い萌黄色胴布に入り町内を練り歩くのです。巡行が終ると獅子頭は、町内葭簀張り小屋に各組安置され供物を捧げます。この仮設葭簀張り小屋も、毎回自然石や植木を配置し、祭日まで各組極秘に創案されたものを競い合います。そのため日頃から植木・鉢の木・盆栽・箱庭・盆景など狭い島内に置かれています。この日のために研鑽している姿なのです。大変風流なもので、佃祭を是非見すべき

です。出来れば夜景の葭簀張り小屋の姿こそ、江戸時代を味わうこと受け合いです。

「竜虎の頭」を詳細に観察しますと、竜頭は、顎巾が四五糧、顎下から鼻づらの高さ二五糧、横巾五五糧、後頭部高さ五〇糧、角の長さ約四〇糧、漆が黒・赤・青と三重に塗られ（特に現在青漆の原料輸入困難のため、漆の塗り変えが不可能）その他金箔も幾分剥けているが、虎頭に較べ美しさを保っています。

虎頭は、顎巾が丸味のため小型に見えますが四五糧、横巾約五〇糧、後頭部高さ四〇糧、漆は共に三重塗り、下地の黒も剥げ素地が少々見えています。都文化財係によれば、全国的に見て天保年間作は未だ新しい時代に含まれるため指定されませんでした。相当虫に犯されているので保存に注意とのことでした。

（彫刻）「黒獅子頭」

佃一丁目下町若衆組

お練り用の木彫獅子頭。正面・側面とも稍々低い方形をなし、黒漆塗、頭部は平で髪は粗い毛筋彫、金泥塗、先端は渦をなす。この上に赤熊の毛を植え、雄獅子は文様のある一本の角、雌獅子は宝珠を冠する。両眼と鼻とは水平に並び、眼、鼻孔と耳の内側は朱漆塗。口は波うって、銀塗の上下の歯を見せ、唇は朱塗、鬚の彫は頭髪と同じ。後方に塵尾を立てる。

天保年間、船大工の作と伝えられ、現在は漆の剥落を恐れて練らず。又本獅子頭を練り巡行すると雨を呼ぶと伝えられ、「竜虎の頭」同様、大祭期間中は、佃島旧下町の南東側に仮設小屋を設けて安置しています。

佃まつりに関する文化財を大雑把に御案内しましたが、これ

ら個別に文化財として指定するのではなく、「佃祭り」全般を通してみても、若衆組の共同作業の習俗は社会生活に関するものであり、祭祀面からみれば信仰に関するものであり、祭祀行事からみれば民俗芸能に関するものであります。従って京都の県文化財としての葵まつり・祇園まつり同様、民族資料として「佃まつり」を東京を代表する文化財に値するものと信じています。是非皆様の御声援を御願いと共に、「佃まつり」に、お越し下さることを願っています。

(平成四年十二月八日祭り記)

祭りの賑やかさに反し、同じ年中行事でも、盆踊りは、やはりもの悲しい。

平成六年東京にもたくさん民謡があったはず……三月二十三日「どっこい生きてる東京民謡」と題して、千代田区国立劇場演芸場で開催、唯一江戸時代から歌い継がれている「佃盆唄」は、当然その匹頭に位置する。民謡はふだんから歌われ続け、当時の暮らしぶりや、人の心がにじんでいて、その上地元の歴史を知る上でも貴重である。

(年中行事) 佃島の盆踊

佃一丁目

文化財が一般に認識され始めて久しい、東京では、昭和三十年代町名変更問題により一層高まった。御多分に漏れず、佃島でもやっと目が醒めた感があった。

その頃全国的に文化財を点で捉えるのではなく、面にとらえるべきであるとして、街道や町の保存が叫ばれ、都心では、震災・戦災を免れた当地が専門家達の話題になったものである。

居住している私達にとっては、遅きに失し今更文化財でもあ

るまい、況して佃島の街並と云っても、強制疎開で戦前の姿もないし、建替えの家々も近代的に変ってきた。そのためかハトバス観光の「下町コース」で訪れる方々は、宣伝と實際来られの差に奇異を感じられている。

中央区でも文化財に本腰を入れ始めたのが、昭和四十九年からであり、私は教育委員会に席を置いていた関係上調査に当たった。日本橋・京橋と云えば江戸の中心のため、すべてが旧跡であるものの、何回もの大火に遭い文化財となると乏しい。佃島は、正保元年築島以来慶応二年神田出火の延焼まで十二回、内四回は全焼している。住吉神社は、七回も焼失している。従ってその中で文化財を求めるとなると、民族資料や郷土芸能と限定せざるを得ない。佃島への関心が高まっている昨今、せめて調査中に「東京都文化財指定」を受けられることが出来ればと思ひ、昭和五十年二月中央区教育委員会より東京都文化財係へ次の四点の調査資料を提出し、審査を申請した。

(美術工芸) 住吉神社神輿(八角型)

(彫刻) 獅子頭(竜虎の頭)

(民族資料) 住吉神社大祭大幟(六組)

(年中行事) 佃島盆踊

「佃島盆踊り」を知る上に、大坂佃島漁民が門徒宗信徒であり、佃島へ移民した漁師全員も今日まで同信徒であるため、先ず「石山本願寺」について理解を持たなければならない。

本願寺八世中興の祖と云われた蓮如(兼寿)上人は、延徳元年(一四八九)法王の職を実如(光兼)に譲ったが、明応五年(一四九六)八二才の秋、堺の豪商万代屋の一族・松田五郎兵

衛の協力で、攝州東成郡生玉之庄内、大阪と云う在所に坊舎を建立、石山御堂とも石山御坊ともいい、後の石山本願寺である。九世実如から十世証如（光教）となった時、親交のあった細川晴元の頼みで、門徒宗三万人を引つれ、畠山義宣を、次いで三好元長を滅し、その折の勢力は、十万とも二十万とも云われる程であった。

昨日の友は今日の敵で、京都公卿鷲尾隆康の「二水記」に、「先月晴元を助け三好一統を追放した許りなのに、今日は晴元と戦っている。まるで天魔の行いではないか、この調子だと、天下は一向一揆のものとなってしまふ」と記されている。細川晴元は、近江の六角定頼を通じ、京都・法華宗徒が、南北朝時代からの対立を利用してこれを煽り、山科・本願寺を焼き打ち、そのため証如は攝津に救いを求め入寺したので石山御坊が、一向宗石山本願寺と呼ばれたのである。その後も度々法華宗徒の連合軍の攻撃を受けたが、石山本願寺城は益々堅固となり、「足利季世紀」には「城は攝州第一の名城なり、籠る兵兵、何れも近国・他国の諸門徒・一向に阿弥陀名号に心をかけ、命を塵芥程に軽んじ、防戦」と表現している。天文四年十一月和議成立、抗争は終止符が打たれた。証如は、天文五年正月から二十三年八月の十九年間、教団機構の整備や石山本願寺内経営に意を注ぎ、三十九才の若さで没し、子顯如（光佐）が十一世を継ぐ。

永禄四年（一五六一）八月、耶蘇会士パードレ・ガスパル・ピレラが、印度イルマンに送った手紙で「諸人の彼（顯如）にあたる金銭甚だ多く、日本の富の大部分は、この坊主の所有なり」と、本願寺教団の富強と繁栄が推察される。

永禄十年秋、京都に入った織田信長が、三好・松永の徒を追い、攝津に進出、池田・高槻・茨木の諸城を抜き、本願寺へ軍

資金として、矢銭五千貫を要求してきた。石高にして八千石に当るが、顯如は、それに応じる。次いで元龜元年（一五七〇）正月信長から、本願寺は石山から退去せよと迫まる。「細川両家の記」に「西は大海なり、里の囲りは沼田なり。これ程なるところ稀なるべし」と大阪の地を述べているが、阿波にいた三好三人衆は、攝津中島や野田・福島に壘を構え、紀伊雜賀の一探も応援、総勢一万三千人がたてこもる。急に接した信長は、八月に河内枚方を経て、天王寺へ、九月に海老江に本陣を置く。中立を守ろうとしていた顯如は、樓岸・川口に砦を築いた信長が本願寺に備えたため、九月六日諸国の門徒に檄をとばし立上だったのである。これが前後十一年に互る、世に云う「石山合戦」である。

天正五年三月一日織田軍は、信達に進み、山手と浜手に分け、雜賀に攻め入る。顯如が最も頼みにしていたのは、常に雜賀の兵士六―七千人を手元に置いており、雜賀には紀伊・和泉の一向宗門徒が行を共にし、ゲリラ戦を得意としていたからである。大将鈴木孫市は、雜賀衆得意の鉄砲で防戦、持久戦になるにつれ、地元民衆への被害を考え、ついに降参を申し入れた。そのため石山本願寺は孤立し、信長は勅旨による和睦を正親町天皇に願いで、顯如の大阪退去を条件に涙をのんで講和を受け入れた。

時に、天正八年閏三月五日であった。

従って大阪本願寺は消滅したが、この石山合戦の敗戦から益踊り振り付けが関係することを記憶して、次に佃漁民信徒と築地本願寺の關係に理解を進める。

江戸の城下も整う元和三年（一六一七）横山町二丁目南側に、

浄土真宗本願寺派江戸別院がやっと創建された。当主十二世准如は、西本願寺が豊臣秀吉庇護であった処から、三度江戸に参向し、やっと家康に对面許可を得たのであった。寺地を寄進したのは、善永寺・称揚寺・実相寺・妙延寺の四寺で、その功により内陣位に昇進（後築地に移っても、表四ヶ寺とよばれ由緒を誇った）他に寺中十八ヶ寺、その下に属する十ヶ寺を寓した。この別院の正式名は「浅草御堂」と云い、浜町御坊とか矢ノ倉御坊とも町中では呼んでいた。

「火事は、江戸の華」である。絶えず火災が起き消防施設不十分の上、萱葺・板葺・かきからぶき等の屋根で、その上木造家屋の密集する江戸は、少しの風でも延焼され、火事に乗じての物盗りも多く、その目的で放火する者もあった。

明暦三年（一六五七）正月十八日昼前、本郷丸山の日蓮宗本妙寺から出た火は、折りから吹きつづける風に煽られ、その上前年十一月より八十日間雨が降らず乾燥していたので、湯島・駿河台から鎌倉河岸、更に飛び火して一石橋から八丁堀まで、数万の男女が逃げ込む靈巖寺も呑み込み、海を超えて石川島・佃島まで燃えつくした。最大の被害地は、日本橋通り中心街から伝馬町牢獄も火に包まれたので、牢奉行石出帯刀が数百人の罪人を釈放したため、牢破りと勘違いした浅草門の門番が惣門を閉じたので、伝馬町から浅草門の八町間は、人と車と荷で埋まり、背後からの猛火に浅草門橋を乗り越え、堀に飛び込む者数知れず、二万余の人が死んだという。

十八日の延焼も夜明け方静まったが、十九日昼前、小石川伝通院表門下の新鷹匠町大番衆与力宿所より出火、水戸邸も江戸城本丸も焼け、更に同日江戸城西の麴町五丁目からも出火、南へ延焼し、芝口の海岸まで及んだのである。

両日の大火は、江戸時代を通じ最大のもので、江戸城天守閣、

大手をはじめ三十余ヶ所の櫓、大名家一六〇、旗本番士以下六〇〇余、寺院三〇〇余、町中五〇〇余町、大名小路五〇〇余町が焼失、死者十万二千名と云う。二十一日には、大雪で多数の凍死者も出た。巷に、次の落首が貼られていた。

おごりたる 罪のむくいや なお火宅かたく

三界 無庵 旗本の衆

武蔵野は 人のいるべき 家もなし

こもより出でて こもにこそいれ

横山町江戸御坊も創建以来四十一年目にことごとく烏着けうに帰し、八丁堀地区清洲方百間の埋立を許される。当時の百間は数字で標示しているが、必要に応じ「幾らでも」の意味があり、大名替地規定は十五万石までは七千坪、百間四方とは二十万石大名格である。「東京名所図会」に「本願寺十三世宗主良如（教興院）、家臣上田正信を以て寺基を他に移さんことを將軍に請う、同年六月七日寺社奉行安藤右京進、松平出雲守を以て、八丁堀の海灣洲渚の地に公許せられ、監守光瀬寺乗以などをして填海移転の土木を謀らしむ、其の地域一万二千七百二十二坪余、築地の名称はより起る。万治元年五月二十七日移転入仏式法会を修す。門外過半の地を三条に区域し、未寺五十八ヶ寺に分与す。」と記されている様に、海上に埋立てる工事を、僧侶と門信徒並びに佃島門徒衆が当った。佃島民衆は、全員門徒のことから、名主孫右衛門を始め熱心に埋立工事に当り、この因縁から以来、御茶所詰番、墓地選定、墓守、非常時及び法要時の出役等、佃島門徒が司ることになる。これより築地別院の大法要の際には、境内に「佃島門徒の標幟」として、桐と下がり

藤に、佃嶋と染め抜いた旗印が立つ。西本願寺にとっては、有力な門徒なのであった。爾來本願寺と佃島の関係を年代別にみると、

万治元年（一六五八）五月二十七日築地西本願寺仮御堂竣工

延宝八年（一六八〇）築地本願寺再建成り、十一月遷座式

元文年間、佃島西本願寺説教所が出来、道場と呼ぶ（現在佃

一丁目三番地河岸）

寛政五年（一七九三）六月二十一日築地本願寺、御堂上棟式

天保二年（一八三一）七月一日町奉行遠山左衛門尉の命で、

佃島住民の盆踊としての市中徘徊を禁止

天保八年（一八三七）十月五日本願寺別院再建上棟式挙行

安政三年（一八五六）八月二十五日大風雨で、西本願寺倒壊

文久二年（一八六二）佃島開基森孫右衛門の二百年忌に当り、

子孫幸右衛門が寺中に追遠墓建てる

（旧跡）佃島開発者 森孫右衛門墓

一基

墓碑形状 屋根型角柱 高さ一六〇糎、巾三五糎、台石巾六

〇糎平方 下位台石八〇糎平方

正面 寛文二年壬寅・篤行院釈久西居士・四月四日享年九十

有七才（三行彫り）

左側から裏面にかけて、佃島漁師と徳川家との係り合いを記録した由緒が彫られてある。

佃島の開基森孫右衛門の二百年遠忌にあたり、子孫の幸右衛門勝鎮と、親族佃衛門寛敏の両名が建立した再建墓である。

本願寺中の墓地は、殆んどすべて杉並区和泉町の廟所に移されたが、この孫右衛門の墓のみは、佃島由緒を語る貴重な墓石な

ので、本寺に残して大切に管理されている。

建立、文久元年（一八六一）四月

明治九年（一八七六）七月二十三日佃島総代森幸右衛門、東

京府知事に「西本願寺再交付之地所に付答申書」を提出

明治二十六年（一八九三）九月七日午前五時半、西本願寺の

台所から出火、本堂対面所・書院を焼失、本尊を一

時佃島説教所へ移す

明治二十九年（一八九六）十一月二十三日水谷金蔵（六世川

柳）没、本願寺葬る

大正十三年（一九二四）八月二十八日月島三丁目十二番に真

宗本願寺派月島説教所落成

昭和六年（一九三一）築地本願寺の墓所杉並区和泉堀に移転

昭和七年（一九三二）二月佃島有志 本願寺和田堀廟所に

「佃島祖先由来之碑」を建立

昭和十年（一九三五）築地西本願寺伽藍落成

佃信徒と本願寺の長い係わりは、大阪石山本願寺以来の長い歴史があった。従って毎年夏の盆に行われる祖先供養も、全島挙げての年中行事なのである。

明治三十四年の「新撰東京名所図会」に「盆踊むかしは江戸市中にも行われしが、久しく絶えてなし。唯佃町のみになおその古風を存し、今に至るまで特許を得てこれを行えり。けだし攝津国佃村より伝え来りし縁故あるに由る。

毎年七月十三日より十六日まで毎夕これを始め、十一時を以て終るものとす。甚だめざらしき事なれば、參觀する者また多し」と記載されている。

佃島の盆踊は、毎年七月十三日から十五日三晩、町の中心に

櫓を組み円陣になり、午後七時から十時頃まで、老若男女相集い祖霊・精霊を慰める供養のために踊るのである。

踊りは、天正五年三月大阪石山本願寺の石山合戦の争いで、鈴木飛騨守が勝ち名乗りをあげる動作にしたのが起源であり、右手に軍扇、左手に槍を握り舞う形、右足は傷ついて引く動作で、通して動きが鈍く手の屈折や足の捌きは静かにして、盆踊の中では流れが優美なのかも知れない。歴史的事実としては、先に述べた天正年間織田信長が大阪石山本願寺攻略に際し、勅旨を擁して開城を迫った時、城内で抗戦派・後退派と対立し、分裂派は四方へ散り、世に云う「一向一揆くずれ」となる。関東地方では、千葉県館山にも「雑賀くずれ」として漁民にこの踊り形態が伝承されている。大阪佃村出身である全島民は、当然本願寺信徒であることは云うまでもない。

明暦三年一月の世に云う「振り袖火事」は、両国の西本願寺を全焼、現在の築地に移転するに及び、佃島門徒衆は、日夜を厭わず地形築立に尽力、更に御堂建設のため江戸市中を巡り踊って勧進して資金に当てた。延宝八年十一月築地本願寺再建、実に二十三年も懸るのである。

その後も勧化になるよう市中を廻り盆踊をして、志納銭を受けると寺に喜捨した。佃島だけが江戸で此の行為が許されたのは、幕府が認めていたからである。しかし、中には悪い者もいて、漁を怠け踊りで金を得る者もおり、天保二年七月町奉行遠山左衛門尉の命で市中徘徊を禁止された。

昭和四十九年七月十三日午後七時 既に盆踊りは始まっている。八十名近い人数の踊り輪を二百名位の観衆、狭い町が人の息で立ち込め、この中に審査に立ち合う先生方はもう来られているのか、兎に角初対面なのである。観衆の顔を隈く見廻す。

眼の使い方でそれらしき人を発見、近付いて挨拶をすると金山正好氏（都文化財担当主事）である。「佃島盆踊は、以前から気にかけていたのですが、あなたからの調査資料で審査会に提出しても充分だと思います。唯、今後保存をどのように継続されるかが問題です。」そこで私は、保存会をどの様に維持するかが大切のため、飯田栄太郎氏（当時町会長）宅へ案内し、保存の永続性と育成のための組織運営について説明を受ける。再び盆踊りの会場に戻ると、観衆が五百名位に膨れ上がり、踊り方も百五十名位に達している。私達二人は大衆を掻き分け、一老婆の踊りの仕草の後を追って歩き廻っている三隅治雄氏（郷土芸能専門審査員）を捜し出す。「挨拶は抜き抜き、ちょっとこちらへ来て下さい。」私達三人は群集の中を飛び出し、踊りそのものについて検討を始めた。「この盆踊りは一向衆系なので、特に日本海側の福井・石川・富山各県に多くみられるが、既に千葉県文化財指定の館山の盆踊りを審査した経験から、先程のお婆さんの形が正しいので、少なくとも七名以上、出来れば壮年、青少年層と各年代層を含めて捜して下さい。」打合せが終って私達は、再び踊りの輪に戻り観察を始める。

楽しんで鑑賞するのと、目的を以て見るのでは見方がこうまで変わるものなのか、約三十分である人この人と観察させて頂いた次第だ。得意になって踊っている者は、自己流になり乱れていることが解る。やはり多くの老婆の踊りは、精霊を祈り慰める思いが深いのであろう。正しい伝承形態を伝える踊りであることに感銘した。

幸いなことに家族で参加する踊り手が多く、姑・嫁・孫と何組も発見したことは、これで決ったと思った。すぐ先生方に目を送り合図する。

その都度、オーケーの頷く返事がある。

もう八時半になろうか、人の数は益々増加してゆく。私達は休憩所のテント張りに入り、最終的の検討を行った。

その夜は、めずらしく佃島の空に星がよく輝いていた。私達は、後髪を引かれる思いで会場を離れた。未だ耳には、「盆踊り」の余韻が残っている。

踊れ人々供養のためぢや

五国みのりて 大風もなし

天のめぐみぞ 佛の音頭

おんを思えば しんじんしやれ

一に いつせの さいなんのがれ

二には 日夜に 氣もやはらぎて

三に 三徳 しゃうめつするぞ

四には 自然と 家 富さかへ

五には 五生の うたがいはれて

六に 六親 みなむつまじく

七に 七福 其の身に そなへ

八に 八代 地獄へ おちず

九には 九ぼんと じょうどに生れ

十で 十法 じょうぶつ たすけ

忘れまいどへ 朝夕ともに

信の一家が ただかんようで

ぎぜに唱へよ 南無阿弥陀佛

(唄原本より)

よく歌われるのは、右の「仏供養」「秋の七草」「祇王」「峨峨くどき」ともよばれる)の三曲で、別に「村づくし」「糸屋

の娘」「阿波の鳴戸」等が一応伝わっている。

翌年二月新聞紙上に「佃島盆踊り」東京都文化財指定の記事が発表された。

(「佃島物語」その九掲載・平成四年五月二十五日記)

私の子供頃は、佃一丁目の道巾が三間位のため、盆踊り場は、江戸時代より住吉神社銅板巻神明大鳥居傍の網干場にて行われ、河岸に精霊棚を設け、無縁仏などの供養が行われた。佃の「渡し船」に乗り、盆踊りの唄と太鼓の響きを聞きながら大川を往復すると、川の波音、蒸気船のポンポンと吐く音、此処が東京の空の下にあるとは到底考えられない。況して明石町対岸から見える櫓の裸電球の光が、闇の墨色の中にボンヤリ輝き、その下で輪になり踊る姿は、むしろ佳びしく物悲しい光景であった。現在は町の中央で踊る輪は明るく賑やかで、旧佃渡し場(上町)と、佃公園(下町)及び佃大橋南詰(向町)の三ヶ所に精霊棚を設置して仏供養をしている。

現在の東京で、江戸時代から伝承する盆踊り、それも上方風の古格を伝えていることが珍しい。

正式には昭和五十年一月十六日、東京都文化財指定となったのである。

(古文書) 佃島盆踊唄帖

一帖

縦一一・五糎、横一六・一糎、半紙横半裁、紙捻袋綴、表紙に「佃島盆踊唄」とあり、表紙含めて十紙を綴り、内題・奥書等はなく、本文は一面九から十一行、一行九から十四字前後詰、明治年間頃の写本と思われる。飯田栄太郎氏所有。

前述「佛供養」の歌詞は重複するので避けるが、歌詞中「五国は五穀・三徳は三毒」の意、浄土信仰を勧め、現世安穩を得べきことを説き、数え歌を含んでいる。以下唄帖より、歌詞を紹介する。

秋ノ七草

人も草木も盛りが花よ

心しぼまづ(ず)勇んで踊れ

思ひ草なら信夫(しゆぶ)ではやせ

まねぐす(薄)木に氣もかるかやと

明日の朝顔よい(ひ)より化粧

つぼみや紅葉咲きや紅ちよこ(猪口)

恋に桔梗は色よい仲よ

萩はねみだれ錦の床よ

おみなへしで風くねるまで

花のしこし草あ恐ろしや

善(ぜん)に導(ま)引(ま)け観音草よ

若い扶蓉(まも)もおきな(草)の草も

秋の野分は無常の風よ

散れば残らず皆土となる

サトリ(サ)開(カ)けば草木も国土

仏頼(ぶつ)よ南無阿弥陀仏

(秋の七草に托して無常を説き、草木・国土も往生する理を述べた念仏歌、行文秀逸である)

祇 王(み)「嵯峨くどき」とも(云う)

昔し平家の清盛様の

おきに入りなる祇王も祇女も

踊り上手でよいしな者と

女さかりで身は男まい

うつゝぬかして三年までも

蝶よ花よと愛していたが

月にむら雲花には嵐し

踊り上手で父一人にて

顔はによぼさつ其の名は佛

こえも踊りもしと方ならず

これをながめて心がうつり

みとせ恋せきりうも祇女も

今は秋風とおざけられて

浮は浮夜のならいとかんじ

わすれがたみの一首のうたも

草によそえしねのあるうらみ

此(これ)がぼだいのたねともなりて

髪おおろして墨染(すみぞめ)ころも

さかの山べにさととりてすめば

佛(ぶつ)ごぜんも此事(こと)聞いて

あとおしたて御所(ごしよ)しのびいて

あまとなりてしばの戸たゞき

ありししだいをわびつゝかたり

うらみしつとも一時にとけて

心すがたもみな丸くなる

これも誠に佛がちしき

道をさとればなむあみだぶつ

(平家物語の白拍子祇王・祇女の姉妹と佛御前の栄枯盛衰並びに入道後の親睦を説いている。)

村づくし

三十三村 恋路にたとへ
さらば七月 七夕様杳
年に一度の おをせが有りて
思ひそめたる 其の恋人に
あわれないとは そりや何事ぞ
新井村なる 八幡様や
御地造様にと 心願かけて
色も飯田の たよりがあれば
むねに新島 早や見たてつゝ
主を立ともふ 木なれば
是非もなくなく 筆取り上げて
思ふ心のある 内ヶ島
事もこまかに 文にとこめて
とかく恋路は 別所のものよ
末の見定め つかない内に
重荷おろして 早飯塚と
親や世間の 義理さえわすれ
人の世話する 縁談事も
耳に聞くさへ 東西矢島
外に望みが 何あるものか
この家道より 木戸をば開て
雨は古戸の 夜も苦にせず

しのびくの 二人の仲は
いつかうわさが 早高林
先は牛澤 米沢越えて
もおとちけいきの 様見つけ
たとへ細谷の 烟でなりて
たてゝ暮らせし 其の楽しみは
人が富沢 福沢よりも
はるかましたる 楽みなりと
残る心の あの岩瀬川
末は深身に 入るとは知らず
流れ附いたる さわより舟に
こすにこされぬ あの下浜田
重ねくの 藤あくらんで
西に向つて 由良く行けは
まよら田島の 田甫の中で
いととお方の 心切話し
なさけ話に 心を定め
ようよこゝにと 氣を沖の村
こゝの別所に しばらく居
二人仲よく 世帯を持つて
はなれまいどゝ 暮せし内に
毎夜新井の 原さへ越へて
おぐし烏山 しつかとよめば
末はよしとの おつげであれば
少しや心も 安心致りし
縁鶴生田 たよらむものと
長手合せて せんげん様よ
呑龍様やら 大島様へ

祈りくくし 其の甲斐ありて
近所組合 こんいのものも
世話もしびよく とゞいた故に
二人やうく 太田の町を
つがいはなれぬ あのおい鳥と
浜町遊びに ます楽しみよ
最早御内の 月さへみちて
親子健ぶで 日立し故に
さつき申した 八幡様や
御地造様やら 吞龍様や
御礼参りの 其の楽みも
さめてあとなき 昔の夢よ
一寸つまんだ 其の村づくし

(地造は地藏、心切は親切、日立は肥立の様な当地や東京訛音を含んでいる。現在も群馬県太田市内に遺っている新井・飯田・新島・内ヶ島・別所・飯塚・矢島・石戸・高林・牛沢・米沢・細谷・富沢・福沢・岩瀬川・下浜田・由良・田島・仲の・長手・鳥山・鶴生田・太田・浜町等の地名を読み込み、恋の成就を述べ、他の唄とは類を異にし、群馬の民謡が混入したのであろう。)

糸屋の娘

花のお江戸で 其名も高き
本町二丁目の 糸屋の娘
姉が二十一 妹ははたち
姉にや少しも のぞみわないが
妹ほしさに 御りよがんかけて

伊勢へ七度 熊野へ三度
芝の愛宕山へ 毎月参る
掛けた御りよがん かなわぬ時は
一に伊勢野の 大神宮様へ
二には 日光の中禅寺様よ
三には さぬきのこんびら様よ
四には しな野の善光寺様よ
五には 北野の天神様よ
六には 六度のびしやもん様よ
七つ 成田の新正寺様よ
八つ 八幡の八幡様よ
九には 熊野の権現様よ
十で 所の氏神様よ

(新正寺は新勝寺、元禄年間に流行した踊り歌の糸屋娘踊りに由来するもので、伊勢大神宮をはじめ新仏に娘との恋の成就を祈願し、後半数え歌になっている)

飯田氏所有の「盆唄帖」には以上五集が記されているが、別に「阿波の鳴戸」がある。

阿波の鳴戸

ここにあはれな 順礼くどき
国は何処よと 尋ねたなれば
阿波の鳴戸の 徳島町よ
主人忠義な 侍なるが
家の宝の 刀の詮議

何の不運を 無実の難儀

国を立退き 夫婦の願ひ

神や仏へ 心願かけて

さづけ給へや あの国次の

刀商売 研屋の見世も

心静めて 目配せなさる

行けば大坂 玉造にて

九尺二間の 借家をいたし

其の間やかしこと 尋ねんものと

三つになる子を 我家において

もはや七年 ばばさま育ち

子どもながらも 発明者よ

年は十とて その名はお鶴

親の行方を 尋ねんものと

育てられたる そのばばさまに

永のいとまの 旅立ち願ふ

(中略)

諸国西国 巡礼すがた

背にはおい鶴 六字の名号(原本妙語)

娘お鶴と 書きたる文字が

墨でにじみて すがたがうすい

(下缺)

五、佃 界 隈

——石川島人足寄場と灯台・佃島砲台跡——

水上バスで浜離宮から隅田川河口を北上し、勝鬨橋と佃大橋の二橋をくぐると、突然空に聳える超高層マンション群が目に見え込んでくる。

此処が東京新名所フロンテアー、リバーシティ21である。岸際には、佃島公園の高台に古風な石川島灯台を模した公衆便所、手前の水門と並んで防波堤から住吉神社銅板巻大鳥居の頭が覗いて見える。更に手前には、昭和三十九年まで「佃の渡し」があった場所である。

その頃は、三井石油のタンク二基や倉庫の屋根が並び、石川島造船所の工場号屋が続き、何か空気が濃んだ。灰色の島に見えたものだ。

延宝以前の切絵図には、この場所が「石川八左衛門」と名がある。寛永三年（一六二五）船手頭石川政次八左衛門が隅田河口の洲嶋を拝領され、人呼んで「石川島」と云う。これが寛政二年の切絵図になると、「石川島大隅守」と「人足寄場」と記され、前図に較べて石川島と佃島の間と、更に東と東南をも埋立てて、「人足寄場」となっている。幕末にはこの一部に「石川島造船所」も造られるが、先ず「人足寄場」に足を踏入れてみよう。

（旧跡）石川島人足寄場跡

平成五年池波正太郎作「鬼平犯科帳」が、中村吉右衛門主演

でテレビ放映され、その後も長谷川平蔵劇が茶の間を賑わしているが、何と主人公、盗賊火付改め長谷川平蔵は、寛政二年二月二十日松平定信の命によって創立したのが、「石川島人足寄場」である。石川大隅守屋敷裏の段沼一万六千三十坪余を、御用地として築立地所とした場所である。

ところが同年一月二十三日石川大隅守屋敷より自火を出し、空屋一棟を焼く事件があったのは寄場創立の一ヶ月前であった。寛政四年人足寄場役所から隣島佃島住吉神社に永代毎年正・五・九月、米志儀宛奉納する旨申出ている。同年四月二十六日石川島の石川氏屋敷替を願ひ、この日永田馬場の替地へ移ったから、凡そ六十五年間住んでいた所で、同年五月二十八日鉄砲洲向島石川大隅守上げ屋敷が、その跡を併せて人足寄場の添地となった。

「人足寄場」とは、当時徒刑に類似する者を役夫と云い、俗に人足と称した。その役夫を衆合する地を寄場と云ったのである。また徒刑に類似する者とは、無籍無頼の笞刑に処せられた者で、即時釈放は未だ無理な者を寄場に移し、官より衣食を給し搾油等の役に服させていたが、享和・文化の頃から有籍の者で笞刑に処せられた後、親戚故旧の下付すべき者無き時には、此処に移して作業をさせて懲知させたのである。

なお笞刑とは、箠尻（長さ一尺三寸の竹を麻苧で巻いた鞭）で、武士・僧侶・神官以外の男子の軽罪者に用いた刑罪で、五十敲を通常とし、重い場合は百敲で、牢屋敷門前に筵を敷き、囚獄や牢屋見廻の与力立合の上、囚人を袴一本の裸で腹ばせ背中を打つのである。

若し寄場を逃走すると、罰として左腕に十字を彫して墨刑された。元來入墨は盗犯者に施されるもので、前科の印として左腕に「腕廻し巾三分づつ二筋」（享保五年御定書）を入れ、江

戸入墨」と云われていたが、寄場でも筋に違つて十字を入れたのである。参考に各藩でも行われ、例へば紀州藩では黒、長州藩では◇、佐渡藩ではサ、丹波藩では犬等のような記号を入墨した。

寄場の中では、部屋が六房に分かれ、罪科の軽重に従つて居を異にし、老人・病人には別に一房あつた。細工小屋が二宇あつて、将来手業を以て宮が出来よう、大工・建具・差物・塗師等あり、人に依つては島外にも出遣もさせたのである。又手業不向の者は、春米・絞油・炭田を製造させたり、菓細工・貝殻細工・紙漉き等に従事させた。要するに、授産事業である。

寄場で三年経過すると、放免して身寄の者へ引渡し、その折営業資本として錢五乃至七貫文を給した。

寄場の生活は、当初寄場奉行一員が管守となり、その隸屬下に元締・勘定役・下勘定役・医員・著丁・水夫が居て手が不足しているため、房毎に服役の人足中より一人を選び保長とし、俗にこれを世話人といひ、又薪水を供する係を俗に卯時と云つて、この係を役付とし、上衣服衣は、柿(楮黄)色の木綿で製し、上衣の背に波紋を染出し、平人足と別とし、糧餉に於て一日に三回、玄米と麦を等分にして一日付六合、雑費料一日錢二四文、支給され、その錢で味噌醬油に充てた。平人足は、玄米・麦の等分一日五合、雑費は同額であつた。

もし遁走を謀つたり、竊盜又は賭博する者あれば、房外の柱に縛してこれを懲らした。

凡そ人足の数は、寛政五年の調査で、一ヶ年平均百三十二人、文化文政頃になると、多くても十四から五十人を出なかつたが、天保七年の飢饉から人数が増加し、同十三年十二月調査では四百六十余人、その上水野忠邦の改革以後、無宿は云うに及ばず江戸払い以上追放の者はすべて寄場に送つたため、益々その数

は増加した。

弘化元年二月の調査によると六百余人、同二年中の平均数は、五百八人となつてゐる。これが幕末に至つても、大抵四―五百人いたのである。

これに対して役人は、どうであつたか。寛政四年六月四日長谷川平藏取扱を免ぜられ、村田鉄太郎徒目附から人足寄場奉行を命ぜられ、彼以降奉行を以て管理してゆくのである。初は下奉行格であつたが、後大工頭格と改められ、定高二百俵二十人扶持と定められた。その属使は、役所詰を元締役と云つて三人と小普請世話役格が高五十俵三人扶持、手業掛三人は高二十俵二人扶持、この他見張鍵番役三人、春場掛三人、斬殺灰製所掛一人、畑掛一人、油絞方掛八人、新見張番二人また給料未考の門詰八人、合計三十二人が寄場吏員であつたことが、天保十三年五月の記録にあり、以後幕末までこれが続くのである。

弘化三年正月十五日午後四時本郷丸山から出火、火の手は下町に延び、此処石川島・佃島にも火の手は延びて来た。飛火が風に煽られ寄場内油庫へ火が移りそうになり、新門辰五郎は監督小金井次郎(俠客)と共に、火の粉をくぐり振り乍ら、油倉の窓や出入口へ目塗して類焼を喰ひ止めた。幸いに翌十三日午前十時佃島で鎮火したが、この功により遠山奉行は、同年三月十九日赦免の恩典を彼に与えた。

寄場送りの理由は、辰五郎の火消組が何時も火事場で後回しされ、偶々有馬組消防と纏の後先から衝突になり、相手組十八名を殺した件で奉行所取調べの結果、辰五郎に理ありと江戸払いで済む、ところが毎晩江戸へ忍び妻妾に寝泊りすることが知れ、捕われ調べられても自分でないと言ひ通す。ついに拷問をかけ死寸前になつても「存知ません」と云ひ張つたのである。

責め殺せば奉行の負け、さすがの北町奉行遠山左衛門勘景元、辰五郎を人足寄場送りとしたのである。

新門辰五郎と云へば、火消から二千人の大親分となった俠客である。下谷山崎町煙管職、中村金八長男金太郎として出生、職人七、八名置く土蔵のある裕福な家庭であった。文化六年三月三十日、父が日本橋横山町田張りの総本家へ、工賃受取りに出掛けた留守中、弟子の不始末で付近一帯延焼、飛び帰った金八は世間に申訳なく火中に投身自殺した。そのため湯島天神伯父村田屋仙三郎方に母子共引取られ育てられたが、十八才の折正蓮寺で父法要の際、火事がもとで父を亡くした思いから、火消になることを誓い、初め浅草警願寺の守番として住み込み、寺院関係上東叡山衛士兼十手の消防夫を務めていた町田仁右衛門の乾兒となる。仁右衛門は三年前に亡くした倅の名をとり、父のいない金太郎を辰五郎と改名させ、嫁おぬいの婿とした。辰五郎最初の功名は、二十五才の時浅草堂前火事場で「と組」の鎌を屋根に立てていると、下谷西町立花持監抱え消防が上って来て争いとなる。相手を鎌で打ち卸して殺したため、火事どころか柳川藩消防と組消防の乱斗が始まったが、辰五郎それを押し止め、後単身立花候屋敷に乗り込み、幡随院長兵衛よろしく大部屋で見得を切ったが、幸に何事もなく無事帰宅、この事件が江戸中評判になったことから始まる。

天保五年三月二十五日芝中門前に出火、ろ組・を組が火事場で蓋口を振り廻しての争が起り、辰五郎配下梯子持の嘉吉が、蓋口で頭を割られ即死、背の低い辰五郎は死骸の上に立ち、「辰五郎が仲裁する双方手を引け」大音声を張りあげている処へ、南町奉行池田播磨守火事場頭巾で馬を乗りつけ、「仲裁、しかと辰五郎に申しつける」でチョン手締となる。又々、男を挙げたのである。当時町火消になるためには、身元保証人が必

要であった。ところが辰五郎は、出獄者だらうが無頼の徒であらうが、頼って来る者はすべて世話をした。或る年の暮、浅草仲見世の松飾付けを行っている多忙中、巾着切の親分道三の乾兒が、辰五郎の腹掛から巾着を掏りぞこない、突作に「親の業代のため出来心」と嘘の申し聞きをしたが、手持十三両全部与えた。以来掏兒は、改心して親孝行者になったと云う。従って、輩下となった消防夫達は、悪行乱暴をしなくなったと云う。

十四代將軍家茂夢御により、和子妃は舜仁准后、浅草に隠遁新たに門をつくる。新門の守衛に任じられた辰五郎、これより「新門辰五郎」と呼ぶ。十五代將軍徳川慶喜公からも甚く信任され、文久三年公の警衛に任ぜられ、慶応二年更に上役申付けられたが、三千人の警衛と共に居たいため辞退した。明治元年大阪脱走の折、城に馬師「金屬」を忘れた將軍は、辰五郎に取り持ち帰ることを命じ、首尾よく担ぎ出し戻ったものの、將軍既に出帆後のため、二十余名を募り馬標を押し立て東海道を下ったのである。

江戸に着くや勝海舟から、江戸戦火が起った場合を想定し、江戸川に行徳・佃島等の漁師を集め、市民を城下から脱出計画準備を辰五郎に依頼、人集めに一役買ってもらった。敗北と知るや乾兒達と共に賊軍に投じ、各地を敗走し廻っていたが、無事に命めでたく帰って来た。

明治八年九月十七日、浅草の自宅で七十八才を期に往生したのである。

時代は変り御維新後明治三年二月二日、人足寄場を徒場(刑場)と改める。

明治四年事件が起つた。浅草区駒形二十一番地五月末、猿若町から駒形堂横新店に移転した原田きぬ宅に警邏が踏み込み、浅草伝法院五方面大屯(警察分署)に連行、玉野判事取調べにより、殺人を告白事件が明らかになった。

明治初年浅草仲見世二十軒茶屋石側で半鈴屋を開業していた原田きぬは、肌白く透き徹おり眼が切れ長にして絶世の美女であつた。従つて、顔見たさに千客万来の賑わいであつたと云う。実は元御鷹匠東京府士族小林金平の妾で、猿若町二丁目に女中と二人住まい、偶々主人在宅の折、近くの森田座の役者の付け人伊之吉が金を借りに来る様になつた縁で、大阪新下り嵐璃鶴の仲を取り持ち、きぬと深い関係に落入つた。

次第に役者璃鶴との思いが募り、主人金平を石見銀山で毒殺、主治医常盤木祐信は不審に思い死亡診断書を書かないので、顧問医師に書かせ果鴨南条寺に埋葬した。処が主人の弟治助が静岡旅行から帰京し、主治医からその旨を聞き大屯へ通告したので事件が発覚したのである。

未だ監獄は日本橋大伝馬町であり、死刑の宣告を受けたきぬの体は、璃鶴の胤を宿し五月腹であつた。そのため身一つになるまで独房におり十月一日男児出産、十二日間肥立ち後、十月十三日北風寒く吹早朝軍鶏籠を簡単にしたアランダに乗り小塚原で死刑となる。辞世の句「夜嵐の　きぬて跡なし　花の夢」二十八才であつた。

早速、京人形のような晒首と「小林金平毒殺……死罪を申付くる者也」の高札が立つ。これより巷間、「夜嵐お絹」で評判となつた。

一方相手役者嵐璃鶴は、石川島懲役場入獄、明治七年放免され、芝榮昇座で市川権十郎と改名、一時名世を挙げた。おきぬの産んだ子は、璃鶴の姉が育て、長じて築地活版の職工となつた。

た。事件は単なる殺人罪と姦通罪で、今日なら日常茶飯事の話である。処が原田おきぬの一生を見た時、そこには悲恋物語が隠されていた。

三浦半島城が島の漁師佐次郎の娘として育つたきぬは、浅草猿若町三丁目道中師鎌倉屋勘七が、娘の容色に目をつけ、十兩で買ひ江戸に連れ帰り、芸事を仕込み、十六才にして鎌倉屋小春の名で芸者に出した。十八才の時兵庫の灘酒造家高田屋吉兵衛が伴吉之助に落籍され、帰国途中「今切りの渡し」で、主人に対する忠義心より番頭幸助が海中へきぬを突き落す、幸いに荒井の磯へ打上げられた。土地の遊び人房吉に救われ、初めて知つた世の無情、おきぬが若旦那の妻になることは、芸者の身であるため大旦那に申訳ない番頭幸助の無情な忠義と、恩を笠に体を奪つた房吉の偽義侠心の経験であつた。

それならと捨て鉢になつたおきぬは、毒を制するには毒を以ての例、房吉に身を任せ、伴吉之助の嫁にするか、手切金を出すか、灘の高田屋に乗り込んだ。堅気の親父は驚き侠客藤兵衛を仲立に、きぬへ三百兩・房吉に二十五兩の手切金を渡した。二人は江戸に帰り、きぬは再び尾張屋小春の名で芸者に、房吉は情人となつて三年過ぎた。

おきぬ二十才の春、格子戸前に立つて乞食に報酬しようと玄関に出ると、乞食は何と父佐次郎であつた。彼女は親孝行を思い立ち、父を同居させる。父に生いたちを聞くと、佐次郎の妹小夜が麹町番町旗本へ女中奉公中、用人原田と通じ、そのため帰宅してきぬを出産、肥立悪く他界したので男手一つで育てたが、十兩で売つたことを謝罪した。その後親孝行の日夜が始まつたが、自分に目を向けられないおきぬを嫉んだ房吉は「風月の紅梅餅」に石見銀山を入れ父を毒殺、きぬは直ちに南町奉行所御用尾張屋庄吉(鼠小僧次郎吉を押えた)に通告、此処で彼女は石見銀

山毒殺法を知ったのであった。

下野国那須烏山三万石大名、大久保佐渡守が日本橋中橋で風呂帰りのきぬの姿に一目惚れ、横町黒沢玄達医者を仮親として、國元へ連れ帰った。漁師の娘が「御部屋様花代」として出世したのである。更渡川の桜狩の折、佐渡守酔って川中に落ちたのを、すばやく花代は激流から救う、それがもとで一層上下の家臣達の信用を得、その上安政四年世嗣「春若君」を誕生、後佐渡守没後は、若いので再縁を許され暇が出たが、小梅庚申塚の寮をもらい「真月院」と改名、下女お松並びに用人一名他下男二人と共に殿の冥福を祈り朝夕念仏三昧の日々を送っていた。春になって気がすぐれないため、玄達坊主の進めで夏箱根へ湯治に出かける。三週間予定が、気晴しで琴を弾いていると二階から、尺八を合せる音が漏れてきた。互に調子合う内、玄達坊主を通じ尋ねると、日本橋本町三丁目記の国屋の倅角太郎と云う。初めの予定が二ヶ月も延び、年下の若旦那と過すのである。江戸へ帰っても、小梅寮へ角太郎を引つけ、隣家まで買い移らせる始末、悪い事は長続きせずお玉が池の火事で伝馬町の牢払いとなり、逃亡中の房吉がおきぬの所在を突き止めた。そのため玄達坊主に頼み、房吉を隣家角太郎の家に連れ込み、酒中に毒を盛り殺してしまふ。それを見た角太郎恐ろしくなり、幸い隣家の近江屋助の娘お八重との縁談を機会に、おきぬかへ遠去かった。嫉妬の募ったおきぬは、再び玄達坊主に依頼、金になる事ならと小梅寮へ角太郎とお八重を招き、手切れの宴を開く。宴中ばにお八重に腹痛薬を投入、一時紀の国屋寮へ引き取らせ殺す計画の玄達は、お八重を無理に狼嚙を喰ませ、吾妻橋まで担ぎ橋袂で、御鷹匠小林金平他数名に怪しまれ捕われた。真月院の不行跡が大久保家に暴露、三百両の涙金で暇が出た。おきぬはその金を元手に、浅草仲見世で半衿屋を開業した

のであった。

正に事実は、小説よりも奇也」を地で行く物語である。大久保家の春若君は、後の志願公で大正三年五月一日五十才で没し、嫡子忠春子爵や四一人の兄弟姉妹は、おきぬの血を引き眉目秀麗であった。

明治五年六月六日町名改正で、石川島は佃島に合併される。翌六年二月二十五日には懲役場と改称、更に八年十九日因獄・懲役場が東京府から警視庁の管理に移され、九年二月二十九日石川島懲役署と改称、十年七月二十八日には、石川島監獄署と改称されるのである。従って、寄場時代の笞杖徒刑を改め、六年十一月二十九日監獄則を定め、十一年十二月二十七日市ヶ谷監獄署の禁獄人が当署へ移された。驚いたことには、十四年一月七日署内に、少年囚徒のための学校が設けられたことで、大要漸進的であった。十五年一月一日から、在監人を区別して、重軽禁固・重軽懲役者をも収容することに改められた。爾来二十八年果鴨監獄署が完成されるまで続き、三月を以てこの地から監獄はやっと消えたのである。

昔中国では、囚人に赭衣を着せたのをヒントに、日本でも寛政二年春から盜賊奉行長谷川平蔵が柿色の着物を囚人に着せて、大川筋の工事に使役させた。それは赭衣を水玉に染めぬいて逃走を防ぐため、全員同じ衣を着せ明治になっても変えなかった。明治十六年二月八日大雪、当日の新聞によると「東京馬車鉄道会社で除雪に困り、警視庁へ頼み、石川島の懲役人百人の衣服をして買った。背中に「懲」の字を丸に染めぬいた柿色の衣服で、二人ずつ鎖でつながれ懲役人の除雪は、その日銀座通りの一異彩だった。」とある。しかし当時の佃島住民達は、晴れた昼休みに、この柿色を着た徒刑囚達が、藁の囚人帽を冠り鎖を

鳴らして、日向ボッコひなたぼっこをしていられるのを見ると、怖くて怖くてたまらなかつたと古老達から聞かされたものだ。とうとう実際に起つたのは、明治十二年八月三十一日正午頃、服役中の終身懲役囚高橋方五郎他十九名が脱獄して大騒ぎとなった。翌日二名を捕縛したと新聞に出ている。そのたてまか十四年三月佃島、警察庁巡査本都宛、警察出張所の設置を願ひ出る。

それ以来戦前まで佃小橋西側袂に、交番が設置されていたのである。実際に困つたことは、江戸時代より「石川島人足寄場」と云わず、「佃島の獄」と通称呼ばれていたことである。そのことは、「此の地佃島とは元より別島なるに、今佃島の称を及ぼして石川島の名を廃せしは如何にや」と江戸誌にも出ている。

昭和三十八年六月北海道旭川市で全国社会教育大会が行われ、東京代表で出席した私は、分科会席上自己紹介の折、佃島について五―六名の方から質問があつた。司会者は特に時間を許して三十分位説明の指名を受け回答したが、真逆最果てに来て「佃島」について話そうとは夢にも思わなかつた。

帰京後知人であり町に住む丸清治氏(故人)宅に、みやげ話で訪問した。先客の佃一丁目町会役員の方から、三―四日後に佃・新佃東西の三町会役員が集まり、最終的に佃島町名を「住之江」か「住吉」に決定することを話された。私は北海道での経験話をし、町名変更の理由を尋ねた。役員さんは六十才になるまで、多くのいやな経験をした由、現に今年Mデパート入社試験に、娘の学校から六名受け、自分の子だけが落された。何か知人を通して聞くと、佃島出身だからだと云う。あそこは犯罪者の町だからと、明治の「佃島牢獄」の話をしたと云う。昭和になつても未だ誤解があるから、子供達将来のためにも町名変更すべきであると云う。

私はポロイスカウト達に、住んでいる町に誇を持って教えて

来たが、あなた方親達は、佃島に対する認識と誇を捨てるので、役所から変更せよと云われ、はいそうですかと二百年の歴史を捨てるので、佃島が「住之江・住吉煮」に変わりますか? 朝まで口論したものだ。町名変更に賛成された方々は、「佃」と云えば「あー牢獄」そこで育つた云う事は、犯罪者関係の後裔と勘違され、特に入学・入社試験に汚点となる経験が多かつたからである。従つてせめて学校だけはと、築地明石小学校や月島第一小学校へ子供を入学させる親が多かつた。

今は、胸を張つて「佃島」と云える時代になつたのである。明治末期から監獄跡も工場や倉庫、それに伴う家族達が住む様になり、大正七年十二月十三日午後四時三十分佃島に火事が起り、工場五棟、倉庫二棟等十五戸焼失している。原因は漏電であつた。

私の子供時代の石川島人足寄場跡は、石山他一軒の木工造船所があり、他に石炭が積まれ、「石炭場」と呼んでいた。倉庫を右に折れ左側に数十件の住宅と石山造船所を更に左に折れた、石川島造船所跡に、何時も延の掛小屋に髪や髯をぼうぼう伸ばし、常に本を読んでいた温かい乞食が居て、子供達は「石炭場の哲学者」と呼んでいた。午後三時になると決まつて旭湯へ入浴に来て、脱衣所で虱を潰す姿を今でも思い浮かべる。また現在佃一丁目から佃公園に入り、公園を築くため盛土してダラダラ上つた所に、寄場役所が二棟建てたことは、明治四年「東京名所四十八景」の佃島燈台の後に描かれている。そこは広場となり、狭い遊び場の月島幼稚園や狭い校庭の佃島小学校の運動会を行う場所でもあつた。

小学校三年の夏、私の家の裏に住む大木兄弟達から、石炭場へ釣に行こうと誘われ伴をしたが、歩きながら「河童が出るのを知つてるか」「うん、噂を聞いたことがある。」と話し合い、

住吉神社を対岸とした入江で糸を垂れた。大木兄は年上だから、得意になって最先端で釣始めた。太陽の火照が容赦なく、頭を焼きつける。

十分も経ったか、大声で「あぶない!!」と叫びながら川に落ちた。「河童だ河童だ。助けて呉れ!!」水泳の出来る五年生の大木兄は、アッパアッパ始めた。急いで釣竿を逆に持ち変え、兄の手にふれさせ、大木弟と一緒に手を伸ばし引こうとした途端、私の足元の石が四本の足を出して、蛙のようにピョンと弧を描いて川に飛び込んだのである。大木弟の顔を見ると、みるみるうちに真青となった。無事兄を引上げたが、「見た! 見た! 河童だ。」と大木兄弟は大声をあげる。直径二五釐位の凸凹した、どうしても岩を砕いて堤に埋めてある石に似た背をして、茶色の手足も開いた五本指の間に水掻がついていた。亀はピョンと飛ばない筈だ、況して弧は描かないだろう、今でも不思議に思っている。

余談であるが、私の伯父山内秀三郎夫妻には子が無いので弟が継いだ。幕末の山内家縁者を見ると、外国留学している者が多い。当時は留学試験に合格すると、將軍の御黒印辞令書を受け、希望国留学の命を受けるのである。幕府派遣留學生の内、祖父山内六三郎を中心にみると、

文久二年 オランダ留學生

林 紀 (号研海、弘化元年—明治十五年)

林洞海の長男、幕臣、ライデン大学及び軍医学校に学び、医学専攻、維新後徳川家達に従い静岡移住、静岡病院頭(沼津病院長) 後明治政府に出仕、松本順(良順)の後を受けて

第二代陸軍軍医總監となる。明治十五年アレキサンドル三世戴冠式に列席中、フランス・パリにて猩紅熱より腎臓病を引起し死亡、甥に当る。

榎本釜次郎 (武揚、天保七年—明治四十一年)

武則の長男、幕臣、オランダにて海軍学科を学ぶ、長崎海軍練習所に留学、前学及び、帰国後海軍操練所教授、研海の妹婿 従って義理の甥に当る。詳しくは後述。

赤松大三郎 (号則良、天保十二年—大正九年)

吉沢政範次男、静岡藩、オランダ・ドルトレヒト、アムステルダム造船所で修業、海軍学科を学ぶ。「御詠船製造中諸術研究」の一員であったため留学、帰国後沼津兵学校一等教授維新後兵部省出仕、海軍造船技術に寄与、横須賀鎮守府司令長官、男爵、研海の末妹婿従って義理の甥に当る。

慶応元年 ロシア留學生

山内作左衛門 (天保七年—明治十九年)

豊徳長男、ロシアにて国法、法制を学ぶ、帰国後榎本軍に出仕、後資生堂開業、兄に当る。

慶応二年 イギリス留學生

林 董 (董三郎、嘉永三年—大正二年)

佐藤泰然五男、姉婿林洞海夫婦の養子、子供の頃へボン塾にて英語修学、佐倉藩、英国にて医学専攻、帰国後榎本軍に出仕、後外務省に七等出仕、各県知事、英国大使、外務大臣

等務む、伯爵、從兄弟兼義弟に當る。

慶応二年 オランダ留学生

緒方平三（哉哉・惟準、天保十四年 明治四十二年）

緒方洪庵次男、幕臣、長崎でボンペ、ポードインに学ぶ、オランダユトレヒト大学にて医学専攻、帰国後陸軍医、侍医、大阪医学所校長、同校附属大阪浪華病院長、姪の習従って義理の甥に當る。

松本銚太郎（嘉永三年 明治十二年）

松本順長男、幕臣、私費で留学、化学を専攻、ヘラタマの門、開成所ドイツ語教員、帰国後文部省、大阪舎密局員、日本化学の草分け、甥。

慶応三年 フランス留学生

山内六三郎（号提雲、天保九年 大正十二年）

豊徳三男、幕臣、民部大輔一行の一員、砲兵差図役動方、運上所（税関）勤務、帰国後榎本軍に投じ後、沼津兵学校一等教授、北海道開拓使から外務省、逓信省、宮内官、鹿児島県知事、八幡製鉄所（新日鉄前身）初代長官、等務む。

右の者中、ロシア留学生山内作左衛門は、体の弱いこともあり、明治五年六月日本橋本町一―三四に西洋薬舖「資生堂」を開業、隣家に診療所を開設した從兄弟の佐藤尚中（佐藤泰然の愛弟子で娘登養子となり、現在の順天堂病院を創設）と松本順（佐藤泰然の次男で松本良甫の養子、榎本軍に投じ後初代陸軍

軍医総監）の共援を得け、当時宮内省御用達菊型の蚊取線香など納める程で盛大であったが二年後解散（雇人の福原有信、前田清則、矢野義徹達は後、銀座出雲町に資生堂を出店する。）小網町に移転し山内六三郎の次男秀三郎に店を継がせ、大正になり深川不動尊前へ再移転した。関東大震災で「資生堂」の看板（中国人の彫刻で秀作品として有名であった）を焼失、薬舖名も銀座の資生堂と紛らしさを避け「不動薬局」と改名、戦禍まで続いた。伯父秀三郎は戦災死したが、生前薬局経営の傍、能楽に精通し梅若流（現在観世流と統合）の三羽鳥の一人と云われ、岩崎家、森村家、木徳家等の弟子を持ち、出稽古で結構忙しそうに立ち回っていた。中でも神奈川県大磯の別荘で、遊び友達先代五世中村歌右衛門に師事し、当時は能楽師が歌舞伎役者に能楽を教えることは禁じられていた。

祖父山内六三郎（号提雲）は、文久元年六月神奈川奉行手附翻訳方から、同三年池田筑後守使節一行に加わり、ヨーロッパへ、更に慶応三年パリ博覧会へ徳川民部大輔一行に加わり、同時にフランス留学生となるが幕末異変で直に帰国し、榎本軍に兄作左衛門、弟徳三郎、從兄弟の松本順、林董達と共に投じ、明治二年五月降伏後、十月函館台場に移され禁錮に服し、翌三年四月十日解かれて直に開拓使に出仕後、鹿児島県知事や初代八幡製鉄所長官を務めた。

榎本釜次郎武揚は、伝習所卒業後、江戸の海軍操練所教授となり、文久二年から六年間オランダ留学帰国し、慶応三年軍艦奉行となり秋に留学友人林研海の妹多津と結婚、明治元年江戸城明渡し後、艦隊と旧幕殘党を率いて、同年八月品川沖を脱走、箱館五稜郭に籠り、徳川残党救済のため蝦夷地開拓を歎願したが入れられず、明治新政府と戦い、世に云う箱館戦争となる。

明治二年五月十八日降伏恭順して品川沖船中で謹慎していた

が、東京鍛冶橋辰の口牢獄に二年近く、後「石川島徒場」に服し、明治五年一月六日特赦により放免されている。直に開拓使に出仕し、同七年ロシア公使を皮切りに運通信・文部・農商務大臣等歴任、子爵に被せられた。

彼は、明治十二年頃から築地一丁目東川端で、寄留地の対岸に住んでいたのも何かの因縁なのかも知れない。

石川島追憶

灯台 ともしび 江戸から明治

文明開化の 光を照らす

大正・昭和は 渡し船

造船技術を 世界に示し

時は流れて 高層ビル群

平成佃を 世界に伸す

(旧跡) 石川島灯台跡

人足寄場が地域に役立ったことは、この灯台だけであった。

江戸の賑わいが急がしくなればなる程、隅田川を上下する船の数は増加してゆく、況して佃島漁村は当然ながら、深川佐賀町の米倉、霊岸島の酒倉、日本橋の矢の倉、隅田川兩岸は蔵(倉庫)が大部分であれば、全国物資が廻漕され益々股賑を極め、船も和船の一番大きい千石船も出入する様になれば、その河口には常夜灯は必要となる。

慶応二年石川島人足寄場奉行清水純崎が、隅田河口や品川沖航行の船舶のために、監禁者の労作した油搾めと炭団の純益金の中から、石川島人足寄場の一角に灯台を築かせたのである。

そのため、江戸湾出入の船乗りや漁師達は、金品を献じて喜ぶの心持を現わした。日本橋魚市組合でも、むしろ感謝して、金五拾両を寄付したことが、慶応三年三月「海表爲目的常夜灯取立に付」と組合沿革紀要に記されている。

風雅な格好の灯台で、二代広重の写生図をみると石垣の上へ築山を造り、築山に木々を植え込み、その上の六角形の練堀塔を乗せたもので、工事に当り奉行は、筋違御門外に住む石工磯吉に命じ、海中に突出している堤防の石垣を、丸の自然石で玉垣のように築きあげる条件を出したところを、丸を積み重ねて、似て不可能と断られたため、奉行自身監禁者達に指図して、一個一個丁寧に横上げていった。数日後磯吉は気になり見に行くと、ノミも入れずそのまま自然石を築いている作業を見て、謝って自然石組立法を奉行から習得し、完成したのである。また寄場で搾る菜種油を灯すため、大きな行灯型の灯室には、障子紙ではなく、長崎の透明な羊皮を張った行灯を真似て、羊皮を張った。その光力は、三里位先まで届いた程で、現在の佃公園川岸、住吉神社横船溜りの水門脇に燦然と光を灯したのである。後磯吉は、この経験を生かして維新後、九段の灯明台や駿河台屋敷石垣等に、この自然石組立法を応用している。

清水奉行は、灯台落成に、工事を働き出した徒役人を慰めるため、五月十日数百名解放して汐干符を開催終日遊業させた。太陽が愛宕山影に沈む頃、灯台の火皿窓から首を出し、扇を開き一同を招く、徒役人は一人も逃じする者が隠れていた。実は沖に舫った苦船に、菰をかぶって寄場役人が隠れていた。扇の合図で一斉に姿を現わし、菰樽を運び揚げ、徒役人達に大杯一杯ずつ酒を振舞い、飲めない者には菓子を出し、灯台の火皿室にも酒樽が据えられ、重ねて振舞ったのである。爾來毎年五月と九月に遊業と灯台見物が行われ、徒役人達は、正に地獄で仏

に逢う如く待ち焦れたと云う。

実際は灯台建設に、かなりの工事が掛り、油搾り益金だけでは不足し、その後の灯台維持費もあつたことをみると困窮し
たらしい。従つて永続せず、数年にして取り壊された。昭和五
十年旧跡調査の折も、跡形も残っていないので発見出来なかつ
た。

現在は当時の灯台を模して、手洗所兼用であるが、夜は明り
がつき川を上下する観光船や作業船の人々の目に、江戸情緒を
偲ばせてくれている。

石川島灯台明

夜の とばりの 始め頃

屋形船が 上下して

世俗の 憂を 振り払い

川に流れて 氣ばらしを

灯台だけが 知っている

夜の とばりが 終る頃

ビルの窓々 灯も消えて

あきらめ 早い 江戸ッ子の

川は明日へと 流し込み

灯台だけが 知っている

夜の とばりの 明る頃

氣早の かもめが 対をなし

橋の上には 人づれの

ささやく 愛の 口づけも

灯台だけが 知っている

(旧跡) 佃島砲台跡

時は幕末、国内は尊皇攘夷倒幕と社会的封建制度変革の上下
騒然たる社会相のもとに、一方眼を外に転じて東西諸外国の東
洋進出を觀ると、日本の風景はいよいよ急を告げ、国内の人心
も又騒然たるものがあつた。

北は寛政五年(一七九三)露艦が松前へ來たりて通商を求め、
寛政十年(一七九八)に再び蝦夷へ、更に文化元年(一八〇四)
使節が長崎に通商を求めたが、すべて幕府はこれを許さず、文
化五年(一八〇八)英船長崎の入港に際し港内刺掠され、長
崎奉行松平康英はその責を自負して謝し、後弘化三年(一八四
六)米国東インド艦隊司令長官ジェムス・ピッドルが浦賀に入
港し通商を求めた。幕府はこれを拒絶、時米因はメキシコと戦
い、カリフォルニアを獲得し太平洋岸に進出したため、サンフ
ランシスコと広東間の航路が開け、そのため薪水供給所として
日本の開港を求めた。四隻の艦隊をひきい嘉永六年(一八五
三)琉球に來航、小笠原島の港灣測量、捕鯨船の避難所の良否
調査を行い、五月末那覇を出航、六月三日浦賀へ來航、ペリー
は大統領ファイルモア書簡を持参したが、浦賀奉行は長崎にて外
交するよう説得したが聞き入れず、その旨老中の指令を仰いで、海
の早舟、陸の飛脚の往來ひきもきらず、江戸の大都會も、忽ち
修羅の巷となつたのである。

四日には幕府は、大森と羽田御台場は萩藩、品川御殿山は福
井藩、芝高輪辺は姫路藩、佃島・鉄砲洲は徳島藩、深川は柳河
藩、大島は岡藩、浜御殿は高松藩と鉄砲方に、その他江戸湾沿

岸に対し各々警固を命じ、米国船内海乗り入れの折は、藩主が出馬するよう指令した。そのため諸家が担当地区の警備のために陣小屋を建てたため材木代は挙り、大工の間は一人一日銀十五匁、他手伝い人足・運送費等諸物価が暴騰した。混乱の町中で、

「泰平の 眠りをさます 上喜撰(蒸氣船)

たった四はいで 夜も寝れず。」

の狂歌が出た。「上喜撰」とは宇治茶銘、「四はい」は茶四杯と四隻をかけたものである。

「武具 馬具屋 アメリカさまと そっと云ひ」

の狂句は、武器商を指している。

六日には米艦「シッピー」は、江戸内海を測量しながら小柴沖まで進入、老中ら驚き夜間登城、国書受理を決定する。

八日には米国船内海に入れば、老中より八代(重)洲河岸火消役へ通達、早半鐘を鳴らし、内火消屋敷、大名火の見櫓も一勢に早半鐘打ち鳴らし、諸役人は火事装束にて登城又は持場を固め、町方でも半鐘を打ち火消人足を集めおくよう、又異国船見物に船で出掛ける町人もあるため、海岸・川通船等船主は出航せぬよう厳達した。ペリーの「日本遠征記」によれば、十日に米艦が入ると、ボート近く之日本船が漕ぎ寄せ、身ぶり手ぶりで歓迎茶振りを示し、水や梨を提供する者、タバコを交換する者があつたと記されている。物見高いのは、昔も今も変わらないのである。その十日に羽田沖まできて湾内測量を行い、日暮れには海上で大砲を放った。砲声は遠く房総の山に響き互り、高輪・芝・築地・鉄砲洲方面の老幼婦女は避難を命ぜられ、武士は陣立・火事装束で受持場所の警戒に當つたのである。ペリーは、十二日に江戸湾を退去している。

翌嘉永七年改元されて安政元年(一八五四)正月十四日ペリー

は江戸湾頭に現われ、サザブトン号を内海に進入させ小柴沖に錨を降ろし、十六日に全艦七隻小柴沖に集錨、そのため町奉行は市民の動揺をいましめ、また品川御殿山は金沢藩、芝は福井藩、高輪は津山藩、羽田は徳島藩、大森は松山藩、佃島・鉄砲洲は姫路藩、深川は桑名藩等に警備を命じた。若し米艦に異変あれば、早半鐘は止めて、今度は早盤木を打ち、出火の場合は大鼓又は半鐘と改めた。市民のアメリカ船見物を、海上は勿論陸上にも禁止を度々出した。

二月十日横浜で会議が始まり、三月三日日米和親条約締結調印これを端緒として、安政五年(一八五八)通商条約が結ばれ、日本は欧米諸国と外交・経済等深い関係を持つようになるのである。

これより遡ること嘉永四年(一八五一)四月九日、毛利藩江戸屋敷に到着した吉田松陰(二十二才)は、初めての江戸出府で旅行好きの彼は直ちに江戸の観察を始めるが、先の長崎の旅で隣国支那に於ける「阿片事件」を聞き、日本の現況の危険を察し、先ず近代知識を身に付けんと江戸中の塾を捜し求める。

天保十三年(一八四二)佐久間修理(象山)は、信州松代藩主真田幸貫に提出した上書に「若し英国が阿片戦に勝利した余勢で、我が国に通商を求め来たらば、之を許せば城下の盟をすると同じであり、之を拒否すれば戦争となり、勝利の見込なし」と、当時多少とも世界の情勢に通じる知識人の考え方であった。仙台の儒学者斎藤竹堂は「鴉片始末」を著わし、秋田の経済学者佐藤信淵も「存華挫扶論」で阿片戦争を論じ、嘉永二年(一八四九)阿片戦争記「海外新話」や「海外新話拾遺」等も刊行され、儒者で高名な安積良斎・大槻磐溪等も阿片戦争を論じ日本本に及んでゐる。もはや阿片戦争は対岸の火事でなく、火の粉が何時日本に飛火するや、吾が身に振りかかる問題と感

じとられていたのであった。

松陰は取り敢えず同月二十五日安積良斎塾に入門文学を学びながら、五月二十一日家業を継ぐべく山鹿素水の素水塾にも入門する。それに飽き足らず夏、佐久間象山塾に入門した。象山は、嘉永元年（一八四八）既に三十八歳の頃から洋砲式の製造にとりかかり、砲術や海防ばかりでなく、電流を研究して電池や地震計等も考案、特に電気の実験は平賀源内の摩擦電気でなく、電池や電磁石を造ることに成功していた程で、嘉永四年（一八五二）江戸木挽町で砲術教授の塾を開いたところ、入門者が一二〇人に及んだという。西洋流兵学が争って求められるようになったのは、迫り来る危機に対する用意でもあった。松陰も飛びついて世界情勢と国防知識を学んだのである。

「浦賀へ黒船が来た由、私は唯今より夜船で参ります。海陸共路留になるかも知れぬ風聞のため、心甚だ飛ぶようです、飛ぶようです。」

嘉永六年六月三日午後五時、四隻の黒船浦賀沖に現わる。黒船来たる！ 報は、忽ち江戸へ伝わる。吉田寅次郎（松陰）は、十日程前に二度目の江戸出府した許りであったが、父の友人長州藩瀬能吉次郎宛書を寄せたのである。

五日の夜十時頃浦賀に着いた松陰は、翌朝日の出と共に丘へ登り、四隻の黒船を目のあたりに見て、二隻の蒸気艦と二隻の帆走艦の姿を眺めながら、明後日正午まで黒船の申し入れを聞かねば、大砲を打つ噂を耳にしていたので、この一戦は先ず勝算はあるまいと思つた。

松陰の「幽室文稿」に「癸丑六月に夷船の来りしとき、余江戸に遊寓す。警を聞きて浦賀に至り、親しく陸梁の状を察し憤激に堪えず。謂らく、大いに懲創を加うるに非ずんば、則ち以て国威を震耀するに足らざるなりと。江戸に帰るに及んで、同

志と反復論弁す。」とある。彼は国防に対する考えの必要を痛感し、江戸の防備を考えた時、直ちに佃島へ渡り、湾岸の觀察をするのである。当時の渡し場は、住吉神社銅巻明神大鳥居の下、「住吉口」であった。手漕船が着くや岸へ飛び移り、恐らく人の意見を求め好きな彼は、住吉神社宮司とも語り合ったことであろう。佃小橋を渡り向町の最南端に至り、台場築構の必要を考えたと著である。

象山と松陰の対話がある、師「未だ砲台海澤を環らすを見ざれば、南風四月甚だ心に関る。」松陰「砲台を品海（品川沖）に築けば一則ち曰く「曠昔の戲談宋堞に憑る、當今の急務元戎にあり。」更に師は「曠昔の戲談宋堞に憑る、當今の急務元戎を得て聖東に下らん。」と松陰を唆かしている。即ち「蘭船に付して海外に出だし、それらをして便宜事に従い以て艦を購わしむべし、則ち往返の間、海勢を識り、操船に熟し、かつ万国の情形を知るを得ん、その益たるや大なり」と。松陰は「因つて窈かに建白する所あり。然れど官能くこれを断行すること無し、予が航海の志、実ここに決す。」純粹な松陰の気概は、ついに安政元年（一八五四）三月海外渡航を計画し、下田から米艦に便乗しようとして失敗、帰藩後松下村塾で青年教育に心血を注ぎたった二年間の教育期間であったが、久坂玄瑞、高杉晋作、前原一誠、山県有朋、伊藤博文等維新前後の俊秀達がその門から傑出してゐる。

安政五年（一八五八）幕府の仮条約調印を怒り、攘夷倒幕を企てて再び下獄し、江戸に送られ、安政の大獄に連座し、安政六年（一八五九）十月二十七日従容として刑についた。奇しくも、中央区日本橋小伝馬町十思公園内に「吉田松陰先生終焉之地」の碑が建立されている。行年三十才、処刑近しと知った松陰は、十月二十五日より翌日黄昏まで書きあげた「留魂録」冒

頭に次の詩を記した。

「身はたとひ 武蔵の野辺に 朽ぬとも
 ぬめ置かまし 大和魂」

米艦が去って二ヶ月後、嘉永六年（一八五二）八月、御台場の建設が始まる。葦山代官で洋式兵術を始めた江川太郎左衛門英竜が、エンゲルツの製城書「ゼイアルチルレリー」を参考に、台場の企画・設計、模型を作製し献策したことにより、七月幕府は急速台場築造を決定したのである。阿部正弘以下老中、若年寄が直接指揮したためか、八月には第一から第三台場を起工し、翌年には竣工した早さであった。

それは品川海中に十一ヶ所台場を築き、大筒を設え外船を撃攘すると云うのである。

海岸より二十町から四十町の海面を埋め、六角形又は五角形のもので、面積各二千三百坪、満潮時海面より一丈（約三米）前後の深さの所に築いた。土は泉岳寺の山、松平駿河守の下屋敷の山、品川御殿山等を切りくずし、海岸より船で運ぶため、昼間は東海道の高輪通りは通行止め脇道を通らせ、御台場に設える大筒は、当時諸大名が大筒製造に力をつくしていたので職人が欠乏、江戸の鋳物師は、出来上りの貫目一貫目に付き平均金一分永五〇文ずつ、川口鋳物師は金二分永一七〇文と倍以上のため、江戸鋳物師が当った。

御台場での防衛自信について、勝海舟は「幕府の当局者が江戸の人心を静めるためにやったことであるから、地理を考えず、築造方法が良くなかったのも、精査する時日の余裕がなかったためである」と後日記している。工事は難渋し、「死んでしまおうか、お台場に行こうか、死ぬにや増しだよ、お台場の土かっぎ」と叫ぶれ、賃銭は悪くないので「お台場で土かっぎ、さきで飯喰うて、二百と四文、ありがたい、ありがたい」と俚謡も

出来た。海岸町は大騒ぎで、出船はもとより、関東近村海岸、川附の村々から荷船をも雇いあげ土を運ぶ、監督の役人は、小船に日の丸を立てて通った。

霜枯に その品川の 賑やかさ

龜甲形の 島が十一

つく鐘の 六つよりいでて お台場の

十依重ねて 島となりぬる

御台場は十一造る予定が、第一、第二、第三、第五、第六の五つを造り、第四は経費の關係上途中で中止した。築造費は一つが五千両から一万二千両位の予算であったが、幕府では嘉永五年（一八五二）五月に西の丸全焼、再建のため財政余裕なく、江戸・大坂の町人や幕領の村々の富農達から上納金を出させた。葦山代官江川太郎左衛門は、村々から多くの上納金を出させたので褒美をもらった程であった。備砲は第一台場だけでも二八門あった。御台場工事は、安政元年（一八五四）五月に、財政上のことで中止になったのである。

それでも江戸防備の充実を図り、元治元年（一八六四）に佃島砲台を築いた。東京通志によれば、「京橋区佃島南端海中にあり、東西凡そ三十九間（七〇米）南北凡そ四十間（七二米）、面積三七〇坪、元治元年幕府之を築き、明治に至り修理を加へ、陸軍に属す」とある。従って、嘉永六年品川沖砲台築造を始め、以来、十一年を経て、更に佃島砲台を築いたのを見て、幕府の江戸湾の防備充実に笑止なほどの焦りと周章狼狽振りが察せられる。

佃島砲台が構築されて隣接石川島造船所・水戸藩から大砲の

一部が献上されている。この大砲鑄造までには、一方ならぬ苦勞があった。藩主斉和の命で銅の欠乏していた水戸藩は、藩内の寺院の鐘や仏像を徴収し、これを鑄造して作った青銅製砲門である。砲門製造のためにオランダ書ヒュゲーニン著「鑄造法」を翻訳した南部藩士大島高任の指導で、嘉永七年八月那珂湊吾妻台地に反射炉を建設、安政三年三月出雲のたたら鉄を溶解して、初出銃することが出来たが、砂鉄の原料のため、銃はチタンを多量に含み、鑄造された大砲は脆くて破損する事故が多かった。そのため鉄鉱石から銃鉄する高炉を、安政四年五月鉄鉱石産地南部藩大橋で、やはり大島高任指導の下、我が国最初の洋式高炉が十一月に完成し、初出銃は十二月一日であった。製造された銃鉄は、早速水戸藩に送られ、反射炉で再溶解され、大砲の鑄造に成功したのであった。

これを記念して、現在十二月一日を「鉄の日」としているが、佃島砲台が製鉄製法に貢献したことになる。

昭和五十年史跡調査で佃島砲台の位置は、現在の月島一丁目二一九—一三番地の一部と想定される。佃大橋の完成前は、二番地の北側は佃川で佃島町から新佃島東町一丁目（現在の佃三丁目）まで、延長三・三・九米、巾員最広で二五・三米、最狭で一・九・五米の堀川で、その川縁に石垣が残っていた。

この石垣は、砲台の土止めであったと云われる。砲台台座は、元佃島小学校跡地内と推測されるが、今日残るものは何一つない。

営団地下鉄有楽町線「月島」駅を下車し、七番出口をでると月島共栄会商店街入口に当る。

右に区立月島幼稚園共設の区立マンションが建っており、私が四年生まで在学していた旧佃島小学校の跡地である。維新後陸軍に属したものの、実際に此の砲台を使用したのは、明治六

年（一八七三）十二月九日プロシヤ（ドイツ）から輸入したコロッポ砲の試射が行われたことだけであった。

明治二十年（一八八七）東京湾淺瀬作業と併行して月島築造工事が始まったが、その折埋立の基点となり、五年後一九、五八五坪の月島一号地が完成したのである。

幻の砲台跡

塩風薫る 江戸前の
白鷺降りて 白魚舞う
幕末風雲 波高し
築く砲台 夢の跡

世界に道を 拓かんと

文武励みし 学舎も

高層樓の 乱立に

築く砲台 夢の跡

超高層の 花火宴

橋梁四手 地下二足

人心往来 多々繁く

築く砲台 夢の跡

※四手とは、勝鬨橋・佃大橋・中央大橋・相生橋を指し、二足とは営団地下鉄有楽町線と都営地下鉄十三号線を指す。

築島の 基点となりし 砲台も

百年世には 文字燒の島

武蔵野武人

※ 文字と號は、やん・ん・の
句 五五年五月 和成る 平

六、大正ロマンの先駆け 佃三丁目

佃大橋には、鴉が似合う。たまに鳩が群がるが、野暮である。況して鳥は、グロテスクだ。雀は小さ過ぎて、橋に似合わない。鳥にも時間帯があるらしく、暁の空に一番先へやってくるのは鴉である。その頃橋上の街灯の光と朝日がブツかったコントラストに、やはり鴉が似合うのである。

近年佃のリバーシティ21や対岸の住友ビル、夜明けの太陽に映える聖ルカの十字架、更に超高層の聖ルカ事業ビル、隅田川河口がアッと云う間に超近代化したのが、これら建物にも、鴉が似合っている。

それなのに、そんなことには無頓着と、今日も隅田川は、悠々と流れていた。昨夜の雨のせいか、濁っているが満々と自信を持って流れている。

佃大橋を東に下り佃島へ入ると、丁字路に当たった道が清澄通りである。左に折れると、改築中の仮り橋梁「相生橋」が北東から、目の前へ迫ってくる。この大通りの右側が、佃三丁目である。この埋立は明治二十三年に工事が始まり、同二十九年竣工して、新佃島東町と呼ばれた。交叉点を右に入り、佃大通りを南に進むと、土手に突き当たる。子供の頃屢々この土手にのぼって、初日の出を見に来たものだ。遠く千葉の鋸山の峰々が墨絵の様に見え、青い海原と良くマッチした景観が、今でも脳裏に焼付いている。

また子供達は、対岸の晴海埋立地まで、水泳の練習に往復した川でもある。昭和十一年頃の佃島小学校は、「水泳」東京一と云われ、大会には常に優勝をしていた。今は防潮堤が高

く、土手の前には大きな石碑が建っている。

(記念碑) 海水館の碑

碑の表面に「海水館、明治学院長武藤富高書、島崎藤村、春執筆の処」と刻まれており、高さ一八一厘、巾四四厘ほどの長方板自然石である。奇しくも、院長武藤先生は、私の予科時代の英語教師であり、令息は、私と大学の同期生でもある。裏面は、次のことが記されている。

海水館の記

海水館は、明治三十年代の終り頃から坪井半蔵によって、此処に営まれた割京旅館である。当時房州までも一望の中に拘えた雄大な景観と閑静な環境を愛して、島崎藤村、小山内薫、市川左団次、日夏耿之介、佐藤惣之助、竹久夢二、木村莊八、五島邦彦等の文人が次々に集い散じた。島崎藤村は、明治四十年の秋から四十一年夏にかけて、此処に滞在し、第二の長編小説「春」を完成した。わが近代文芸の夜明けの形成に参じた海水館の名の埋れんことを惜しみ、当市坪井伊三郎の望みを容れ、島崎藤村を同窓の先輩と仰ぐわれら力をあわせここに記念の碑を建てる。

昭和四十三年十二月

明治学院大学藤村研究所

昭和五十年、「中央区の文化財」史跡・旧跡・記念碑を教育委員会が刊行したところ、執筆の担当でもあったため、私の所へ藤村についての問い合わせが殺到した。これなら「中央区と島

崎藤村」と題して、稿を起そうかかと考えているが、未だその機会を持たない。それ程、島崎藤村への興味を持つ方々が、現在も続いているのである。従って、暫し藤村のプロフィールを語ろう。

銀座五丁目一番の泰明小学校入口にある自然石表面に「島崎藤村、北村透谷、幼き日ここに学ぶ」と記された記念碑がある。泰明小学校は、明治十一年（一八七八）四月に設立され六月二十五日開校、両氏は幼時にして上京し、この学校に席を置いた。

北村透谷（一八六一—一八九四）明治元年小田原に生れ、本名門太郎、政治家を志し自由民権運動に投じたが、十六才の折大坂事件で政界の醜状に失望、東京専門学校中退後文学に志し文筆生活へ入る。石坂ミナと恋愛結婚、同時にキリスト教に入信した。叙事的長詩「楚囚之詩」（一八八九）発表、続いて魂の遍歴の記録「蓬萊曲」（一八九一）「はたる」を世に出す。詩人、評論家、作家としても活躍、明治二十六年（一八九三）藤村らと「文学界」を創刊、みずから編集に当り文芸における自由主義を称え、その後「厭世詩家と女性」をはじめ数多くの評論を「女学雑誌」「平和」「国民之友」「文学界」等に発表、近代日本ロマン主義思想の先駆となり、特に「平和」では、最初の平和運動家となったが、翌二十七年二十六才で自殺、弥左衛門町（銀座西四丁目）に住んでいた。

蝶のゆくへ

舞ふて ゆくへを 問ひたまふ、

心のはどぞ うれしけれ、

秋の 野面を そこはかと、

尋ねて迷ふ 蝶が身を。

行くも かへるも 同じ関、

越へ来し方に 越へて行く。

花の 野山に 舞ひし身は、

花なき野辺も 元の宿。

前も なければ、後もまた、

「運命」の外には「我」もなし。

ひらくくくと 舞ひ行くは、

夢とまことの 中間なり。

北村透谷の影響を強く受けた島崎藤村（一八七二—一九四三）は、本名春樹、長野県木曾馬籠の本陣庄屋の七人兄弟の末子四男として明治五年に生れた。

島崎家は、馬籠の宿で本陣、庄屋、問屋を勤めた旧家である。父が「椿の木」を愛したところから、末子を春樹と命名した。その父は平田篤胤の門下で国学者であり、寺子屋を創り明治に期待していたが、明治七年十月十七日扇骨に頸の筋を記入して投げ入れ、直訴事件を起した。政府批判である。明治新時代に浮び上がることが出来なかったのである。

春樹の少年時代は、文字許り書くことが好きで、明治十三年（一八八〇）九才で上京、姉園子婚家先高瀬氏に寄留し、京橋鎗屋町から泰明小学校へ二才年上の兄と同年に編入、翌年姉夫婦と木曾福島へ共に帰郷し、十五年（一八八二）銀座四丁目同郷の吉村忠道氏方に寄留、再び泰明小学校に通う、北村透谷はこの年に小学校を卒業している。藤村は明治十七年（一八八四）十三才で卒業、ところが十九年（一八八六）永昌寺に放火した父が狂人となり、十一月二十九日五十五才で死亡、この「家系」は藤村に深い刻印を残し、父の悲劇的生涯が後の大作「夜明け前」の主題となり活写されるのである。

二十年（一八八七）に、吉村氏が日本橋浜町へ移転のため共に移っている。同年九月明治学院入学、キリスト教的雰囲気の中自由の気風に溢れ、山国から来た青年の心にロマン的志向を植えつけていったのか、男女交際にも入り、しかし突然行方を暗ましたが、別人の様になって現われた。それは「家系」からの苦悩からであった。又キリスト教の洗礼も受けたが、やがて信仰からも離れ北村透谷と交際するに及び、文学に目醒め、これによって自分の思いを表現出来たのである。明治二十四年（一八九一）卒業、巖本善治の知遇を得て、「女学雑誌」への執筆や「明治女学校」の英語教師（二十才）になる。ついで二十六年（一八九三）北村透谷、戸川秋骨、星野天知、馬場孤蝶、平田亮木らと「文学界」を創刊、同人となり欧米時代の新しい刺激の中で、詩劇や詩を発表、これが我が国のロマン主義運動の起点となる。心の余裕は初恋を産み、年上の女佐藤輔子は許婚があり、許されぬ恋であったが関西に出て、「文学界」には原稿は送っていた。この頃中心人物であった透谷の影響を受けていた藤村が東京に戻ると、透谷は理想と現実のギャップに苦しみ、若くして自殺した。藤村自身は、透谷の生き方と異なるにはどうすれば良いか、生き方への模索が始まる。正に此の兩者の生き方の対称そのものが、そのまま日本近代文学者達への運命に繋がるのである。

初恋相手が身重で病死をすると、失恋にからむ放浪生活の後、思い出の東京を去り、明治二十九年（一八九六）仙台の東北学院教師として赴任、いよいよ藤村の文学的活動の第一期が始まるのである。

翌三十年（一八九七）処女詩集、「若菜集」を刊行、詩人藤村時代を迎えたのである。この詩集は、日本近代詩の成立を意味する画期的詩集であり、更にロマン主義の曙を告げる記念碑

ともなったのである。鬱屈した青春の愁いを情感こめて美しい詩情に高めた功績は極めて大きい。

その詩集は全国的規模で読まれ、国民的作家藤村の誕生となったのである。

「若菜集」は作品五十編を収めた第一詩集で、「あけぼの」「初恋」「六人の処女」「春の歌」「秋風の歌」「醉歌」等多くは青春の情熱をこめた恋愛詩である。青春の感動をみずみずしく歌いあげながら、苦渋と悲哀にみちている。「初恋」はまだあけ初めし前髪の 林檎のもとに見えしとき 前にさしたる花櫛の花ある君と思ひけり……

彼はこの詩集より、初恋の人佐藤の「藤」をとって、藤村と名乗るのである。「文学界」では、「古藤庵」の名で執筆していた。

逃げ 水

ゆふぐれしづかに

ゆめみんとて

よのわづらひより

しばしのがる

きみよりほかに

しるものなき

花かげにゆきて

こひを泣きぬ

すぎこしゆめちを

おもひみるに

こひこそつみなれ

つみこそこひ

いのりもつとめも

このつみゆゑ

たのしきそのへと

われはゆかじ

なつかしき君と

てをたづさへ

くらし冥府までも

かけりゆかん

(若菜集)

後に続いて「二葉舟」「夏草」「落梅集」を刊行するが、この四詩集を合せて『藤村詩集』と称し、明治三十七年(一九〇四)四詩集を合せて一冊として出版、「遂に、新しき詩歌の時は来りぬ。そはうつくしき曙のごとくなりき……」に始まる序文は有名である。詩集が明治の新体詩を芸術まで高め、日本の近代詩を打建てた名作を残したのである。

明治三十二年(一九〇九)四月、詩人では生活が出来ず、長野県小諸に移り四年間小諸義塾教師を勤める。時に二十七才であった。

小諸義塾は、キリスト教徒木村熊二が米國留学から帰国、明治二十六年(一八九三)に創立し、十四年間存続した四年制の中学校で、同地方では唯一の学校であった。藤村にとっては、木村氏は恩師に当る。国語担当教師である彼は、写生文の試みを始め、多くの千曲河畔の物語を創り、詩から散文への転出を図った。又、恩師により畑冬子と結婚、明治三十四年(一九〇

一)『落梅集』を刊行、「落梅集」は、藤村第四詩集で詩二十四編、散文四編を収める。失われゆく青春へのやるせない嘆きをうたった「千曲川旅情の歌」(小諸なる古城のほとり 雲白く遊子悲しむ 緑なす繁葉は萌えず 若草も藉くによしなし)しらがねの衾の岡辺 日に溶けて淡雪流る……(略)をはじめ、「秋風の歌」「椰子の実」「労働雑詠」などの名編が多く、藤村の現実主義への傾斜が、詩から散文へと移る前の、青春への決別を秘めた傑作集である。従って「若菜集」にみられたみずみずしさから、次第に静かな詠嘆と憂いに深く沈んでいった詩情には、何か新しい世界に向おうとする藤村の姿勢が感じられる。ところが或る時、妻の恋文を発見、昔好きなお男のあったことを知り大変こたわった。それは「吾が胸の底にある秘め事」として、父が祖母妹と関係、母も他の男と不義理によって兄弟弥(三男)を出産、従って藤村は女性不信であった。小諸の生活は、月給だけでも喰えず、六年間の生活に見切りをつけ、明治三十八年(一九〇五)四月家族と共に上京、西大久保に移り全収入がない生活であった。貧しい生活の中で子供を亡くしつつ、大作『破戒』の稿を書き続け、翌二十九年(一九〇六)三月『緑蔭叢書』版として自費出版した。

折からの物興しつつあった自然主義文学の陣営はもとより、それと反対の陣営の中ですら、『破戒』は高く評価された。

『破戒』は、藤村の最初の小説であるが作家の地位を確立し、自然主義文学の先駆けとなった。部落民である小学校教師瀬川西松は、父の戒めを守って自分が部落出身であることを隠していたが、ついに自分の身分素性を告白し、渡米する。世間の無知や因襲と戦う青春の苦悩の物語である。彼の文学と生活をかけたの、出版であった。芥川竜之介は、書評に彼を『老獪な偽善者』と称したが、逆に芥川の師の夏目漱石は、感激して『叢

が止まらなかつたと云つた。

女優藤村志保は、「破戒」の主要人物から俳優名を当てている。

『第二のふるさと』小諸の自然と生活を愛し、「古城のほとり」や「秋の修学旅行」は、その描写が彫り深い人間像を刻みつけ、小説家藤村の将来を決定づけたと云える。

藤村文学第二期は、「破戒」以降「夜明け前」までの間、自然主義作家藤村の時代となる。

海水館にて執筆した青春の憂愁を画く、半自伝的要素の濃い第二の小説「春」（一九〇八）は、「文学界」時代に対する愛情が基調となつている作品で、「文学界」一派の青年達の、青春の哀歌を、体験をもとに描く。岸本（藤村）と青木（北村透谷）の二人が中心にされ、若者達の情熱や理想、あこがれなどが現実生活と矛盾相克し、芸術や人生に敗れていく。ロマンチックな情緒に満ちた作品で、「破戒」に続く初期の代表作であり、これより私小説的方向に転じたと云える。続いて第三の長編「家」（一九一〇）は、十一年かけて完成し日本の古い家族制度を追求し、それは島崎家と姉の嫁いだ高瀬家の「血の歴史」であった。藤村の描写眼は、すべて家の中に凝縮するのである。それは日本の家の重苦しい雰囲気、見事に描き出されている。

小泉三吉の生家小泉家と、姉のお種が嫁に入った橋本家と、二つの旧家におこつた種々な事件を中心に、二十年にわたる「家」の歴史が書かれ、伝統的な旧家が時代の波に次第に崩壊していきさまを細かに描出している。藤村自身を思わせる主人公が、古い「家」の伝統の重みから抜け出そうとして必死になりながら、結局どうすることもできない暗い宿命の中に突き放されて、作品は終っている。自然主義文学の大作である。大正元年（一九一〇）には「千曲川のスケッチ」を刊行している。

小品集であるが信州小諸付近の自然や農民の生活などを観察したもので、現実主義への傾斜を深めていた藤村が、詩から散文へ移行する時期の習作として、藤村の作家としての生涯に大きな意義をもたらした作品である。

現実の藤村の生活はどうであったか、西大久保へ移って一ヶ月目、更に翌年四月と六月に次々と娘三人が死亡し、すべての嘆きは行け、彼は悲しみから立ちあがろうと、同年浅草新片町に移り、男子出産に喜ぶ。また朝日新聞社より依頼もあり、前述の二大小説が執筆されたのである。しかし明治四十三年（一九一〇）八月六日、四女出産後妻冬子は死亡する、彼の廻りには余りにも死が多かつたのである。子供四人と姪二人を抱え再婚話もあったが、姪の姉「久」が外交官に嫁ぎ、残された姪妹の「駒子」と過失、懐胎させた事件から逃れるため、仏語を学ぶための理由で大正二年（一九一三）四月フランスに旅立った。姪駒子は子供を出産し、里子に出す。実父は、藤村である。

父の半生の悩ましと、私の半生の悩ましは同じであった。と彼は述懐している。一時帰国するが、「人間の理性とは何か？」を考ふる理由で再渡仏する。しかし此処で第一次世界大戦を日撃、大正五年（一九一六）帰国、元西大久保に住む姪駒子（二十四才）が待つて同居、この前後に書かれたのが明治学院時代を扱った「桜の実の熟する頃」や、告白的小説「新生」（一九一九）を発表、「春・桜の実の熟する頃・新生」共に藤村は、岸本捨吉と云う名で登場する。大正七年より朝日新聞に連載で出たため、藤村自身は姪との不倫事件を告白することで、「新生」を期した作品であったが、世の大反響が起り多くの論議が集中した。姪の駒子はいたたまず、台湾の兄の元へ逃げた。芥川は逆鱗したが、多くの友人は同情的であったのが未だしも心の安らぎであった。

飯倉片町に移り、家族五人でひっそりと暮し、子供達にとつて良き父親であった。従つてその頃の作品は、童話「眼鏡」「幼きものに」「一九一七」「ふるさと」「一九二〇」「おさなものがたり」「一九二四」等の童話集を刊行、新たな転回を示した。また感想集「飯倉だより」「春を待ちつつ」、紀行「海へ」「エトランゼ」等の作品もこの時代に書かれている。その上女性中心の雑誌「処女地」も創刊したりした。

大正十五年（一九二六）短編「嵐」を刊行、明治四十四年に妻を失つた藤村には、四人の子供が残され、子供達の各々が成人して新しい人生に向つて進んでいく過程を描いている。時代の嵐と内（家）の嵐に耐えつつ、子供の成長を注意深く見守る。思慮深い中年の藤村の姿がよく描き出されている。晩年の大作「夜明け前」の下地となる一連の自伝的短編の一つである。一部の批評家は、自然主義最高の作品と云っている。

大正七年に脳溢血で倒れた藤村は、父正樹を書こうと思つた。藤村文学第三期は、長編歴史小説「夜明け前」の制作・完成そして死に至るまでである。

「父を書くには、その時代を良く知らねばならない」それが歴史に重ねて「夜明け前」を書き始めたのが、昭和四年（一九二九）から昭和十年（一九三五）まで中央公論に連載、吾が家の歴史を遡つて探究することで、近代日本成立の基部に触れた大作である。

昭和四年から七年まで第一部、以下十年まで第二部を発表、木曾街道馬籠本陣の一人息子青山半蔵が主人公で、維新の変革期を背景に理想と現実の谷間に置かれた主人公の運命を描き、時代の波を被つた主人公の家は没落、苦惱の果に発狂した主人公は座敷牢で死を迎える。藤村の父が主人公で、父の生涯を通して日本の近代社会の夜明けを描こうとした。藤村最後の長編

で、スケールの大きさも、未完の「東方の門」につぐものである。この自伝的雄大な歴史小説は、藤村の円熟を示した傑作である。

藤村自身は、「維新前後に働いた庄屋、本陣、問屋の人達を中心に描き、時代の変革を下から見上げて書いた」と云っているが、「父とその時代」の探究をしたものであって、彼の最後を飾るに相応しい作と思う。

いつまでも夜が明けぬ。その近代日本の重苦しさをそのまま証明しているのが藤村文学であり、亀井勝一郎は「藤村の生涯とその歩みを、家を背負つてノロノロ歩む蝸虫」に例えている様に、藤村の文章も同じくスローテンポの思い入れの多いものであった。

「一切は、神の心であろうとござる。書き終つた時、六十三才の彼は、始めて人前で笑つたのであった。」

昭和十年（一九三五）「夜明け前」を完成した藤村は、同年初代日本ペンクラブ会長となり、南米に旅行し翌年帰国している。

昭和十八年（一九四三）「夜明け前」の続編とみられる天の岩戸の序章から始まる「東方の門」を中央公論に連載開始、序章を発表し、三十三章五節まで未完、原稿用紙四十九枚目であった。

同年八月二十二日、大磯の別荘で「東方の門」原稿を夫人に読んでもらっている中、急に頭痛がすると云つて寝たまま永眠した。残念乍ら日本人の心の原点を、明治維新の長崎を舞台に日本の風雲時代を描こうとした構想雄大な小説は、日の目を見ず絶筆となり、彼は自分の理想を描き、その理想の中で死んで往つたのである。「一筋につながるものがなかった。ゆける所まで歩いた。前日のように進んでいる」と、童話「餅力」に書

いてある。

彼の一生は殆んど東京中心で暮したが、外遊三回しており、晩年は二年ほど大磯の別荘生活をしていたのである。享年七十一才であった。

藤村を偲ぶ碑は至る所にあるが、特に有名なものは、長野県馬籠の藤村記念郷、同県小諸懐古園内藤村記念館、そして愛知県渥美郡恋路が浜に「椰子の実」詩碑がある。神奈川県中部大磯町南本町地福寺に墓がある。

私は屢々中央区立小諸学園で行われる各種指導者研修会や団体指導で、小諸に行く機会が多く、往復時には必ず懐古園に一人立寄り、天主台の西に藤村記念館前を通り、展望台にただずみ「小諸なる古城のほとり 雲白く遊子悲しむ」刻みのある「千曲川旅情のうた」の詩碑前で感慨に耽ったものだった。何故なら彼の小諸の生活は苦しく東京に移転、作家としての命運をかけた長編「破戒」執筆中、妻冬子が栄養不良から夜盲症にかかり、四十三年八月急逝し、その後して緑・孝子・縫子と三女を亡くしたのである。残された四人の幼い子供の養育を母に代って、やさしく語りかけた作品が童話として表現され、子への愛情を注いだのであった。従って、親としての自覚に目ざめた彼は、自分の父と己の姿を重ねた時、父親の苦悩を知り、父を書こうと決心したのである。

私の父は、古くから木曾御嶽教の信者であった。呉服の同業者でありながら神道大教正の資格を持つ古田光伯師は、名古屋「御嶽教照王教会」で教祖の養子にもなった関係上修業をし、深川森下町で「東京照王教会」を興し、呉服経営の傍、困った方々の救済をされていた。師の実兄森浜三郎氏も鉄道工夫から成り上がり、深川門前仲町で大正中頃から呉服店を開業、東京

商工会議所会頭まで成功されていた方で、その関係もあり東京織維界の卸売問屋関係や呉服小売業者の方々も教会に賛同援助をしていたが、父も同業者や交際小売業者の方々も教会に賛同援助していた。父が次第に信仰が深くなり、昭和六年頃からは十六年第二次大戦が始まるまで、毎年夏の御嶽参拝登山や冬腰まで積る雪を払い除けながらの霊場参拝登山へと、信仰が一層高まっていた。戦後昭和二十五年夏、私も父の代参として、既に教会は無いので鎌田女史（神道小教正）と共に参拝登山の経験を持ったが、木曾一帯では、昔から旧正月には「お座を建てる」と云って、家長を中心に家族揃って神棚に礼拝し、神のお告げを賜り新しき年の幸を祈るのである。殆んど旧家では、今日も行われている民間宗教の伝承行事である。藤村の大作「夜明け前」に描かれている庄屋の父の描写は、幕末から明治への御一新による変革で、奉行からの圧力から変わって新政府による命令と、その目まぐるしい変動に村の長として、如何に村民達を守りながら、それぞれに対応していったか、責任を一身に受け、最後には狂人化していく、謂わば時代の犠牲者とも云うべき姿は、当時の世俗をよく表現している秀作である。従って私の父の戦前戦後の変化に戸惑いながらの対応を見ると、藤村の父半蔵とオーバラップして「夜明け前」が、一層身近に感じられたのであった。

特に第一部半蔵が、父吉左衛門の病氣平癒を祈っての御嶽参籠で、彼が平田派の国学への傾倒であったから、神仏混合への疑問、純粋な意味から考えた場合の宗教への矛盾を考えながら行を終ったのではないかと思う。この事は藤村が明治学院でのキリスト教に接した時、純粋に宗教をとらえたからこそ、初めての小説に生活苦と信濃の教師の体験が、差別「破戒」を表現し、「夜明け前」にと進んだものと考えられる。

「木曾路は、すべて山の中である。」に始まるこの文は、木曾川の荒い溪谷を下り、伊勢湾から太平洋へ流れ出ていく様と、幕末から明治・大正・昭和へと発展する世界と併せて想像する様は、現代にも通ずるものがあると思う。然し自然主義の先鋒を行く彼は、再び木曾馬籠へと心は帰郷するのである。もし木曾路を旅する機会がありなら、御嶽山麓王滝でもよし、出来れば黒沢での神社参拝されることをお勧めする。

その折是非「夜明け前」を思い浮かべて頂きたい。

藤村の「春」を執筆していた佃島が、過去と将来の常に交叉している場所であることは、「夜明け前」に相応しいことの因縁さを物語っている。

藤村に寄せて

房総峯を 墨絵みて

「春」の のどけさ 走る筆

海原 遊ぶ 母子カモメ

隅田の 川土手 乱れ咲く

タンポポ 朝露 濡れていた

恋せし 妻を 失せしとき

路傍に 迷う 父子鳩

草笛 悲しく 耳に染み

千曲の 川淵 乱れ咲く

野菊は 露に 濡れていた

霞に 望む 御嶽に

夜明けを 知らず 親子鷹

杉や 松に 木霊して

木曾の 川岸 乱れ咲く

龍胆 飛沫で 濡れていた

木曾も 武蔵も 王滝と

発する 元は 異なれど

川に流れて 同じ海原

平成五年十一月文化の日筆

武蔵野武人

図らずも本年文化人切手に、島崎藤村が選ばれ四日発売された。

(建造物) 海 水 館

佃三丁目一一一九

町と云うものは、住民意識によって雰囲気が作られるものだ。新佃島(佃三丁目)の埋立工事が明治二十三年着工し、二十九年九月に二六、三三三坪を完成、現在の清澄通りを境として東西に分け、新佃島東町と新佃島西町の町名を立てた。西町には貸家長屋が多く、石川島造船所勤務工員家族が八割を占め、その家庭を対称とする商店街で構成され、東町は東河岸通りが別荘を含め一戸建家屋が並び他は貸家長屋であった。どう云う訳か子供達の世界は、佃島小学校学区が、佃島と新佃島西町並びに月島一丁目学校付近を対称とし、新佃島東町は現在でも月島第一小学校学区に属している。

従って東西町の子供の交流はなく、その上こんな狭い地域の中で、佃島や新佃島西町の住民意識は下町的であり、新佃東町

の住民は上町^{ウカマチ}的考え方の家庭が多く、明石小学校への越境入学も、新島東町の子供達の方が多かったのである。それもこれも大正時代の別荘意識が強かった理由かも知れない。

私の幼時期の頃、月島一丁目の佃島小学校が改築のため、現在の佃三丁目清澄通りと佃大通りの交差点北側角より相生橋^{アライハシ}扶にあって京橋区水練場まで仮校舎が造られ、丁度私の長姉が佃島小学校へ通っていた。何故か私は二才位なのに、長い髪を三ツ編にし、頭上にリボンをつけ、紫地に花模様^{ハナカズナ}の長袖の和服に袴と靴を履き、肩から濃いローズ色地に薔薇^{バラ}花刺繍^{イロゾリ}のついたピロード鞆^{タヌキ}を下げて、学校へ通う姿を覚えている。

それは母が口癖で語っていた日本橋十思小学校へ通った姿、髪をキリッと頭上へ一つにまとめリボンをつけたハイカラさんに似ている。

従って、その頃の東町南側は、低い平家や二階家の長屋が既に建っていたから、北側家屋は、学校移転昭和六年頃から建ち始め、今日の佃三丁目が形成されたと考えられる。

さて「海水館」は、嬉しいことに今も現存しているが勿論昔の姿ではない。碑の右隣が坪井宅であるが、川添いに同じ位置で割烹旅館でなく、アパートとして経営されている。

碑に刻まれている文人達の他にも、吉井勇、木下李太郎、松崎天民、横山健堂達もいた。何れも明治四十年代から大正にかけて、下宿された方々である。

私の父の話によると、この辺りは東京湾を見下ろす閑静な場所^{トコロ}で、別荘地として利用されていたと云う。恐らく坪井半蔵氏もそれを考えられて、下宿旅館を始められたのである。

その頃は、家がまだバラバラで今の清澄大通りから、あるのかないのか解らない細道が、原っぱを横切り、河岸の周囲は松林で、海に向こうには房総が一望できる景観は、別荘地に相応

しかったのである。

御子息伊三郎氏の話によると、初め敷地が二百二十坪あったが、関東大震災後その半分を「松の屋」に七千円で売り、更に信託会社が買い、石川島造船所へ二十一万円で売ったそうである。石川島造船所は、「黒潮寮」と名付け社員寮とした。

当時の旅館は、玄関を入ると真直ぐ廊下が奥まで続き、左側の客室は一から六番室が並び、右側は帳場・電話室・女中部屋と七番客室の順で、帳場の後に台所と風呂場があった。

一番室は、柳橋芸者置屋の主人が住み、島崎藤村がよく遊びにいらしていた。二番室は、三木露風、四番室が木村荘八達の利用で、二階は、丁度一番室の上が八番室に当り横山健堂、十番室は松崎天民、十一番室の小室には佐藤惣之助、大室には吉井勇が、又向い側の一階七番室の上に当る十三番室には、島崎藤村で後に紹介された小山内薫が使用、女中部屋の上に当る十八番室には竹久夢二や五島邦彦達が利用しており、全部で二十三番室あった。現在のアパートは二十部屋を貸室としている。当時の下宿代は、月額三円八十銭、坪井さんの困ることには、本屋から原稿の催促を如何に断わるかで苦労されたそうであった。文人達は自由人でもあるから、吉井勇や小山内薫達は、午前中散歩をし午後出かけると午前一時、一時にならないと帰らない、所謂午前様である。島崎藤村は、午前の散歩から帰ると初中終電話に追われ、夜十時半頃から執筆していた。又文人達の多いと云うことは、下書の紙屑が一パイで、焼いたり屑屋にやったりしてしまつたので、今考えると大変惜しいことをしてしまつたと述懐されていた。

そこで「海水館」を利用した文人達にスポットを当て、暫く大正ロマンに暮つてみる。

島崎藤村から紹介されて本館を利用した小山内薫（一八八一—一九二八）は、日本近代劇（新劇）運動草創期の中心的指導者で「新劇運動の父」と呼ばれ、ヨーロッパ近代劇の理論を日本に紹介して、演劇革新の実践につくした明治・大正の劇作家兼演出家、又詩人であり小説家でもあった。

陸軍軍医正を父として広島市に生れ、旧一高を経て東京大学英文科に進み、その頃から文学に親しみ、武林夢想庵らと同人雑誌「七人」を出したり、詩集「小野のわかれ」（一九〇五）を刊行、又「帝國文学」の編集委員となるなど森鷗外に認められ、明治三十九年卒業するや鷗外の第三木竹二の仲介で、明治四十年新派の伊井蓉峰や河合武雄の一座に参加、座付作者となる傍、雑誌などに劇評を執筆していたが、新派の世界にあきたらず伊井一座を退座、新しい演劇は新しい文学運動の上につきねばならぬと主張し、明治四十年（一九〇七）雑誌「新思潮」（第一次）を創刊して、海外文学や特に北欧の近代劇運動と戯曲の紹介につとめた。

更に歌舞伎でも新派でもない新しい演劇の創造を試み、欧州から帰国した二世市川左團次と組み、森鷗外らの支援で明治四十二年（一九〇九）「自由劇場」を創立、演劇革新の実践に乗り出した。従って丁度その頃「海水館」に下宿し、演劇関係者の往来も繁くあったのである。

十一月第一回公演には、イブセンの「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」を旧有楽座で旗揚げ上演、我が国新劇運動の先駆となった。

大正元年（一九一〇）年に演劇研究のため欧州に遊学、後も演出の脚本や小説の執筆に当たっていたが、自由劇場は、大正八年（一九一九）その活動を終えた。翌年松竹キネマに入社、映画「路上の靈魂」を監督、映画演出にも当り、更に雑誌「劇と評論」を

創刊して、ドイツ表現主義戯曲の紹介と門下の劇作家養成に当たっていた。

その頃演出俳優養成の研究目的でドイツに遊学していた土方与志が、関東大震災の報により留学途中で帰国、遊学残余費用を基に小山内薫の賛同を得て「築地小劇場」（中央区築地二一十一）を建設、大正十三年（一九二四）六月開場、最新の劇場設備をもつ、我が国最初の新劇常打劇場である。様式はゴシック・ロマネスク、建坪二六四平方メートル、定員五〇八名、舞台間口一三・二メートル、奥行八・二メートル、高さ一三・二メートル、鉄筋コンクリート造、舞台は四セクションからなり約二メートルまで下げ、観客席の頭上及び舞台両袖から照明をし、舞台の大部分を置舞台として変形白出、客席の一部を前舞台とし、舞臺の大部分を置舞台として。又客席の等級廃止、観劇者の低減、会員制興行を型とし、「演劇の実験室・民衆のための芝居小屋」をモットーに、近代的演劇創造のシステムを確立、俳優の汐見洋、友田恭助、効果照明の和田精、経営の浅利鶴雄を合せ六人の同人制で運営、演出者・装置者・照明等を養成教育しながら、月二回ずつ研究発表し、内外の戯曲を連続上演して大きな成果と反響をもたらした。彼はチェホフなど翻訳劇約五十作の演出を担当、又日本の創作劇をも意欲的に上演させ、今日の演劇発表の基礎を確立した。

昭和二年（一九二七）ソビエトの革命記念祭には、国賓として招かれていた。

昭和三年（一九二八）クリスマス夜の夜、招宴の席上で急死、演劇革新の業なかばにして倒れたが、坪内逍遙と共に新劇史上、先駆者として残した彼の足跡は大きい。残念ながら彼の死後劇団の離合集散により、大正十三年六月旗上げ昭和四年四月で終了である。築地小劇場は、第二次大戦中「国民新劇場」と改称され利用されていたが、昭和二十年の戦災で焼失した。

彼の主作品をみると、海水館で執筆した耽美的な自伝小説「大川端」（明治四十一年）、戯曲「第一の世界」（大正十年）「息子」（大正十一年）「森有礼」他、「演出者の手記」芝居入門」などがあり、大正十五年にはトーキー映画を初めて作っている。又特に記憶される演出には「桜の園」を始めチェホフもの、ゴリキーの「どん底」、坪内逍遙の「役の行者」などがある。享年四十七才、多摩墓地に眠っている。

小山内薫とコンビを組んだ二世市川左団次（一八八〇—一九四〇）は、演劇革新の先頭にたって活躍した歌舞伎俳優である。九世市川団十郎、五世尾上菊五郎と共に団・菊・左と呼ばれ、明治期三大名優の一人と云われ、初代市川左団次の長男として東京築地に生れ、本名高橋栄次郎、屋号高島屋、俳名杏花、四才で初舞台をふむ。明治二十年四月一この年八才になった左団次が、鉄砲洲神社に近い鈴木学校に入學した。芝居関係者の多く住んでいた築地や新富町に近いので、その子弟は大概この学校に通っていた。木村錦花や鏑木清方は三・四年の上級で、同級には、芝居茶屋竹田屋の息子で、後の河原崎権十郎や、まるで女のような装をしていた芝居茶屋上総屋の息子などがいた。（左団次芸談）明治三十七年八月七日、一世市川左団次が新富町で死去、享年六十三才であった。

明治三十九年（一九〇六）父の追善興行で二世を襲名、父の残した明治座の経営に苦心したが、約一年間欧米に遊学、ヨーロッパの近代劇運動に刺激をうけ、帰朝後友人であった小山内薫を説いて、明治四十二年（一九〇九）「自由劇場」と云う新劇団を創立した。彼がヨーロッパの近代劇運動として、フランス近代写実主義演劇の先駆をなしていた「自由劇場」を見て、我が国でもと小山内と共に興したのである。

当時支配的であった商業主義演劇に対抗し、ソラなどの提唱する自然主義に呼応して、A・アントアヌ（一八五八—一九四三）が一八八三年に創始したTheatre Libreの訳名自由劇場は、予約募集で三百名の会員を集め、常設劇場を持たず、実験的小劇場主義で、「人生の断片」を有りのままに描くことを第一義とし、イブセン・ストリンドベリ等の近代劇を紹介し、又、ホルト・リッシュ・ルナル他多くの劇作家をフランスに生んだ。その写実主義の行きすぎは批判されるが、欧州各国の近代劇運動に刺激を与え各地に自由劇場運動が起っていたのである。従って左団次と小山内の組織した日本の自由劇場は、文芸協会と共に日本の新劇運動の先駆をなすもので、第一回公演は有楽座で四十二年十一月二十七、二十八日にかけて、イブセンの「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」を上演、劇壇文壇はもとより、一般知識階級にも異常な感銘を与えた。従ってその頃海水館には、泊りながら小山内との打合せも多かったのである。このことは西欧近代劇を移植し、日本の近代劇を確立することを目ざし、又新人の創作劇の上演も若い作家や知識人に影響を与え、大正八年の解散するまで断続的に公演を行い、吉井勇、秋田雨雀などの作も取り上げたが、特にゴリキー作、小山内薫訳の「夜の宿（どん底）」は好評であった。

更に古い歌舞伎に飽きたら改革をころがけ、父ゆずりの堅実な芸風に独特の色気を加味した立役として活躍、岡本綺堂や真山青果とも提携して新歌舞伎のジャンルを開拓、歌舞伎界に新風を吹き込んだ。一方、歌舞伎十八番などの古劇を復活上演し、「毛拔」「鳴神」等線の太い独自の芸風の内に近代的な役の解釈を秘め、「毛拔」の衆寺彈正、「修禪寺物語」の夜叉王、「鳥辺山心中」の菊地半九郎、「元禄忠臣蔵」の大石内蔵助など当り役とした。没年六十才であった。

何時も小山内と午前の散歩を楽しんだ吉井勇（一八八六一—一九六〇）は、明治末期から昭和三十年代に至る長い期間に亘って活躍した歌人として、又その創作範囲は広く戯曲や小説をはじめ、歌物語・随筆から西鶴の現代語訳にも及んだ。

祖父吉井友実は鹿兒島藩士で、明治維新に功をたて、枢密顧問官に補せられ、父伯爵吉井幸蔵の次男として東京芝高輪に生れ、東京府立一中を経て早稲田大学文学部予科から政治経済学部に入り中途退学、明治三十八年（一九〇五）「新詩社」発刊に短歌を発表し、後石川啄木らの雑誌「スバル」を出し活躍、又森鷗外の「観湖樓歌会」にも出席した。明治四十一年（一九〇八）北原白秋・木下李太郎・石井柏亭らと友に「パンの会」を起し、退廃的耽美派の中心的存在として活動した。明治四十三年（一九一〇）酒と恋を歌う耽美派詩人と知られるようになり、題材を主として酒色の世界に求め、人生の哀歎を詠歎した第一歌集「酒ほがし」を発表、処女歌集であり勇の代表作でもある。酒と情痴にひたる蕩児の哀歌を直線的にうたったもので、明星派の流れの一新風として世にもてはやされた。その後大正期から昭和期にかけて、歌にまあたらしさはないが、すなおな感傷をうたった「昨日まで」、「孤園歌集」（一九一五）、「毒うなぎ」（一九一八）、「片恋」、旅の哀悲をうたった佳作「旅情」「夜の心」「鸚鵡林」（一九三〇）等多くの歌集を次々に発表し、戯曲にも「河内屋与兵衛」（一九一〇）、「俳諧亭白楽の死」（一九一四）等、長編小説では「狂へる恋」（一九二二）、「魔笛」（一九三三）、隨筆「生ひ立ちの記」等を発表して旺盛な創作活動を行った。しかし妻と離婚など人生的苦悩を経て、土佐に隠棲を始めた頃から、勇の歌風は次第に沈静化して、虚

無寂寥の趣きを呈するに至った。歌集「人間経」（一九三四）は後期の代表作で、以後「天彦」（一九三九）、「風雪」（一九四〇）、「遠天」（一九四四）、「玄冬」（一九四四）、「寒行」（一九四六）などの歌集は、燻し銀のような歌境をみせている。勇の一生は、まれにみる華奢風流の生涯と云えるが、「歌は恰も神の如し」という作歌信条に支えられていたのである。享年七十四才であった。歌集「毒うなぎ」を刊行した中に「新俳閑居」と題して、二十三首歌っている。

新俳 わがたましひの 傷つけば

堪えがたきまで 寂しきところ

冬の海 見ればかなしや 新俳

海水館は わび住みにして

身に染みぬ その夜の海の 遠鳴も

鴉の声も 君がなさけも

大衆に唱われし「ゴンドラの唄」（命短し恋せよ乙女……）は、余りにも有名である。

木下李太郎（一八八五—一九四五）吉井勇と親交のあった彼は、本名太田正雄、号、きしのあかしや・地下一尺生等、静岡県加茂郡の出身で、第一高等学校を終え東京大学医学部卒業の純然たる医者でありながら、明治末から大正期にかけ、詩、戯曲、小説、評論で活躍した耽美派の作家である。医学生時代より与謝野鉄幹・晶子らの「明星」に参加（一九〇七）、「明星」時代は、北原白秋や吉井勇らと訪れた九州旅行で、長崎・天草

などに残る南蛮遺跡にふれ、それが彼の後の作風に影響を与えている。ついで北原白秋らと共に石井柏亭ら美術家を加えて「パンの会」を結成、東京下町を拠点に耽美派運動を起し、一八九〇年代初期の日本近代詩に、異国情緒と江戸趣味の融合した耽美的詩風を示し、この頃の彼の作詩が後の「食後の唄」にまとめられた。この詩集は、異国情調と近代の憂愁に満ちたもので、白秋の「邪宗門」「思ひ出」と共に、耽美派の詩集の白眉である。又この傾向は、「和泉屋染物店」「南蛮寺門前」などの戯曲となって表われもした。「明星」脱退後は、「スバル」同人となり重要メンバーとして活躍、特に「スバル」の後見人であった森岡外に近づき、その影響を強く受け反自然的傾向を示し、小鷗外とみなされたりした。次第に作風は官能的退廃美・異国情調へと特色を現わし、「スバル」には、小説「荒布橋」、戯曲「南蛮寺門前」等を発表、小説では芸術上の大胆な実験を試み、戯曲では情調を尊重した。大逆事件の反応の一つでもあり、武者小路実篤ら「白樺」の人々との「絵画の約束論争」も有名である。大正五年（一九一六）南満医学堂教授として中国東北に赴任、更に大正十年（一九二一）欧州に留学したが、その間美術やキリシタン史の研究にもすぐれた業績をあげているし、先駆的な鷗外の研究者としても著名である。

大正十三年（一九二四）帰国後、専門の皮膚医学ことならぬ、研究の分野で貢献するところが少なくなかった。評論集には、「地下一尺集」「芸林間歩」などがある。没後、岩波書店から「木下李太郎全集」全十一巻が刊行された。

明治四十三年「築地の渡し」を、本館で執筆

房州通いか 伊豆行か。

笛が聞える あの花が
渡したれば 佃島
メトロポールの 灯が見える。

三木露風（一八八九—一九六四）本名操、兵庫県竜野生れ、明治・大正期の代表的象徴派詩人である。十三才頃から露風と称し、明治三十八年（一九〇五）七月、十六才で三百部限定の処女詩歌集「夏姫」を、清水橋村・内海泡沫らの序文をつけて自費刊行した。上京後、早稲田大学文科に進み、相馬御風・人見東明・加藤介春・野口雨情らと「早稲田詩社」を創設、明治四十二年（一九〇九）「魔園」を刊行、その象徴的詩風で北原白秋の「邪宗門」と共に並び称され、その序に「はびこれる悪草の間より 美なるものはほろび去り 青白き光の中より 健げなるものは逃げり」とある。一時慶応大学に転じたが半年で中退、その後フランス象徴主義をとり入れ、明治四十三年（一九一〇）永井荷風にささげた「寂しき曙」、大正二年（一九一三）「白き手の獵人」を刊行し、その温雅な音楽的、象徴的詩法によって彼独自の詩風を完成し、当時を代表する存在となった。特に「白き手の獵人」は、日本近代詩中一つのピークを形成した詩集として有名となったのである。大正三年（一九一四）西条八十・川路柳虹・柳沢健らと未来社を起し「未来」を創刊、ついで北海道トラピスト修道院を訪れ、そこでの経験をもとに詩集「良心」（一九一五）をまとめ、「幻の田園」「青き樹かげ」「露風詩話」等を発表、沈静且つ瞑想的で気分象徴の佳篇を生んだ。象徴詩風な独自の作風で抒情詩人であった彼が、カトリックに入信後修道院講師にもなったが、詩集「信仰の鐘」、のような次第に神秘的宗教的境地の詩も書き、北海道トラピストで約九年間過ごし、「芦間の幻影」「信仰の曙」等、修道院生活にか

らむ作品もある。

大正七年（一九一八）から始まった「赤い鳥」にも、多くの童謡を寄せ「小鳥の友」（一九二六）の童謡集もある。特に「赤トンボ」の歌は、著名である。昭和初期には東京三鷹に移り、安部宙之介らと「高踏」を創刊したが、その影響力は、以前ほど持ちえなかった。昭和三十九年（一九六四）家の近所で交通事故のため死去、没七十五才であった。没後、安部宙之介、家森長治郎らの推進で「三木露風全集」が刊行、日本近代文学館の編集により、若き日の未発表書簡等翻刻、紹介された。

心もかすむ 日ぐれどき

鳥は飛びつつ 花は黄に

恍惚の中 吹き過ぎて

色と色とは 弾きあそぶ。

慕はしや 春うつす

永遠のゆめ 影のこゑ。

身には揺れども いそがしく

入日の花の とどまらず。

春はわが身に とどまらず。

ありともしれぬ うすぐもに

なやみこがる 蛾のけはひ。

（白き手の狐人）

日夏秋之介（一八九〇—一九七二）本名樋口園登、別号黄眠、
聴雪廬主人等、長野県飯田生まれ、近代日本の代表的詩人であ

り、英文学者、評論家でもあった。生家は土地の旧家で銀行業など営み、叔父樋口竜峯をたよって上京、大正三年（一九一四）早稲田大学英文科を卒業するが、在学中西条八十らと海外新文芸の移植に力点を置いた同人雑誌「聖盃」（後に「仮面」と改題）を創刊、象徴派の詩人として認められ詩壇に出た。ついで芥川竜之介らと愛蘭士文学研究会を起した。大正六年（一九一七）処女作第一詩集「転身の頌」を出版、古典的神秘的特異の詩風で注目され、更に大正十年（一九二二）第二詩集「黒衣聖母」を刊行、この詩により詩人として自らゴシック・ロマン詩体と称する時風をなし、一流の地位を築いたのである。それは俗をしりぞけ、孤高の道を往く高踏派の気概に溢れたもので、一貫して詩を言語の複雑微妙な構築物と創造したのである。

早稲田大学で英文学を講じ、キーツ研究「美乃司祭」によって文学博士となり、名訳詩が多く英文研究の業績と詩の他に、新体詩の成立から大正期の自由詩までを、自己独自の詩観のもとに統括して記述した「明治大正詩史」全三巻を完成、そのあらわな主観性が一大特色として迎えられた。世に学院詩人、アリストクラート詩人ともみなされたのである。「明文学雑誌」「国外文学」「荷風文学」「谷崎文学」「鴎外と露伴」「明治浪漫文学史」等、著作多数ある。

かかるとき 我生く

大氣澄み 蒼空晴れ 野禽は来

啼けり

青き馬 流れに翹ひ立ち

纖弱き草の ひと葉ひと葉 日光に喘ぎ

今^ナの時計は 明らかに 吐息す

かかるとき 我 生く

(軀身の頌)

右の本館を利用していた詩人達よりも、より大正ロマンを謳歌した画人、むしろ生活も仕事の上でも現代人の心を描いている画人、竹久夢二(一八八四—一九三四・本名茂次郎)は、明治末から昭和初期にかけて、大衆画壇で活躍した異色の画家である。又大衆ジャーナリズムを湧かせた詩歌人でもあった。夢二と云うと代表作「黄八丈の女」「女十題」「長崎の女」などに見られるあの夢二式美人と云われるなよなよとした繊細な肢体、眼はパッチリ、まつ毛の長い、その風情の女人を形容した像が浮び「宵待草」の甘美なメロディーが聞えてくる。明治十七年九月十六日岡山の醸造家に生れ、少年時代は神戸八幡で過し、三十四年(一九〇一)上京、早稲田実業学校へ入学専攻科に進んだ頃から画家を志し、白馬会研究所にも学び、月刊雑誌等に投稿を始め、東京各地を転々しながら絵画と文芸の両面に活躍、詩も絵も独学で詩壇・画壇とは全く無縁であったが、明治四十二年(一九〇九)詩画集「春の巻」を出版、感傷にみちた抒情画と詩文によって若い人を魅了、一躍人気作家となり、大正二年(一九一三)に「宵待草」が発表されたのである。

宵待草

まてど くらせど こぬひとを
宵待草の やるせなさ
こよひは 月も でぬさうな

(どんたく)

しかし彼の生活をみると、^{おんげん}頻繁な恋愛と転居で波乱に満ち、何時も世の話題となりながら、絵画と文芸作品の制作を旺盛に続け、数多の秀作を生み出している。その芸術的思想的評価は、確定的であるとは言い難いが、時代のファッションメーカーとして、またリベラリズム芸術家として果たした役割は大きい。いわば「現代の浮世絵」として特異な地位を占めている。昭和六年欧米旅行後病臥となり、九年九月一日長野の富士見高原療養所で死去、享年五十一才であった。

明治四十三年、二十九才の折、海水館に下宿した頃に、後の夢二時代の基を形づくったと云える。詩画集「夢二画集」「どんたく」その他作品が多数ある。最も注目されたのは夢二画集を出した頃で、

「波は洵去し 洵来せり、
人は いづこより来り、
いづこにゆく」

漂泊画家にして詩人であった、彼の心境である。

木村荘八(一八九三—一九五八)は、明治二十六年八月二十一日、日本橋区吉川町一番「いろは」、牛肉店第八支店で壮年の六男として出生、当時父は、天狗標草の岩谷松平、「天下の糸平」こと生糸貿易の田中平八等と「明治の三平」の一人に数えられ、牛肉店多角経営により二十二店舗拡張する程の事業家であった。子福者のため子供に中学教育以上の学資を出さぬ木村家のしきたりで、京華中学を卒業すると兄のとおりなして、美術学校進学を志すが二度の受験失敗、その間に岸田劉生を知り、文学や演劇にも志したが刺激されて、絵画への新しい方向を求

始める。大正元年（一九一〇）劉生や万鉄五郎、斎藤与理等と「フユザン会」を結成、丁度マチス・ドラム・ヴラマンク達を中心に、フランスに起った絵画の運動で、強烈な色彩を用い大胆な単純化の絵画を描くフォービスムに近い荘八の作風は、解散後劉生や高村光太郎らと「生活社」を組織したり、更に中川一政らと結成した「草土社」の頃から、徹底した写生主義に変わり、大正十一年（一九二〇）から「春陽会」計画に参加、昭和四年（一九二九）会の設立を見て終生ここで活躍し、画業に動しんだ。しかし家業の傾きから家を出て、美術雑誌への寄稿、翻訳、評論、エッセイ等を刊行、美術評論家、著述家としても道を拓いた。画家としての表現活動は、洋画、日本画の制作をはじめ、文学性の強い独特の画風を挿し絵の世界にも切り開き、樋口一葉の「にこり絵」永井荷風の「墨東綺譚」等は、大変優れている。この様に画壇から挿絵の仕事を紹介して文壇にも、更に舞台美術や風俗考証を通して劇界にも至った。

著作が大正二年「後期印象派」に始まり、没後刊行され芸術院恩賜賞をうけた「東京繁昌記」まで、その数五十点近くあるが代表作には、「パンの会」「牛肉店帳場」「山の中腹」などがある。昭和三十三年十一月十八日、没六十六才であった。

彼は「東京の風俗」で「如何に破壊されようとも、よしんば悪化されようとも、そこに地息のようなものがあって、その中の虫のように、私は東京を呼吸して生きています」と述べているが、古きよき時代をなつかしむのでなく、いくら悪化され破壊されても変らない、その風俗や環境の推移変化の底を見ているのである。前述四、佃島の街中「佃小橋」について遺書「東京繁昌記」から引用したが、本人が云う挿絵は六分の美術、四分の文学だの通り、特に佃島の頃は、望景詩であり、風俗学でもあると思う。それもその筈、彼は小唄にも通じ、邦

楽評論家としても知られていた。

大正時代は、ジャーナリストの世界にも今日の基礎を作り、数多くの傑作を出しているが、本館を利用した横山健堂（一八七二—一九四三・山口長門出身）本名達三、号は黒頭巾、明治から昭和期にかけて、ジャーナリストの一人者であり、評論家でもあった。東京大学史学科を卒業後、新聞記者を経て国学院大学の教授となった。特に幕末維新の造詣が深く、人物評論や人国記を得意としていた。明治三十四年「日本教育史」を著わし、海水館での執筆は、明治四十四年「新入国記」また力作の「大西郷」は有名である。

同様にして、松野天民（一八七八—一九三四・岡山出身）も、明治・大正期の新聞記者で文筆家である。本名、市郎、二十才で上京し、苦学して国民新聞社に入社、その後朝日・毎夕・都等転々と各新聞社に勤め、その道のベテランである。特に探訪記事では人気を博し、本館利用の頃、明治四十三年「東京の女」を著はし、その後昭和二年「銀座」などがある。晩年は「食道楽」を主宰していた。

最後に佐藤惣之助（一八九〇—一九四二・神奈川川崎出身）は、日夏耿之助と同様、大正・昭和期にかけての詩人である。暁屋中学仏語専修科を卒業し、初め俳句を作っていたが、後詩に転じた。佐藤紅緑に師事、白樺派の影響をうけたが、経てして著しく感覚的な色彩を強くした。海水館当時大正二年詩集「華やかな散歩」を出し、続いて大正五年第一詩集「正義の兜」を刊行、詩人として世に名を出した。大正十四年には「詩之家」を、創刊している。「満月の川」「颯風の眼」「情艶詩集」「わた

つみの歌」他、多作を極め、小説・隨筆・歌謡曲の作詩まで手がかけ、「赤城の子守唄」や「人生劇場」等は、既に大衆の生活に溶け込んでいる。

六 月

六月よ おまへは 窓の乙女だ
そよ風が来て よい匂ひをつける。

そよ風よ おまへは 小舟と小波だ
夫れは 乙女の 胸のやうに揺れる。

乙女よ おまへは 祭り日の靴だ
足許には 花の撒かれた 路がある。

路よ おまへは 乙女の 口髭だ
チョッピリ すみれの 影がさす。

すみれよ おまへは 昔の唄だ
思ひ出しては すぐ しほむ。

日光よ おまへは 乙女の預金だ
あこがれを 空いっぱい 持つ。

(わたつみの歌)

さて大正デモクラシーの風潮は、自由主義思想の興隆をもたらし、特に新聞・雑誌などジャーナリズムを通じて、新しい政

治思想の普及の上で大きな役割を果たした。その上社会主義への接近を示す者も現われ、労働運動まで発展もした。しかし反面、西田幾多郎、朝永三十郎のような「個」の確立を目指す思想も大きな影響力を与えたが、良くみるとそこにはコスモポリタニズムや楽観主義があり、美術・演劇等の場合特に著しかったことは、海水館の客の生活やその作品に現われている。

又世俗では、都市と農村の文化水準や生活水準をみた時、その格差は激しく、恐慌が深まると、民衆の意識は目的を失い、退廃化もしていったのである。大衆娯楽は、東京は浅草・大坂は千日前とその地を中心として、軽演劇や映画等が普及してゆき、その上カフェー・ダンスホールの増加も手伝って、享樂的な気分が漲っていったのである。処が関東大震災以後は、ファシズムと戦争への道へと進んで行く契機を創り出したのであった。

島崎藤村が、大正八年十月朝日新聞連載「新生」の完結後、新聞に寄稿した一文から「極端から極端へと動く振子の波のようにな、今日の社会思想の偏向が反動の大勢を喚起することがないとはどうして云えよう……」と、そして大正十四年一月二十日から同新聞連載の「大正十四年を迎へて」の一文に、「なんという社会の空気の暗さだったろう。多くの人々の心をおおう破壊と虚無の傾向、ないしは寂寞感、それらのものは重く垂れ下がる雲のように自分らの頭上を通り過ぎたような氣もする。……(中略)……真に夜明けと云い得るときのために、今日までの暗さがあったと考えたい。とうてい私達は果てしもなく続いて行くような冬の寂寞にたえられない」と。

大作「夜明け前」が発表されたのは、四年後の昭和四年であった。

海水館を訪れて執筆した文人達の成果は、大正ロマンの魁と

なり、今日もこれを称えているのである。

『大正ロマンは返り咲く』

若者達が 振り返える

大正ロマンの 柄をみて

素敵な 模様と 飛びついた

最も 先端ゆく センス

昔の ことも 知らないで

大正ロマンを 着て歩く

大正ロマンの 筋書きは

人里 はなれた 海水館

人の力で 築島の

新しい 土地で 創り出す

八十年後の 平成に

大正ロマンは 返り咲く

七、昭和の夢の懸橋 “相生橋”

佃島は、東京の田舎である。島の生活が如何に不便か、住んだ者以外には解らない。

戦前は「何処に、お住いですか。」と問われても、「佃島です。」とすぐ答えが返せない。「京橋です」とか「銀座の近くです」とか、見栄を張って答える人が多かった。しかし話が進み佃島と解ると「佃の渡し」しか話題はなく、話は止ってしまう。東京は江戸時代より殖民地であるから、東京何処に住んでも同じだと思つて上京するが、とんでもない武家街と町人街では、明治以後も格差があった。どう云う訳か、日本では否世界中何処でも同じだが、生産地より消費地の方が尊ばれる。佃島も月島も平成時代前までは、生産地であった。その土地で働いた人々にとつて郷愁があつても、住んでいる者は、常に一段低い解釈を自分達でもしていた。

曾て離島対策から伊豆七島の社会教育指導の経験は、船だけが頼りで時化に合えば、「新聞」も三日遅れでは「旧聞」になる。同様に、目の先に築地・越中島と見えていても、船だけが通じる道であるのは、心細い。

況して明治・大正新開地である当地域にとつては、大量に物流を通じる橋は、命の懸橋なのであつた。

新佃島東西町の埋立当初は、石川島東端から深川に航通する渡津があつたが、佃島・月島の住民達の年来の熱望で、明治三十四年より二年がかりで、三十六年に架橋が叶えられた。架橋の際、島民は進んで盛土の労役に協力したので、東京市はその勞に酬いて、土地の借地料を減じた程である。

橋の架けられるまではすべて船のため、風雨の強い時には船が出ない。急用には果たさず、特に兵隊の入営時は遅れては大変だから、前日に川向に渡り、旅館に宿泊してないと安心出来なかつたと云う。

橋は木製で、長さ一〇九間（約二〇〇米）巾四間（七米余）の大きさであつたが、大正八年十二万円を投じて改築している。父の話によると、新佃島東町は別荘を建てる人が多く、店に注文があると番頭が手代が、反物を入れた木箱車を丁稚にガラガラ引かせ、永代佐賀町の店からこの木橋を渡つて訪問させたと云う。

余談であるがその頃の店は、現在の永代橋東詰北側の角から次の角まで十三間間口で、今の佐賀町一丁目一番地と二番地に当り、店舗の裏には次の角まで長屋を持ち、店員の宿舎や貸家もしていた。奉公人の構成は、番頭、手代、丁稚、奥女中、店女中の制度を取り約二十名である。番頭になり年季が開けると、暖簾分けをする。

元来小僧から仕上げて大番頭（主人代理）格となつて、店の暖簾分けをし独立するのであるが、事情によって番頭達に、主家の屋号と商標「入り山」印と開店資金並びに商品が与えられ、その上出入りの得意先数軒も譲り渡されるのである。従つて紺の三河木綿の軒暖簾や軒先から地面へ張る一間物（約二米）の長暖簾に△「入山」印と川越屋の文字を白抜きにして掛けることが許されるのである。江戸川柳に、

「繁昌さ 江戸往来に 国づくし」

の句にあるように、店の信用の看板であり、広告の役目を果し、同時に本店の信用をそのまま受け継ぐのが「分けのれん」の生命でもある。

番頭達は、深川門前仲町、清澄町、板橋の大山、浅草の馬道、

埼玉大宮（戦後市会議員になった）等父の指導で店を構えたが、当時の東京の呉服小売業では、手広く営業をしていた方で、客は新川の酒問屋、箱崎の廻船業、深川木場の材木問屋が主であったが、時代の流れて今日では問屋さんも統廃合により僅少になって来た。

父は「川越屋の清兵衛さん」と深川では、子供の時から客に可愛いがられ御最きが多かった。

養父は、父を商売の後継者として養育したため、小学校の頃から店員同様扱い、丁稚から叩き上げられた。丁稚とは、商家や職人の家に年季奉公する見習い年少者のことで、よく丁稚小僧と云うが、小僧の方が丁稚より幾分年上の者が多い。

店では、店員の店名と云うものがあり、小僧の場合父なら清どんと呼ばれ、店によっては名の一字を呼び捨ての場合もある。制服は、木綿縞の筒袖に紺の前かけ、後輩ができる袖付きの着物となる。やがて商売を覚えて来ると、名も「清兵衛どん」と改め、手代として外出に羽織も許され、算盤を持たされる。やがて番頭に進むと、「清兵衛さん」となる。更に「大番頭」となると主人代理を勤める。番頭以上は「住み込み」をやめて「通勤」もできる。丁稚一人に要する雑費は、明治二十年代で年間四円程度であった。

当時は未だ江戸からの仕来たりで、呉服屋許りか、材木商も酒問屋も大店おほだなはみなそうであった。

越中島に陸軍訓練所が出来、それが糧秣廠になると、そこへ勤める人や食糧納入関係者の出入が多くなり、市電「永代橋」停留所付近は、関東大震災までは朝夕深川区内で一番人の出入が多く、常に店前が停留所でもあり、日夜客で賑わっていた。

大正十二年（一九二三）九月一日午前十一時五十八分、関東一帯大地震にみまわれた。震度七・九、家屋の倒壊・崖のくず

れが各所に起り、特に隅田川以東の震度が強く、倒壊家屋二五%内外に達し、より酷いのは火災で、殆んど同時に市内一三四ヶ所から発生、次々に延焼し三日間燃えつづけた。焼失戸数四〇万七千余戸、市内の戸数六四%を焼失、物的損害五十五億円余の巨額に達した。死傷・行方不明者は、十万名に及んだのである。

父は店が燃え落ちるまで、男子店員と共に頑張り、女子は母が祖母や子供、女中達を連れ、一先ず糧秣廠に逃げ込み、火の沈まるのを待った。ところが夜になる程火勢は強くなり、何回となく運び出し山と積んだ家財に飛火し燃えつき、身の危険を感じて、子供を抱え義母の手を離れぬ様取り、越中島河岸の川淵土手にぶら下がり水に漬かりながら、何度も水に潜り飛火を防いだ。女中達も共に同じ動作を繰返して、夜明けを待った。

困りが少し明るさが増し朝近くなり、少し気が安んだが母がフト思い出したことは、隅田川の此の辺りは通常立でない水量なのに、何故立っているのか？川床を足で確かめると、川底ではない。困りの者殆んどが、土手にぶらさがり形はしているものの、全員立っているのである。何と犠牲者の死体の上立っていたのであった。驚いて岸に上がり、焼跡をみると一望千里、昨日までの姿は見る事が出来なかった。何も、無いのである。「痛いよ！」「水・水」あちこちで、ヤケド、脱水状態の人、怪我人達、陸に居た人々が蠢めいていた。二日午前八時頃になり、父達男子連中は何事も無かった顔をして、船に乗って女子達を捜し当て岸に飛び移り、互に全員無事を喜び合い一息したのであった。

男子達は、店の最後を見届け永代橋に避難したが、あとからあとから人々が橋へ集まってくる。

危険を感じた父は、子供の頃より遊び慣れた橋であるから、

店員達を橋の下で待機させ、自分だけ箱崎の得意先廻漕店に急行、船を掛け合って一隻出し、店員や付近に居た人達を乗せ、浜離宮から第三台場沖で待機し、夜明けと共に戻って来たのである。

永代橋墜落の惨事は、江戸時代何回もあり、中でも文化四年八月十五日深川八幡宮祭礼の折、橋と共に断落、落ちた者千人と云われるが、内三百四人は助かり、溺死者七二人、佃島で引上げた死体でも三十一人に及んでいる。

しかし関東大震災では、深川から避難者は、永代橋と相生橋に殺到した。永代橋には二千人以上いたと云う、鉄橋が落ちる前に既に半数は焼死し、後橋が落ちて水死したのである。永代橋が落ちると、木橋の相生橋が上流から流れてきた焼船がブツかり、橋に延焼、燃え始めた。

行手の新佃島や月島も一面火の海、後ろからも火の流れが氾濫してきた。万余人の避難民は、三百余坪の中の島へ鮎詰めになり、夜中火の粉を振り払い命を守った。警官は、抜剣して木枝を伐り払い、避難者の荷物を強制して海中に投げ、そのお蔭で一万人が狐色に焦げたくらいで助かったのである。ともかく、助かったのである。それは、奇跡に近い。

逃げまどふ 焔の底に これやこの

わが肉親の 顔をかぞへつ

揺りくづれ 焼かれはつるを ひた前に

大地のうへに ひれ伏しにけり

ゆりやまぬ 大地のうへの ひとところ

いのちあづけて 身動きをせず

(土岐善磨・緑の斜面)

震災後三年二ヶ月、昔に戻って渡船に頼ったが、大正十五年十一月に二十八ヶ月を要して相生橋が完成、震災後最初に復興した橋であった。

相生橋が他の橋梁と異なるのは、大橋と小橋の間に大坂の中之島公園に因んで、水上公園のあるのが特色である。小さいながらお台場公園が出来るまでは、東京唯一の水上公園であった。

東側の公園には、蔓植物棚のある休憩所の前に、東京湾を望んでいる隅田川諸橋の生みの親、当時復興局土木局長 太田円三氏の胸像が建っていた。氏は先に紹介した「海水館」の客、木下李太郎(太田正雄)氏の令兄で、(このレリーフは戦後、千代田区神田橋脇公園北詰西側に移転)そこからは商船大学の陸地に固定された練習船「明治丸」が眺められるよう設置したと云う。

橋の設計は、橋梁課長田中豊工学博士と成瀬勝武、囑託の三宅政吉の三氏による。総工費一四三万七千余円(永代・清洲両橋の半額)請負は主に間組施工、橋鋼桁製作は、大橋が汽車製造株式会社、小橋は石川島造船所、高欄灯柱は日本铸造株式会社製作である。型式は、隅田川本流でなく派川のため、橋脚は多く必要なしとして平凡な多径間に互る突桁式鋼板式が採用された。総延作業人員十二万人、大小橋の長さは一四六・五米と四五・五米、巾は二二米で、地震と火災で苦しんだ経験から、工事は耐震構造・耐火設備に重点を置き、特に地盤のゆるい所のため十米から十二米の松杭を四百本も打込んだ基礎工事が行われ、その上に橋台を築いた。

橋脚は吊り下げ足場で、コンクリート製直径三・六米の円形筒を沈設し、水面から五〇六米の河底硬地層まで打ち込み、そのもとに鉄骨を組み入れ、径二・五米の橋脚を造った。耐震装置としては、橋桁六ヶ所に特殊蝶つがいをを用い振動の被害を防ぎ、温度の変化による伸縮に対しても工夫されている。

開通式は、大正十五年四月二十二日であった。

佃島・新佃島・月島の各戸には、国旗と紅白の幔幕を張り島民挙げて喜び、定刻には千四百人も来賓を迎え祝賀会が始まった。住吉神社平岡宮司祝詞を奏じ、鳶は鶴亀の木遣を先頭に唄いながら、内務大臣浜口幸雄以下幼、小学童三千二百人が日の丸を手に万才を連呼しながら、橋を三度渡っては返し、渡っては返したのである。

私の相生橋の追憶は、小学一年生の遠足の折、深川公園へ向って佃島小学校校旗を持った小使さんの後に、百六十名の生徒がぞろぞろついて渡ったことから始まる。初めて歩いて橋を渡った自信は、「川の傍で遊んではいけないよ」の親の注意も聞かず、天気の良い休日には、中の島公園へ乳母車を引いて、弟妹のお守りをしに行ったものだ。何故なら、春はレンゲ・タンポポ・スミレ等の積み草に、秋は松ボックリやどんぐり拾いが出たのである。二・二六事件の時は、学校が休みで嬉しかったが、帰宅すると門前仲町角の不動銀行まで入金に行けと云う。寒い雪の積った中を相生橋を超え越中島憲兵隊門前を通ると、土嚢を積み機関銃を備え付け銃口を車道に向け、銃剣付の兵隊が右往左往していたのが印象的であった。又五年生に進学した際、深川八幡宮裏の数矢小学校へ転校してからは、朝晩市電で相生橋を往復したものだ。朝の六時半までは市電乗車賃の割引料金が往復九銭のため、片道七銭往復より五銭安くなる。毎日二十銭を親からもらい、十一銭を貯め弁当を忘れた同級生のた

めに昼食代とした。帰りには電車に乗らず、その友人達が相生橋まで送って呉れるので、帰りの券が浮くのである。台風になると電車は止まるので相生橋を歩いて渡ると、越中島は勿論深川全域に水が上がり、汚水の中には金魚、鯉、亀等が泳ぎ、私も一緒に腰まで水に漬かりながら登校したものであった。

戦争が進み、町から青・壮年男子が入営・出征と毎日の様に出て行く時は、「祝某君入営（又は出征）」の旗を先頭に、青年団が太鼓を叩きラッパを吹き鳴らし、兵士と在郷軍人に続き、近所の人や婦人会の人々が手に旗を振り振り、軍歌を合唱しながら相生橋まで来る。送られる兵士は挨拶をし、万才の声に送られながら橋を渡って行った。戦禍がひどくなるにつれ、何か相生橋が今生の別離の場所と私には思えた。

それは昭和二十年三月九日午後九時、空襲警報のサイレンが都内に鳴り響いたが、三十分で解除となる。その頃三月一日私達家族は、板橋区（練馬区）大泉学園に疎開した許りであったが、二度目のサイレンが鳴ると同時に、東京上空にはB29が来襲し、庭から見ていると焼夷弾の雨を降らし、都心は真赤な炎で染まっていた。

向え討つ高射砲の弾が放物線を描き、サーチライトに照らし出されるグロテスクな敵機、それは火の交叉する画面を見る様で芸術的でもあった。東京上空に燃え上がる紅蓮の炎は、練馬の庭で楽に新聞が読めた程である。

翌朝下町の災禍のラジオニュースで、佃島小学校卒業式に出席した妹と付添の姉が、式後の謝恩会のため月島の知人宅に泊っている。私はその安否を確かめるべく出かけたが、何とか神田橋まで市電は通じたが、それからは佃島まで歩いた。何と不思議にも、佃島・新佃島・月島は焼けなかったのである。知人宅に着き、姉妹の厄介の謝礼を述べ、親類の安否を確かめる

ために既に出た姉妹の後を追った。

若し、深川富岡町の二軒ある伯父宅か、永代の長姉の嫁先か、本所ガラス工場の伯母宅の何れかに、姉妹が泊っていたらと思うと、正に相生橋が命運を二分していたのである。

橋には、衣服が焼かれ裸か同然の人々、足を引きずり或は煙で目のはれ視界のきかない人、ひどいのは這いながら渡ってくる人、後から後からと続いて避難しに来るのである。すべて顔が煤け、火事場の匂いと煙で神経が麻痺し、たれ流しの匂い、そして死体の焼けた匂い、言葉に語りつくせない將に地獄である。この橋を境に、天国と地獄に二分されたのである。隅田川には、永代橋方面より死体が累累と流れ、岸際には重なり合つて留まっている。二十三年前の関東大震災の時よりも、この光景はひどいのであろうと思つた。

橋を渡り商船学校の前丁字路には、人間の死体が山となつて積もっている。よく聞けば、月島方面は焼けていない情報で、南に向つて逃げて来たが、此の場所が炎の渦で災難に合つたと云う。吾先に死者を乗り超え相生橋に向うが、こと切れて上へ上へと積もつたのである。憲兵隊の塙の先は、曾て小学生の頃バラバラ事件のあつた鞆屋から黒船橋南詰交叉点まで強制疎開地となり、都立深川病院の妊産婦避難場所、何十と云う防空壕の中に恐らく百人近く見えたが、妊産婦が悶え苦しんだ焼死体が重なり合つて横たわっていた。黒船橋の隣石島橋上には、今風呂から上がった許りの少女が駈け足しているのか、黒髪を風に靡かせて白い裸体がフラフラして立つ死体は、神々しくさえ感じた。

門前仲町に入ると被害は、更にひどくなる。銀行の扉を半開きにしたまま、力尽きたのか鎖の紐にぶら下がっている白骨体、貯水池には衣服のまま煮上がった老若男女の屍、猫も犬も被害

は一緒であつた。

八幡宮に入ると、神社囲いの木々は生え残っているが、本殿も他の建造物も塵一つなく、綺麗サッパリしている。爆風ですべて吹き飛ばされたとのこと、公共物唯一の残存していた母校、数矢小学校のすべての教室には、被災者が横たわり蠢いていた。此の場所が、被災者連絡所になっていて、連絡員の方々は旧知のため、私を見るなり、伯父二家族の内、両伯母だけが生存、両眼視力を失つた伯母を年上の伯母が手を引き、目黒の親戚へ避難したとのこと、又私の姉妹は既に大泉宅へ向つたこと、一先ず安堵した。序でに木場の知人達を一囲りすると、焼板の切れ端に、各々の連絡先が記入されていた。

深川小橋を渡り、橋上から川を見下ろすと、筏番の老夫婦が窒息死して、船上に老翁は俯せ、老婆は船尾に仰向けに倒れ、上半身川に漬かり、半開きの口から、太陽の光に照り返る金歯の反射光と胡麻塩の長い髪が川面に流れ揺れる姿は、無気味でもあり、哀れでもあり、特に真白い顔色が印象的であつた。冬木町を通り、駈け足で高橋まで辿り着き、橋上から森下・両国・本所方面をみると、総武本線の架橋と両国国技館の丸屋根だけが残つて見えた。

この戦禍で下町の縁者は、全家庭犠牲となつたのである。戦争は、二度としまい。勝つても敗けても、損害は大である。今でも相生橋と云うと、天と地、天国と地獄の境界、仏教で三途の川と云うが、此処が現実のその場所であつたと信じている。

天災と人災の遭遇の橋、それは相生橋であつた。

昭和四十年中頃まで、相生橋西側の川洲に入り乱れて、大小塔婆が立っていた。子供ながら、何か異様に見えたものだ。何

時もそこには、水死者の靈魂が宿っているような気持ちになつたものだ。

江戸時代は、箱崎の隅田川中洲に水死人の供養塔婆が建てられていたが、明治中頃からこの辺りに建ち、関東大震災から急にその数が増加した。潮が満ちると塔婆はかくれ、引くと現われ人目を引く。

私の友人、日本橋小伝馬町大安楽寺住職中山弘之氏は、偉いもので大僧正位まで登ったが、毎年盆には、船を仕立てこの洲の水死者慰霊供養を施していた。近年「川をきれいに」の掛声で、川底を浚い隅田川も鮎が泳ぐようになり、もう洲もなくなり悲しい思い出は消えた。

現在この相生橋は、新しく改築中で平成十年には、モダンな姿をみせてくれるだろう。

今度こそ三途の川の橋でなく、夢の懸橋となることを望んでいる。そして又、また一つ二十一世紀の姿に佃島は変わるのである。

“相生橋は、知らないよ”

川は まるで 止まってる

波も 昼寝か 動かない

筏も 音なく 止まってる

動いているのは 赤トンボ

騒さわさい 蟬鳴く 夏でした

三本 マストの 明治丸

いつも 貴品を 白色に

今日も 家来の 学生が

ボートを 漕いで 打ちました
白と赤の 旗を振り

自分の 心を 打ちました

朝から 晩まで 騒さわさいな

この頃 時間の 区別なく

車が 橋を 超えて行く

何処どこえ 行くのか 知らないが

上のぼりも 下りも 物乗せて

忙いそが しそうに 行きました

夜の 帷とばりの 降りる頃

中の島が 騒さわいな

親の目 忍んで 合あいに来る

何処どこまで 進むか 知らないが

末すえに 泣くのは 自分達

相生橋は 知らないよ

八、造船昭和の街 佃二丁目

地下鉄有楽町線「月島」駅を下車して、六番口を出ると、いきなり高層マンションが目飛び込んでくる。上から覆い被るようで佃二丁目が狭く感じる。

右手に八階建て月島機械株式会社の瑠璃色タイル張りビルが、昭和四十七年頃建設されたのに未だ新しく見える。

昭和十年前後は、此処が空地で機械用材が放置され、道を隔てて現在駐車場にも、月島機械の資材置場で鉄線の囲いが張られていた。

その頃学校から帰宅すると、新佃島西町一丁目二丁目の男子達は、ランドセルを背囊に見立て、棒を剣や銃に当て、学帽に繻帯を巻き「白軍」として、足の臍には、藁縄を巻きつけゲートルに真似、午後四時「新月橋」際に集合する。誰が見ても狐に化かされた子供の兵隊だ。六年生が隊長格になり、この両側資材置場に陣取り戦争ゴッコが開戦される。いくつもの班に分かれ、敵陣から敵旗を獲った隊が勝ちである。場合によっては、とっ組み合いになり降参すると、陣地へ捕虜として連れ帰る。両隊共捕虜に捉まり隊員が減少すると、突撃を掛ける。ポケットに小石を一杯つめ、投げ合うのである。夕方のため西仲商店街へ買物に行くおばさん達も、石が飛んで来ても文句を云わない。工場帰りのおじさん達も笑って通り過ぎて行くだけである。

皆、戦争ゴッコに協力的であった。一戦が終ると、自分達の町へ、二列縦隊に整列し、先頭の二名が手を丸め、口に当てラッパの形をし「トテテター」と口鳴らす。それに合せて全員が歩調をとって帰って行くのである。軍旗は棒に、藁縄を結んだ

だけだ。何時も秋になると、兵隊ゴッコで、夕食が遅れ母に叱られたものだ。その頃の子供達の遊びをみると、冬は、男子が凧上げ、ケン玉、松がとれた竹での竹馬作り、紙相撲、女子がお手玉、おはじき、羽根つき、あやとり等、春は、男子がメロンコ、ペーゴマ、釘さし、ビー玉、女子はゴム飛び、なわとび、石けり、マリつき、鬼ゴッコ等、夏は、男子が川での水泳、釣り、虫とり、女子がつみ草、虫とり、おばさんゴッコ、男女共でお化けゴッコ等、秋は、男子が兵隊ゴッコ、探偵ゴッコ（黄金バットや怪傑黒頭巾の真似）、女子は遊戯（郵便やさん・カゴメ・あの子が欲しい・鬼ゴッコ）等であった。子供達のゴッコ遊びには、時代が反影して、飛行機やタンク（ミシンのカタン糸芯利用）の製作、蠟紙による防毒面作り、又月島全地域を利用しての宝隠しの密書作りと捜しっこ等を思い出す。従って街のどの通りでも、晴れた毎夕、日曜は朝から子供達が大声で遊び戯れていたものだ。又すべての大人達も、おおらかでもあった。社会そのものが、子供と大人の社会、男女別の社会、上下関係、ハッキリとそれぞれの世界があった。そのため、それなりに否なことも良かったことなのである。

現在の佃二丁目は、昭和三十九年住居表示変更までは、新佃島西町と呼ばれ、始め佃島の東より築き出し明治二十三年工事二十九八年八月竣工し、新佃島南北に通ずる大路を経て二分し、東町と対峙して西町と名付け、南は佃川を隔てて月島西仲通り一丁目、北は旧石川島に隣接し、町の中央を東西に通じ、南側を西町一丁目、北側を西町二丁目、最北端側を石川島に接して西町三丁目と区分した。一丁目・二丁目が町の形態を作り出したのは大正期からであり、今日ある姿は関東大震災後、昭和に入ってからである。それはすべて、隣接石川島の発展から始まったと云っても過言ではない。

旧石川島について武蔵志料は、「佃島とこの島との間、よほど離れて海潮もたたへたりしに、近き頃は、いつしか彼方、此方より出合つて、その界も失せたり、すべてこの島昔より甚だ広くなりしと見ゆ、芥の寄せる所なれば、自らかくなりぬべし」と記されているが、石川氏移転後、人足寄場から明治は、徒場、懲役署、監獄署と改称、後移転により空地となったが、石川島造船所その壮に乗じて、この地を含めて盛大となつて来たのである。

(旧跡) 石川島造船所

佃二丁目一番地

嘉永六年(一八五二)ペリー来航により鎖国の夢は破れた。時の幕政担当老中首座阿部正弘は、黒船渡来を契機に大名や幕吏へ充分意見を出すよう命じたが、彼等も幕府が持っている以上の認識や代案がある訳ではなかった。中でも比較的優れている意見を持っていたのは、勝麟太郎ぐらいであった。それは、「兵制を西洋風に改革すること、西洋の科学や兵学を研究する学校を設けること、江戸の防備を嚴重にすること、大艦を建造し日本から出国して貿易をすること、交易の利益で武備を整えること、人材を登用して意見を交換し合うこと」等が、最上の考えであった。阿部はこれらの意見を聞くのと並行に、前水戸藩主徳川斉昭を海防参与の名目で起用したのである。

徳川斉昭(一八〇〇—一六〇・烈公)は幼少時、会沢安らに学び、兄の死により文政十二年水戸藩主となり、藤田東湖らの人材を登用、民政に留意し、藩制改革を行う強硬な尊王攘夷論者であった。天保十二年水戸学の中心として藩校、「弘道館」を建て、殖産興業、軍備改造整備を行うなど、幕府より異心あり

と見られ、その上御三家の一つでありながら外様大名同様の扱いに不満を持ち、名門大名として、財政整理・賄賂の禁・製艦の許可等の政策を幕府に要求する等、出すぎた振舞と反斉昭派に利用され、弘化元年五月不謹慎であるの理由で、隠居謹慎を命ぜられていたのである。嘉永二年藩政参与は許されていたものの、幕政には関与出来ずいた処、ペリー来航を機に、幕府の大船製造禁止令を解き、反対に大船製造へと切り換え、嘉永六年十二月五日斉昭に幕政に参与し、直ちに大船製造が命じられた。徳川斉昭は、石川島に造船所を建設したのである。

何故水戸藩に、大船建造の下命がなされたのか、その経緯をみると、徳川斉昭の大船建造への情熱と意欲が動かされたものと考えられる。それは天保年間にアイセルチエルニーの原書が翻訳されたのを見て、帆船模型を作り幕府へ献上したり、それを機に「日立丸」と名付けて、二十四間長さの軍艦建造を願い出て許されなかったが、嘉永六年八月末大船建造禁令中にも拘らず、大船建造の内命を受け、直ちに小石川水戸藩邸にて、長さ二間余の大型模型船を作成、幕府に献納する情熱は、ついに幕府を動かし十二月に幕府御用地・石川島を造船所敷地として決定、水戸藩に大船建造の命が下ったのである。

翌安政元年(一八五四)十一月東海大地震が起り、被害甚大の上、丁度ペリーとの交渉中でもあったため、

泰平の世を大変に ゆりかえし

上もゆらく、下もゆらく、

と民衆からやじられる世であったが、翌二年十月またまた江戸大地震が起り、藩主斉昭に蔭で知恵をつけていた藤田東湖が、母を庇って地震のため不慮の死を遂げ、以来斉昭の存在がサッパリ映えなくなっていた。

水戸藩の大船建造の努力は、当時二月に再来したペリー艦隊

を横浜へ視察に行き詳細なスケッチをしたり、七月にはオランダ特派艦スンピン号が長崎来航の報を聞き、造船技術調査に派遣させたり、又十一月伊豆下田に来航したロシア軍艦ディアナ号が、地震の津波により大破し、その代替艦建造中の戸田へ、大臣を派遣し技術の実地習得をさせたり、とにかくその努力は大変であった。安政二年一月二十二日新造船の進水式を行い、翌三年五月洋式帆船が竣工、「旭日丸」と命名された。我が国で日本人の手になった最初の洋式軍艦である。しかし実際に幕府へ献納したのは、暴風雨で大破し修繕のため、安政三年十一月二十九日であった。旭日丸は、木製パーク型二本マスト帆船で、長さ二十間(約三六米)運転が非常に困難で、人々は「厄介丸」と呼んだ。

動かさる 御世を動きて 動くべき

船は動かぬ ※ みともなきかな

(※みとは、水戸)

余談であるが、前述のオランダ船スンピン号は後、幕府に献納され「観光丸」と名付け、長崎海軍伝習所開設に伴い、練習艦として利用、維新後明治九年老朽化したので石川島造船所で解体された。又伊豆戸田で建造され、ロシア使節を帰国させた二本マストのスクナー船は、安政二年三月完成し「ヘダ号」と命名され、その設計図を基に、後スクナー船六隻が建造されたが、石川島造船所でも君沢型と称されたこの船を建造のため、当時の戸田の船大工四人が江戸へ派遣されている。

幕府自身も、海防危機感から近代的海軍の創設に腐心、当初独力で洋式軍艦を整備しようと、安政元年浦賀で約六〇〇噸、大砲一〇門装備の「鳳凰丸」を建造、薩摩藩も半年遅れ「昇平丸」を完成、いずれも西洋の造船書や実船を見ての知識だけで、外国人の力を借りずに竣工したが、後勝海舟編「海軍歴史」の

中で「外観のみ模倣した悪船」と評価したが、建造者達の苦心を考えると少し酷評過ぎる。

文久三年(一八六三)七月二日次の建造船、千代田形木造船の進水式が行われた。砲艦千代田形建造(蒸汽船)は、長さ二九・七米、巾四・九米、六十馬力のもので、蒸気機関は長崎製鉄所製を使用、汽缶は鍋島藩「三重津」造船所製品を取り付け、蒸気機関担当者肥田浜五郎、氏は長崎海軍伝習所第一期生で、蒸気機関専門に研究した経歴を持ち、幕命で石川島に勤務、文久四年「石川島拡充計画」に基づき、幕命により欧州留学をする。後平野造船所創立時スタッフでもある。

この小型蒸気艦「千代田型」は、江戸湾防備のため品川台場が計画され構築されたものの、それを補う移動式砲台として位置付けられ建造されたのであった。

御一新後明治二年(一八六九)一月二十日、薩・長・土・肥四藩主連署して版籍奉還、これにならって版籍奉還するもの二百有余藩に達した。二月十九日には、行政官布告によって、朱引の内外(市内市外)が決められ、当時朱引内人口五〇万をほぼ一万ずつに配分して行われ、同月中に府藩県議事制定もされた。

同年七月政府は、軍務官を廃して兵部省を設置し、兵部省海軍部は、石川島に造船局製造所を設け、艦船や器械の製造修理などを管理した。

明治五年(一八七二)二月石川島主船寮製造所、海軍省管下に入る。

同年六月町名改正が行われ石川島は、佃島に合併される。

同年十月三十日海軍省が造船局を廃止、石川島造船所は石川島修船所と改称される。

明治九年（一八七六）八月三十一日主船寮廃止に伴い、石川島造船所が廃止される。諸機械みな築地兵器局に移された。

此処に嘉永六年十二月五日徳川齊昭、石川島造船所設立以来、幕政から明治政府に移管され、明治五年十月三十日石川島造船所と改名、九年八月三十一日を以て廃止、二十四年間存続にして幕は降りたのである。

（明治大正時代）

明治九年九月十日 平野富二氏（当時三十才）は石川島造船所跡の借用許可を得て、造船業を計画。

明治九年十月三十日 石川島平野造船所創立、我が国に於ける最初の、民間経営の西洋形船舶製造所である。面積は、七、五五一坪、人員明治九年五十名、十二年には二二〇名に達していた。

平野富二氏は、長崎に出生し、初め長崎奉行所へ奉職後長崎造船所に移るが、先輩の長崎奉行所職員兼海軍伝習生であった本木昌造が「造船学」や「活版印刷」技術を習得していたので、その下で働いた平野富二にそれらの技術を習得させた。後、本木氏が「長崎製鉄（造船）所」所長となり、続いて後任所長に平野氏が受け継いだ関係上、明治六年平野が上京「長崎新塾活版造所」を経営、神田佐久間町から築地二二〇に移転し、本木氏の協力により「築地平野活版製造所」を設立していた。しかし明治九年石川島造船所払下げのため、当時国立第一銀行総裁であった渋沢栄一の資金応援を受けることが出来たので、その上幸いにも海軍大臣勝海舟、大蔵大臣大隈重信、内務大臣大久保利光等であったことは、伝習所時代知己の間柄同志であっ

たことも幸いしたからである。スタッフは、幕府時代伊豆戸田造船所で蒸気船建造のため、ロシア造船技師指導の下、技術習得をした船大工達であった。

明治十年二月二日、外車汽船「通運丸」完成

明治十年二月四日試運転を行う、隅田川に浮んだ姿は、錦絵にも描かれているが、内国通運（現日通の前身）に納入した。「通運丸」は、平野造船製作の蒸気船第一号である。日本橋↓江戸川↓松戸流山↓野田関宿城にて利根川に合流↓古河栗橋の航路や、明治十六年利根川運河の完成で銚子港への航路も行っていった。

明治十一年 建造船舶一覧表

船名	船種	総トン数	利用
通快丸	木造双螺蒸気汽船	三七・〇	東京湾内旅客が主
東雲丸	木造帆船（暗車蒸気汽船）	一〇二・〇	注文主・栖原角兵衛
第二通快丸	木造双螺蒸気汽船	三七・〇	東京湾内海運業
第一九店丸	木造帆船	一四四・〇	注文・九軒の造酒家
長安丸	〃	一三一・一	
高麗丸	〃	七二・五	
第二九店丸	〃	一九六・〇	注文・造酒家

右船舶の内、木造帆船「第一九店丸・第二九店丸」については、二、心のふるさとの章「住吉神社縁起」の項、江戸各種積荷問屋でも述べたが、九店（くたな）とは、江戸時代の必需商品九種（綿・油・紙・木綿・葉種・砂糖・鯉節・鉄・蠟）を扱う問屋の連合体で、江戸の十三店や二十四組と同様、大阪から

江戸向の、大阪菱垣回船問屋八軒、同樽回船問屋八軒、西宮樽回船問屋六軒の連合体が運営し、主に樽回船問屋（造酒家出資の酒樽運送問屋）が他商店の運送も取仕切ったのである。

屢らくこの二隻「九店丸」の一生を追跡してみよう（山下新日本汽船株式会社社史より）。

第一九店丸 明治十一年建造、木造帆船。

東大保存資料 明治十五年十二月十二日付品川湾入船積荷調によれば、

明治十五年十一月九日、（船名）第一九店丸（屯数）一四四（仕出港）兵庫（船主）小西フジ（船長）牛栖勘右衛門（積荷）紙二一〇個、糖一三三俵、瓦二、六〇〇枚、花四万本、石炭五万斤、取合一四三個、

以上の記録以外、何処の港にも記録なし、従って不明（海難による沈没又は解体か、推定）

第二九店丸 明治十一年建造、木造帆船。

東大保存資料 明治十五年十月一日品川湾入船積荷調によれば、（船名）第二九店丸（屯数）一九六（仕出港）安治川（船主）小西フジ（船長）柴田鶴藏（積荷）酒九〇〇樽、砂糖五〇〇樽、三〇〇〇個、薬種四七個、鉄三七〇束、線香五〇〇箱、浮粉二一〇樽、水油五〇樽、砥石五五〇個、竹皮三〇〇個、米三〇二俵、瀬戸一〇〇〇個、取合一八六個、

※船主小西フジは、名酒白雪蔵元小西酒蔵か。

明治二十年八月四日 大阪府伝法村の造酒家井上仁兵衛の持船として、この日に設立免許をうけた有限会社盛航会社に現物出資。登記簿屯数二八三屯、評価額八、〇〇〇円。

明治二十一年七月から十二月（盛航会社、第二期）九店丸が海難に遭い修理。

明治二十五年一月から六月（盛航会社、第九期）九店丸が唐

津の石炭積、備前山田の食塩積とも事故があり会社成績不良。

明治二十六年一月から九月（盛航会社、第十一期）九店丸は定期検査のため木津川船渠に入渠して修理を行った。

明治二十六年十月盛航会社は、株式会社組織を変更、明治三十一年六月に解散する迄の間に第二九店丸他五隻の帆船が遭難、破船した。

以上が第一・第二九店丸の運命であった。

明治十五年三月 築地二一三三、平野活版所も軌道に乗っており、「東京英学校」（後の青山学院）が銀座から活版所一隅に移転、幸田露伴はこの築地時代の「英学校」に二年近く通った。

明治十八年六月、築地活版製造所（築地二一七）が会社組織になり、社長平野富二、職員男女一七五名、府内屈指の大会社となっていた。

同年平野造船所は、一等砲艦「鳥海」の建造に着手している。

明治十九年五月 平野富二、有限責任東京平野汽船組合を設立、本店を新船松町河岸におく。

明治二十年八月二十日 一等砲艦「鳥海」（排水量六三二屯）の進水式行われ、私設造船所での軍艦製造の嚆矢であると高く評価された。

同年十二月九日 吾妻橋完成、長さ八一間、巾八間、鉄材は英国から輸入、石川島平野造船所の施工にかかり、設計・製造・架設すべて日本人の手で行ったのである。

平野の経営力と情熱は、かなりの成果を挙げたとは云え経営は安定せず、渋沢栄一に救済を懇願するに至った。

明治二十二年一月十七日 平野富二、渋沢栄一、松田源五郎、田中永昌、西園寺公成、梅浦誠一等によって、資本金十七万五千円の有限責任社「石川島造船所」が設立した。

従って、同年十一月十五日、先の東京平野汽船組合は、同業三社と合併、有限責任 東京湾汽船会社となったのである。

明治二十二年四月 佃島以南の埋立工事は、ホボ完了する。新しき佃島の曙を待つばかりとなった。

明治二十五年十二月二十一日、石川島造船所創立者、情熱と努力の人平野富二は、夢を果さず没したのである。享年四十七才であった。

平野の他界と共に、石川島造船所の基礎時代は終り、時代はいよいよ海国日本への幕開けに邁進していくのである。

さて明治二十九年九月 新佃島西町が町名を立て、三丁目に当る場所は初め別荘地として開かれたが、後石川島造船所が拡張するのであって、三丁目に添い、通りを西へ佃島五十四番地に当った所が正門であった。従って、石川島の号屋も増えれば、必然的に工員も増加する。それに伴い一丁目二丁目も、自然に町らしい形態を整えて行くのであった。

先ず町の交流に新佃島西町東町と月島の間を流れる佃川を結ぶために、月島通り一丁目から新佃島（現在の清澄通り）に小橋が架り、これを「初見橋」と云う。この明治三十三年は、新佃島に衛生組合も創立していることは、人口の増加に伴い衛生問題も起ったからであろう。

明治三十四年当時の石川島造船所の現情をみる。

株式会社 東京石川島造船所

所在地、佃島御料地（旧石川島）面積約八千百余坪、外に長

さ二七〇尺、巾六〇尺余の船渠を有し、各種工場発電所・事務室・倉庫・徒弟室・賄所・舎宅等十棟、その他造船台・起重機・船舶を備えている。業種は、船舶・諸機械汽缶・橋梁・車輛・電機等各船の工業に関する製造、若しくはこれに必要な材料購入供給を以て営業としている。資本金二五〇万円、株数三万株、

積立金十五万七千円、分工場、神奈川県三浦郡浦賀町館浦に、面積三万坪、長さ四五〇余尺、巾八〇余尺の船渠と、これに伴う造船台を首め、各種工場並に事務室、倉庫、クラブ、宿舍等各種建物数十棟設置、起重機・貯水池・浚渫機・船舶等を備う。

役員、取締役会長洪沢栄一、専務梅沢精一、取締役浅田正文、岡田実徳、益田克徳、理事兼任平沢道次、同兼支配人道経太、監査役西園寺公成、田中永昌、肥塚龍、職員八十八名、その他頭目・船員等少なからず、備役する職工人夫、日々二千人以上。

製作物は、造機は数多いが橋梁は、吾妻橋・厩橋・永代橋・お茶の水橋・湊橋、電機中主なもの、東京電灯会社の発電機、飯田・長岡・喜多方・広島等の電灯機械、車輛中の主なもの、九州鉄道会社運炭車、造船は、軍艦「鳥海」、汽船帆船一九八艘、水雷敷設用、捕鯨用、浚渫用船舶の如き異種のものも少なくない。

現在浦賀工場で大坂築港用犬島九二艘は、石材運搬用を製造中、なお明治七年十一月英国「グラスゴウ」製造の遠洋航路「明治丸」（一・三七屯）鉄船の修繕を行う。

以上は、明治三十四年七月二十四日現在の記録である（青淵光生著「六十年史」参照）。

この様に石川島造船所の発展は、新築なる新佃島にも必然的に影響し、造船所に働く家族相手の借家が次第に建築される様になって来た。

それはとりもなおさず明治三十三年の衛生組合の設立は、「浴場」の必要に迫られたからである。しかし未だ交通の便は、「石川島の渡し」と「佃島の渡し」だけに頼るしかなく、従って働く工員の居住問題には必要に迫られたのでもあった。この様に人口増加は、明治三十五年新佃島東町「海水館」右隣に、内科外科・伝染病科を主治とする「築地海岸養生院」が設立され、三十七年一月に「海岸病院」と改名、震災後も続き昭和十二年頃まで診療に当たっていた。院長さんは、頭が禿た小太りで、外診には人力車で、よく私宅にも往診されていた。

明治三十六年三月になると相生橋（木橋）の架設により、一段と交通の便が良くなった。これと同時に水道が月島に入り、生活が一層便利になってくる。従って新佃・月島地区の開発に、一層拍車懸ってくる。

三丁目にもこの頃から二、三軒の別荘が建ち始まり、父の話によると、弁護士宅は豪荘なもので、木橋「相生橋」が架るまで、深川蛤町や古石場から小船で別宅の入潮船付場を往復する構で有名であった。この弁護士別荘は、日本橋区通油町長谷川深造宅で、長女ヤス（明治十二年十月一日、昭和十六年八月二十三日）後の長谷川時雨が二十五才頃、当地から築地居留地の女子語学校（現・双葉学園）に通っていた。彼女は日本最初の女性歌舞伎脚本家であり、明治・大正・昭和にわたって活躍した評伝作家・小説家・随筆家として、また「女人芸術」「輝ク」等の編集発行人としても有名であった。「粹」と「美貌」と「江戸ッ子」の気風を兼ね備えた時雨は、六十一才で没したが、葬儀の際吉川英治の弔辞に「明治に一葉あり昭和に時雨ありと後の文学史は、銘記しませう」と賛辞を贈っている。しかしこの地も日露戦争後は戦争景気に煽られ、東京シャーリング工場建設や石川島造船の拡張により埋没していくのである。

翌三十七年二月十日日露戦役勃発、これに合せて出征軍人の送迎・慰問など契機に、町内睦会の結成が促進され、この町にも結成をみた。

幸いなことに四月十日東京電灯株式会社、月島地区に対する配電用水底電線も完成し、町に明りが確保されたのである。従って、町中にも石川島造船工員の貸家許りでなく、店屋の貸家もポツポツ建て始まるのである。三十九年四月には西町一ノ一にも高橋鉄工所が設立する。更に翌四十年には有志の醸金により、月島西仲通り一丁目と新佃島西町一丁目に「新月橋」を架け、月島商店街も少し整いだしたので、新佃島住民の生活に便利さを欲したからであろう。それは又明治二十六年五月佃島四十二番地から、月島西仲通り一ノ四に移転した佃島小学校への登校のため、新佃島の子供達が佃橋を廻っての通学を便利にしたが、一時佃島小学校が廃校され、月島通三ノ九月島小学校開校により編入の上、翌四十一年一月には、月島尋常小学校分教場と改名された。しかし此の橋は、大正三年二月十三日に東京市へ献納したのである。

明治四十五年（大正元年）には、西町に碌々商会製作所も設立され、町工場が増加した。それだけに当地域の娯楽はどうであったかを見ると、明治から大正にかけて、西町一丁目に「月島亭」と云う寄席があったのである。

大正六年三月三十日、西町に火事があり、住宅九棟を焼く記録があるが、町が構成され初めての火事であり、反面家屋が密集し始めたことを示している。

大正六年九月「月島機械株式会社」が、合名会社高橋鉄工所所有（現二ノ一〇）を買収し、「佃島分工場」として、製缶部門担当操業を開始した。

月島機械は、黒板伝作氏が明治三十八年八月、月島東仲通五

丁目に「東京月島機械製作所」の創業が始まる。何故高橋鉄工所を買収したか、エピソードがある。

「月島の渡し」渡般場改修工事完成式に、月島機械を代表して深沢又一郎氏が参列した折、黒岩鉄工所長黒岩富吉も同席、席上同氏が深沢氏へ不況のため工場を買って呉れと話を持出した。

帰社して黒板伝作氏に伝えると、早速問い合わせよとのこと、すると時価一〇二万円するのを三〇四万と吹き掛けて来た。そこで高橋鉄工と黒岩鉄工の深い誼の關係を利用して、高橋鉄工所長に交渉を依頼した処、尚更高く値を吹き掛けて来た。仲に入り業を煮やした高橋氏は、「私も不況で困っているのだ。いっそ俺の工場でも買わんか」と云う話になり、元来単純で簡単な人間であつた高橋氏と黒板氏の氣早が一致して、「幾らで売るか」「負債が七万円位ある」と台帳を見せ、とんとん拍子に話が進み七万円で売買することになり、若し違約した場合一百万円月島機械に支払うことで決定。一応仮契約を済ましたが、高橋氏帰宅し妻や親戚の反対で解約を迫つたが、違約金目当てで購入したのではないから黒板氏は受け付けなかつた。後帳簿を調べると、六〇封度の軌条が落ちていたり、鉄製の運搬車が五〇六台落ちていたり、結構十万円位の価値があり、月島機械にとつては大変利益であつた。しかし買取に際しての資金は、平野富二氏が、石川島造船所の払下げ購入で、渋沢栄一氏の力を借りたのと同様、彼も金策に走つたのである。黒板伝作氏前夫人ヒデ女（齊藤金一郎長女、黒板駿策の母）の縁故で、山口俊太郎（佐賀出身、枢密顧問官山口尚房長男、明治二十年東大工学部土木科卒、巴石油会社専務取締役）の資金融通で資金一三万円出資、黒板氏一百万円、山谷氏五千元、吉田藤八氏（山谷氏義弟）五千元、機械部は匿名組合組織（額を定めず必要に応じて融通）よ

り一応四万円から「佃島分工場」は出発したのである。製缶部は資本金一百万円（内七千円は機械部出資、杉山氏三千元、製缶用器具は現物出資である）経営には資本家の後援を考え、福原俊丸男爵（黒板氏一年後輩東大工学部出身、本社会社改組当初取締役）が大倉喜八郎へ、更に大倉桑馬氏（昭和十九年十一月まで取締役）へと、大倉組との財的友好關係を結び、大正六年株式会社を改組当初から大倉発身氏が会長になり金融面の世話を受けるのである。

大正八年八月には、相生橋を改築工事が始まる程島は賑わつてきたのである。

大正十一年十一月二十四日午後九時五十分、西町二一膳飯屋山田方から出火、長屋九棟を焼失する。

大正十二年七月十四日昨年相生橋改築完了しているので、門前仲町から月島へ市電の折返し運転が開始され、佃島から船で明石町に渡る以外、やっと電車での島外交通が行われたのである。しかし、折角の交通開通も一ヶ月半後、関東大震災で、此の現実は一時の夢として消失したのであつた。

大正十二年九月一日午前十一時五十八分四十四秒、関東地方に大地震起る。相模湾海溝の最深部の深さ十五キロの点を震源とする陥没と、その両側の隆起による地震といわれる。初期微動十一秒四、主要動の継続十分間、最大震幅八・六ミリ。地震後市内外一七八ヶ所、市内一三四ヶ所の火災のため、東京市内全面積の四三・五%を灰燼に帰す大被害を惹き起した。江戸末期、安政大地震以来の大災害であつた。東京下街は殆んど灰尽で、圧死・水死・焼死計九万九千名、行方不明者四万三千名、被害額東京市だけで三十六億円を下らないと云う。

新佃島では、一日の午後八時頃になって京橋区越前堀の火が大川の帆船に飛火し、更に石川島造船所の起重機に移り、折柄

の北風で火勢が猛烈となり、南進して佃島の一部を残し、午後十二時頃新佃島東西町全部を焦土と化した。

罹災者収容は、翌二日月島警察署で、三号地東京セメント試験場事務室を借りて応急救護に当たったが、三号地避難者約五万名、石川島造船所構内と三井貯炭場及び佃島に在る者一万五千名、相生橋が焼失して陸上の通路が杜絶したため、三日に三号地から小田原河岸間の渡船を開始、序で工兵隊活動により浜前橋が改修され、交通の便を得て、三号地避難者を順次焼跡に復帰させた。焼跡に復帰した数、十一日調査で、月島一号地一〇四三名、二号地四七八名、三号地二、〇一八名、石川島一、七六七名、佃島一、五三三名、新佃島七四四名、計八、五七二名の避難者であった。屋外に居て雨露を凌ぐ道がないため、十六日になって東京市社会局より軍用天幕二〇〇張を借用し、数ヶ所に張り困窮者を収容した（月島全島罹災状況大要・月島警察署報告による）。

大正十三年八月、相生橋の再架工事が始まり十五年四月二十二日、隅田川六大橋復興の先駆として、二年四ヶ月をかけ相生橋は再建したのである。島民の喜びは、七、夢の懸橋相生橋の章で記した通りである。工費は、一二四万円であった。

一方石川島造船所は、大正期世界的経済恐慌を迎え、どうであつたか？

既に明治三十九年二月五日、職工七五〇名が給料引上げ要求で、同盟罷業を決定している。

しかし大正三年七月二十八日、オーストリア・セルビアに宣戦布告を機に、第一次世界大戦が勃発、翌四年造船業界も好況に転じ、三、五〇〇屯汽船に着手した。景気が十二月から好転すると気が弛んで油断したのか、創立以来初めて七年十二月に

工場内変圧所から出火、九棟一、三〇〇坪工場を焼失している。大正八年七月二十日、工員七〇〇余名、賃金三割値上を要求、それに呼応して全職工三、五〇〇名がストライキに入るが、翌二十一日には解決した。しかし十一月三日にも、職工が罷業に入っている。

大正九年に、世界的経済恐慌が起つたのであるが、同年四月十六日には、駆逐艦「梅」の進水式が行われた。ところが翌十年三月三十一日、造船課の職工四〇〇名が解雇され、ついに十月八日職工二、九〇〇名が大同盟罷業に勃発、十三日争議に、会社側は要求全部を拒絶したため、当日休業の通知を正門前に掲示した。このため集団行動を実施したところ十五日、警察が出動し、解散を命じたので、争議団は止むなく生活手段のため、二、〇〇〇名の行商隊を東京市内に繰出し、日用品販売を始め、持久戦の準備にかつたのである。

十月三十日午前七時半、木挽町歌舞伎座舞台内陣二階の電気屋から漏電し、忽ち猛火に包まれ、同座を全焼してしまった。損害約二百万円、その折本家茶屋や河原崎権十郎宅も類焼したが、火事で防火に駆けつけた石川島争議団職工達約一五〇余名は、消火後そのまま築地本願寺に集合、労働歌を高唱していたため、警察官達から解散を命ぜられたが、渡船で月島へ渡ったところを、先廻りしていた警官達に包囲され、四名の者が検束された件が、朝日新聞に報導されている。結局十一月八日になって、四十日長きに亘る争議も、当時の虫明月島警察署長の調停により解決したのであった。

争議より二年後、大正十二年四月十四日、新駆逐艦第十二号の進水が行われている。

同年九月一日午前十一時五十八分の関東大震災は、東京市内一三四ヶ所の殆んど同時出火により、翌日にかけて市内大部分を

灰燼に帰したが、石川島の一部と稲垣氏宅及び渡辺倉庫の一部を残し、新佃島全島焼野原となったのである。

時代は、これより昭和に入り、いよいよ軍国主義化へと突進して行くのである。

(昭和時代)

私の父は、関東大震災後で未だ町中はバラック小屋だと云うのに、永代橋東詰北側に十三間口の以前より況して立派な呉服店舗を新築、実は父の本意に反して無理に建設を押し切ったのは義兄であった。父は幼少の頃から内山家を継ぐため小学校生より育てられていたが、実兄吉太郎死亡のため、増山家督を継ぐべく、その代りに嫁いだ長姉が心配して、自分の家作長屋に住む青年と、同長屋に住む娘と結婚させ、内山家の夫婦養子とした。ところが商売経験がなく兵隊あがりのため外交を任かせたら、日夜紅灯に明け暮れ、常に尻拭いを父がしていた。建築も達ての義兄の望みで着手したのである。ところが資金調達に困り、先代が父にと譲り受けた千葉県我孫子町手賀沼の六〇〇坪別荘を売却し建設資金に当てた。この別荘は大正当初、手賀沼地域開発の意味で別荘地として売出したのを、養父が脚氣で困っている父のために購入養生所として建てたもので、いの一歩で購入したところ、地元でこれを記念して庭に開拓別荘地記念碑を建立したと云う（現在もその碑はあるとのこと）。従って父の結婚前迄は、屢々別荘に行き、早朝庭の芝生を素足で歩き廻り、脚氣に良いとされたので養生をしたと云う。

永代佐賀町に呉服店を再建したものの、震災被害の復興は遅々として進まず、衣料どころか食料と住居で深川区民は難んで

いた折であるから、商売はサッパリ振わず、父の商売方法に対する意見を、兵役感覚で判断する義兄とは、常に意見が対立するようになる。父にとつて、番頭初め他の店員や女中達の給料も考えねばならず、母の意見も入れて、行李を販売した。これが実は、当ったのである。それは救援物資を贈られた被災者達が、物資を保管する容器がなく、母自身困った処からヒントを得てのことであった。柳行李の大小種々、弁当箱に至るまで柳材の製品を仕入れ、又木製葛籠を大小取揃えた。永代橋を荷を担いで通行する人々は、吾れ先に購入したと云う。従って私の誕生した頃も、西町で呉服と共に行李を扱って来た。僅かな利益であったが店員すべてに分配し、商売不振を理由に永代店舗を閉店し、土地並びに店舗売却金を義兄に与え、自分は一銭も受けず解散したのである。義兄は荒川区尾久の熊野前で、川越屋呉服店を経営、しかし戦災に遇うまで何時も資金のやりくりを、父へ相談に来ていた。それよりも養母が、養子夫婦をいやがり、折りにふれて口実をつけ、吾が家に泊りに来ていた。従って西麻布檀家寺住職も、養父母供養や法要を、父が代って執行されたいと依頼される程であった。その模様を取引関係の卸問屋の番頭が職を止め、放送劇「川越屋の清兵衛さん」をモデルに、震災前後の夫婦愛と大店での人間葛藤の苦楽をラジオ劇放送したことを、問屋の人々や親戚からも聞かされたものだ。私の誕生した頃の西町は、震災後すぐ建てられた平家が多く、昭和の代に入って二階家の長屋が主流を占めて来た。従って、強制疎開地域外の平家は、大正時代末の建物である。私の産まれた西町二ノ十二の震災前は、平家の米屋であった。偶然にも私の中学時代の担任高杉定次郎先生が、米屋を営みながら日本橋青年学校の夜間教師で法律を教えていた。先生がよく話して呉れたのは、当時の腕白小僧達（岸田理髪店・星野酒店・横井

豆腐店・萬髮結等の息子達、すでに八十才の人々で他界された方もいる。を、遊ばせたり時には学習を教えたり、小遣い稼ぎに米の配達を手伝わせアルバイトさせたものだと云う。又日露戦争を機に、在郷軍人会が結成され、新佃島西町地域住民中では、高杉先生と石山木工造船所長の二人が伍長勤務上等兵で、在郷軍人会中では格が一番上であったから、町での発言力も強かったのである。

先生は関東大震災後は牛込区鶴巻町に住まれ、精米業は甥の中村氏が、現在の佃二丁目八番にて開業され、戦後パン製造に切り替え、区内小中学校給食に寄与するほど成功された。

中学四年の折、新赴任された先生が、何かにつけ私を取り成すので変に思っていたところ、「実はお前の産れた場所に、俺は住んでいた」ことが解り、以後何かにつけて佃を訪れると寄っていた。御曹司御曹司」と大声で私を呼ぶ先生は、自分の子供同様可愛がって下さった。お蔭様で戦後ボーイスカウトを結成した時、先生が指導した当時の腕白小僧達の息子を、今度は私が指導するハメになったのも、何かの因縁であろう。

昭和二年十一月十一日佃川に架る「新月橋」が竣工し、震災後復興したのである（長さ三九米、巾一米）。この橋は明治四十年有志者の醸金により設置され、大正三年二月二十三日に東京市へ献納し震災で崩潰したのである。子供達にとって、正月には凧上げをする場所であり、小学校登下校時の遊び場でもあった。橋の下を流れる佃川は、小船が舳い、筏が組まれた置場でもあり、登校の際屢々水死体が流れつく場所でもあった。生れて初めての人間の死体を見て、男性が下を女性が上をむいて流れることも知った。しかし昭和三十九年「佃大橋」の竣工は、佃川を埋め「新月橋」も過去の話となり、すべて営団地下鉄有楽町線「月島駅」に埋没したのである。橋で問題が起った

のが、昭和三年五月二十五日、相生橋の土台改修を行っていた折、橋台が沈下、その上橋に百十数ヶ所亀裂が生じ、東京市会で問題にもなったことがある。島だけに住民にとっては、橋が命であるからである。

昭和六年一月十六日午後五時頃西町一ノ二五所在のバラックから出火、全焼五棟七戸と半焼四棟七戸の災害があった。私が生れて今日まで、これ程の出火は町に起っていない。

同年三月三十一日佃島小学校が震災復興により落成、東町にバラック仮校舎から移転、翌四月一日より開校された。本校を最後として、東京市立小学校二一七校の震災復興が終ったのである。

私の店前通りは、「新佃島西町大通り」と呼ばれ、向側が一丁目町会、私宅側が二丁目町会で、町では雇員を置き、同級生の高沢君のお父さんが雇われ、カーキ色の学帽型帽子を冠り、カーキ色の動物園丁の様な服を着て、車掌と同様肩から革鞆を下げ、町会費を一軒一軒徴収したり、汲取券を販売したり、葬式にはテントをその家前に張ったり、出征・入営の際の町会旗を先頭に捧持したりする役に当たっていた。戦争以後は隣組制が現在もとられ、当番がこの任を行っている。戦前と戦後を比較して、町会の在り方も今後考える可きであると思う。同じ東京でも練馬の大泉学園町は、戦前は町会隣組制度が実施されていたが、戦後今日まで散会したままでも生活は営まれ、従って余計な出費も散財もない。問題が起れば関係者だけ集まり解決し、大問題は区政が解決して呉れる。今後人口が減少する西町では、一考する時に迫られている。

西町の目抜き通りは、中央十字路から都電通り（清澄通り）に向って南北両側を指し、朝寝でいても、石川島造船所へ通う人々の足音で目を醒まし、夜はホロ酔い気分工場帰りの人々

の声で寝る。朝から晩まで、石川島造船所へ通う人々の音で始まり終る町であった。

私の店前は、「吉川ミルクホール」牛乳店で、昭和三年新婚早々の夫婦が開店、大正風の髪をして、白いエプロン姿は、竹久夢二に描かれる絵の姿のおばさんが客との応待をし、新しい流行歌のレコードをかけるので、子供ながら生いきにも流行歌を覚えたものだ。その上、裏の笠井青年（昭和天皇のそっくりさん）は、ジャズに被れ晩になるとレコードをかけるので、これも知らず知らず覚えさせられた。又、「ダリヤ」や「ナポリ」と「ときわ」等のカフェー、食堂兼酒処「鶴屋」や「吾妻亭」では、女性の嬌声が夜遅くまで聞えたものだ。何れも石川島造船所勤務の人々が、客であった。その他酒店でも立飲みで混み合い、この狭い町に「山田」「武蔵屋」「小川屋」「星野」「梅本」「鹿島」「高山」「二波屋」と八軒、飲食店はソバ屋が、「上村」「長谷川」「船長」「若竹」「鈴木」と「市原の支那ソバ屋」の六軒、食堂は「梅田屋」「山田屋」「埼玉屋」「なべ信」「江尻」「月山亭」「岡野」（以前は祖母が飯屋をついでピリヤードも行ってた）にもう一軒で八軒、他に「高瀬寿し店」とよくも食事処と酒処があったものだ。何れも石川島造船所勤務者が、主客である。又商店主の中には、元石川島造船所工員で商売へ鞍替えした店も多い。

当時子供や造船所通いの人々にも記憶に残る人物が、向い側の太田靴店のお爺さんである。

早朝石川島造船所通いの人々が歩いてるのに、店の表で下着を脱ぎ、裏返えしてハタハタ両手で下着の端を持ち振るい、徐に、縫目にそって爪を立て、虱を潰すのである。年柄年中冬は寒いであろうと思うが、必ず行う。その上不思議にも午後明るい中に旭湯へ行き、今朝の下着を入浴前に脱衣場で、再び虱

を潰すのである。

靴屋は、そんなにも虱が沸くのか、町の笑話の一つであった。深川高橋の中学同級生で製靴会社の問屋の息子が、仕入に来る太田靴店のお爺さんを知っていて、あっちこっちにお婆さんのいることを教えて呉れた。その爺さんが朝晩何かにつけて、お婆さんと口論し、最後には必ず箒で追われ、店を飛び出すお爺さんの姿と虱に併せても、どー考えてもお婆さんのイメージが、噛み合ないのである。ある時、深川八幡の縁日で下校の際、深川公園を横切ると、靴屋の小僧が一人でベンチにいた。「お休み」と問いかけると、小指を立てて「お爺さん、この家にいるんだよ」と教えてくれた。噂は、本当らしい。人間には特技があって、このお爺さんが、人相手相観なのである。それが何処で勉強したのか、「ズバリ」当る。天眼鏡を顔面に押上げて、徐に予言する。

私の今日までを思い出すと、子供の頃云われた通りであったから、お爺さんには脱帽である。

毎年春秋になると必ず気が変になるお婆さんがいて、「狐」つきと皆は呼んだ。御主人はいたって静かで鍛冶屋をしていたが、普段は良き妻なのに、温暖の時期になると、むずかしい和歌を口ずさみ、ちゃんと理に叶った事を大声で呶鳴る。天気の良い朝は、靴屋のお爺さんが虱を潰している隣に、椅子を出し腰かけ、道を通る人々に注意を呼びかける。特に石川島造船所へ往く工員の人々に向って、「お前は、昨日何をした。そんなことをすると体に悪い。止める、でない」と早死にするぞ」とか「罰が当るぞ」とか驚かすのである。ズバリ当るらしく、問われる人は気味悪く足早に去って行く。やはり「狐」つきなのかも知れない。戦後も気が変になる季節になると、家庭内に問題のある家前に立って、ブツブツ注意を云っていた。冬の未だ気

の触れていない時に私の店へやって来て、自分の過去を私に述べ、こんな所へ嫁にくる身分ではないことを語ったことがあった。なんでも京都の公卿の血を引く後裔だそうだ。

私が現在住む場所は、初めバラックが五―六軒建っていて、八丁堀材木商川名氏が此の辺一角の地主で、貸家新築に当り、昭和六年西町一ノ二十五火災を知り、又既に住んでいる人の意見の進めもあって、稲荷を祀ることにした。丁度石川島自彊会館を建築するため、二十二軒許りの平家長屋が取り壊され、そこに住んで居た一老婆が、石を積み祠とし稲荷を祀っていたので、有志一同地主と共に、此の地の守護を祈願して、「新佃稲荷」を祀ることになった。地主の川名さんは、昔からの店のお客であったことが縁で、父に稲荷を祀る相談を持ち込み、同業者で神導職にある古田光伯師に依頼、「伏見系」の稲荷として祭祀することになった。

（事跡）新伏見新佃稲荷祠

——新伏見新佃稲荷記——

佃二十一―二十二

昨年（一九九〇）は、住吉神社大祭でした。江戸の祭りと言えば、山車が主役ですが、佃住吉と浅草鳥越神社は、昔から神社神輿を町民が担ぎ巡行しています。今では民主的だと思われませんが、当時はそれほど貧しかったとも考えられます。私の町、佃二―三丁目町会の町神輿は、昭和七年町民の寄付で作られ、翌八年の大祭は盛大に行われました。

当時の大祭が私にとっては、昨日のように思い出されます。それほど大祭の名に相応しい街の賑わいでした。

佃大通りは清澄通りまで背中合せ二列の夜店が並び三日三晩参拝客で溢れていました。その上現在私の住む場所は広場で、

二張りの見せ物小屋が立ち、私にとってこの種見物は、今日まで唯一の経験でした。

夜になるのが待ち遠しく、親にせびって小人五銭の木戸銭を手でテント張り小屋前に行きますと、すでに見物客で溢れています。呼び込みのおやじさんは、大声で宣伝を始めます。

「さあー、お客さん見てビックリ、あとで良かったと思う代物だよ。何しろ首が二つ体が一つの赤子の馬のミイラ。噂では聞かされたこともない河童が、今夜は見られるよ。この世にへソのない人間がいるのも見られるよ。もっと驚くことは、夜な夜な丑三つ時になると首が延びるロクロッ首、そうだ、今夜は祭りだ、先に見せちゃおう。さあー、愛ちゃん、ご挨拶」

と云いながら天井から下がっている紐を引くと、後の黒幕が開き、箱の上にサロメ風の美女の首が目を閉じて銀皿に置かれているではありませんか。私はハッと驚き目が据え付けられ、急にパッと美女は目を開き『ハイお客さま、今が見頃、ヘソなし人間が登場いたしましたあーす』と、キィキィ声をあげるや中央の幕がサーッと上がり、ドスンとすぐ落ちました。小人の女性が舞台に出てきたのを、チラッと垣間みた思いがしました。同時に呼び込みのおやじさんが手の紐をはなしたので、サロメの美女の首も見えなくなりました。

「さあー、これから始まるよ。見なきゃ損だよ。いらっしゃいらっしゃい」と囁し立てますと、木戸へ向って客が押し合います。私もいやが応でも押されながら木戸の中へ入ってしまいました。何のことはない、見終って何か狐につままれた思いがしました。

その夜十時、父と一緒に旭湯へ行きますと、呼び込み親子が入浴しています。私は見物したことを話すと、おやじさんは「有難うございます」と挨拶しました。私と同年令の子供と話

し易くなり学校へ通っていないこと、遊び相手もないこと、「明日遊びにいらっしやい」と、おやじさんからも誘われませんでした。

私は好奇心から、神輿を担ぐより見せ物小屋に惹かれて早速翌日出かけました。子供と学習の話から「乘法」の覚え方を紙に書いて教えますと、そのお礼にと昨日の演目の仕掛を教えてくださいました。

二日目の夜は、隣の小屋を見物しました。袴姿の女太夫が、囃子に合せて、小鳥たちを棒・紐・扇子等の小道具を用いて、自由自在に操ります。終りに場内中に飛交わせ、合図と共に太夫の持つ籠の中へ吸い込ませる技には驚きました。ご愛嬌に四角籠の中のお宮さんの扉を小鳥が口ばしで開き、中からオミクジを銜えてお客さんへサービスを何回か繰返し鳥芸は終わりました。

次に手足のない女性が出場、口に筆をくわえ、達筆な文字を下座の囃子に合せて書きます。次には足の膝へ筆を紐で結び、同様に文字を書くのですが、これも達筆で数枚書いて客に振舞いました。もっと驚かされたことは、口で布を縫い合せることです。最後に舞台正面に障子を立て、裏から口に筆をくわえ、客が読めるように、「恋しくば 尋ねきてみよ 和泉なる 信太の森の うらみ葛の葉」と書いたことでした。観衆のすべてが驚嘆し、拍手喝采を贈り終了しました。私にとって、この不具者女性の至芸は、未だに忘れることが出来ません。後で解ったことですが、「ダルマ娘」中村久子（一八九七—一九六八）の姿でした。彼女は「突発性脱そ」で三才にして両手足を失い、母からこの様な躰を身につけられ育ちましたが、治療費の借金から十八才の時、義父に見せ物小屋へ売られ、人目にさらされ屈辱の日々を送ります。年季が明け座員と結婚、娘を産みます

が不幸にして夫が他界、三度目の結婚後、昭和十二年来日したヘレン・ケラーと対面、一役世間から注目を浴びます。興行を止め講演活動が続きますが、次第に慢心が高じていく自分を悟り、再び興行の世界へ戻り一生を送りました。彼女は、「いかなる人生にも絶望はない」「人は自分で生きるのではない、生かされているのです」と、語り続けた人でした。

当時の大祭ほど、今日まで大規模に催されたことはありません。それだけに祭が終わると一層一抹の寂しさを味わいました。またこの場所が、それだけに私の脳裡に忘れない場所として残りました。

この広場の裏に長屋があり、かなり前から一老婆が小さな石の祠に稲荷を祀って朝夕祈願していましたが、昭和九年（三月下旬）新佃島西町二丁目町会有志により、広場中央に「新伏見新佃稲荷大明神」として建立しました。

神主が祝詞を奏じ始めると小雪が降り出し、関係者は縁起を担ぎ喜んだものです。子供ながら私もお手伝いして、参拝者の方々へ供物を配ったことを昨日のように思い出します。

昭和十六年小さな盆栽的境内の片隅に、戦勝を祝して国旗掲揚台が立ち、祝祭日には近所の人々が集まって日の丸を掲げたものでした。しかし戦争が酷たげとなると石川島造船所が軍需工場のため、作戦上延焼防備の意味から、周囲家屋が強制疎開で立退かされ、稲荷祠は家屋の廃材に埋もれていました。

戦後衣料配給のため呉服店を当地に再開し、学生である私は父の店を手伝いながら知ったことは、戦災に免れた月島・佃地区は、一軒に二〜三世帯の同居が普通で、人が溢れている状態でした。少年犯罪を研究していた私は、北区の年間少年犯罪数より月島警察署の年間少年犯罪数が多いことを知り、何かお役に立ちたいと、昭和二十四年七月セント・ポール青少年クラブ

を結成、子供達が相互に学びあったり、遊びあったり出来る場所をと、稲荷祠隣に集会所建設を試みました。十六名の中学生達と私は、一週間学校から帰宅すると、社会事業団のお手伝いを兼ねて、キャラメルを石川島造船所の門に夕方立ったり、町内の希望者宅に販売をして、約六千円の利益を得ました。子供達が自分で働いた金で、自分達の設計により、自分達の手で家を建てる試みは、六坪の小屋の骨組が夏休みの終りに建ったのです。

九月一日キティ台風の襲来、一晚中暴風雨に晒された裸体の少年達は、柱一本に一人ずつロープで体を縛り、支え合った甲斐なく骨組は倒壊、残念にも挫折、その後一年間夜空に星を眺めながら学習と遊びの研究を、お稲荷さんに守られながら勉強し合ったものです。日曜には近くの公園や遠くは深川公園まで遠征し、小さい子供達を集めて遊びの指導をしたり、夜は町のために火の用心と少年達は奉仕もしました。

さすがに親達の心が動いて、毎月五十円小遣いを貯め、翌二十五年秋大工さんの指導のもと、少年達の手作りの遊び場が建設され、今日まで「聖人児童館」として成長して来ました。

お稲荷さんと子供達とは良く云ったもので、毎日百名を超す子供達が狭い場所に集まり、自分達のプログラムで活動していたのですが、これが評判となり全国から少年に対する社会教育指導者が見学を訪れ、厚生省・文部省からも専門家が見学に、更にニューヨーク大学教育部長まで訪れられたのには驚いたものでした。

それは、昭和二十四年秋の夜のことです。

「お宅の前に来ると体が固くなり、動かなくなつたので、不思議に思つて見ると、お家の裏から金色の光が見えますが、何かあるのですか」と云つて朝日新聞の女性記者が店に入って来

ました。「裏は石川島造船所の自彊会館で、リクレーションをしている電気の灯ですよ」「いいえ違います。電気の光ではありません」「それでは、子供達が外で学習している電気の灯りでしょう」「いや違います、裏に入っていますか」暫くして記者が店に戻りますと「お稲荷さんは、あなたが祀っておられるのですか」「はい私と町の子供達で……」「大変良いことです。国を思う神様らしく、その上子供達が集まって勉強している姿を見て、私は感激しました。どうぞ長く指導をして下さい。私からもお願いします」と云つて立ち去られてから以来、鳥居を寄贈したり、供物を供える方々が多くなり、理由をお聞きすると、就職・入学・病氣快癒祈願成就のお礼だそうです。

子供達の活動は、種々のグループを産み、国際性を豊かにとボーイスカウト・ガールスカウトの団も設立し、益々成長していったのです。

戦後「母の日」が制定され、日本の母の代表へカーネーションを捧ぐべく、厚生省の依頼で皇后陛下に宮中へ参内したり、昭和二十八年戦後の独立で米副大統領来日にも、日本の子供を代表して歓迎の大役を勤めたり、軽井沢の夏キャンプでは、中学時代の美智子妃殿下との出会い、平成天皇や御弟妹君、高松宮殿下達の御来訪、佃島のボーイ・ガールスカウト達は、本当に幸福でした。又英語学習の一助として、米大統領夫人・インド首相・ニューヨーク市長・ロンドン市長・ニューデリー市長等に子供達はお手紙を出し、それぞれ返書を頂き、その上ペンフレンドの紹介を受けたり、少年達は感激したものです。

昭和三十八年には、会員も三百人を超し集会所を改築するに当り、申訳なくも「お稲荷さんの祠」を解体しましたところ、「御神体」一台に、昭和九年春「佃稲荷」と名が記されておりました。戦前から「新伏見新佃稲荷大明神」と職を立て、石碑に

も刻まれているのに、何故か疑問を感じていました。その年の六月北海道旭川で、文部省主催「全国社会教育大会」が行われ、私は東京代表で出席しました。開会に当り自己紹介を致しましたところ、「佃島」のことについて三十分も質問時間をとられ、まさか最端北海道で、佃の説明をするとは思いません。帰京しますと、区から町名変更で当用漢字にない「佃」は使用せず、神社祝詞にある「住之江・住吉」二者の中から選ぶのだと、佃一・二・三丁目町会で騒いでいるではありませんか、お稲荷さんの名称と北海道の経験は、「佃」の名称が残存した一助にもなった次第です。

私は昭島市拜島にある啓明学園役員を長い間やっておりますが、故五島慶太氏が学園敷地の内、十万坪を売って呉れないかと相談があり、何にするのか問いますと、多摩川を挟んで八王子滝山城趾と学園を空中ケーブルで結ぶ一大遊園ランドを造る構想はどうか持ち込んで来られたのです。勿論学園はお断りしましたら、実は佃の石川島造船所と対岸の霊岸島を隅田川を挟み、ポートや空中ケーブルで結ぶ海上遊園ランドを計画したが、土光社長に断られた由、誇大妄想を抱く人だなあと思いました。当時五島慶太氏は、ボーイスカウトの相談役をしておられました。縁は異なるもの、後石川島造船土光社長もボーイスカウト総裁になられ、老骨に鞭打って群馬県榛東村で行われた東京ボーイスカウト大会では、半袖半ズボンで少年達と御一緒したものです。

お稲荷さんにまつわる戦前戦後の体験の事実は、正に小説よりも奇なりで何れ発表する機会もあると思えますので割愛させていただきます。

四十五年前少年達に私は、月島は日本のマンハッタンになると申しましたが、ウォーターフロント開発は、リバーシティと

して日増に進みまして、佃二丁目も間もなくその煽りを蒙り、すばらしき発展をすることでしょう。

昭和二十四年より今日まで、子供達に守られた「新伏見新佃稲荷大明神」は、此処を巣立った多くの子供達のふるさととして残し祭って行く処存です（本記事は、一九九一年五月「佃島物語」その七に掲載）。

呉服屋は女性客が主であるから、商売をしながら必然的に、嫁姑問題、夫婦間の問題、近隣の恋愛の噂、子供育ての問題、子供の結婚問題等、種々話題につきない。父母は相槌だけを打って、時には相談者になったり、同情したり、注意をして慰めたり、何組かの結婚を纏めたり、傍に居て子供ながら、大人の世界を垣間見た思いをした。

戦前は、女性がすべて「きもの」である。店の客は、深川全般に互っていたが、特に富岡町・木場・古石場・門前仲町・佐賀町と中央区では新川・箱崎等の方々で、きものを購入し易い方法を考えて欲しいの御要望に答えて、「互福会」を組織、毎月会費を積立て、月一回の集会時に籤で当たった方が、一年間会費分の品物を先に購入される仕組みである。従って毎月の会合は、料亭で会食したり、観劇したり、一流料亭での展示会（産地卸商共同主催）、この他会員でなくとも年間お買上げ下さる御得意様を含めてのバス旅行も実施した。東京呉服小売店で、バス利用旅行御招待を行ったのは、最初で業界に有名となった。

子供の頃から店の後継者として父は、私を店では小僧同様扱った。正月の年始廻りは、学校の新年式から下校すると、すぐ贈答用の店名入手拭や風呂敷を、新しい大風呂敷に包んで首から吊し両手で支え、父に随って新佃島・月島、深川方面、新川・箱崎と遠くは浅草から春日町まで、お得意様年始廻りが七草ま

で続くのである。それは親心からか、子供の時からお得意様に顔を知って頂く、父自身の経験から指導したのである。又月末支払の銀行入金には、父以外は小学生である私のみに銀行へ行かせた。

年間を通じて一番多忙なのは、年末年始の月である。特に初春に着る「きもの」の仕立を、期日まで如何に間に合わせるか悩みであった。

仕立が上がると直ちにお客様宅へ届け、仕立が間に合いそうでないと、「仕立屋」へ催促や取りに行かせられもした。従って、数軒の染場と抱え仕立屋の有無で呉服店の将来は決まるのである。深川一丁目に通称「お藪」と云う仕立屋が、私の店の主たる抱え仕立屋であった。仕立ものを取りに行き、親方の部屋で待つより、仕事場で働き振りを観るのが楽しみであった。

二階に上がり、五十畳ばかりの和室に、三十四〜五人の男職人さんが、胡座を組み、足の親指の又で布の端を挟み、片方の縫い合せる布端を紘台に止め、縫い合せる布を右手親指と人差し指で持つ糸針を、ツと一気に入先まで運んでゆく、実は手指は上下して布を縫いつけているのであるが、子供の私から見ると、正に神業である。この動作を大広間に三十才前後の男性が、三十名以上一勢に踊っているしか見えない。すばらしい光景なのであった。一人一日給せ着物（振袖や訪問着）を、楽に一枚仕立てるのである。この職人さん達も、昭和十五年頃から、一人一人と減って、誰一人として戦後今日まで再会していない。恐らく戦死か、戦災死されたのであろう。

学校の冬休み十二月二十五日になると、新川・箱崎・木場の会社や新佃・月島の町工場等の贈答用誂手拭や名入れタオル、中には芸妓の箱入れ名入れ風呂敷等を折りたたみ、名入れ封筒や箱に入れる作業が、三十一日夜を明かすのは当然で、翌日元

日学校から帰ってもその作業が続き、午後三時頃終るのを常とした。それから近所の年始廻りを行うのである。従って大晦日は、他の商売屋さんは大掃除をし、新年を迎える用意をするが、呉服屋は、着物小物を購入する女性客で賑わう。その上「除夜の鐘」が鳴り出すと、女の子や若嫁さんが一勢に店へ飛込んで来て、黄金の布（黄色）を一〜二尺購入し、家へ取って返して、除夜の鐘が衝き終るまでに「財布袋」を縫えば、新しき一年中金に困らないと云う縁起を担ぐ客で、再び賑わうのである。戦後は、その風習も無くなった。

一月七日か八日三学期始業式頃は、私の正月中楽しみの一つである。それは、佃ばやしが訪れるからである。

私は神楽囃子が好きであるが、祭囃子と云うと、明治の頃は神田・深川・葛西の囃子が盛況を極めていて、「馬鹿囃子」と一段低く見られていた。それは祭りで若い衆が集まるところから「若囃子」の言葉から擲擲されたのかも知れない。異説に、和歌の浦の漁夫がはじめたので、「和歌囃子」が起りだと言葉尻から云われもしていた。しかし昭和になってからの「佃ばやし」は、私の知る限り神田・深川・葛西囃子より、より高尚である。何故なら神楽囃子を主とし、毎年二月の白魚祭りは神事であることでも了解される。むしろ正月の町廻りの囃子は、里神楽と云えるのである。

（年中行事）佃ばやし

「ピーイッ・ドンドン・テン」

大川の川面と永代の橋板に反響して、囃子の音は一層冴えた。船中の客は、遊び疲れと酔いしれて寝静まっている。昭和十年七月両国の川開きに御招待したお客様達である。

明治の頃から取引客である回漕店より屋形船を借り受け、菊地水店から船中用冷房水柱と氷水樽を出入口と真中の三ヶ所に置き、小山八百屋より西瓜と二葉屋の和菓子、それに魚初より刺身の盛皿、高瀬の寿しの折詰、鹿島・山田・高山各酒店より酒のつまみと酒樽・ビール・サイダー等を発注し、小学生の私も帰校後、小僧や女中達と共に、新月橋際に舫^{かぎ}っている屋形船へとこれら食べ物を運んだ。どこで聞いたか「佃ばやし」の金子幸吉氏が、どうしても連中を乗船させよと父に申入れがあり、喜んで同乗して貰った。

船の帆先と後尾に「川越屋呉服店」の旗を押し立て、船のグルリに紅白の幕を張り巡らせ、「佃子」の囃子に合せて岸を離れたのが午後三時頃であった。橋上から手を振って送る者、私達も行って来ますの合図の手を振る。百名近いお客様の中には、外にお構いなくすでに酒盛に興じている者もいる。

浜町公園近くの兩岸には、早くも百数十隻の大船小船が舫^{かぎ}っていた。「バ・バーン」明るい空に、音火花が鳴りわたる。「佃の川越屋さん」船から船に飛移りながら、人形町のみやげ用「せいたくせんべい」と、日本橋「弁松」の夜食用弁当が運び込まれる。夏の六時と云っても、まだ明るい。柳橋の芸者衆の船では、三味に合せて歌が始まって賑やかだ。「武男ちゃん、こっちも踊ろうか。」オッペケペーのおじさん（金子氏を私は、そう呼んでいた。）が、私に聞いた。「まだ、明るいからやったら」と云っているそばから、道具箱から衣裳と面を出し、先ず「狐」による清めの踊りから鈴を手に囃子方に合図して、船先で舞始めた。相手方の「ひよっこ」役も、用意を始めた。佃子連中が、川開きの船上で「かぐら」を演じるのは初めてであらう。

「狐」と「ひよっこ」の先払いが終ると、素戔鳴尊の面おもてに似

た面をつけ衣裳を着たおじさんの剣の舞が始まった。ところが一勢に船から船にたわって花火見物客が、私達の屋形船の囲りの船に飛移ってくる。いつの間にか芸者衆も三味を止め、皆隣の船に移って見に来る。中には、外国人も多くいた。「ピーッ」「ピーッ」海上整理の巡查達が、モーターボートで笛を鳴らしながら近づいて来た。「花火を見に来たのか、かぐらを見に来たのか、自分の船に戻って下さい」メガホンで囁^{ささや}りまくる。しかし、観衆は動かない。とうとう巡查は、私達屋形船に乗り込み「かぐら」の中止を申出て、お開きとなる。

「佃ばやし」は、毎年正月から二月の春分まで佃・新佃・月島と一軒一軒門付けをして、獅子の厄払いをするのが慣習であった。連中を仕切るのが金子幸吉氏で、先達役であるから家々に先に入り「おしねり」を頂くと、いつ見るとか中味により手で合図を仲間にする。「おしねり」の額によって、獅子舞や「おかめ」「ひよっこ」「大黒天」と出し物が異なる。私の家に来るのは、学校の始業日にいつも重なり、学友や隣近所の子供達から「今晩行くから席を取って」と、よく予約を受ける。どういふ訳か、佃ばやし連中は、勝手に正月はそうするものだと七草中の一晚、私の店先で里神楽を演じる。恐らく父が、新しい神楽の衣裳や日常着る連中の着物も「ある時払いの催促なし」で、蔭で支援していたからであらう。それは午後五時頃から八時頃まで演じるので、近所の人々や子供達の観衆のために、伊藤のパン屋から「菓子袋」を、小山の八百屋からミカン箱等買い替え、二葉屋から紅白の餅を誂^たらえ、踊り場からまいたり結構散財する。終演後は、連中も二階に上がり酒を勝手に酌交わし、高瀬の寿司、魚初の刺身、月島の鳥辰から鳥料理や柳がわを取り寄せ馳走し、御祝儀を各自に渡すのが慣わしであった。

金子幸吉氏は、魚河岸の仕事の合間に「佃ばやし」を起し連

中を指導している、その努力を父は買っていたのである。

本来江戸の里神楽は、埼玉県鶯宮神社の「土師一流催馬楽神楽」を源流として江戸初期に江戸市中に広まり、能や狂言・歌舞伎等当時の流行を取入れながら、祭礼を盛上げる庶民芸術として発展してきたが、中でも演目を際立てるのは囃子である。

江戸の三囃子と云えば、神田・佃・葛西の囃子を指し、江戸市民から親しまれて来たものであるが、他の二囃子と違うのは、佃島漁民が毎年二月十六日白魚初出漁の折、沖に出て御神酒を流し、大漁祈願をし、独特の「佃ばやし」を囃子ながら沖から引上げてきたものである。そのため、「佃の盆踊」と同様佃島の郷土芸能である。これを昭和になって、佃ばやしと神楽の観賞にまで成長させたのが、金子幸吉氏であった。特に「佃ばやし」中興の祖である。素戔鳴尊面にそっくりな金子のおじちゃん^{おぢちゃん}の目は、人を射抜くするどい目をして、背も高く偉丈夫であった。昭和十一年春、青山能楽堂で神楽の新創作を発表された。

それまでも、子供ながら上演の都度観賞に行ったものであったが、実はそれが最後の舞であった。上演後楽屋で、新衣裳や面を拝見させて頂いたり、演出について語り合う姿をみて、その気魄に子供ながら心驚かせられたものである。翌十二年日中事変が起り、上海上陸作戦の折、加納部隊の喇叭手として名誉の戦死をされ、死んでも口からラッパを離さなかったことが、当時の新聞記事に記されている。

姉が高等女学校の文化祭で「かぐら」を踊ることを考え、残された連中の方々に話したところ、若山清磨氏が「戦争で私も最後かも知れない」と喜んで応援、もどきがよいと「ひょっとこ」の振付けを姉に師事され、当日囃子方を引連れ学校で演じたことがあった。

戦後その若山氏は、佃橋の畔、渡辺油店に御夫婦で間借りを

し、隣間には活弁の国井紫香（当時浅草フランス座支配人）夫婦も住んでおられた。昭和二十四年の秋、若山氏が見えて、「金子氏の遺族が神楽の面や衣裳もあり、再起したいので力を貸して欲しい」と申出があった。

未だ物資不足の折であったが、父は無い中から必要とする衣裳の布生地を融通してあげたものである。囃子連中再起と云っても、元の連中は散り散りで、その形をなさない。その頃は江戸囃子何処も同じであったが、葛西の松本氏と若山氏が主となり、取敢えず「里かぐらを観る会」を結成、その研鑽に務めた。私も理解者を多くさせるため、ボーイスカウトやその父兄達と私の家族を引連れ、水道橋能楽堂での上演には、その都度観賞に行き応援もしたものである。

残念ながら若山氏も若死にされ、細々ながら昭和五十年頃まで、祭りと正月巡行だけは瓜生氏を中心に続いていた。松の内に銀座まで散歩をすると、歌舞伎座・松竹セントラル・新橋演舞場等の玄関口で、連中が囃子の厄払いをしているのを目にした。時には幕間に、幕外で獅子舞を演ずることもあった。それも今は、昔の語り草である。

「佃ばやし」が漁業もなくなり、他の囃子で味わえない、粋な笛の音色と小太鼓の音が聞けないのが残念である。

その後「佃ばやし保存会」も結成され、古老が後継者を指導して祭りには屋台で演じていたが、今はどうか？

私のボーイスカウトの教え子、瓜生・吉川両君もその一員であったが、彼等が中心となって再興されることを願っている。

つくだ 囃子の 粋音色

くれば 白鷺 住吉の

だらり 競うか 藤の花

じまん 腕かたの 江戸祭り
まっぴら 御免ごめん 蒙まかります

川越呉服店店主敬白

(平成五年四月一日「佃島物語」その十掲載)

日華事変より昭和十三年に入ると諸物価暴騰の上、物資不足が進み、贅沢は敵だと、長袂のきものを着て銀座など歩いていると、婦人会のおばさん達から非国民とされ袖を半分切られる世の中となり、三月から衣料切符制度となった。

従って配給衣料が店に届き翌日販売となると、早朝から行列が店頭に来て買う状態であった。この切符制度は、戦後昭和二十五年九月廃止まで続くのである。

昭和十五年六月十五日 勝鬨橋完成、盛大に渡り初式が挙行され、当地域の立地条件が一躍都心並になったのである。

昭和十六年十二月八日 真珠湾攻撃、米英に宣戦布告。マレー半島上陸、遂に世界大戦へと突入した。

昭和十七年 月島小学校内に高射砲部隊第四防空連隊が設置され、身近に戦争感覚を感じ始めた。

昭和十九年五月一日 都バス門前仲町から月島八丁目間が開通され、銀座までの交通が結ばれた。

私の店は昭和二十年三月一日閉店し、新佃島西町より板橋区(練馬区) 大泉学園へ疎開したので、十日後東京大空襲により親戚が全滅し、九死に一生を得た伯母二人は、生涯私宅で過ごすことが出来た。従って、戦後一時衣料販売が東京は中止されていたが、翌二十一年秋より切符制度の復活となり、衣料店へ登録しなければならず、西町の方々の要請もあり、一ノ七旧伊藤

パン店を借用して再開、二十四年に現在地へバラックながら店舗を新築し移転したのである。

一方軍国主義方向に足を踏入れ軍備拡張期に入る昭和の石川島造船所は、軍艦製造することが主であると解っていても、同じ町に住む住人達は、どんな船で何時完成したも知る由もない。総て軍の秘密であり、壁に耳ありスパイ防止策のため軍備については、口を滑らしてはいけない時代であった。それでも、昭和の初めは、新聞に報導されていた。

昭和二年一月二十四日 海軍省から特務艦「白鷹」の建造を命ぜられ、十一月に世界最初の急設網艦「白鷹」の建造に着工している。その間四月三十日には、一等駆逐艦「長月」が完工している。

昭和四年四月九日 建造中の急設網艦完工し引渡完了。十二糎高角砲三門、急設網六海里分(機雷百個)を装備していた。

昭和五年二月二十七日 駆逐艦「天霧」が進水式されたが、実際には昭和三年十一月に起工し、五年十一月に完成している。この艦は在来の一等駆逐艦の兵装を五割増とし、「特型」と呼ばれ、基準排水量一、六八〇吨(公識一、九八〇吨)、水線長一五・三米、最大巾一〇・三六米、三連装発射管三基(六糎魚雷九射線)、十二・七糎砲六門(連装砲三基)、主機艦本式タービン二基(五万馬力)、速力三七ノット等が主要目(計画時)であったが、昭和十年に下部外枝二重張り、船首楼補強、固定バラスト搭載など改造が行われ、排水量二、四三〇吨、速力三四ノットに減じた。

——「天霧」の活躍は、開戦当時マレー半島への兵団輸送を行い、コタバル沖でオランダ潜水艦Q二〇号を撃沈、翌十七年一

月、エンドウ（マレー南部東岸）にて船団護衛中、英艦「サーネット」撃沈、以後パレンバン、スマトラ、アンダマン等攻略、ベンガル湾機動作戦に活躍し、帰国後六月にミッドウェー海戦に参加、シンガポール、比島等の作戦中八月、米軍がソロモン群島、ガダルカナルに上陸したため、二十日にトラック島に入港、二十八日ラバウルに回航中、米空軍の猛攻により、他三隻沈没又は航行不能や小破の損害を受けた中、「天霧」のみは健在であったが作戦は中止された。後何回も繰返し輸送作業するも、年末までガ島への輸送は九回実施しているのである。翌十八年修理のため帰国するも、三月には再びラバウルに進出、この折ソロモン海域で、日米両軍の死闘が続くのであるが、この折かの大統領ジョン・F・ケネディが、魚雷艇長（当時海軍中尉）として、日本駆逐艦「天霧」と衝突、船体を切断され無人島に泳ぎつき奇跡的救助されたことは有名である。

昭和十八年八月一日 月令ゼロの暗夜、日本海軍はコロンバラ島東岸ヴィラに陸軍兵団を輸送中、警戒に「天霧」が当たっていた。出撃は、午前〇時である。この周辺は、常に十五隻のPT型魚雷艇で、米軍が毎日哨戒している地域である。ケネディ中尉指揮のP一〇九は、他の三隻とコロンバラ島南のブラケット海峡を哨戒中、内PT一五九がリーダーに四つの白点を捉えた。ヴィラには、数分の航程地点である。距離五千米、確認のため接近の途端、日本軍発砲、直ちに魚雷四本発射、残念標的をはずす。

他の魚雷艇数隻も影像を捉え、約三十本の魚雷発射、しかし日本駆逐艦四隻は、無傷で午後十一時四十分ヴィラに到着、四十五分間で作業完了、帰途に着く。「天霧」はブラケット海峡に入る。速度三十ノット。突然艦橋に「黒いもの左丁度一〇（一杆）」大声があがる。黒いものがぐんぐん近づいて来る。前

方二百米、魚雷艇である。それもアメリカ人が見える、後の舵輪を握った艦長も見える。魚雷艇は「天霧」の針路上を左から右に横切り、近いので砲撃も出来ず、唯「体当り」しかなかった。二日午前〇時二十四分、艦首に衝撃が走り火花が上がった。「天霧」の軸先は、PT一〇九の艇長（ケネディ）席右舷に鋭角で衝突、「天霧」の船体が小刻みに振動を始めたが二十八ノットに減速、同日午後五時ラバウルに帰港、直ちに調べると右舷吃水線約三十糎の処が艦橋から艦尾まで、水平に強くこすった傷跡と、左舷の艦首水線部が少し裂け、他にプロペラ翼一枚が曲り先が欠けていた。ケネディ艇は、真二つに切断、後部は海中へ、前半部は浸水、二名戦死、ケネディ中尉以下十一名は無人島に泳ぎついたのであった（天霧先任将校志賀博氏著より）。

翌昭和十九年四月二十三日 マカッサル海峡を比島ダバオに向け速力二十四ノット、べた風ぎ、心持良い航行である。正午過ぎ「ドドン」艦底に衝撃あり、乗員の体が天井まで打ちあげられる。艦底で磁気機雷が爆発、瞬間に第一艙室が発火、やがて艦橋も火焰に包まれ、艦は右に傾き前部より沈下が始まる。「総員退去」乗員が海中に飛込むと同時に「天霧」は、海中深く没して行った。時に午後二時五十三分、触雷後約二時間の死闘の末であった。機関長は、部下も退艦させた後、機関室に残り艦と運命を共にしたのである。

物語は、昭和前期に戻る。

昭和六年九月五日 石川島造船健康保険病院が落成、工場関係者許りでなく、佃島・新佃島・月島住民は、今日まで健康管理上恩恵を受けることになる。

昭和七年九月 西町二ノ二〇に、私立石川島工業補習学校を設立し、若き技能者の育成に当り始まる。

昭和十一年 東一工場事務所にトタン板バラックながら、本

社の事務所が出来る。

昭和十二年 満洲・奉天製作所が、東芝と共同で設立、この年月島地区機械工場は、平和産業から軍需工場に転換、十五名以上の工員を使用する工場六十二工場を数えた。

昭和十四年八月 石川島自彊会を初め、三十二工場が産業報国会を組織、八日月島第三小学校講堂で「月島産業報国聯合会」を結成、発会式を挙行した。

今年になり、石川島造船が船舶と陸上機械を生産してきたものの、船舶部門新設の第二工場（東京第一工場）に分離して、陸上機械専門工場となった。

昭和十六年頃より学徒動員により石川島重工にも、日夜勤労学生が奉仕に参加、学校により学風がよく現れ、町中を歩く姿も学校の特色が出ていた。特に記憶に残っているのは、拓殖大學生で、昼勤奉仕学生が朝市電で下車すると、夜勤が終って帰途上にある上級生に出会い、「オス」と云って歩を止め挨拶を交わす。搔卷を丹前変りに着て、荒縄で胴を巻き、跣で、顎髭を延ばしほーだい伸ばし、何ヶ月も洗ったことのない垢だらけの顔で答礼を返す上級生、ゆっくり歩いているので電車が発車すると、下級生が飛んでいって、電車を四方から囲み発車の邪魔をする。運転手は危険を知らせるがお構いなく、たいしたもので動いている電車を十数名の拓大生が力づくで引き戻すのである。搔卷布団の上級生は、いきなり電車の横を両手で押すと、電車は左右にユラユラ横ゆれする。車には客が溢れ、外にブラ下がっている状態でも構わずその動作が続く。運転手は止むを得ず車を止めて、上級生を乗車させるのである。工場では大変真面目な勤労学生戦士であると云う。当時は、こんなバンカラ学生が、石川島に限らず他の工場でも結構見られたものであった。

昭和十九年 満洲に石川島重工を設立する。

昭和二十年一月十一日 B 29一機東京侵入、石川島造船所を目的に油脂焼夷弾約七〇個投下、しかし工場そのものには、被害はなかった。

同年二月九日 B 29高々度から爆撃で、月島通り一丁目焼失地域若干生ずる。

同年二月十九日 晴海町二丁目、月島第二国民学校脇、その他数ヶ所焼夷弾落下、この頃から空襲激烈となっていたのである。

（夜明け前・戦後）

「あさりーしじみー」私は、ハッとして目が醒めた。自転車に乗り貝を売る呼び声は、久し振りである。時計は、午前四時半を指していた。なんとなく「これが下町だ」と、自分に云い聞かせ、床の中でその感触を味わった。「納豆ー納豆ー納豆」続いて呼売り声を通り過ぎる。

西町の戦前は、正月になると「三河万歳」「一人大黒」「乞食獅子舞」法螺貝を吹きながらの「修験者」や、春秋彼岸と盆の坊主に尼の門付、年柄年中「おもらいさん」が店先に立つ。こちらの気持が良い時は、幾許かの銭を与えるが、多忙の時は「お通り下さい」と促す。年末には「箒売り」と「恵美須大黒」の置物とか、必ず商店には売りに来る。箒はともかく、一回置物を買おうと又次の年にやって来る。恵美須大黒が、いくつあってもしょうがない。

季節を知らせる町売りの呼び声や音は、下町情緒を醸し出す。暗い内から聞えるのが、天秤竿に小魚を入れ売り歩く、「エイいわしこ」の振売（まわりの）の聲、朝夕のブーブーラッパの「豆腐売り」、

ピーツと蒸気で鳴らす「羅宇屋」、チリンチリンと風鈴の音と「きんぎょや、金魚」の呼び声、カタカタカタカタ両天秤に箱をぶらさげ「定斉屋でござーい、定斉屋」の葉売り、春秋のんびりした日和日には「くずうーい、くずうーい」^{くずうーい}、餅包丁、研ぎ屋でござーい^{くづもり}「蝙蝠傘のー張替え」、ボンボン鼓を叩きながら「下駄の張替え」、これ等の呼び声がどんなに町を賑わしていたか、その上子供相手の街頭売りもあった。

西町中心の十字路角に魚屋があったが、日華事変前後に男子服縫製店が移り、東側出入口を窓に変えたため、街頭の立売りする場所になった。頭上に風車を三十本位さした葉の輪を冠り、薄い両面太鼓を打鳴らし、相槌に笛を吹き立っていると、幼児が老婆に手を引かれ買求めにやってくる。肩からさげた鉛箱から、長棒鉛か鼈甲鉛一本に風車をつけて渡す「鉛売り」、リヤカーに竹格子を組み、セルロイドの種々な面を飾りやはり風車をつけて売る「お面屋」、同じくリヤカーでも、六、七人の中年男女が、臼を地におろし車の蒸し器から、栗餅を臼にあけ、太鼓や三味に合せて唄いながら、三人男が杵をつき、つきたての「栗餅売り」、秋から翌春に掛けて来る「焼芋屋」同じ芋でも、大学角帽を冠り久留米餅に高下駄で「大学芋ー大学芋のホッカホカー」と勇ましく大声で、むしろ囀鳴り声の芋売りや、自転車ですって来るのは「玄米パンのホッカホカッ」と呼びながら鐘を鳴らし走る「パン屋」、夏は「氷とアイスキャンデー」、春秋には「鼈甲鉛屋」と「鉛細工屋」、毎夕には、紙芝居が拍子木・太鼓・ラッパ・呼び子等、その特色を出して子供を集める。少なくとも、七ヶ所この町には常時来ていた。これ等街売りの中でも最も馴染み深いのは、細田の「糝粉と寒天型取り」で、糝粉は自分で製作したものに黄粉と蜜をかけて喰べ、寒天は上手に型を取るともう一枚貫え同じ様にして食べるのである。

この他鈴木の「おでん屋」、海老名の「どんどん焼」、何れも屋台を引いて、呼び止められると売ったものだ。屋台の成人向きは夜で、特に風呂帰り客を狙い旭湯の傍で屋台を構える小太で黒メガネのおじさんは、夏は「氷は如何が、スイにイチゴ、レモン」と良い声を、周りに遠慮して呼び歩く。冬には、「あづきー、あづきに甘酒」に変わる。また夜鳴きソバ屋は、「うどーんにそば」の呼声、チャルメラの支那ソバ屋、何となく物悲しくも感じ、呼声が逆に静けさを導くようでもあった。

これが西町の戦前の街頭風物である。しかしそれよりも特徴と云えるのは、石川島造船所で鳴らす朝八時の始業・正午・夕五時の終業のサイレンが、町全体を工場であるが如くそのけたたましさは、会話が一時止る程であり、時計のいらぬ町でもあった。

あれやこれや思い出に耽っていたが、もう午前六時頃なのである。人の繁く往来する足音に誘われて、床を出た。昭和二十四年七月一日、現在地へ昨日引越して来たのである。衣料配給品が、今日も届く。私は学生であり、池袋の学校と店の手伝い、その上配給物資の分配と連絡、その經理の奉仕をしていた。同業者から「奇特な方奇特な方」とお煽てられていたからかも知れないが、私が新富町の事務所に行かないと分配出来ないため、今だから云えるが、配給品の種類によっては少ない物もある。従って先ず自分の店に登録されたお客様のために、先に良いものを別にし、自店に配給品を運んでから、デパート（元呉服店であった関係上）や呉服小売同業者に、配給品分配の連絡をするのである。無報酬の奉仕だから、このくらいの利点は許されるであろう。中央区内で衣料配給登録者は、私の店が三千二百名で区内二位であった。一位は、日本橋三越である。それは、佃島及び新佃島東西町以外、立教大学の先生や友人とそ

の家族、練馬の大泉農家の方々が登録されたからである。

配給を通じて理解出来たことは、戦禍から免がれた当地が、一戸に何世帯も入居していることであつた。当地に越して来るまで、西町の方々が、練馬の私宅に何回となく訪れ、農家からの食料買つけの仲を持って呉れと云う。現金でも実は野菜を売って呉れない。折角此処まで来たから、助けて欲しいと云う。母はその都度、自分や家族の衣料を当て、芋や野菜に変え、少ないけれどお持ちなさいと贈っていた。聞けば、月島・晴海の雑草がなくなる程、食糧に飢えていたのである。しかし昭和二十四年ともなれば、何れもやりくりをして闘食なれど食事情も緩和され、移転して来た当地も強制疎開地であつたが、徐々に家々が建ち始め、往時の姿はないが復興したのである。

物資が出廻り始め、昭和二十五年には切符制度も廃止され自由販売となり、少し世の中が潤つて来た。

世の中がひもじく敗戦により意気消沈している中、明るい“リングの唄”が風靡したが、佃島にも昭和二十一年“住吉亭”(佃一―十五)が誕生、NHKを通じて寄席が放送され、全国に笑いを振り撒いた。寄席許りでなく、田舎芝居のドサ廻り一座が巡業に来て、町のおかみさん達のアイドルとなり、座によつては結構今で云う“追っかけおばさん”が発生していたのである。最員の座がくると、自分用の座布団を持って出掛け“おひねり”を投げるが、金より物の時代、役者はそれを好まない。勢い奮発して、舞台着にと派手な着尺を店に購入にくる。お蔭様で、店は商売になった。町の中には未亡人が入れ揚げて、親子共々駈落ちし町から姿を消した家庭もあつた。全く、罪な話だ。

住吉亭の支配人は小林仙太郎と云う旅興行くずれの小太りな好々爺と、藤間紫ばりの奥さん夫婦は、貧弱な劇団が掛かると

衣裳の心配をし、夫婦揃つて店に来ては、“出し物”と舞台衣裳を相談され、ある時払いの催促なしで父は世話をしていた。女剣劇浅香光代などは、未だ十六七才の座長で、町中を太鼓を叩き本日上演の口上を云い歩く、必ず私の店頭止って一言口上をしたものだ。実は口上を云いながら店内をチラチラ覗き、着尺柄に目をつけておく。住吉亭前に住む藤生親子が、最員で、必ずそれらしいものを購入に来て、縫い上げて寄贈するのである。しかし昭和三十年代に入り、世の中が一層安定しテレビの普及に伴い、客の入りが少なくなり、経営不振となつた。支配人夫妻は、閉館の折挨拶に来たが、この種業界人としては、大変義理堅い人達であつた。

昭和二十九年十月 新佃島西町に“新栄会”と名を打って、東町西町の商人達が集まり小さいながらも商店会を結成した。

町は戦前とはいかないまでも、それ以来盛況へと進むのである。特に三十二年頃になると、人口が増大し月島地区六万を数え、中央区から離れ月島区を造ろうかと区会議員達が騒いだ程であつた。しかしこの期を契機に経済成長へ向うに反比例して、人口は減少し始めるのである。

昭和三十九年佃大橋の開通は、新佃島西町の生活は高上し、地価もそれなりに挙がつたが、商店にとつては客足が遠出の便利さも手伝つて売上は減少し始める。従つてこれを境に、商店会々員を止める店も出て来た。逆に“佃まつり”は人の足を集め、昭和四十年代から次第に観客が多くなり、私の経験では、五十二年度の祭が最も人出が多かつた。更に六十三年六月八日営団地下鉄有楽町線の開通は、当地域商店会にも遠方より客の誘致を喜んだが、今日は単に隣町の“もんじゃ屋”が数多く出現したに過ぎない。

むしろ経済成長の発展は、東京一極主義により都心事務所不

足を謳い文句に、不動産屋と銀行の暗躍は東京をドーナツ状態に呈し、御多分に漏れず西町も町中が穴だらけの姿に変わって来た。

石川島造船所の戦後は、造船疑獄事件とも絡みあい、昭和二十五年土光敏光社長が石川島芝浦タービン社長から戻り、再建が始まった。

昭和三十三年二月四日月島から豊洲町を結ぶ「晴海橋」改修工事を竣工し、豊洲石川島重工業第二工場で祝賀会を挙行、三十四年三月千代田区大手町新大手町ビルに、日本橋通り広瀬ビルから本社を移転、翌三十五年播磨造船を合併し、そのため世界開発銀行より設備金百数十ドル借用する程、世界の「石川島播磨造船」を示した。

東京都は三十七年度追加予算として、佃大橋の橋梁費五億一千万円、事業費三億円を計上、都議会を通過、同年十一月十日石川島播磨重工業が、佃新橋架橋工事を受託、三十九年八月二十七日佃大橋完成、盛大な渡り初め式を行ったのである。

昭和四十九年当地の東京第一工場を荷役運搬機械や鍛造品の担当工場に、東京第四工場は、製紙機械担当工場とした。しかし後者は、機械が大型化してゆくの陸送が困難となり、新佃西町の住宅事情や環境対策上運送には岩壁を有する横浜第一工場に移転するが良策と決定、変りに鍛造については、専門メーカーに比較して設備能力共に競争力も衰えているので、むしろ撤退することが良策と考え、東京第一工場を海面に接した第二工場に移した。

昭和五十四年六月から八月にかけ設備と人員を移転、跡地に製紙機械部門の設計及び管理部門一部が佃事務所として残存した。この面積は、七、八一六平米で全体の八%が存続している。

従って、五十四年十月日本住宅公団に六一、六三六平米、約一六二億八千万円、翌五十五年一月三井不動産へ三、三五八平米、約八十二億一千万円で売却した。更に昭和六十一年中央区立佃島中学校建設のため替地として、一、八四三坪のみ石川島播磨重工業名義地が残っている。従って現在は佃島石川島播磨病院と附属地、約三、五〇〇坪が確保されているのである。

昭和六十一年四月十四日 大川端リバーシティ21の起工式が行われ、名実共に「石川島重工業発祥の地」が、記念地跡として残るのである。

昭和の街佃二丁目は、石川島造船所から石川島播磨重工業へと共に発展し、工場移転と共に様相が一変したのである。

穴が空き バブル弾けて 西町の

末の姿は 灰色の中

七色に 変る紫陽花 世の中と

定め決まらぬ 平成の御世

九、二十一世紀へと佃島

佃島物語は、佃島一・二・三丁目の過去の姿を文化財面を通して紐解いて来た。江戸から平成へ、時代時代に住んでいた人々の心が伝わって来る思いがする。しかし科学万能の時代であれば、生活の便利さに誰しも走る。貧困からの脱皮は、建築も耐震耐火の経験から、近代建築に変化する。昔の姿で、留めることは不可能となって来た。

私の住む佃二丁目は、今は暗い。歴史も浅く、頼りの石川島播磨重工も姿を消した。町中も、次第に姿を変えつつある。平成十年には、都営地下鉄十二号線も開通し、新装なる相生橋も二十一世紀の姿に変わるだろう。周囲は、新世紀に向けて一歩一歩と姿を変え対処しているのである。何を思ったのか、中央区文化財調査委員会は、二丁目の雑貨店を、平成六年建造物文化財として指定した。民俗資料上から見れば、佃二丁目に此処より大切な建造物がある。しかし、何もない町に、燭光を当てようと云うのかも知れない。

(建造物) 高瀬家

佃二一四一四

高瀬君の家は、昭和六年に建てられ、同町二一四一〇の田中青果店とは親戚で、共に同時期に建築された家である。

間口三間半、奥行四間半、出桁造の軒が出た二階建、店舗併用住居である。一階は軒が出桁造でなく、軒下にガラス欄間で店内の明りとりとして付され、それだけに欄間の上間口一ばい高い桁を渡している。二階は、一階正面より二尺後退し戸袋を

銅板張りにし、当時西町大通り同番地商店が好んで、家屋周囲板張りの上に防火上銅板を張ったものである。

家の間取は、右手タバコ販売口は板の間で、店は土間にコンクリートを打込み、奥の間は四畳半と廊下を挟んで右側に二階登り階段と奥に三畳の台所、対峙して廊下に続き便所が配置されている。二階は、床ノ間付八畳客間が表側に、次の間を奥に六畳つなげ続き間座敷としている。二畳広さの板の間の物置が表側と後部に付し、すべての室を廊下でつないでいる。

此の建て方は、昭和初期に多くみられ、調査された千葉大工学部では、現代住居の過渡期として注目される建物と云う。恐らく木造建築で防火装備の無い点と、昭和六年より他の手が加わっていない点が文化財指定となったのであろう。

此の種建造物は、先の田中青果店も同様で、同じく二一四一四九長谷部米店、月島タイヤ、特に中島商会(三階建)並びに二一四一三大星倉庫等も耐火モルタルを除けば、建築技術上価値が高い。又佃三丁目四十一元麻生商店も、事跡上も建築上も文化財的には面白い。昭和二年昭和恐慌で、渡辺銀行が破産閉店し、その跡に麻生商店が移転して来た建造物で、残念ながら不動産屋が購入したため、何れ倒壊される運命である。

二十一世紀に向けて佃各町は、どの様に脱皮していくのか。そして住民達も、新しき歴史を築くために、どの様に歩を進めて行くのであろうか。

水の町 川は流れて

過去から 今に

創り 来たりて 築いた島も

憩に めざめ 未来に 向う

平成 佃の物語

次の世紀に 望みをかけて

次の世代に バトンを つなぐ

漁業の島、造船の島、そして重工業へと三百年間生産地であった佃島が、消費地として変貌しようとしている。居住私設を中心として二十一世紀を迎えるが、過去政治経済に対応して町ぐるみで対応することもなくなり、都心のベッド・タウンにしようとして行政は試みている。

石川島播磨重工工場跡の再開発「大川端リバーシティ21地区」は、昭和六十三年に十四階建てを、平成元年に四十階建てを、同じく公団、都公団と次々に高層マンションが建ち並び、佃二丁目目旧町中の開発を待つ許りとなった。

経済成長は、東京への一極集中を世界が目に向け、オフィスの必要性から不動産業や銀行の挺入れで、土地の高騰価を来とし、それに伴う物価の高騰も相俟って、政治はストップを掛け、瞬間にバブル崩壊、今や佃島にも穴だらけの土地の様相を呈して来た。

佃島物語をまとめるに当って、この島の将来を考察すると、未開発の「旧跡・石川島造船所」(佃二丁目一三井不動産)跡地利用計画「商業ゾーン」並びに月島機械跡地(佃二丁目)の居住施設と佃二丁目清澄通り開発如何に懸っている。

バブル以前に私は、集う青少年達と未来の佃を考えた折、営団地下鉄有楽町線「月島」駅より、三井の商業ゾーンを結ぶ街筋が、丁度東池袋「サンシャイン」と「池袋」駅間の商店街を想像していた。しかし居住施設の指定と小中学校設置に伴いその夢は消え、平成六年開設された明石町「聖路加ガーデン」のビルを例とした場合、地域に関係なくビル独自の営業しか考え

られない。唯当地の場合は、佃島付近の交通の便は数倍優っており、人の出入りも多くなる可能性を持つものの、居住施設の中の商業ゾーンは、ゾーンのみ独立して存続する可能性が高い。平成三年一月二十五日から三日間、イタリアのベネチアで開催された「第二回水都国際会議」の席上、佃島が「世界都市東京の都心で、古い町並と超近代的高層住宅群と共存し、魅力あるウォーターフロント環境づくりに貴重な存在を占めている」ことが評価され表彰された。

しかし佃一丁目も次第に近代建築化しつつあり、将来は「旧跡・佃島」として歴史の街の意識が残るだけとなる。従って居住施設観念から、住民が少し脱皮した考え方を持って、ゾーンとの関係上で町おこしを考えなければ、「佃島物語」は、江戸の祭りと盆踊りで終わってしまうのである。

近年町中は、「海底の静けさ」に居る様だと訪れる人々が云う。住んでいる私も、最近はいしししと感じている。

佃の祖漁夫三十余名は、天正慶長年間の文化人であった。大坂湾を往来する異国人とも全国から集う武士達をも見聞あれば、地方武士より知識人であったればこそ、いの一に江戸へ下り、日本橋に魚市場を建て今日東京の礎を創ったのである。その血統を持つ佃島住民が、世界一の都心に綿々と三百年間生業を営み今日に至り、世界文化の真直中に住んでいるのであるから、今こそ立ち上がり、「住吉神社」と共に、日本の将来に対する航路を導かなければならない。

佃島物語は、近世から現代まで常に日本の先端に位置していた佃島、そしてこの小さい島の歴史が日本の縮図であったことを意味している。

佃島の文化財一覧

(一) 住吉神社関係

種類	名称	所在
工芸	住吉神社宮神輿(八角型)	神社境内神輿庫
"	陶製扁額・額文住吉神社一面	境内
"	水盤石一基	境内
"	和琴(銘・川上)一面	社務所
"	銅造灯笼一基	境内
彫刻	水盤舎 欄間・他	境内
絵画	板絵着色芦鷺図一面 板絵着色蘭陵王図一面	本殿 本殿
"	社格通達一通	本殿
古文書	神社宮司に関する書六通 人足寄場玄米奉納通知状覚一通 神主居室修覆寄進帳一通 並びに修覆費勸進控書一通 留守中日記一通	社務所 社務所 社務所 社務所 社務所 社務所
記念碑	石摺拓本賀茂季鷹の碑一面 鯉塚一基	社務所 境内
"(旧跡)	五世川柳、水谷金蔵碑一基	境内
"	植樹の石碑一基	境内
建造物	水盤舎一棟	境内

(二) 佃島一丁目関係

種類	名称	所在
古文書	「佃島起立之事」一帖	佃一五七 飯田家
"	※「佃島之古事記」一帖	佃一二一 小沢家
"	「往昔佃村より江戸へ下降せし漁師の名前」一綴	佃一五七 飯田家
"	「明治二年 佃島戸籍下書」	中央区立京橋図書館
旧跡	佃島渡船の碑一基	佃一二区 児童遊園内
記念碑	「佃の渡し」劇・北条秀司の碑一基	佃一二区 児童遊園内
建造物	飯田家	佃一三六 飯田家
年中行事	佃祭り	佃一丁目全域
古文書	佃島下町若衆大帳一帖	佃一一七 藤間家
民族資料	住吉神社大幟六組	佃一丁目全域
彫刻	竜虎の獅子頭一対	佃一一 下町
"	黒獅子頭一対	佃一一 下町
芸能	佃ばやし	佃一丁目
年中行事 (芸能)	佃島の盆踊(東京都文化財指定)	佃一丁目
古文書	佃島盆踊唄一帖	佃一五七 飯田家
旧跡	佃島開発者・森孫右衛門墓一基	築地、西本願寺内
"	石川島人足寄場跡	佃一一一 全域
"	石川島灯台跡	佃一一一 佃公園地区

(三) 佃二丁目関係

種類	名称	所在
旧跡	石川島造船所跡	佃二丁目一
“	佃島砲台跡	月島一・二・九・十三 地域
事跡	新佃伏見稻荷祠	佃二十一・十二 増山家
建造物	高瀬家一棟	佃二十四・四 高瀬家

四 佃三丁目関係

種類	名称	所在
記念碑	海水館の碑一基	佃三十一・十九地区
建造物	元海水館	佃三十一・十九 坪井家

(五) 橋梁関係

種類	名称	所在
建造物	佃小橋	佃二丁目
“	佃大橋	佃一三地区
“	中央大橋	佃一十一地区
“	相生橋	佃二十二三地区
旧跡	佃橋	佃一八、九の地区
“	初見橋	佃二十七、三六の 地区
“	新月橋	佃一九、十七の地区

あとがき

平成十七年「増山望人児童館」を「昭和青少年教育資料館」と改め、昭和二十四年以来当館で使用した教育資料や教具並びに戦後東京都青少年教育資料（特に千代田庁舎時代）等を永く保管し、中でも野外教育資料テントの整理を行い不慮の災害に備え世に提供すべく常設致す所存です。

しかし当館五十年の記録を発刊することが先行との声が挙がり、共に活動の一環として今回の運びとなりました。奇しくも平成十七年は、住吉神社鎮座二百六十年に併せて、おくらばせながら季刊「佃島物語」に連載しました本館関係記録を整理加筆し、順次発刊する次第です。

『文化財で綴る 佃島物語』

『子供館物語 —— 本館五十年の歩み ——』

『偲ぶ江戸佃つれづれ一齣り』

『昭和青少年教育史』

『大泉学園物語』

以上

視覚障害者並びに高齢者の方々のために……

中央区立京橋図書館視聴覚ライブラリーでは、本物語の内「佃の祭り」・「石川島人足寄場」・「昭和の夢の懸橋 相生橋」等を各項別に誦読録音されております。区内全図書館にても貸出しを扱いますので御利用下さい。

文化財で綴る

佃島物語

発行 平成十八年五月五日

著者 増山 武男

制作 丸善出版サービスセンター

東京都千代田区丸の内一―六―四

印刷 大成印刷株式会社

©TAKEO MASUYAMA, 2006. MTSC-TA026

ISBN 4-89630-199-4 C0021